

旅芸人は楽し

—ヒンディー語劇海外公演の記録—

溝上 富夫 著

भारत

राष्ट्रीय
National Theatre
Festival

शिव महोत्सव
2003
10th March - 10th April



आदित्यं भुवनं यस्य वाचिकं सर्ववाद्मयम्।
आक्षर्यचन्द्रतारादि तं नुमः सात्त्विकं शिवम्॥

"We bow to Lord Shiva, the actor accomplished in all emotions, whose movement are the world,
whose perfect speech is the entire language and whose vestments are the moon and the stars."
From the Abhinaya Darpan

旅芸人は楽し

—ヒンディー語劇海外公演の記録—

溝上 富夫 著

ユニオンプレス



バジパイ・インド首相（右から2人目）の前で上演



2,000人の観客で埋まった野外公演



華麗な全インド演劇祭の開会式—壇上には有名人がずらり



全インド演劇祭で「夕鶴」を上演



床に座って観劇する人まで出た超満員の観客席



全インド演劇祭で舞台挨拶する出演者



हिंदी में जापान

जापान के एक शिक्षक की विदग्धा की जिद बना हिंदी

हिंदी लय-जापानी ताल: *साय जी नाटक में डोला रे* गाने पर नाचती जापानी छात्राएं

उम्र: 63 साल; लंबाई: 165 सेमी.; मातृ-भाषा: जापानी; पेशा: हिंदी अध्यापन; शोध अध्यान का विषय: पंजाब के जालंधर में रह रहे उत्तर प्रदेश के प्रवासी कामगारों पर पंजाबी भाषा का प्रभाव. जापान के ओसाका विश्वविद्यालय में हिंदी के प्रोफेसर डॉ. तोमिओ मिजोकामि के व्यक्तिगत के इतने अग्रिम हैं कि एक पहलू फकट उनका विश्लेषण मुमकिन नहीं.

जापान में कोबे और ओसाका के बीच ताकागुसा नाम के एक सुंदर-से शहर में रह रहे और ग्रेज ट्रीम फकड़कर पढ़ाने वाले डॉ. मिजोकामि की कहानी है बढ़ी दिलचस्प, अपनी हाइस्कूल की पढ़ाई के दिनों में जवाहरलाल नेहरू को तासरो दुनिया के देशों का नेतृत्व करते देख वे

उन्से इतने प्रभावित हुए कि उनके देरा की प्रमुख भाषा सीखने का संकल्प ले लिया. हालांकि, जहाँ के शब्दों में, "यहाँ आकर पता चला कि नेहरू की मूल भाषा तो अंग्रेजी थी," पर तब तक मिजोकामि हिंदी के होकर दिल्ली ब्रिचि से एमए और शोध कर चुके थे. और 1997 में राष्ट्रीय नाट्य विद्यालय के न्यूते पर छात्र-छात्राओं के साथ दो हिंदी नाटक लेकर भारत क्या आर कि एक मिलिट्रिस्ता शुरू हो गया. यहाँ तक कि 1999 में लंदन के विश्व हिंदी सम्मेलन में भी उन्हें *कायाकल्प* और *अब हम आजाद हैं* नाटकों के साथ बुलाया गया.

स्वभाव से विनोदप्रिय ("मेरी फनी का वजन मुझे ज्यदा है") मिजोकामि नियमित भारत यात्रा के क्रम में इस बार सिंबर में *सावधान साय*

जी और *धुधाराहित युग* के साथ आर तथा दिल्ली, मेरठ, हस्तिनापुर, हरिद्वार, देहरादून, चंडीगढ़ और मुंबई के तीनक हजार दर्शकों को रोमांचित कर मंगेशरस खाना हो गए. मिजोकामि ने नाट्य विधा को अपने विवि के हिंदी के छात्र-छात्राओं (अजादतर छात्राएं) को पढ़ाई आसान करने का एक माध्यम बनाया है. हर बार सह शिक्षिका गीता शर्मा की मदद से हिंदी स्नातक पाठ्यक्रम के द्वितीय वर्ष के छात्रों को कर्फी मेहनत से इस तरह तैयार करते हैं कि उत्कण्ण से ब्याकरण दोष खोजना मुश्किल हो जाता है. हिंदी फिल्में की बढ़ती पहुँच ने काम आसान किया है. *सावधान साय जी* में छात्राओं ने वीडियो के जरिए *देवदास* के *डोला रे* गाने का नृत्य सीखा और पेश किया.

भारतीय समाज और संस्कृति के अपने ज्ञान के आधार पर सुरसा, कुच्छेड, भास और साग जैसे शब्दों का मिजोकामि सहसा से इस्तेमाल करते हैं. उनकी समझ बारीक है. पंजाबी दर्शकों की प्रभावित करने के लिए उन्होंने पंजाबी बहू बनी रिसा हारगुचि से दो मिन्ट का पंजाबी संवाद उल्लुखाया: "बाहे गुरे दी मेहर" के साथ, और अगली यात्रा? थोड़ा उत्स होकर वे कहते हैं: "दो साल बाद तैयार हो जाऊंगा. अगले साल की यात्रा संभवतः भारत की आखिरी यात्रा होगी." पर भारत की हमेशा होजार खेगा हिंदी मित्र प्रो. मिजोकामि का. —सिलफेज मित्र



हिंदी की जिद, *धुधाराहित युग* में डॉ. आरुम वने मिजोकामि (बीच में)

मिजोकामि की भारत यात्रा

पिछले आठके साय में मंचित उनके नाटक

- 1997 *परदा उठने से पहले, प्यार कैसे होता है*
- 1999 *कायाकल्प और अब हम आजाद हैं* (विश्व हिंदी सम्मेलन, लंदन में)
- 2000 *कायाकल्प*
- 2001 *तीसरा, आठवाँ*
- 2002 *दिल की दुकान, अब हम आजाद हैं*
- 2003 *सायस प्रेम, बुरे फंसे योद्धवत में*
- 2004 *सावधान साय जी, धुधाराहित युग*

ヒンディー語最大の週刊誌一面に紹介された記事一見出しは「ヒンディー語の中の日本」

目次

	はしがき―語劇とは？なぜ海外公演か？	1
第一章	神戸からインドへ	5
第二章	初のインド公演―マスメディアは超過熱（一九七〇―一九七八年）	23
第三章	はじめてロンドンへ（一九九八年）	63
第四章	再びインド縦断の公演旅行（一九九九年）	79
第五章	「世界ヒンディー語大会」に招かれる―再びイギリス巡業の旅（一九九九年）	115
第六章	インド人キャストとの初の共演・初のネパール公演（二〇〇〇年）	133
第七章	バジパイ・インド首相の前で上演（二〇〇一年）	149
第八章	四回目のインド公演旅行（二〇〇一―二〇〇二年）	159
第九章	五回目のインド公演旅行―日印修交五〇周年記念行事として参加（二〇〇二年）	177
第十章	全インド演劇祭で「夕鶴」を上演（二〇〇三年）	199
第十一章	国際交流基金の助成金で初めてのモーリシヤスへ（二〇〇四年）	217
第十二章	東京外大ウルドゥー語劇団との初のインド合同公演旅行（二〇〇五年）	253
第十三章	東南アジア公演（二〇〇六年）と最後のインド公演（二〇〇七年）	283

第十四章 印日演劇専門家の評価	307
あとかきーやつぱり「旅芸人」は楽しい	317
海外公演一覧表	321

推薦の言葉

陳舜臣

このたび溝上富夫さんが、大阪外大の教授退職を記念して、『旅芸人は楽しい—ヒンディー語劇海外公演の記録』という著書を出版されることになりました。まずは心からお祝い申し上げます。

大阪外大がこの十月から大阪大学と統合されるので、溝上さんは最後の大阪外大教授となるそうです。そのことをきいて、私たちは歴史の大きな波のなかにいるのだとつくづく思いました。

もともと国立の外国語学校は、東京と大阪の二校しかなく、この両校は仲が良く、こんどの公演も東京外大ワールドウ語劇団との合同となっています。私の在学中、日米開戦の一年前までは、カレッジライフを楽しめ、スポーツで東西対抗がよくありました。そして大阪がたいい負けていました。「なにしろ一年すくなくからな」と、われわれは負け惜しみを言ったものです。修業年数は

陳舜臣

東京が四年でわれわれは三年でした。それだけに大阪の語学は、実践第一主義をめざしていたのです。戦前は印度語部の兼業語学はペルシャ語でした。くわしいことは忘れましたが、印度語（ウルドゥ、ヒンディー）が週八時間ほどに対して、ペルシャ語は六時間ほどあったように思います。実感としては、われわれはペルシャ語ばかりを勉強した気がするのです。内輪話になりますが、印度語の時間の半



ばはヴァルマ先生の会話で、学生はそれを遊びの時間と心得ていました。時間中に法律の勉強をする不心得な者もいました。法律で留年する者がすくなくなかったのです。

ペルシャ語が印度語の兼修語となったのは印度が英領となる前はムガル帝国（一五二六―一八五七）に支配され、当時の印度の公用語はペルシャ語だったからです。英領になるまでの印度の記録は、すべてペルシャ語で記されていました。それを読むためにペルシャ語が必要で、会話などはどうでもよいと思われたのでしょうか。

あれほど勉強したかんじのあるペルシャ語がまったく話せず、後年、イランへ行ったときもなんの役にも立ちませんでした。失礼ながら、遊び半分でヴァルマ先生とやり合ったヒンディーやウルドゥは時々思い出します。これは実践語学の勝利であると思います。大阪外語建学の理想はまちがっていなかったのです。

私たちの時代は戦争なので仕方がなかったのですが、もうすこし上のクラスは語学劇をやっていたようです。学芸会ではないかと思いましたが、むかし写真で見たことがあります。

それに較べると、溝上さんの率いたヒンディー語劇団は、なんども海外公演するなど、私たちからみれば夢のようなことです。一度神戸で舞台を拝見したことがありますが、そのレベルの高さに驚いたことを、私ははっきり覚えています。この本は溝上さんの定年記念であると同時に、語学教育についての提言であり、さらにいえば国際平和実践の一例を提供したもので、ひろく、大ぜいの人に読んでいただきたいと熱望します。

光と風と人々の絆

役者魂というものがあって、演劇人は自らの一生をその魂を燃焼し尽くすことに懸ける。「演劇は最高の語学教育である」をモットーに、外国語教育の精髓を語劇という場に結晶させようとする教育者がいる。溝上先生はこのふたつを一身に兼ね備え、自らの行動で示してこられた。その行動の軌跡をつぶさに記した（時には学生の手になる記録も含め）のが本書である。本書は、言語修得と身体性、異文化理解とは何か、等々さまざまテーマを内包しつつ、旅物語として展開する。物語の主人公は日頃謹厳実直な、文学博士である教授、溝上先生である。その教授が一転役者に変化（へんげ）して、この地球上を、風となり光となつて、学生ともども旅をするのである。その旅への志は、元禄二年、「前途三千里のおもひ」を「行はるや鳥啼うをの目は泪」と歌った芭蕉に通うところ無きにもあらず、そしてその思いは人々の絆に助けられ、また新たな絆を紡ぎつつ、旅は進む。旅の途中、南インドのティルヴァナンタプラムで出会った老爺の、ヒンディー語を学ぶには「君たちは肉や魚を食べることを捨て去らなければならないだよ」という言葉は、言語とは何かを喝破している。言語とはその人間を存在せしめる根底的な要素にはかならない。老爺の問いかけは厳しさだけのものではなく、この物語全体にやさしくほほえみ返しているようにも思える。溝上先生が高校生の頃、神戸の街角で見かけた妖精のようなインドの貴婦人も、きっとこの旅物語を温かく見守り、ほほえみ返している、と思えてくるのである。

大阪外国語大学長 是永駿



- ◎ 5回以上公演
- 2回～4回公演
- 1回公演

公演地と上演回数

はしがき―語劇とは？なぜ海外公演か？

どこの大学にも高校にもE.S.S.というクラブがあつて、英語劇をやっている。目的は、いうまでもなく、生きた英語を学び、演技することによつて、文字通り身をもつて、英米文化を体得することにある。

同じ目的で、東京・大阪・神戸市の国公立三外国語大学では、各専攻語で外国語劇を上演するのが、大学祭の目玉となつている。フランス語劇、中国語劇、ヴェトナム語劇……というふうに。東京外国語大学や大阪外国語大学には、こういう外国語の専攻語が二〇以上ある。私の専攻する、インドの公用語ヒンディー語（使用人口約四億人で、中国語・英語についで、世界第三位。『世界がもし一〇〇人の村だったら』にも、ヒンディー語はウルドゥー語話者を足すと、八人がしゃべるとなつていて、やはり第三位である―池田季代子再話、C・ダグラス・ラミス対訳、マガジンハウス刊）も例外でなく、かなりの中断期間はあつたが、大学の文化祭でヒンディー語劇を上演していた。それだけなら何の変哲もないことで、ヒンディー語劇が特に注目されることもなく、わざわざ本を著すほどのことでもない。

低調で観客の少なくなつた学内の文化祭から学外（神戸）に出て、実際にインド人に見てもらつたこと（学外公演というだけなら、神戸市外国語大学が毎年、大学の行事として行つており、特に

珍しいことではない) がきっかけで、ヒンディー語劇を海外で上演するようになったのである。

しかし、語劇の海外公演という事実だけみるならば、決してヒンディー語がパイオニアだったわけではなく、一九八九年に、東京外国語大学と上智大学を中心とする学生と一部社会人を含む劇団「ラ・バラキリーヤ」が、マドリッドとグラナダでスペイン語劇を四回上演したと言う記録が残っている(東京中日新聞)。又、一九九〇年頃、同じ大阪外国語大学二部(定時制)の旧中国語学科の学生が上海で一度だけ中国語劇を上演しているが、日本の民話をもとにした「夕鶴」を中国語で上演したという以外、反応がどうであったとかいう詳しい記録は一切残っていない。ヒンディー語劇も、一度だけの海外公演なら、インドは別として日本では、さほど注目されることもなかっただろう。(しかし、彼らが「夕鶴」を上演したということが、我々のヒンディー語劇団に刺激を与え、後に実際に、インドで「夕鶴」をヒンディー語で上演することになるのである。)

大阪外国語大学のヒンディー語劇が内外で注目されたのは、ヒンディー語の本場であるインド本国だけでなく、インド系の移民が多く住むイギリスやモーリシャス、東南アジア、それに容易にヒンディー語が理解される隣国のネパールにも出かけ、かなりの長期間、各地を公演して廻ったことによる。その海外公演のための渡航回数は一二回を数え、六ヶ国で廻った都市数は三九(主要都市では複数回上演している)、公演回数は実に七九回にも及ぶ(日本国内での公演を加えると、一〇九回になる)。移動距離を測ってみたら、何と二二万一千キロメートルにもなった。地球を約五周半したことになる。この記録は、そう簡単に破られないのではなからうか。

ヒンデュー語劇団（文科系の任意サークル団体）の顧問である私は、団長として、引率者として、すべての公演に学生と同行した。実際に、ドラマの選定から企画・渉外・会計・通訳に至るまで、ほとんど一手に引き受けた。さらに、「座頭」（インドの古典サンスクリット語劇の伝統ではスートラダーラ、ヒンデュー語式の発音なら、スートウルダーラという）として真っ先に舞台上に登場して、観客に挨拶したり、芝居の内容を説明したり、役者を紹介するばかりか、時には自ら役者の一人として学生たちと共に演技したこともある。これまで私と一緒に海外への巡業の旅に出た学生は合計五四名にもなる。数回に亘って参加した学生も多い。また、その中から二組のカップルも誕生した。信頼関係を基に、共に一致団結して芝居を成功させた彼ら一人ひとりとの心の交流も、教師にとつて得がたい貴重な財産となった。演劇にはずぶの素人であるにも拘わらず、どこでも熱狂的な歓迎を受け、インド（又はインド系の）の人々との交流の輪もどんどん広がって行った。もちろん、つらいことも多々あった。ドラマ以上のドラマもあった。この貴重な体験を私は、ぜひ記録に残しておきたかった。

私は一介の語学教師だが、在職中はとくに、語学の実践教育に情熱を傾けた。自ら範を垂れるべく、外国人被告事件の法廷通訳人としても、何度も法廷に立った。語劇の海外公演は何よりもまず、語学の有効な実践教育であり、フィールドワークなのだ。私の三九年に及ぶ教師生活の最後の一〇年間は、ちょうど、語劇の海外公演を行った時期と重なり、教師として最も意義のある、充実した時期でもあった。「有終の美」をもって定年を迎えることができたのも、この海外公演のおかげである。

本書に綴った一二回の海外公演の記録は、第一に、語学教師たる私の語学教育の記録であり、第二に、ユニークな日印文化交流の記録でもある。現地の人々から見ると、我々「旅芸人」は日本からの「文化使節」でもあったのだ。この二つの観点から読んでもらえればありがたい。

ほぼ毎回、海外公演の度に、学生がその体験記を学内の雑誌に掲載してきたが、若者らしい感動を素直に伝えていくすぐれた文章が多い。私の記述よりも正確で客観的である場合も多くある。そのような箇所は躊躇することなく、引用または転載した。

本書の想定する読者層を四つに分類すると、(一) 語学の実践教育に関心をもつ教師 (二) 異文化間コミュニケーションに興味のある人 (三) インドに対して一般的な関心をもつ人 (四) 演劇関係者、ということになる。もともと、最後についていえば、我々素人劇団の活動に関心をもつ演劇人は少ないかもしれない。プロの演劇人からの反応は、数名の理解者を除いておしなべて冷たかったのを覚えている。しかし、我々の芝居の質を決めるのは、プロの演劇人よりはむしろ、インド(又はインド系の人々)の観客だと、私は信じている。

また本書では、必ずしも海外公演だけを扱うのではなく、その発端となった神戸公演や、大阪のホテルでバジパイ・インド首相(当時)の前で上演という、きわめて特筆すべき経験もしたので、このような国内での「学外」公演についても、随所に触れるつもりだ。

第一章 神戸からインドへ

阪神大震災がきっかけ

あれは、一九九五年のことだった。未曾有の阪神・淡路大震災が神戸地方を襲い、神戸に多く住むインド人も甚大な被害を蒙った。彼らの多くは、比較的被害の軽かった山手方面に住んでいたため、死者こそ出なかったものの、それでも、ライフラインをとめられ、余震の恐怖に怯えながら、不便な避難生活を送っていた。安全を求めて、海外に避難した人もいた。住めなくなった神戸の家から、大阪のホテルに移り住んでビジネスを続けた人もいた。神戸のオフィスが全壊または半壊した人にとっては、ビジネスも大きな痛手を受けた。

そんな不便な生活の中から、一般の避難者にインドカレーを無料でサービスして配ったインド料理店の経営者がいたというニュースが私の目を引いた。この人は後で、貝原俊民兵庫県知事（当時）から感謝状を贈られている。神戸には、古くから、インド人コミュニティがありながら、インド研究を行う大阪外国語大学としては、今までどちらかといえば無関心で、彼らとの積極的な交流は、個人的な知己関係は別として、余りなかった。彼らと同様で、大阪外国語大学でヒンディー語が教えられていることを知らないインド人もいる。大阪外国語大学は、戦前の外国語専門学校時代を含めると、実に八〇年以上にもわたって、インド語（ヒンディー語）の教育は戦後始まったもので、

それまでは、現在のウルドゥー語に近いヒンドスターニー語という名称で教えられていた）が教えられているにもかかわらずである。

神戸のインド人は、圧倒的にビジネスマンが多く、エスニックグループ別に見ると、シンデイー、グジャラーテイー、パンジャービー等が多い。彼らはヒンデイー語を理解するが、母語ではないため、正確なヒンデイー語を話せる人はきわめて少ない。このことが、簡単にインドへ行けるようになった今、我々が彼らに関心を持たなかった主たる理由だろう。（なお、神戸のインド人についての研究には、金谷熊雄「神戸とインド人」『日印文化特集号Ⅱ』二二～三三頁、同「戦後の神戸とインド人」『日印文化特集号Ⅲ』一～一七頁、富永智津子（統）「インド人移民社会の歴史と現状」横浜、神戸、沖縄」『日印文化創立四〇周年特集号』五二～七九頁、等がある。）

しかし、外国語大学は言葉だけを学ぶわけではない。広く、インド文化全般についても学ぶところである。神戸には、立派なイスラーム教寺院もあれば、白亜の大理石でできたジャイナ教寺院、民家を改修して作ったシク教寺院（グルドゥワラーという。なお、グルとは師又は神、ドゥワラーとは戸口という意味であり、グルドゥワラーの意味はまさに、神戸なのである）もあり、さらに、サイバーバーを祭ったお堂が、熊内通のインディアン・ソーシアル・ソサエティーの中にある。これをヒンドゥー教寺院とみなせば、インドの宗教の九割以上の施設が神戸に揃っていることになら。従って、本国に行かなくても、神戸である程度、インドの宗教に触れることは可能なわけだ。

インド人と神戸とのつながりは深く、戦前は、フラワーロードの一角に、ボンベイタウンという

インド人街があった。神戸の環境がインド人に好まれ、商都大阪の船場に会社をもつても、住居は神戸に構えるインド人が多い。現在、神戸には約千人のインド人が住んでいて、かつては日本一だった。現在ではIT（情報技術）関係者の多い東京には比ぶべくもないが、それでも二位である。かつては、インド総領事館も神戸市内にあったが、インド経済の自由化の後、関西の経済を重視したインド政府は、総領事館の機能を強化するため、館員を増やし大阪市内に移した。しかし、アメリカ合衆国やドイツ等と同じく、神戸の名前は残して、大阪神戸インド総領事館と称している。

その年の十一月、恒例の大学祭で「幸子の結婚」というヒンディー語劇を学生達が演じた。当時の外国人教師、ハルジェンドラ・チョードリー氏が学生達用に書き下ろした創作劇で、できるだけ多くの学生に参加させ、ヒンディー語を実際に喋らせようとの趣旨から、登場人物は三〇名近くにもなった。そのため、一年生から四年生までがキャストやスタッフとして参加した。かつてこれほど多人数の学生が、一つの語劇に参加したことはない。ドラマは、日本留学中のインド人青年と知り合って婚約し、渡印した日本女性（幸子）がインドの結婚式その他の伝統的な古いしきたりに困惑するさまを通じて、日印の文化の違いを浮き彫りにしたユーモラスな、しかし考えさせる内容のもの。なかなか面白いドラマに仕上がったので、神戸のインド人達に披露しようと思った。実は、その前年に上演した「シヤクンタラー」（有名なサンスクリット語の戯曲のヒンディー訳）も力演だったので、平成七年の三月の春休みに、神戸で上演しようと企画したことがあったが、阪神・淡路大震災で吹っ飛んでしまった。

そのこともあって、今回こそはぜひ実現させたかった。震災で辛い思いをしたインド人の人々を慰め、激励しようとの気負いもあった。「テロ事件で傷ついた人たちを元気づけられれば」とニューヨーク公演を決めた丸の内交響楽団（朝日新聞、二〇〇二年五月三日）と似た心境だった。私自身が震災の被害者でもあったので、地震に対するこだわりは人一倍強かった。インドカレーを無料で配ってまわったインド人のことも頭にあった。これを機会に、神戸のインド人コミュニティとの交流を計ろうとも思った。そして、一九九五年二月二日、前述のインディアン・ソーシアル・ツサエティーのホールで、I・V・チョープラー・大阪神戸インド総領事（当時）を主賓に招いて、この「幸子の結婚」を上演した。

それに先立って、インド総領事館が行った、ヒンディー語エッセイコンテストの上位三名に対する表彰が行われた。当日の観客の数は記録していないが、一五〇名ほどが入る、さほど広くないホールがほぼ満員だったのを覚えている。半数以上は、大阪外国語大学の在学生と卒業生で占められたが、インド人もかなりいた。ドラマは、インド人が日本語を話すのを真似たり、実際に神戸のインド料理店の名前を挙げたりして大いに受けた。結婚式にヒジュラー（去勢された男）を登場させ（もちろん、男子学生がサリーを着て登場する）、警官がワイロをとる場面では、インド人観客も大いに笑っていた。総領事という公的立場からすると、人によっては、自国の恥部が暴かれた（しかも外国人によって）ことに、気分を害するかもしれない。実際、数年後にインドクラブで、パキスタンのウルドゥー語劇を上演した時に、そのような抗議をした総領事がいた。しかし、チョープラー

総領事は度量の広い人と見えて、そのようなシーンでも他のインド人と同じように大笑いしていた。警官がワイロをとることは、インド社会では当たり前のことと、誰も認識しているのだ。ともあれ、この神戸初公演のドラマは、予想以上に受けた。

ただ残念なことに、原作者のチョードリー氏は、当日急病のため、出席できなかったため、氏に代わって私が司会を務めた。上演後のホールは立食パーティーの会場となり、あちこちで学生とインド人の交流の輪ができた。ヒンディー語の会話の練習ができたのも意義があった。NHK国際局ヒンディー語班の高村昭夫ディレクターが取材にみえ、後日、海外放送の電波にのって、この催しのことをはじめ、インドの聴取者に伝えられたのだ。

この神戸初公演のドラマが、インド人に予想以上に受けたことで、学生達はすっかり気をよくし、「来年もやろう」ということで、チョードリー氏に、新たにこのような創作ドラマを書いてくれるように依頼した。ところが、チョードリー氏は、新たなドラマの執筆をはじめることなく、一九九六年三月に任期を終えて帰国された。そして、そのまま、適当なドラマを見つけることもなく、夏休みも過ぎてしまった。時期的に間に合わないのが、残念ながら、この年は大学祭への参加も見送らざるをえなくなった。

そんな時、一人の学生が神戸のインドクラブではぜひヒンディー語劇を上演したいので、適当なドラマを選んで欲しいと訴えにきた。彼の熱意に応えるべく、四月から赴任した後任の外国人教師、ダラムパール・ガンディー氏と一緒に図書館で適当なドラマはないか探したところ、ラマーシャン

カル・ニシェーシユという人の作品「愛とはいかなるものか？」というドラマを選ぶことにした。ストーリーはほぼ次のようなものだった。

「近所でも理想の夫婦として評判の、夫ヘーマントと妻パーリーは結婚一四周年記念日を迎えるうとしている。近所のシユクラ夫妻の夫婦喧嘩を仲裁したり、破談になりかけた青年の縁談をまとめたり、いつも近所の人々の信望を集めている。ところが、ふとしたことで、パーリーが昔の恋人からもらった恋文を見つけたヘーマントは、裏切り行為だとパーリーを激しく責め、離婚を迫る。しかし、世間体をとるため、結婚一四周年記念のパーティーはそのまま行い、その後、家を出て行けという。偶然、大学時代の同窓生アヴィナーシユの訪問を受けたヘーマントは、アヴィナーシユが、カレッジ時代にプレイガールとして評判の悪かったカピラーの過去を許し、彼女を真剣に愛して、彼女との幸せな結婚生活を送っているのを聞いて、衝撃を受ける。そして、夫婦の愛情とは、過去をとわらないものである、現在こそが大事であることを悟ったヘーマントは、出て行こうとするパーリーを呼びとめ、抱きあう」。

インドのメロドラマによくありそうなストーリーである。実際一九七六年のヒット映画「時として」はこうしたテーマがとりあげられている。日本人には何ら感動を与えない、きわめて陳腐な内容かもしれないが、インド社会では結構、リアリティーがありそうな気がした。もつとも、インターネットと携帯電話の時代に、どれほどの若者が恋文を書いているかは疑問としても。又、古いインド観をもつ人々の中には、インドはそれほど男女交際は自由でないはず、という人もいるかもしれ

ない。解釈は自由だが、この劇の上演そのものには何の問題もない。それよりも、登場人物八人のキャストを決めるのが先決だ。なにより、余り時間的余裕がない。神戸公演は、インド人に来てもらいやすい土曜日を選んで、一二月七日と決められた。神戸でインド人に見てもらうただけに演じようとしているドラマである。

すでに圧倒的に女子学生が多数を占めていた状況からは信じがたいようなことだが、八名のうちの男子キャスト六名はすぐ決まった。うち四名は、一年前の「幸子の結婚」に一年生として出演した経験をもつ者である。女性キャスト二名のうちの一人、気の強い人妻役には、他大学から編入学してきたKさんにすぐ決まった。Kさんは、インド舞踊を習っており、インドの生活の経験もあり、舞台度胸もあるので、誰の目にも適役と思われた。問題は、主役のパリー役を演じる女子学生がなかなか見つからなかったことだ。誰にでもできる役ではない。セリフも非常に長い。二人ほど当たってみたが、断られた。どうしたものかと案じていると、中学時代に演劇部に入っていたSさんという学生が偶然見つかり、このSさんに白羽の矢を立てた。演劇の経験というのは、何語で芝居をやるにしても、非常に有利な材料となる。演劇の基本を心得ており、なにより舞台度胸があるのがよい。

さて、急いで練習をはじめなければならないが、大学生の場合、全員が集まるというのがなかなか大変なのである。せつかくの週休二日制も、多くの学生は、土曜日や日曜日をアルバイトにあっており、週末に登校するのが好まないもので、なかなかメンバーが揃わない。かろうじて、木曜日の

三時限に設けられているアセンブリーアワーしかない。この時間帯は授業をしないことになっている。元来、大学全体の行事（たとえば、講演会とか、就職説明会とか）のために、設けられたものだが、いつのまにか課外活動のための時間に変容してしまっている。従って、体育系や文科系のサークルに属している学生にとっては、このアセンブリーアワーでさえ、練習時間が保証されない。やむなく、空いている時間帯を見つけて「個人練習」をすることから始めなければならぬ。

この「愛とはいかなるものか？」というドラマは、テキスト通り上演すると二時間もかかる長いものである。とても、この短い期間にこれだけ長いセリフを覚えることはできないし、仮に覚えたとしても、二時間のドラマは観客に飽きられる。実際、冗長で不要なセリフも多くあったので、ガンドー氏と相談しながら、二幕五場約八〇分に短縮した。それでも、主演の学生にとっては相当長いセリフを覚えなければならぬので大変だ。受験勉強のように、毎日少しずつ暗記していくよりほかない。もちろん、暗記は第一歩にしか過ぎず、その後、演技の練習をしなければならぬ。いくら外国語でも、単なる棒読みでは、観客はしらけてしまう。ある程度の感情移入は絶対必要だ。外大の学生用に、やさしい言葉で書かれた昨年のドラマとちがって、今回はインドで実際に、プロの演劇人によって演じられているドラマであり、セリフも結構難しい単語が使われている。昨年は受けたが、今年は大丈夫だろうか、とやや不安な気持ちのまま、一二月七日を迎えた。

より多くのインド人に来てもらうため、「日印友好の夕べ」と銘打って、ドラマだけでなく、歌好きのインド人に声楽と器楽のサービスもすることにした。前年に「ヒンディー語で歌う日本のう

た」というCDを出版していたが、そのCDに美声を吹き込んでもらった藤井千尋さんと、夫君でタブラー奏者のクルブーシャン・バルガヴァさんの二人に前座をつとめてもらった。藤井さんには、往年のヒンディー映画の主題歌を数曲と沖繩の歌「芭蕉布」をヒンディー語で歌ってもらい、クルブーシャンさんには、タブラー（インド音楽にはなくてはならない打楽器）の独奏を一五分ほどたっぷり聞かせてもらった。いずれも、珍しいというより、本邦初公演だっただけに、観客はうっとりとして聞き入っていた。その間に徐々に観客の数は増えて行き、インドクラブの三〇〇前後の観客席がほぼ埋まった。今年は、狭いインディアン・ソーシアル・ソサエティーから広いインド・クラブに場所を移したのが、功を奏し、集客という点では、成功だった。このインド・クラブは戦前からある古い建物で、阪神・淡路大震災の被害を蒙ったので、修理のために、多額の費用を使ったという。

いよいよ「愛とはいかなるものか？」の初演である。大学祭でも上演していないので、八〇分という長丁場をどう乗りきるか、正直いって不安であった。新任のアシヨーク・クマール・インド総領事夫妻が非常な期待感を顔に表して、最前列に座られたので、一層緊張感が増した。いまさら、急に発音が上達するわけではないので、せめてセリフを間違えずに、言ってくれることだけを祈っていた。プロンプターといって、幕の後ろからセリフを読む人をおき、役者はそれをなぞらえていえばよいようにする方法もあるが、それでは、出演者は役になりきれないし、第一、プロンプターの声が客席に聞こえるのでみっともない。やはり全セリフを暗記するのが一番である。

しかし、外国語の長いセリフでは、いくら練習していても忘れることはある。しかも、外国語だからアドリブでごまかすわけにはいけないので、ちょっと詰まったら頭の中が真っ白になり、ストーリーのつながりも忘れてしまう。このような経験は、誰も一度はするものらしい。そこは、素人だからやむを得ないところがある。

このような場合に助け舟をだそうと、私は台本を手に、幕のそでに身を隠して小さくうずくまっていた。幸い、セリフに詰まる場面はなかった。一方、客席の反応が気になる私は、うまい具合に幕に小さく開いていた穴から、前列の総領事夫妻の顔を眺めていた。とくに、総領事夫人は非常に表情豊かに反応しておられたので、もっぱら夫人の表情を追いつづけた。夫人は、夫婦の軽妙なやりとりや、気の強い隣家の奥さんが夫を非難するきつい言いぐさには、殊の外、大声で笑っておられた。その都度、私は内心「やった！」と叫び、一人で悦に入っていた。昔の恋人にもらった恋文を夫にみつきり、離縁をいい渡された妻のセリフは、逆に客をしんみりさせるものだった。主演の女子学生には、思いきって実際に泣いてもいいよ、といっていた。笑わせるばかりではなく、劇をメロドラマ風に仕立てる上で、悲しい場面も必要である。実際に涙を流したかどうかは覚えていないが、迫真の演技といってもよかった。お決まりのハッピーエンドで劇を終えた瞬間、無事終えた安堵感で疲れがどーっと出てきた。八〇分の長丁場を本当によくがんばってくれたものだ。閉会式で挨拶に立ったアシヨーク・クマール総領事の口からは、社交辞令はあるとしても、賞賛の言葉が述べられた。やがて、客席は、立食パーティーの会場に変わり、日印観客との交流会場ともなった。

実になごやかな雰囲気であった。熱演した学生たちも、最後まで観劇してくれた人達の顔からは、満足の表情が読み取れた。

折りしも、会場の周囲は、阪神・淡路大震災の犠牲者の鎮魂と復興を願って一年前から始められた「神戸ルミナリエ」が開催中であり、まばゆいばかりの美しい光の洪水の中を、高揚した気持ちで帰宅の途についたものだ。

初のインド公演へ

翌年（一九九七年）の春頃だった。神戸のインド人商人の一人、アルジュン・ダスワーニーさんから「ヒンディー語劇をインドで上演してはいかがか」と言われて驚いた。神戸のインド人だから、まあ甘い評価をしてくれたのだろう。本場のインドで、耳の肥えたインド人観客の前で、まずいヒンディー語を披露するとなると、日印友好どころか、笑いものにされておしまいではないか：正直言って最初はそう思って「とんでもない」と断った。学生たちに相談することもなかった。彼らも「そんな夢みたいいな」と一笑に付したことであろう。ダスワーニーさんは冗談を言っているのではないかとさえ思った。そして数ヶ月間、このことが話題になることはなく、ダスワーニーさんの「思いつき」は立ち消えになった、と思われた。しかし、その後、これは決してダスワーニーさんの思いつきでなかったことを知るようになる。その後も、何度もダスワーニーさんがムンバイへの出張の度に、現地のディネーシュ・タークルという有名な劇作家兼舞台監督と接触し、我々ヒンディー

語劇のインド公演を実現しようと熱心に努力して、こちらにも真剣に考えるようになった。学生たちにも、そのような企画がなされていることを伝えたが、まだ半信半疑の状態だった。ある日、ついに具体的な提案がダスワニーさんを通じて伝えられた。タークル氏はもちろん民間人で、ダスワニーさんは民間団体主催でムンバイでの公演のみを考えていたようだ。しかし、タークル氏の提案は、インド政府から正式に招待されるのがベターというものだった。確かに大国インドはまた、大きな官僚国家であり、政府の権限が強いことは、日頃から何かにつけて感じてはいた。インド政府のお墨付きで公演を行った方が確かに権威があり、インドの民衆の注目度も異なるだろう。そこで、まずアシヨーク・クマール総領事を通じて、インド政府に我々の意向を伝えてもらうことにした。インド政府でこのような企画に直接関与する権限を有するのは、Indian Council for Cultural Relations (インド文化関係評議会、通称ICCR)で、わが国でいえば、国際交流基金に当たる機関である。公費を支出するとなると、当然厳格な審査をしなければならない。外国人のヒンディー語劇がどれほどのレベルと質なのかの判断をICCRは、人材開発省の下にあるNational School of Drama (国立演劇学校)に委ねた。この国立演劇学校は、学校といっても、修了年限三年の事実上の大学院大学で、所長は大学の学長と同地位である。定員わずか二〇名で、大学卒業資格をもつ者しか応募できない。舞台俳優を目指す多数の若者が全国から応募するので、競争率は一〇〇倍を越す超難関校でもある。卒業生は映画・演劇界で活躍する有名人が多く(たとえば、シャールック・カーン、ナシールウッディーン・シャー、マノージ・バジパイ、アヌパム・ケール、

ニーナー・グプタ等）権威ある機関である。この演劇学校から届いた返事は「神戸で上演したドラマのビデオを送れ」というものだった。後ほど、国立演劇学校と交流をもってから分かったことだが、国立演劇学校主催で毎年行われる「全インド演劇祭」の参加団体を決定する際も、ビデオによる一次審査を行うらしい。指示通りビデオを送ったが、一、二ヶ月経ってもなかなか返事が来ないので、やはりインドの専門家からみると、我々素人で外国人のヒンディー語劇は鑑賞に耐えられるものではないのだろうと諦めかけていた。ある意味で、どこかホツとした気持ちになっていた。

ところが、そんな秋のある日、突然「デリー滞在中の滞在費を負担するので、インドでのヒンディー語劇上演のために貴劇団を招待する」という思いがけない通知が来て、我が目と耳を疑った。学生達にもわか信じられないという表情だった。興奮したが、一方ではまだ、本当に我々の素人ドラマがネイティブスピーカーのインド人一般大衆から評価されるのだろうか、という不安感があった。まだまだ演技は改良する必要がある、発音もまだ完璧とは思えなかったからである。しかも、通知を受けた一〇月末日から一二月一月の公演予定時期（実施時期は冬季休暇期間のこの時期をおいてない）まで余り時間的余裕がない。一年前の一九九六年に神戸で上演したシリアスな八〇分ドラマに加えて、この年の一月二日に神戸のインドクラブで上演した、三〇分の一幕もの喜劇の二本立てで臨むことにした。三時間の映画を見なれているインドの観客は、ドラマ一本だけでは満足しないだろうと思つたことと、新たに意欲的な複数の学生が加わつたからである。ラージェンドラ・シャルマー作のこの「幕が開く前に」というドラマは「舞台芸術の魅力にとりつかれて、妻のご機

嫌を損ねてばかりいる演劇狂の劇作家・舞台俳優が、芝居の上演が明後日に迫った日、リハーサルに來なかつた相手役のヒロインが降板したものと誤解する。困り果てた末、急遽妻を代役にたてて、リハーサルを行おうとするが、もとより余り乗り気でない妻は、現実離れしたセリフに難癖をつけたりして、なかなか指示通り動かない。さらに、次から次へと訪れる客にリハーサルを妨害される。そこに、実際のヒロイン役の女優が登場して妻と罵り合うことになる。二人の女性に愛想を尽かさず、上演不能となつてしまつた劇作家が『ああ、幕が開く前に芝居が終つてしまつた!』と嘆くところで終る」という、いわばドタバタ喜劇である。

しかし、芝居のセリフと現実の人生を混同するおかしさは観客の心をとらえ、駄洒落も含めたセリフの聴かせどころが随所にあつて、神戸公演ではさかんに爆笑を誘つていた。日本語で刷つたパインのキャッチフレーズは「人生にドラマが。ドラマに人生が!」というものだった。昨年と同じアシヨーク・クマール総領事夫妻も最前列で哄笑しておられたので、これは本国でも受けるに違いないと、密かに自信をもつようになった。なお、以後毎年行なう海外公演の前に神戸公演をするのは、このインド人に受ければ本国でも受けるという、いわば「試金石」のためとなつた。

ところが、皮肉なことに、昨年のドラマ「愛とはいかなるものか?」の主演男子学生が急にインド公演に参加しないと断言して慌てた。すでに、インド公演は決まつており、主役を変えるのは残された時間の短さ(ほぼ一ヶ月)とセリフの多さを考慮すると、非常に厳しい事態となつた。理由は、他のクラブ活動に専念するためという。ドラマは共同作業であつて、一人が勝手にやめると

他のメンバーに大きな迷惑がかかることぐらいは、常識として分かっているはずだ。しかし、自由参加なので強制することはできない。やはり、最終的には本人の意思を尊重せざるを得ないので、急遽代役を探すことにした。四年生は卒業論文作成に忙しい時期だし（そもそも四年生は語劇に参加しないのが学内の慣例だ）、三年生はそろそろ就職活動の準備に取りかかる頃。また、冬季休暇から帰国するとすぐ学年末試験が始まるので、その準備のためにも躊躇する学生が多い。一、二年生には負担が重過ぎる。男子学生の参加者が多かったが、一般学生の男女比は圧倒的に女子学生の数が勝っていたので、男子学生の主役を求めるのは、数字的にも難しかった。

しかし、一番厳しい状況にある四年生の中から、N君という学生が引きうけてくれた。卒論も未完、就職も決まっていない状態でよく引きうけてくれたと思う。彼自身、もともとこういうパフォーマンスが好きだという。願ってもない人材を得たことに安堵した。N君は帰国後、大学院に進学し、後輩の勧誘や育成に貢献し、なにかと後輩の海外公演をサポートしてくれる頼もしい先輩となった。現在はマスメディアで活躍している。彼はわずか一ヶ月で、長いセリフを覚え（もちろん、相手役とのリハーサルも入念におこなった）まるで救世主のように、劇団のピンチを救ってくれた。

このような状態で主役を演じることを引きうけたN君自身、「大冒険であるというよりも人生の大博打の感覚に近かった」と述懐している。さらに、N君のセリフ暗誦の遅さに業を煮やしたインド人教師が「語劇と卒論・就職とどちらが大事だ」と怒る場面があったそうで、学生たちを啞然と

させたらしいが、当然のことで、私も驚いた。語劇は所詮課外活動で自由意思でやるもの。一生を左右する就職ほど重要な問題はないのは決まりきっている。インドの大学は学生の就職には一切タッチしない。おそらく、インド人教師のガンディー氏は、自分の教え子の好演技をインドで見せていい顔をしたかったのだと思う。日本人学生とインド人教師の文化や価値観の違いといってしまう。ええそれまでだが、このような食い違いは、実際のインド公演でも体験することが多く、そんなときの私の気苦労は大変なものであった。

さて、年末年始にかけてのインド公演が決まると、朝日新聞と読売新聞、神戸新聞に大きく報道され、たちまち有名となった。阪神間のインド人コミュニティが八〇万円ほど寄付してくれたし、大学の同僚や卒業生からも温かいカンパを頂いたので、費用の面でも何も問題なくなった。それでも往復航空運賃だけは、学生に負担してもらったので、物価の安いインドでは、この寄付金はかなり余ることとなった。今から思うと、実にぜいたくなことだった。

ところで、初のインド公演旅行となると、やはり学生の健康対策が問題だ。インド旅行初という学生も多かった。北インドの冬は結構寒い。風邪をひくものが出るかもしれない。下痢はほとんどの日本人旅行者が一度は経験する。A型肝炎もマラリアも心配だ。何よりも我々素人劇団には代役をおく余裕がない。仮に人数に余裕があったとしても、代役というだけで参加させるのは教育上好ましくないことだ。とにかく、病気をしないように最大の注意を払うより他ない。もちろん、海外旅行傷害保険に入るのは必須である。しかし、病気になった場合は、やはり身近に医師がいたほう

が心強い。幸い、大阪外国語大学の保健管理センター所長の内科医である太田妙子教授が、インドのアーユルヴェーダ医学を研究されたこともあり、インド旅行を個人的に希望されていた。絶好のいい機会なので、同行を依頼したところ、快諾を得たので、健康面での不安はなくなり、強い味方を得た思いがした。インフォームド・コンセプトやりに従って、太田教授は学生の意思を聞いた上で、マリアの予防薬を投与された。確か半数ほどの学生が応じたと記憶している。副作用も強いとされるこの予防薬を私は飲まなかった。保健管理センターから全員にうがい薬をもらい、太田医師は点滴等の医療装備を持参された。なお、「石橋をたたいてもなお渡らない」慎重な性格とおっしゃるご自身は、蚊対策として旅行用の蚊帳まで持参されたが、冬だったのでそこまで必要ではなかった。さらに、私のアイディアで、全員紙オムツを二枚ずつ持参することにした。インドへ行く時、ほとんどの人は、一度は下痢をする。舞台でお漏らししては大変なので、用心のためにそうしたのである。

さらに、私と個人的に親しい事務官の仲川英雄氏にも同行をお願いし、会計を担当していただくことになった。学生には演技に集中してもらいたいという配慮であった。インド人教師のグラムパール・ガンディー氏も含め、一三名の学生を四人の大人が引率するという大掛かりな団体旅行グループとなった。一三名の学生の男女比は八対五で、このような「男子優位」は長続きせず、やがて数年後には、圧倒的に「女子優位」にとって代わられることになる。主役以外のほとんどの学生は、二つのドラマに掛け持ち出演となった。

かくして、ヒンディー語劇の史上初インド公演のため、我々一七名は一九九七年一月二一日
一三時一五分発のインド航空三一九便で関西空港を飛び立つこととなった。期待感と不安感を胸に
懐きながら。

第二章 初のインド公演―マスメディアは超過熱

我々を乗せたインド航空三一九便はほぼ定刻通り、インド時間の夜九時過ぎ、デリーのインディア・ガンディー国際空港に着いた。機内では、主役の二人を隣り合わせに座らせ、セリフ確認のためのリハーサルまでやった。しかし、殆どの時間はくつろいでいた。スムーズに入国手続きを終え、空港を出たところで、国立演劇学校の人が出迎えてくれていた。一人一人に歓迎の花輪が首にかけられ、甚く感激した。ミニバスで案内されたのは、ホテル・ランジットというスリースター級のホテル。都心のコンノートプレイスに近い便利な所にあり、全室バルコニー付きで、中には花壇があつて外見上は非常に感じがよい。しかし、毛布がすべての部屋に行き渡らず、お湯も出ない部屋があつて、サービスはどうみてもよいとはいえなかつた。この年の冬は二〇年ぶりの寒波（マイナスになることはないが、摂氏一度ぐらいまでは下がる）といわれ、毛布がなければ寝られないほど寒い。上演には差し支えなかつたが、さつそく風邪をひいて寝込む学生が現れた。この頃のデリーは、自動車の廃棄ガスによる大気汚染のひどさが、世界の都市のなかで指折りに入るといわれていた。太陽が黒いスモッグに遮られて一週間ほど太陽をまともに見たことはなかつた。まともなら、目をぱちり開けて太陽を見つめることはできないはずだが、太陽を見ても平気であつた。少年時代にすりガラスというので遊んだことがあるが、あれを思い出した。空全体がすりガラスなのである。必死

でうがいを励行したが、それにも関わらず喉をいためてしまった。うがいだけでは不十分でマスクの持参を忘れたのは軽率だった。太田医師はさすがに、移動の際は、マスクをしておられた。阪神・淡路大震災でお馴染みになった、先のとがったマスクである。なお、我々日本から来たグループに、ヴァーラーナシーでホームステイして留学中の二人の女子学生も上京して加わった。この二人はヴァーラーナシー公演のみ、ヒロイン役を演じることになっている学生であった。あらかじめ、現地でインド人の指導を受けてセリフを覚えていたが、相手役の男性とは初顔合わせなので、彼女達とのリハーサルも必要だったのである。

さて、あくる日は会場の下見をし、簡単なリハーサルを行った後、女子学生は舞台で着るサリー等の調達のため、チャンドニー・チョークを訪れた。痴漢にあつたり、電柱の配電盤から火花が飛び散るといふアクシデントに遭い、ただならぬ国だと学生達は緊張した面持ちであった。

デリー（キロリマル・カレッジ）での上演（観客数約二〇〇）

インド初の公演は一二月二三日、デリーの北にあるデリー大学付属キロリマル・カレッジ講堂で行うこととなった。メトロが開通した今では簡単に都心から行けるが、当時はまだ交通手段としてはバスしかなく、交通渋滞の中を都心から到着するには、かなりの時間を要した。この辺りは、デリー大学本部のキャンパスを中心に付置研究所や付属のカレッジが集中している文京地区であり、キロリマル・カレッジもその一角を占める。道路を挟んで経済学部と経済成長研究所がある。スーパ―

スターのアミターブ・バッチャンが英語を学んだカレッジとしても知られる。当日は、デリー大学の教職員のストライキと遭遇し、付近のカレッジはピケが張られ、一部の道路は閉鎖されていた。キロリマル・カレッジに通じる道路も閉鎖されており、そのため、途中ミニバスを降りて数百メートルをキロリマル・カレッジまで徒歩で辿りつかねばならなかった。すでに芝居の衣装に着替えていたので、舞台衣装のまま歩くこととなった。ただでさえ目立つ日本人の集団がサリーやクルターを着てぞろぞろ歩く姿は、いやでも通行人の好奇の視線を浴びた。初演でストライキに遭遇するとはあまり幸先はよくないな、もしかしたら中止になるのかなと心配になったが、しかし、当カレッジの学生を中心に近くに住む大学関係者が徒歩で観劇に来てくれたおかげで、二〇〇人収容の講堂は満員となった。普通、カレッジの講堂というのは講演や式典を行なうためのもので、演劇用にはできていない。しかし、このキロリマル・カレッジの講堂は一応劇場の設備を整えており、音響装置、照明装置、幕などが揃っていた。しかし、管理はお世辞にもできているとはいえず、幕も汚れ、機械類も埃をかぶっていた。埃といえば、北インドの乾季は、空気が乾燥している上、ラージャスターン方面から吹く砂風のため、どこの家にも埃が侵入してくる。常に掃除をしておかないと埃がなくならない。

さて、芝居の方だが、インド初公演ということで緊張していたが、始まってみると観客席からやんやの拍手と歓声を浴び、学生達はリラックスして平常心でやっていた。最初の出し物に、短い喜劇「幕が開く前に」の上演をしたのも成功で、飽きっぽい観客を最後まで足止めしておく効果があっ

た。二つ目のシリアスなドラマ「愛とはいかなるものか？」は八〇分とやや長く、ストーリーのテンポもそれほど速くないので、中座する観客がでるのではないかと少し心配していたのだが、幸い誰も退席する者はなく、最後まで観劇してくれた。私のデリー大学留学中の恩師数名（その一人はかつての大阪外大の同僚だったギリ―シュ・バクシー氏―今は故人）も駆けつけてくれ祝福をもらった。「教え子の教え子」の活躍に喜ばない人はなからう。嬉しかった。学生達が誇らしかった。インド初演は大成功で学生達は観客の確かな手応えを感じ、自信をもったことだろう。なお、初のインド公演なので、座長たる私の挨拶と、劇のあらすじと出演学生の写真を載せたヒンディー語のパンフレットを、日本で多くの部数を印刷して持参し、上演前に各会場で観客に配った。私の挨拶文は次のようなものだった。

「ヒンディー愛好者の皆さん―遠く日本にいてヒンディー語を学ぶ日本人学生―日本語でもドラマを演じたことのない―にとって、インドに来てヒンディー語を母語とする観客の前で、ヒンディー語でドラマを演じることは、貧しい人が宮殿の夢を見るような（不可能な）ことでした。欠陥ヒンディーをわざわざ露呈しになぜ行くのかといって反対する人もいました。では、どうして不可能が可能となったのでしょうか。学生達の熱意、同僚のガンディー氏の厳しい指導、大阪・神戸地区に住むインド人の厚意と日本印度商業会議所から頂いた寄付金、アシヨーク・クマール大阪神戸インド総領事の愛情に満ちた激励、さらにインド政府の寛大さ―これらすべてが一緒になって、不可能を

可能としたのです。私達は私達のヒンディー語の発音は欠陥のあるものであり、演技力も未熟であることを熟知しております。それでも私達は、私達がいかにヒンディー語を愛しているかを披露したいのです。実際、ドラマのセリフを暗誦することは、言語教育の有用な手段です。学生にとっては、文法の教科書の「無味乾燥」な文章はなかなか覚えられません、ドラマのセリフは比較的容易に覚えることができます。セリフには脈絡があり、何よりも生き生きしているからです。私達の団員の中には、日本の演劇界と関わりをもつものは誰もいません。(にも関わらずこのような公演を行うことは) 大胆なことこの上ありません。しかし、自らの経験にもとづいて、ヒンディー語を話す人は寛大であると信じています。この寛大さこそが私達の寄り処であり、刺激の源です。このドラマの上演を通じて、私達も多くのことを学びました。私達の演技は観客に感動を与えるにはほど遠いレベルです。私達は、このような試みを始めたに過ぎません。ヒンディー語に堪能な次代の学生たちが、この任務を完遂してくれるものと期待しております。最後に、皆様方の並々ならぬ忍耐力に対し、心から感謝申し上げます。そして、インド独立五〇周年記念を心からお祝い申し上げます。日印友好万歳！」

そう、この年は、インドが独立して五〇周年記念という節目の年であった。おそらく、インド政府から受けた厚遇には、このことが追い風になった面はあるだろう。ラッキーとしかいえない。

公演を日中に終えた後、一行はクリシュナ副大統領を副大統領官邸に表敬訪問することになった。これは、外国人教師のガンディー氏の実兄が副大統領の秘書をしておられる関係で、あらかじめ予

定プログラムに組込まれていた。副大統領の前で一人ずつ恭しくインド式の合掌をして挨拶した後、スナックを振舞われ、副大統領の人生訓を聞いた。インドの伝統に従って、家庭生活の大切さを説かれたように思う。ちょうど、「愛とはいかなるものか？」という我々のドラマのテーマとも関係する。副大統領の求めに応じて、劇のさわりの部分を副大統領の前で演じて賞賛された。このように、一般の観光客には得られない貴重な体験ができるのも、この公演旅行のすばらしさであり、以後も劇の上演以外に、このような素晴らしい経験を限りなくすることになる。

デリー（LTG劇場）での上演（観客数約三五〇）

あくる日（一二月二四日）は、ニューデリー市内の中心部にあるLTGオーデトリウムという本格的な劇場で上演することとなった。設備も立派で、照明等の設備も整っている。このホールのある、いわゆるマンデイー・ハウス地区には、インド文学アカデミーのあるラビン・ドラ・バワをはじめ音楽・演劇・美術関係の施設が集中しており、毎日どこかで、美術展や音楽会が催されたり、演劇が上演されたりしている。国立演劇学校もすぐ近くだ。フィロローズジャーナリーにある日本情報文化センターも近くにあって、便利だ（ところが、この日本情報文化センターは二〇〇四年に大使館に統合されて、チャーナクヤプリにある大使館に移ってしまった）。毎年一回、全インド演劇祭というのが国立演劇学校の主催で催され、インド各地や海外からも沢山の演劇人が集まって、二週間ほどにわたって、一〇〇近い劇が演じられるのだが、すべてこの周辺の五つの劇場を使って

行われる。いずれの劇場にも徒歩で移動できて非常に便利である。たとえば東京でも、劇場の数は多くとも、お互い徒歩で移動できる複数の劇場というのは、あまりないと思う。この全インド演劇祭については、後の章で詳しく述べる。

昨日の公演がカレッジの講堂で行われたため、観客は学生と教師が主で、一般のデリー市民は少なかったように思う。このL T Gホールは都心の便利な所、しかも文化的な行事が常に行われている場所の一角にあつたため、多くの一般市民が駆けつけてくれて、三五〇人収容の席は、たちまち満席となった。昨日の反応に自信をもった学生達は、ここでも熱演した。ただ、デリー到着以来、私の喉の調子がよくなく、ついにほとんど声がでなくなつた。ストウルダールとして、真つ先に舞台上で登場して前口上を述べるのが私の役割なので、大いに困つた。しかし、声をふりしほつて、「こんな声になつたのは、デリーの気候のせいです……」と言つたら、会場の爆笑を誘つたため、芝居の雰囲気が高めるのにむしろ役立った。「さすがは、転んでもただでは起きぬ溝上先生！」と、後で学生に冷やかされた。前口上を述べると、もう後の役割はない。この頃はまだ、照明やBGMにさほど凝つていなかったもので、そういう操作も比較的簡単に学生に任せておけば安心だった。また、日本人観客を想定していなかったもので、日本語の字幕をつけることもなかった。

前口上が終ると、私は観客席の後ろの席に紛れ込んで舞台上の学生たちの演技を見ることにした。同時に、観客の反応をさぐることにした。場所も移動しながら熱心に観察したが、どの顔も真剣そのもの。面白い場面では、大笑いしたり、感動すべきシーンでは、惜しめない拍手を送っていた。

ヒンデュー映画のメロドラマを見るのと同じ反応だった。前日に勝る大成功だった。観客の中には、ネルー大学日本語学科のS・B・ヴァルマー教授やインド大使館元参事官のオーム・ヴィカース氏、物理学者で日本政府から勲章を授与されたアショーク・ジェイン氏（若い頃、氏が京都大学に留学中に筆者は知り合った）、筆者が学生時代、神戸で個人的にヒンデュー語を習い、以後四〇年以上にもわたりずっと親しくお付き合いしてもらっているサチュデヴ夫人等の顔ぶれがあった。もうひとつ特筆すべき観客は、国立演劇学校が児童の為に開く演劇講習会に学ぶ児童達である。演劇に興味のある彼らの素直な反応が一層会場を賑やかな雰囲気にくれたことは間違いない。観客の反応には、観客の年齢も大きな要素であることを、後の公演でも知ることになる。

かくして、その夜はホテルでの夕食会をデリーでの初演祝勝会に変えて一同で祝った。大阪外大の元教師ハルジェンドラ・チョードリー氏も祝福に駆けつけて下さった。私は、「これまで約三〇年ほど教師生活をしてきたが、今日ほど嬉しい日はなかった」と述べたが、決して誇張ではなかった。もっとも、以後もこういう祝勝会があるたびに、いつもそのような「最上級」を使って表現する癖がついてしまったので、最上級の価値を下げてしまったかもしれない。しかし、私の使う最上級は、その時々私の偽らぬ気持ちを表現している。決して誇張表現ではないことをお断りしておく。

ナラヤナン大統領と会見

さて、デリーでの大任を果たした一行は、翌二五日クリスマスのは自由行動とし、ある者は

ショッピングに出かけ、ある者は体を壊してホテルで休み、ある者は国立演劇学校を見学した。私も見学組に加わった。まず、昨日会った子供達の演劇のリハーサルを見た。すごい迫力だ。まず声が大きくはつきり通っている。発声練習の基本をやった証拠だ。驚いたのは、このリハーサルでやっていたドラマが彼らの創作によるものだという。さらに、台本がなく、即席でやっているというのも驚く。インド人はおしなべて耳がよくて、暗誦が得意だが、こんなところでも訓練されるのだろうか。とにかく、子供達の生き生きした表情は強く印象に残った。彼らのうち、将来、舞台俳優として名を成すものがきつと出てくることだろう。

その翌日二六日の午前中は、やはり演劇学校で大人の劇のリハーサルを見た。これは、もうプロ級で、表情や演技、発声のどれをとっても一流と思われた。大人が子供役をする演技も見た。とにかく、インド人の舞台人というのはこれぐらいのレベルであって、素人の我々の演技なんぞは、とても比べ物にならない。大喝采を受けたからといって、それぐらいで有頂天になってはならないと、自らを戒めた。

午後は、思いがけず大統領官邸で、ナラヤナン大統領と会見できることとなった。これは、あらかじめのスケジュールに入っていなかった全くの幸運であった。アーグラに中央ヒンディー研究所という、ヒンディー語の教育・研究所があつて、本学の多くの卒業生もこれまで留学しており、現外国人教師のガンディー氏もそこに准教授として勤務しておられる。毎年、この研究所が推薦して、ヒンディー語の教育・研究や著作活動に貢献のあつた人一三人ほどを、大統領官邸に招い

て大統領から表彰するセレモニーが行われる。今年のセレモニーがちょうど、一二月二六日の午後に行われることになり、ヒンディー語を学んでいる我々の一行が、その授賞式に出席する来賓として招待されたのである。大統領官邸は、イギリス統治時代の旧総督邸であり、ニューデリーの国会議事堂の隣に威風堂々と建っており、普通の外国人には中へ入る機会は余りない。私は、かつて留学時代に、大統領官邸に留学生を招く行事があつて、当時のアーメド大統領に拝謁した経験があるのみで、それ以来中に入ったことはない。学生達は、もちろん、初の体験である。めつたにないチャンスなので、喜んでこの招待を受けた。当時はまだ、テロ事件というのがなかったので、持ち物検査もさほど嚴重でなく、すーっと中に通された。中は、壮大華麗というほかなく、部屋の数は一三〇、ムガル庭園を含めた総面積はヴェルサイユ宮殿をしのぐといわれる。このムガル庭園が公開されるのは、美しい花が咲く二月のみで、私が留学時代に招待されたのも、二月だった。外国の大使が信任状を提出する儀式は、日本では皇居で行なわれるが、インドでは、ここで大統領に信任状を提出することになっている。

セレモニーは官邸内のオーデイエンス・ホールで、厳かに行われた。一三人の受賞者の内、ひとり外国人がいたが、その人はロンドン大学でヒンディー語を教えるルペルト・スネル氏で、外大でも教科書として使っている *Teach Yourself Hindi* の著者としても知られ、中期ヒンディー文学に関する論文や著書も多い有名な学者である。外国人に与えられるジョージ・グリアソン賞を受賞されたのだが、当然だと思つた。ひとりずつ大統領の前に進み出て賞状と小切手と記念の盾をもらい、

そして栄誉のウールのシヨールを肩にかけてもらうというのがインド式の表彰式のやり方である。大統領が表彰状を授与する前に、S・R・ボムマイ人材開発大臣（日本でいえば、文部科学大臣）がその人の業績をヒンディー語で朗読するのだが、氏はヒンディー語を母語とする人でなく、遠いアッサム州出身の人だったので、そのヒンディーのなまりも文法もひどく、非常に聞きとりにくい変則的なヒンディー語であったのが印象に残っている。司会者のヒンディー語が流暢で美しかっただけに、よけいに耳に残ってしまった。これが多言語国家の現実である。

そばにいた仲川英雄事務官に「先生もいつかあそこ（受賞者の席）に座られるのところがいますか」と訊かれて、即座に私は「冗談を！わたしなんかそんな大それたことを！」と本当にそう思った通りに答えた。しかし、思いもかけず、五年後にこの「冗談」は本当になって、私が日本人ではじめてジョージ・グリアソン賞をまさにこの場所で受賞することになるのである。

授賞式が終るとお茶にお菓子の立食交流会が開かれ、そこで、ナラヤナン大統領とわずかだが、言葉をお互いに交わす光栄を得た。気安く日本語で語りかけられたのには驚いた。実は、私はナラヤナン大統領とは初対面ではなく、氏が駐米大使を勤めておられた一九八二年五月に、米国のシラキュース大学で開かれたヒンディー語の学会でお会いしている。氏はケーララ州出身で、ヒンディー語は決して流暢ではないが、ヒンディー語の重要性を「英語で」説いておられたと思う。氏は外交官出身で、最初の赴任地が東京のインド大使館で三等書記官として外交官のキャリアを始められた。まだ少し日本語を覚えておられるのはそのためだろう。ビザを発行されていたという。その後は、ネルー大

学学長、駐中国大使、駐米大使、外務大臣、副大統領とトントン拍子に出世を重ね、ついには国家の元首の地位にまで到達されたのである。よく知られているように、氏は最下層のカースト出身で、少年時代は過酷な差別にあったという。インドの民主主義を賛美する形で、よくこの人の例が出される。被差別階級出身でも、実力があれば、国の頂点にまで登れると。確かに、インド社会は差別社会ではあるが、一方ではそういうダイナミズムもあるようだ。とにかく氏は非常に物腰が低い方で、大国の大統領という尊大な態度はとらず、国民から敬愛されている。なお、その後もう一度東京で氏とお会いしている。大統領を辞任されてから、日本政府の準国賓として二〇〇四年の一月に来日された折に、我がヒンディー語劇団が、一〇月一〇日、全日空ホテルで催された歓迎昼食パーティーに招かれてヒンディー語劇を上演したのである。七年前のこの出会いのことを覚えていてくださって感激した。その後、まもなく二〇〇五年六月三〇日に、氏は惜しまれながら他界された。巨星墜つという言葉がふさわしい。

さて、大統領官邸を出た我々はマスメディアのカメラの放列に出会って面食らった。我々は受賞されたわけではなく、ただ授賞式に参列しただけなのに、なんのニュースヴァリユーがあるのかわからなかった。そして、あくる日の新聞にでかでかとその写真が載った。ヒンディー語劇の上演よりも、大統領と会見した事の方がニュースヴァリユーがあるなんて、と複雑な思いだった。

混乱したヴァーラーナシーでの上演（観客数約四〇〇）

一二月二七日、初の地方公演先として、聖都ヴァーラーナシーに発つこととなった。

ところが、なにが起こるか分からないのがインド。信じられないことに、デリー空港の国内線カウンターで、ヴァーラーナシー行きにチェックインしようとしたら、予約していたはずの一七名の座席がそっくりキャンセルされていることを知らされ、搭乗を拒否された。日本で買ったOKチケットである。そんなはずはないと主張してコンピュータの画面を見ると、確かにcancelledとなっていた。まだ、コンピュータが導入されずに手作業で予約業務を行っていた時代には、団体客を優先するため、先約の個人の予約が勝手にキャンセルされてしまうことがあり、国内を独占的に営業していたインディアン・エアラインズの評判はなにかとよくなかった。しかし、コンピュータで予約業務をおこなう時代に、勝手にキャンセルという事は信じられない。疑うとすれば、インディアン・エアラインズの予約係りが勝手にコンピュータを操作して他の団体客に振り替えてしまったのだらう。それにしても信じられない。執拗に抗議した。幸か不幸か、ヴァーラーナシー行きのその便は遅れている。埒があかないので、昨日の、ナラヤナン大統領との面会の写真まで持ち出して「我々は普通の観光客ではなく、こういう重要な任務を帯びた団体である」と主張して、あくまでその一七席を確保するように主張した。いつまで待っても返事は「待て、待て」の一言。とにかくどうしてもヴァーラーナシーに行く必要がある。粘って粘った結果、ようやく搭乗できることとなった。学生や他の同行者は私の手柄だと思つて、まるで魔術師のようだと感じていたが、私自身は一体何が原因なのかいまだに分からないままである。二時間遅れの飛行機に乗ってみると、結

構空席があったことも不思議だ。

ハプニングがあったが、ともかくヴァーラーナシーに到着することができた。久しぶりに明るい太陽を見てホッとした（しかし、夜になるとここも寒かった）。空港からサイキルリキシャ九台を連ねて都心へ。まず、記者クラブに案内されて、そこで記者会見。この主催者は、ヴァーラーナシー・ヒンドゥー大学を定年退職して、外国人やヒンディー語を母語としないインド人を対象にヒンディー語の短期集中コースを自宅で開いているヴィシユヴァナート・ミシユラ氏。氏は、短期間の特別の訓練でヒンディー語を習得させる方法を開発した人としてアメリカ等で紹介された人で、バーシャー・バーラティーという名前でヴァーラーナシーの自宅を学校にして経営しておられる。前記の二人の女子学生は、その家にホームステイしてヒンディー語を学んでいたのである。毎日六時間、一対一で授業を受けるので会話はたちまち上達する。ホームステイなので、女子にとっては安全であり、



「愛とはいかなるものか？」の舞台

食事つきというのも衛生上ひじょうにいいことだ。授業料は高いが、ホテルに泊まることを思えば安い。なによりも、ヒンディー語の会話能力がみるみる上達するので、受講生の評判はよかった。その後、バーシャー・バラティーはデリーにも「分校」をもつことになる。

一二月二八日に、初のヴァーラーナシー公演を行うが、会場となったナーガリー・ナータク・マングリー（市民劇団）は、千人は収容できると思われる大きな劇場だ。三〇年近くも農科大学で農業を教え、農村開発の指導を行っておられる畏友牧野一穂氏夫妻も、アラールハーバードから車で観劇に駆け付けてくださった。しかし、ここでデリーでは見られなかった「インド」を発見することになる。まず、ここでは、働く人間の数が多すぎて、誰が何を担当しているのか分からない。複雑なカースト制度がからまっていて、現場の作業員に指示する人は決して自分の手を汚して物を運んだり、機械をさわろうとしない。幕の係りは幕の上げ下げしかない。しかも、ミシユラ氏は劇のシナリオを読んでいながら、これら現場の作業員との打ち合わせは一切やっていなかった。そのため、とんでもないハプニングが起こることとなる。まず、ミシユラ氏は、市の有力者を舞台に呼んで延々と開会式をやった。我々を歓迎してオーブンセレモニーをやるのは当然だが、劇と直接関係のない内容のスピーチを延々とやる招待者がいて、デリーから疲れて到着した一行には、はなはだ迷惑なことだった。

概してインド人は話好きで、スピーチをやりだすと、なかなかとまらない人が多い。長いスピーチにはうんざりするが、それでもなかなか面白いヒンディー語を話す人がいるので、私はヒンディー

語の勉強になると思つて我慢して聞いていたが、劇に集中したい学生にとつては、迷惑千万だ。開演前の長いスピーチはしらせせる。ドラマの内容まで説明し出す司会者がいるが、そんなのは芝居を見たら分かることで、全く余計なことだ。簡単な紹介はストウルダールたる私の役割であるから、私の役割まで奪われたみたいで不愉快である。二つのドラマの幕間にもミシュラ氏は、セレモノーをやつたので、ますます余計な時間を食うこととなつた。なお、さきほど述べたように、ヴァーラーナシー公演のみは、地元でヒンディー語を学んでいた二人の女子学生がそれぞれのヒロイン役を交代して演じることとなつた。さすがに、演劇の専門家の指導を受けたとあつて、実に立派な演技だつた。しかし、後の「愛とはいかなるものか？」は長いドラマなので、上演時間が長くなるほど観客の数が減りはじめた。デリーではなかつたことだ。そして、ある場面で、幕係りが芝居が終つたと勘違いして幕を下してしまつた。打ち合わせのできていなかった幕係りは、勝手にドラマが終つたと思つて幕を下ろし始めたのである。夜も遅くなつたので、彼は家に早く帰ることしか考えていなかっただろう。確かに、ドラマのひとつのシーンが終るところで、芝居全体が終つたと錯覚しそうな場面ではあつた。当然、観客の多くは一斉に席を立ち始めた。慌てて、「まだ劇は終っていません。席についてください！」と叫んだが、一たん席を立つた客は再び座るはずがない。一斉に出口に殺到した。もう夜の一〇時を過ぎていて、ドアを開けるともうそこは外で、外気温一度という寒さであつた。家路に急ぐ人の気持ちは分かる。幕係りはとつくに率先して帰宅してしまつていた。

しかし、ともかく残つた人の為に幕をもう一度開けて最後まで演じた。わずか数十人の観客しか

残っていないかった。しかもその後も、表彰式や歌とかいろんなセレモニーをながながとやった。このホールには暖房設備はない。楽屋にもヒーターひとつ置いてなかった。学生達は薄着の舞台衣装のままずっと立っていた。芝居が終わったのだから厚着に変えてもよかったはずだ。しかし、そうアドバイスしてくれる人は誰もいなかった。私が気づけばよかったのだが、やはりセレモニーの方に気を奪われていた。ようやく長いセレモニーが終つたら、もう午後一時を過ぎていた。館内は深々と冷えてくる。ここで数人の学生が倒れ出した。とくに驚いたのは、水泳部の学生が倒れたことである。皮膚の鍛錬ができているはずの彼が倒れるとは！よほど寒いということである。地元で暮らす二人の女子学生は薄着でも平気だったのは、環境に適應していたからだろう。ここで、太田医師の出番が出て、てきばきと治療に当たってくださった。主催者側はインドの医者を呼んで違う治療を施そうとするし、太田医師はそれには責任はもてないといわれ、ここでも衝突が生じた。深夜にホテルに到着した時は、学生達の怒りは頂点に達していた。予測できなかったとはいえ、私にも責任があるので素直に詫びて今後の善処を約束した。案じられた学生の健康だが、若いだけあつてすぐに回復した。しかし、あくる日予定されていた、釈尊初の説法の地サールナート見学を中止して休息にあてた。

このように、ヴァーラーナシー公演は、さんざんだったが、新聞では大きく報道され、各新聞とも非常に好評だった。その中のいくつかの見出しを紹介しよう。

「日本の学生のヒンディー語愛は賞賛に値！」「ヒンディー語劇上演で、地球は家族なりの思いが

現れる」「日本人のアーティスト、インド文化を同化する」「日本人学生の劇上演は言語と国の境界を破る！」その他は単に、「日本人学生によるヒンディー語劇上演」という見出しである。「バーラテンドウの生誕地で、本日、日本人学生がヒンディー語劇を上演する」というのもあった。バーラテンドウというのは、近代ヒンディー文学の祖といわれるバーラテンドウ・ハリシュチャンドラのこと、彼がこのヴァーラーナシー出身であることを、ヴァーラーナシー市民は誇りにしている。また、私のインタビュの内容が「演劇によって国々の文化を身近にすることができ」る」「日本でヒンディー語学習熱急速に増加」という見出しで報道された。

このヴァーラーナシー公演は特別例外だったが、今後の地方公演にとって貴重な経験をした。地方都市ほどセレモニーを盛大にやる傾向にある。デリーでは、開演前の一切のセレモニーはやめたことがない。いきなり芝居が始まる。とにかく、出演者不在の長いセレモニーはやめてもらうこと。ある程度のセレモニーはどこでもやるので、仕方ない。むしろ、インド式のセレモニーのやり方（たとえば、ランプに蠟燭で点火して、サラスヴァティー女神の讃歌を歌うことから始まる）を学ぶの必要である。私は長すぎるスピーチをやめさせることに腐心した。ある都市では、インド側にもセレモニー重視派と簡素化派に分かれて議論するところがあった。学生にしてみれば、自分達は芝居をしに来たのであるから、芝居に集中させて欲しいという当然の要求である。しかし、世話になる主催者にはある程度は我慢して従うことも必要だ。そのあたりの兼ね合いが難しいところで、板ばさみになって悩むのはいつも私であった。健康を回復した学生達は、ホテルから近いガンガーの

ガート（石段でできた沐浴場）を見学した。筆者は何度か訪れているが、これから続く公演のことばかり気になり、聖なるガンガールの感慨に耽る余裕はなかった。

バスで長距離を移動

さて、一二月三〇日は、列車で次の公演地であるアーグラーに向かうことになっていたが、日本で予約していたはずの列車には、ヴァーラナーシー仕立ての車両には一七名も乗れる席はないといわれ、またしても困惑した。どうしても、新年のアーグラー公演に間に合わなければならぬ。飛行機がヴァーラナーシーからカジュラホ経由でアーグラーまで飛んでいるので、まずその方法を考えた。しかし、一二月といえばインドの観光シーズンであり、とても一七席の確保は不可能であった。その次の方法は観光バスのチャーターである。しかし、これも暖房付きの観光バスは大抵日本人観光客にハイヤーされていて、もう車両はないといわれて途方にくれた。いろいろ考えあぐねたが、みんなの了解を得て、普通のバスをチャーターして、アーグラーまで、距離にして約六〇〇キロメートルを移動することにした。東京―明石間ぐらいの距離だろうか。日本の高速道路なら一〇時間ぐらいで着くだろうが、ここではそうはいかない。その一・五倍ぐらいはかかるものと見たほうがよい。夜は冷えるので、厚着をして湯たんぽを全員に持たされた。しかし、二時間ほど暖かいただけで、すぐ冷めてしまった。こういう事態を予測していたら、ホカロンを大量に持ってくればよかったのだが。バスは大型なので、一人が一つのシートに座ることができた。アーグラーまでは

一応ハイウエーが通じていて、まっすぐ走れば、夕方出発して翌日一二月三日の朝には、アーグラーに着くはずだ。それしか方法がなかった。ヴァーラーナシー公演は、そもそもデリー空港でハプニングがあったし、とにかくハプニング続きで余りついているとはいえない。しかも、一人の学生がひどく下痢をしていた。しかし、置いてはいけない。オムツをして、点滴をしながらの移動という難行となった。太田医師が付き添ってくださったので、安心ではあったが。

今から思えば、この夜のバス旅行は危険に満ちたもので、アーグラー公演を中止してでも、避けるべきだったかなと、反省している。運転が荒っぽくて、ひやっとすることもあった。治安のよくないとされる所を通過したときは、緊張した。途中、交通警官が運転手にワイロを要求する。余りに偉そうな態度をとるので、ナラヤナン大統領と一緒に記念撮影した写真を見せたら、効果観面で、その警官の態度は急に変ってワイロを要求しなくなった。

途中何度もバスを止めて、用を足したり、腹ごしらえをした。点滴をしているM君の容態を気遣いながら、ハイウエーといっても、日本のようにあちこちにレストランがあるわけでない。しかし、ある道端で、焼き立てのチャパティーが一枚一ルピーで売っていたのは実に美味しく感じられて、一同むさぼるように食べた。そして何よりありがたかったのは、焚き火である。体を温めるのはこれが一番。いつもより長く感じられた車内での夜がやがて徐々に明けてきて、東の空が徐々に白んできた時は、思わず、ああ夜が明けた！と叫んだ。もちろん、目的地に着くまでは何が起こるか分からないので最後まで油断はできないが、しかし、夜ほどの不安はない。アーグラーまであとわず

かだ。

元日のアーグラーでの上演（観客数約六〇〇）

ついに、一二月三一日の午前一〇時頃だったろうか、アーグラーの中央ヒンディー語研究所近く
のバス停に辿りついた。何時間かかったかは、数えてなかったので分からないが、一五時間は確実
にかかっている。長旅であった。ホテルに着くと、とにかく全員死んだようになって寝た。私とガ
ンディー氏と仲川氏のみ、ある医師の家で泊まることとなった。しかし、夕方に行なわれたグロー
ヴ・インターナショナルという、我々の公演を主催してくれるNGOの文化団体の例会と記者会見
に私と数名の学生が招かれて出席したが、やはり長いスピーチが延々と続いたので、学生は怒って
しまった。しかし、そこで知り会った人のお蔭で、その年の夏、ロンドン公演が実現することにな
るのである。

日本なら大晦日。今頃、人々は「紅白歌合戦」を見ているだろうなと思いつながら、元気な学生だ
け、次期外国人教師として大阪外大に着任する予定のアシユヴァニー・シュリーヴァースタヴ先生
の私宅でのニューイアーズイヴのパーティーに出た。そこで、ジーンズを履いた若者達がゴーゴー
を踊っていたのには驚いた。私の留学時代のイメージでは、インドの女性はまだそこまで開放的で
なく、サリーやパンジャビー・ドレスという民族衣装を着るのが普通だった。しかも、首都のよ
うな大都会ではなく、アーグラーのような地方都市のしかも中流階級の家で、このような光景を

見て、インドの変化の一面を感じた。こうして、一九九七年の最後の夜をアーグラの地で過ごした。一九九八年の新年は、さっそく有名なタージマハル見学にでかけた。あの白亜の大理石でできた壮麗なタージマハルを新年に見られるとは、素晴らしいことだった。しかし、体調を壊したり、休息を望む学生もいて、全員がタージマハル見物に参加したわけではない。せっかく来たのだから、この世界遺産は見なければもったいないと思うのだが、しかし、有名な観光地だから、将来又見にくるチャンスはあるだろう、ということに参加しなかつた者もいるかもしれない。太田医師と仲川事務官は、再訪の可能性は低いので、とりわけ感慨深く見学されていた。

アーグラでの元日公演は、市内のスール・サダンという、ヴァーラーナシーと同規模のあるいはそれよりも大きい劇場でやることになった。スールというのは、クリシュナ信仰を謳った中世ヒンディーの詩人スールダスに因んだ名前である。サダンは館という意味である。インドの新年は、ただ休日というだけで、日本のように特別の行事はない（もちろん、「新年おめでとう」という言葉は交わす）ので、むしろ、こういう日は、人々が集まりやすい。六〇〇名ぐらいの観客があつた。ピームラーオ・アムベドカル博士大学（アーグラ大学の正式の名称）のマンジュール・アーメド学長、中央ヒンディー語研究所のマハーヴィールサラン・ジェイン所長、地方長官のドウルガーシヤンカル・ミシユラ氏、アーグラ・パブリック・スクールのマヘーシユチャンド・シャルマー校長、劇作家のラージェンドラ・ラグヴァンシー氏等が招待客であつた。当時、アーグラに留学中の長崎広子氏（現在は大阪外国語大学助教で、筆者の同僚である）も、ホームステイ先のインド人家族

と共に、応援に駆け付けて下さった。やはり開演前のセレモニーはあった。学生に言わせると長かったというが、あらかじめお願いしていたため、ヴァーラーナシーよりはずっと短く終わった。下痢をしていて点滴をしていた学生も回復して、元気に演技した。公演は大成功に終わった。ヴァーラーナシーのような不愉快な経験をするともなく、打ち上げは、シュリーヴァースタヴ先生の整形外科医であるお兄さんの自宅（そこに私が泊っていた）で豪華な食事を一同楽しんだ。芝居の後は、公式のレセプションもあったが、こういう風に、ある人が好意的に家庭に食事に招待してくれることが多く、実際の滞在費用の負担が軽減されるのである。費用の面よりも、そういう人々の歓待の気持ちが好きだ。家庭料理は概してマイルドで、外食するよりも健康的である。何よりも、そこで行われる国際交流が素晴らしい。これは、語劇の海外公演のもたらす最大の副産物である。素晴らしい元日だった。難行して遠くヴァーラーナシーからバスで駆け付けた苦勞が報われた。

翌日の地元アングラーの新聞にも「日本人アーティストのヒンディー語劇に聴衆魅了される！」「日本人学生のヒンディー語のセリフまわしに聴衆はうっとり！」という見出しで大きく報道された。二日は、のんびりと郊外のファターフプル・シークリというムガル朝の都跡を訪れた。かつては、都として繁栄したが、水の便が悪く、枯渇したため、今のパキスタンのラーホールに遷都したと言われる。パーンチ・マハルといわれる、五層の骨組みだけの建物の最上階から一望する周囲の光景はすばらしい。インド平原のど真中にあることを実感できた。しかし、やはり全員ひとり残らず、このピクニックに参加したわけではない。休息したい学生もいた。しかし、その夜、アングラー・

パブリック・スクールの校庭で催されたキャンプファイアーには全員出席した。若い高校生との交流も楽しかった。キャンプファイアーというのも、私の高校時代にはグラランドでよくやったものだが、今頃は公害や安全意識の高まりで、本当のキャンプは除いて、都心ではあまり見かけない。それだけに、このキャンプファイアーは懐かしかった。実際、この寒い冬空での焚き火は本当に心の底まで暖かくしてくれる。昨日の招待客であった地方長官がパトカーに先導されて、政府の公用車でこのグラランドに現れたのには、驚いた。この国の高級官僚が高い地位にあることの象徴と思った。

あくる日、一月三日は、中央ヒンディー語研究所のミニバスで、アーグラをデリーに向けて旅立った。最後の公演地ムンバイに飛行機で向うためである。デリーまで約二百キロメートル。五時間ぐらいで着く。ヴァーラーナシーからのバスの旅とは違って、何の不安もなかった。白昼であったし、病人もいなかったし、この間の道路はインドで最高の部に入る完全舗装道路で、乗り心地も快適だった。ハイウェー沿いの農村もそれほど貧困という感じはしない。高度成長期以後に生まれた学生たちにとっては、インドはまだまだ貧困に映るらしいが、昭和一三年生まれの仲川事務官は、日本の貧しい時代を知っておられるので、インドの「貧困」にはとくに驚きの反応を示されなかった。航空機の突然のキャンセルや飛行機の搭乗口が急に変わったり、という点はカルチャーショックだったようだが、インドの「貧困」や「不潔さ」を口にされることは一度もなかった。

途中、クリシュナ神が育ったとされるプリンダーヴァンに寄って、寺院にお参りした。外国人も含めた巡礼者が多く訪れていた。快適といってよいミニバスの旅を終えて一週間ぶりにデリーに

戻ってきた。そして、真つ先に行つたのは、国立演劇学校。そこで、しばらくくつろぎ、アーグラ―に戻るミニバスと別れて、我々は国立演劇学校差回しのバスで、空港に向つた。

ムンバイ（ジャイヒンドウ・カレッジ）での上演（観客数約五〇〇）

デリー（国内）空港を飛び立つた飛行機は一時間三〇分ほどでムンバイのサハラ空港に着いた。プリヤダルシュニー・アカデミーというNGOの文化団体で、我々の公演を主催してくれる団体の代表者が、やはり花輪で迎えてくれた。ミニバスでダーダルというターミナル近くのホテルに案内された。ムンバイに着いたら、北インドの寒い気候にうんざりしていた一行は、急に暖かくなって、ホツとした。暖かい、というより、半袖でないと過ごせないほど十分暑かった。インドの大地は、本当に多様である。わずか一時間余り飛行機で移動しただけで、すっかり気候が変わるのである。ともかく、ムンバイの暑さで、学生の気分も明るくなったようだ。

ムンバイは大都市なので、デリー同様、二ヶ所で上演が予定されていた。まず、一日目は一月四日、チャーチゲート駅に近いジャイヒンドウ・カレッジで上演することに。主催者のプリヤダルシャニー・アカデミーの会長、ナーニク・ルーパーニー氏がシンディーの人であったためか、このカレッジはシンディーのコミュニティーの経営するカレッジといわれる。舞台の下見をして驚いた。豪華な舞台装置が準備されていたのだ。「幕が開く前に」も「愛とはいかなるものか？」も一幕もののホームドラマで、ソファ―付きの居間のシーンで十分であった。これまでは、シンプルな舞台装置

で間にあわせていた。しかし、この舞台セットは、応接セットだけでなく、部屋の壁や窓、ロッカー、二階に通じる階段、奥の間に通じるドア等も大きなパネルで作られており、相当凝った舞台装置である。平面でなく、立体的に作られているところが凄い。トラックで運ばないと持ち込めなかつただろう。ドラマでは、中産階級の家庭なのだが、上流階級の家庭のように見える。主催者の我々のヒンディー語劇に寄せる期待の大きさが分かるというものだ。いやでも期待にこたえて熱演を見せなければならぬ。

開会式には、マハーラーシシュトラ州文化担当大臣、プラモード・ナワルカル氏を賓客に迎え、映画プロデューサーで、テレビの大河ドラマ「ラーマーヤナ」の製作者として知られるラーマーナンド・サーガル氏の子息のプレーム・サーガル氏、ナーニク・ルーパニー氏の従兄弟にあたり、神戸で貿易業を営むB・ルーパーニー氏も神戸から駆け付けて壇上に並んだ。プレーム・サーガル氏から「ラーマーヤナ」のビデオ二六本セットをプレゼントされた。これは、すで



「幕が開く前に」の舞台

に大阪外大の視聴覚資料室に揃っていて、現に授業に使用しているものと同じだが。

ナワルカル大臣は「我々には財源はないが、このような（日本人学生の）努力を大切にすることがある。我々は、第二次世界大戦の敗北から目覚ましい復興をとげた日本から多くを学ばなければならない。日本がスバシユチャンドラ・ボースを支持してくれたことをインド人は忘れない」と熱っぽく語った。社交儀礼は割り引いても、心から我々を歓迎してくれていることがよく分かり、感激した。日本のアジア外交を批判して、旧西ドイツのシュミット元首相は「日本はアジアに友人をもたない」といったが、そんなことはない。インドは日本の最大の友人ではないか。インド人の世論調査で「好きな国」のナンバー1は、いつも日本なのである。我々は、この親日国をもっと大切にすべきだ。もつとも、この年の五月、インドは世界の反対を無視して核実験を強行する。アメリカとともに、経済制裁を課した日本とインドとのその後の数年間は、政治的には戦後最悪といわれるほど、緊張関係が続いた。しかし、我々はその間もインドでヒンディー語劇の上演を続けたが、そんな政治的關係が我々の文化活動に影響を与えることは微塵もなく、相変わらずどこでも歓迎を受けつづけた。政治に左右されない文化活動の重要性を、あらためて確認した次第である。

ムンバイ公演は熱く燃えた。ただ、最初のドラマ「幕が…」と二つ目のドラマ「愛とは…」の幕間に、主催者が招待者にティー・ブレイクをもうけ、会場の別室に招待したのは問題であった。映画のインターバルと同じで、人々はお互いのお喋りに夢中になり、後のドラマが始まっても、なかなか席に着こうとしない。何度もマイクで着席を呼びかけたが、全観客が着席するには、二、三〇分はか

かっただろうか。もちろん、後半のドラマはもう始まっているのである。この時、「決して幕間には、ティー・ブレークを入れてはいけない」という教訓を得た。芝居がすべて終ってからにすべきである。今回は、主催者側がすでにアレンジしていたもので、どうしようもなかったが、以後数多く行うことになる海外公演では、決してドラマの幕間にティー・ブレークを設けないことにした。出演者にとつては、衣装替えと舞台替え、観客にとつては、用を足すだけの最小の時間だけ設けて、すぐ後半のドラマを始めるべきであるとの信念はこのとき生まれたものである。でない、と、ドラマに対する観客の集中度と関心が削がれてしまう。それから、新聞報道は、記事の入稿締切時間というのがあって、どうしても記者は前半のドラマの取材だけして、すぐ本社にもどって原稿を書くことになる。したがって、新聞の記事になるのは、たいてい前半のドラマである。

さて、芝居は、もちろん大好評に終わった。回数を重ねるにつれ、学生たちの演技は磨かれていくようだ。ドラマの後は、豪華なレセプションが待っていた。ナワルカル文化大臣主催の公式レセプションで、主催者・招待者・出演者がビュッフェ形式の豪華なインド料理に舌鼓を打った。糖尿病を患う私も、カロリーを気にしながら、思わずご馳走に手が伸びてしまった。しかも、会場となったのが、どこかの立派な庭園で、色とりどりの花が咲き、綺麗に手入れされた芝生が目に見える。ヒンドウスターニー音楽を奏でる楽団の音色は、いやでも園遊会の雰囲気を感じてくれた。なんと心のこもったもてなしだろう。レセプションはアーグラでも（ある人の私邸で）あったが、これほど盛大な歓迎会は初めてだ。しかも、アラビア海から吹く夜風が膚に心地よかった。ムンバ

イはインド第一の港湾都市でもある。北インドの寒さにも、ムンバイの日中の暑さにも辟易していた我々にとって、この微風は本当に清涼剤以上の活力を与えてくれた。確かに、劇場は冷房が完備していた。しかし、冷房がきつ過ぎて決して快適ではなかった。やはり、自然の涼風ほど気持ちのいいものはない。

ポリウツドの有名な女優、シャバーナ・アーズミーが招待されていると聞き、興奮した。彼女は、八年前にアメリカのシカゴで会っている。一緒に撮った写真は今でも、私の研究室に飾ってある。ああ、彼女と再会できるなんて、何て幸せ！ヒンディー語でスピーチをした日本人を覚えてくれていたのかな、などと、しばし芝居の感動を忘れて、胸をときめかせたが、やがて多用のため欠席と聞いてがっかりした。それはそうだろう。日本人の学生たちに、こんな有名な大物スターがわざわざ会いに来てくれるはずはない。そんないいことづくめは続くはずはない、と気を取り直した。それがなくても十分素晴らしい一日だった。

「タイムズ・オブ・インディア」の一面トップに！

明くる一月五日の「タイムズ・オブ・インディア」の紙面を見たときは、驚愕した。なんと一面トップで大きく、「幕が開く前に」の舞台写真がでているのだ。その解説は別のページにあったが。「タイムズ・オブ・インディア」のような一流全国紙の一面しかもトップに掲載されるとは、超異例ではないか。一面といえば、普通は政治関係の記事が載る。よほどの大きなニュースでないと政治以

外の記事は載らないはずだ。それに、もともとインドの新聞には、あまり日本に関する記事はでない。仮に、橋本首相(当時)のインド訪問があっても、いや天皇の訪印があったとしても、あれほど大きくはでなかっただろう。二〇年前に、ラージーヴ・ガンディー首相と中曽根首相の時代に「日印交流年」がもたれ、双方から有名な映画演劇人・舞踊家が派遣された。一流の歌舞伎役者も訪印して公演したというが、一面記事で報じられたことはない。まさに、破格の扱いだ。インドのマスメディアが、我々素人芝居をいかに高く評価したかということだ。いくら外国人によるヒンディー語劇が珍しかったとはいえ、観客の反応がよくなければ、記事にしないはずだ。この記事は、むしろ在ムンバイの日本人社会に驚きだったようだ。ムンバイ日本人会の会長が、印日協会で我々一行のためにもたれた歓迎集会に見えて、祝意を述べられた。

その他の新聞にも面白い見出しの記事が出た。英字紙では、「From Japan in Hindi」とか、「From Japan with



The Times of India の一面トップに掲載される

Love, とくらのもの。ゆゑに、Mind your language: Japanese Drama troupe performs Hindi plays in city、というのもあった。これは、外国人でこれほど流暢にヒンディー語を話す人がいるのを見ると恥ずかしい。インド人の我々もつと我々の言葉に注意を払え、と警鐘するものである。ヒンディー語紙では、「日本人学生は、愛とは何かを見せた」「ヒンディー語の舞台に広がる日本人の演技の魔法！」等。また、開会式のスピーチを、日本人の私を除く全員が、英語で行なったことを皮肉った「ヒンディー語劇の司会をインド人は英語で行なう」というのもあった。主催者と来賓を痛烈に批判した記事であった。確かに、ヒンディー語劇を歓迎する人達自身が英語で喋るといふのは、考えてみればおかしなことだ。しかし、これが、インドとくにコスモポリタン都市ムンバイの現実でもある。やはり、知識階級や上流階級の人達は英語が堪能で、また英語を使いたがる。他の都市では（同じくコスモポリタン都市であるもうひとつの大都市コルカタを例外として）、すべてヒンディー語のみで行われたが。

TVで放映された、ムンバイの豪華な劇場（ネルー・センター）での上演（観客数約八〇〇）

その日（一月五日）最終公演の行われるネルー・センターに来てみて、さらに驚いた。千人は収容できようという豪華な劇場で、その広い舞台には、昨日ジャイヒンドゥ・カレッジでの舞台で用いたセットがそっくりそのまま設置されていた。トラックで運搬したのだろうか、その手回しのようにも感動した。当たり前のようにだが、インドでは決して当たり前ではない。一層舞台が映えて見

えた。大阪でも、これほどの設備を備えた劇場はそう多くないに違いない。さすがに、映画・演劇の中心都市ムンバイだけあると思った。本当にこんな立派な大劇場で、我々の素人芝居をやるのだろうか、観客は来てくれるのだろうか。昨日は日曜日だから、多くの観客を集めることができたのだろうが、今日は平日である。交通渋滞のひどい中を、果たしてどれほどのサラリーマンが観にきてくれるだろうか。不安であった。しかし、それは杞憂に終わった。始まってみると、八〇〇名ぐらゐの観客で埋まっていた。本日の開会式にもナワルカル大臣は臨席された。その関係からか、あるいは本日の「タイムズ・オブ・インディア」の記事の影響か、山岸祥郎在ムンバイ日本総領事も参列された。学生達は最後の力をふりしぼって熱演した。

有終の美を飾るにふさわしい成功であった。しかしながら、面白いことに気がついた。会場全体が爆笑の渦に包まれたという点では、この大ホール八〇〇人の観客より、観客三五〇人のデリーの二日目、L T Gホールでの反応のほうが凄かった。これは、後者には演劇を志す子供が多く、前者が身なりからしてそれなりの社会的地位の人しか招待されていなく、いわば「上品な」人達が多かったためかもしれない（なお、以後の公演でも入場料をとったことは、二〇〇三年の全インド演劇祭を除いて一度もないが、だれでも先着自由ということはなく、主催者は必ず全員に招待状を出していた。インド人はそういう形式を非常に重視し、招待されなければ行かないという人が多い）。そういう人達は、笑うが自分から進んで哄笑することはない。また、今回の公演において、開会式を英語でやったのがムンバイだけであったように、四都市の中では、唯一ヒンディー語地域ではなく、

グジャラーティーやマラーティーやシンディーの人々が多かつたためではないか、とも思う。もちろん、ヒンディー映画の中心地ムンバイで、この人達がヒンディー語を解さないということはないが、母語ではないので、もしかしたら、細かいヒンディー語のニュアンスで分らないところがあったのかもしれない。体での反応には、やはり北インドのネイティブスピーカーに比べると、零点零何秒かは多くかかるのではないか、などと想像してみるのも楽しいことだ。

インド初公演の最後の舞台のハイライトは、舞台袖にテレビのカメラが設置され、映像関係の人達の出入りが激しかったことである。テレビ中継用の録画をやっているに違いないことは分かった。後日にそのビデオを送ってくれるように、テレビ局に依頼した。

ところが、そのビデオが届くまでに、インド各地から「君達のヒンディー語劇をテレビで見た」という反応が私のもとに届き始めた。どうやら、インドのテレビの全国ネットで放映されたらしい。しかも、コマースシャル抜き全編二作品がノーカットで放映されたらしい。それも一度ではなく、数回放映されたらしい。「タイムズ・オブ・インディア」の記事にも驚いたが、それ以上の驚きであった。もう信じがたいことだ。それほど我々のヒンディー語劇は報道の価値があるのだろうか。インドでは、貧困層も多いが、そうした地域でも意外とテレビが普及している。すでに、マルチメディアン時代に入っていたが、一億人という人口を考えると、数百万人の人が見たと推測できる。これは全く考えられない。奇蹟である。それこそ、ドラマ以上のドラマであった。最終日も、ライオンズクラブ等の団体からレセプションの招待を受けた。責任を果たした劇団員たちの表情は皆、

明るかった。どの顔にも満足の表情がみてとれた。

こうして四都市六回のインド初公演は圧倒的な成功を収めて終えることができた。学生たちの健闘を称えたい。それだけではない。ラッキーなことばかりに恵まれたようだ。仮に、どこか日本の大学のESSの英語劇団がアメリカで公演したという仮定で、次のように空想してみる。ニューヨークのカーネギーホールで、ニューヨーク州の文化担当高官と在ニューヨーク日本総領事が参列して英語劇を上演したという記事が「ニューヨーク・タイムズ」の一面トップに掲載され、CNNでノーカットで何度も全国に放映され、ワシントンDCで、ブッシュ大統領とチェルニー副大統領に個別に会見する：まず、あり得ない夢語りである。ところが、これに近いことを人口一億の大国インドで経験したのである。インドの人達の暖かさを今回ほど感じたことはない。

我田引水でもなく、自画自賛でもなく、我が大阪外国語大学のヒンディー語劇団は、日印の文化交流の歴史に残る功績を上げて帰国したことは、客観的事実としていえよう。今回のインド初旅行は、大阪外国語大学の知名度を高めるのにも貢献した。そして、我が大阪外大のレゾン・デートルを再認識した。要するに、外大は語学と縁を切ってはならない、というごく当たり前のことなのである。語学こそが社会で評価されるのだ。ヒンディー語を学んでいたお蔭で、普通の学生がインドでVIP待遇を受けたのである。インド人に喜んでもらい、学生にも喜んでもらい(細かいことでは、いろいろあったが)、教師冥利に尽きる。私は凱旋將軍のような気持ちで、寒い関西空港に降り立つ

た。関西空港に飛行機が着くまで、私はずっと興奮していたのだ。

帰国後「インド通信」という、インド関係の情報を伝えるミニコミ紙に書いた公演旅行記の最後に、私はこう書いた。「長い教師生活の中で、これほどスリリングでエキサイティングな経験をしたことはない。学生諸君にとつてと同様、生涯忘れがたい思い出となった。我々は、インドにドラマを演じに行ったのだが、我々の滞印そのものがドラマ以上のドラマとなった。インドよ、ありがとう！ヒンディーよ、ありがとう！」と。

「中外日報」の記事より

一九九八年一月二九日付きの「中外日報」に、インド人記者（経済学博士ビノド・グプタ氏）がこの初のインド公演について「日本人によるヒンディー語劇」という見出しで次のような記事を書いている。インド人の目に我々のヒンディー語劇公演がどう映ったかを知ってもらうため、中外日報社の許可を得て、ここに転載する。

日本の大学の先生もなかなか役者だ。見せ場を心得ている。誰かって？大阪外大でヒンディー語を教えている溝上富夫教授のことである。この一月初旬、ムンバイーの大劇場ネルー・センターで、同大学生一座によるヒンディー語劇を上演した折、前口上を述べる溝上教授はまるで石のようだった。直立不動。その面長の顔には感情のかけらもない。だが、この本邦初公開の、日本人によるヒ

ンデー語ショーの開幕式の挨拶が終ったとたん、教授は賓客から役者へ鮮やかに変身した。幕が降りてから出演者全員を紹介する、その姿は一分の隙もないプロの役者のそれだった。まさにアーティストそののであった。

公演したのは、インドの文化団体やNGOなどに招かれた、同大外国語学部の学生一三人。独立五〇周年の祝賀行事と文化交流をかねて、昨年二月二日から今年一月七日までデリー、ヴァーラーナシー、アーグラの各都市を二つのヒンデー語の芝居で興行して回り、最後にここムンバイでその記念すべき公演旅行を打ち揚げた。一行が日本文化の代表としてインドの観客から大歓迎されたことは言うまでもない。実際、インドの代表的な新聞が一面トップで大きく扱い、テレビの映像は全土に中継された。NGOのプリヤダルシャニー・アカデミーの主催した、新年四、五日のムンバイ公演では、連日八〇〇人収容の大ホールが狭く感じられるほどの大盛況。溝上教授が芝居のテーマを説明したり、出演者を紹介するたびに、割れるような拍手が湧いた。

そのホールで教授は、前記の役者ぶりを演じてみせたのだ。筆者にはそう見えた。開幕前、促されて超満員の観客に語りかけた際は、口が重く言葉少なかった。が、二つの芝居―一つは一幕ものアチャラカ喜劇「幕が開く前に」で、もう一つが夫婦間の濃やかな情愛を描いた人情噺「愛とはいかなるものか?」。どちらもインドの著名な劇作家の手になるもので人口に膾炙している―のカーテンコールとなるや、教授の全身に電流が走った。満員の観客は両手を高く突き上げて、教授とその一三人の教え子を褒め称えたのだ。

まったく、日本風の身振りや抑揚によるヒンディー語のやりとりは、われわれインド人にとって、めったにない文化の贈り物だったのだ。とりわけ、国を挙げてゴールドデン・ジュビリーに沸く今の時には。大阪での稽古は大変だったらしい。昨年の夏休みから打ちこんできたという。主催者のアカデミーでは、日印の文化交流に力を入れており、数年前に創価学会の池田大作氏を招いている。芝居の出来も上々だった。演出、演技、セット、照明など、どれも申し分なかった。そして、ヒンディーの風味も。しっかりと稽古を積んでいることも、客席からよく分かった。「ヒンディー語のセリフを覚えるため、皆昼も夜もなかったみたい」と、一幕喜劇の主役を演じた丹山未由紀さん（二一歳）が苦労を語った。彼女は長いセリフが多かったから大変だったろう。しかし、一三人の中では、ミス丹山が一番のびのび芝居をしていた。これは女子学生全体がそうで、安心して見ていられた。ひきかえ、男子学生は、セリフ回しに手一杯で動きがぎくしゃくしていたが、これは是非もなからう。外国語のセリフのやりとりは、誰にとっても難しいのである。ただし、もうちょっと練習を重ねインドの芝居の流儀を勉強していたら、というあるインド人学者の辛口の批評もあったことを付言しておこう。

ご承知のとおり、インドは伝統的に、演劇の宝庫なのである。古代インドの仏教僧はすぐれた劇作家でもあった。インド最初のサンスクリットの戯曲が、詩聖アシュヴァ・ゴーシヤ（馬鳴）によって、荘重なカーヴィヤ調の韻文で書かれている。言うまでもなく、首尾結構の整った『ブッダ・チャリタ（仏所行讃）』がそれである。もっとも、これはインド学に造詣の深い溝上教授には、釈迦に

説法だろうか。

教授はさぞかし、今度の訪印に満足されていることだろう。とりわけ、学生を率いての「旅興行」は初めての経験だっただけに。インタビュアーでこう答えていたのが印象的だった。

「インドの未来は大変明るい。アジア全体が前進しているが、その中でも、お国がずば抜けて有望で、二一世紀に向けて着実に進んで行くでしょう」と。一方で、文化より経済を重視する、両国の政府関係者の姿勢に失望の念を漏らした。とくに、日本政府の目は経済ばかりに向いている、と。今度の公演旅行でも、日本の役所の支援は万全だったとは言えないようだ。これからは経済分野に劣らぬ手厚い配慮を文化面に期待したい、と教授は語った。

それでも、すでに言ったように、公演旅行自体は大成功だった。行く先々で熱狂的な歓迎が待っていた。インド国立演劇学校の招聘によるデリー公演の際には、大統領や副大統領とも会見したし、ムンバイでの公演でも、マハラシュトラ州のナワルカル文化担当大臣や山岸駐ムンバイ総領事らが顔をそろえた。インドのマスコミ各社が連日大々的に報じたことも、すでに書いた通りである。

(翻訳・松本英昭氏「国際ジャーナリスト、元朝日新聞社社員」)



第三章 はじめてロンドンへ

ロンドンで家を借りる

私はその年（一九九八年）の夏、ロンドン大学の東洋・アフリカ研究院に短期客員研究員として滞英していた。冬のインド初公演の圧倒的成功に気をよくした学生のうち四人と新人一人が、ロンドンでヒンディー語劇を上演したいという。実はこの奇抜なアイディアは、この年の元日のアーグラでの公演を見た、ロンドン在住のインド人、K・B・L・サクセナー氏夫妻から提案されていたものだった。

サクセナー氏は四〇年にも亘って勤めた英国行政職 (British Civil Services) を退官した人で、四〇年前、わずか三ポンドをもってイギリスに渡ったという。無一文に近い状態から、学校の教師をする夫人と共に人種差別と闘いながら懸命に働いて、高い地位にまで上りつめた。息子を立派な医師に、娘を国際的な分野で活躍する公認会計士に育て上げた、アジア系イギリス人（このうち、インド系は二五〇万人ほどといわれる）のサクセス・ストーリーを地で行くような人で、この人の滞英体験談それ自身が、今世界で二千万人といわれるNRI（在外インド人）と呼ばれる人達の一画を知り得てきわめて興味がある。NRIの特長は、決して祖国インドとの繋がりが切れていないということ、サクセナー氏も、デリーに実家をもっていて、毎年のようにインドに帰って、親族

や友人に会っておられる。イギリスでも頑固にインド式の生活スタイルを通す人だ。現在は、南部ロンドン・ヒンドウ協会理事として、そういうインド人コミュニティの世話役をしておられる。ウーシャー・ラージェー夫人は、NRIの中ではかなり知られたヒンディーの短編小説作家であり、詩人でもある。氏の人脈の広さが、今回のロンドン初公演の実現に役立った。日程の都合で、三回公演が適当ということで、それぞれ地理的に離れた三つの会場で上演することが決まった。それぞれの都合のよい日に都合のよい航空便でロンドンに集合することになった。少々リスクがあったが、学生諸君を信頼し、イギリスという先進国に安心感があった。ある者は航空機で、ある者はユーロスターでパリからやってきた。ある学生とは、大英博物館見学中にばったり出会った。

とにかく、全員が所定の時刻までに、サクセナー氏の私邸（ロンドンに隣接するサリーという町にある）に集合した。私は、ここにホームステイすることになり、学生たちと親（二人は母親同伴であった）は、休暇のためインドに帰国して空き家となっている付近のインド人宅を借りて、共同生活することになり、移動した。ロンドンのような物価の高いところでホテルに泊るのは大変なので、これは非常に助かった。しかし、食料品や日用品は、日本より安い。近所のスーパーマーケットで買物をして自炊したので、ロンドンでの生活は意外と安くついた。

ネルーセンターでの上演（観客数約一二〇）

まず、九月一三日に、ロンドンのインディアン・ハイコミッション（インド高等弁務官事務所。

大使館と同じだが、英連邦に加盟する国の間では、伝統的にこの名称を用いる）の文化情報センターである、ネルーセンターというところで、初演を行なった。インドが英領植民地であったときは、インド省の建物として使われていたといわれる。その重厚で風格のある建物が、ハイドパークからさほど遠くないサウスオードリー・ストリートにある。図書室やホール、セミナールーム、事務室等からなる。このセンター長は、インディアン・ハイコミッションの公使という肩書きで、本国から民間人や役人が任命されて赴任している。因みに、デリーの日本大使館にも、付属の日本情報文化センター（二〇〇五年までは、大使館とは別の、国立演劇学校の近くのフェローズシャー通りにあったが、その後、チャーナキヤプリにある大使館に統合された）があるが、私の知る限り、そのセンター長は、参事官または一等書記官である。ネルーセンターの所長が一ランク上の公使であることは、それだけ、英印関係の緊密さとインド政府が文化外交を重視していることが伺われる。

たまたま、この時のセンター長は、筆者のデリー大学留学時代の恩師であるインドラナート・チョードリー氏がつとめておられたので、なにかと便宜をはかってもらえて、都合がよかった。ホールはさして広くなく、百数席ぐらい。舞台もさほど大きくはなく、本格的な大ドラマには適していない。しかし、我々のホームドラマには十分である。インド舞踊の公演とかインド音楽のコンサートとかはしょっちゅう行なわれていて、講演会も合わせると、年間一二〇回ほどの催し物が行なわれている。前日は、「二一世紀のインド」と題して、ジョティ・ボシユ西ベンガル州主席大臣の講演があつたばかり。我々のヒンディー語劇も、そのような正式の行事に組みこまれ、出演者一人あ

たり、四〇ポンドの「出演料」までもらったので、先ほど述べた「自炊生活」を一層楽にした。

この公演記録は、ネルーセンターの年報に正式に記されている。上演の演目は、インド初公演で好評だった「幕が開く前に」と新作「僕たち、もう自由だ！」の二作。「幕が開く前に」は、三〇分そこそこの短いドラマなので、もうひとつ短いものを用意する必要があった。そこで、インドの小学校の教科書の中から、マストラーム・カプールという人の書いた「僕たち、もう自由だ！」という小編を選んで演じることにした。内容は、「両親の留守中に、六つの宿題を命じられた四人のきょうだいのうち、長男が親代わりに威張って、弟や妹達に命令したり、しごいたりする。そういう横暴な長男に反発した弟や妹達が一計を講じて、長男の命にそむく。その捨てセリフが『僕たち、もう自由だ！（兄さんの指示には従わない）』というたわいないドラマなのだが、私はこれを東西の文明論・伝統の崩壊というテーマと結びつけて、前口上でこう述べた。

「年長者を敬うのは、東洋文明の特長ですーインドでも中国でも日本でも同じです。ヨーロッパ文明では、長幼の違いは、あまり意味を持ちません。英語では、王様であろうと、乞食であろうと、二人称の代名詞はユーシかありませんが、ヒンディー語では、相手の年齢や社会的地位に従って、アープ、トゥム、トウーという三つの二人称代名詞を使い分けなければなりません。イギリス人は民主的な国民ですね。しかし、近年、アジア諸国でも急速な近代化・西洋化によって、そのような伝統的な価値観もなくなりつつあります。もはや、単に年齢が上というだけでは、年少者に対して威厳を示すことのできる時代ではありません。壊れつつある伝統の一面をご覧ください！」王様

に對しては、本当はユアー・マジエステイーというのだが、ここは英語の講義をするところではないから、そんなことをいう必要はない。「イギリス人は民主的な国民です」の「民主的な」にストレスを置いて（スピーチはインディーだが、デモクラティックだけ英語を使った）言ったら、ここがイギリスだったからだろうか、聴衆のインド人は一斉に笑った。皮肉ととったのかもしれない。さらに、私はここで、芝居を打った。芝居を面白くするのが、ストウルダールの役目である。

実は、この四人の子供達はすべて、「幕が開く前に」とかけもち出演であった。子供の役だから、男子学生は半ズボン、女子学生はおさげ髪にしてスカートをはいた。この頃の女子学生は結構背が高くなっているが、身長だけは小さくすることはできない。このドラマが終ると、すぐに次のドラマのため、インド服に着替えなければならないので、忙しい。それよりも問題は、脇役の召使役がないことだ。ここは、急遽私が出演しなければならないと腹を決めた。私は、小学校の学芸会で「浦島太郎」をやって以来半世紀ほど、劇に出たことはない。恥ずかしい気持ちはあったが、学生を指導する立場で、そんなことは言っておられない。日頃から、「語学教師は俳優であらねばならない」（『なぜ外国語を学ぶか』講談社現代新書五四二）という、母校の先輩教授（注・田辺保大 阪市立大学名誉教授）の言葉を信奉する者として、率先して演技力を示す必要がある。日本では、学生と一緒にリハーサルをやってきた。しかし、私が俳優として出るということを、観客にあらかじめ知られないほうがよい。いきなり出てきて驚かせた方が効果がある。せいぜい、「出るだろうな」という暗示にとめておきたかった。そこで、芝居が始まる前に、次男役の学生と、次のような漫才

にも似たようなセリフのやりとりを考案したのだ。

さきほどの「…をご覧下さい！」という前口上を終えて、舞台から引き下がろうとしたところに、その次男役の学生が、「先生大変です！」と血相を変えて駆け込んでくる。

「何だね?」「召使のバンケール役の学生が見当たりません」「何、いない?そりゃ一大事だ。早く見つけて来い。草の根を掻き分けても探し出して連れてこい!」その学生はいったん退場する。座長、客席に向ってひとり言。「ああ、今の若い連中、何を考えているんだろう?芝居が始まろうとしているのに、姿を見せんとは!」そこへ、また先ほどの学生が息咳き切って駆け込んでくる。「先生!えらいこつです。あいつ、ロンドン見物に行っちゃいました!」「なんだと?ロンドン見物?ああ、万事休す!お前達一体どうつもりだ。我々はこれまで、インドで何回も上演して名声を獲得してきたのだぞ。その名声を台無しにするつもりか?」「それじゃ、先生、バンケール役なしでやりましょう!」「何をいっとる、君?インド料理からマサーラー(香辛料)を除いたら何が残る?あれは、このドラマにとってマサーラーなのだ、マサーラー、分かるか?」「そしたら、先生、あんたがバンケール役をやりなはれ!」「何?わしはストウルダールだぞ、ストウルダール。役者ではない!」「先生、いつも僕達の演技がまずいと大声で叱りはりますから、今度は、先生が僕達に模範演技を見せてくれる番ですよ!」「何を生意気な!ええい、もうどうでも、とにかくはよう芝居を始め。でないと、お客さん帰っちゃいます!」とここで私が引つ込むのだが、大半の観客は私が「出る」と思ったことだろう。楽屋ですばやくインド服に着替えて、髭をつけ、じよ

うろを持って出てくると、大爆笑と大歓声が起こった。気持ちのいいことだ。このように、この「創作漫才」は、芝居の雰囲気盛り上げる点で非常に有効的だった。我ながらよくできた「作品」だと思った。語学教師はかくあるべし、と一人でほくそ笑んだものだ。

なお、このドラマは短くて登場人物も少なくてすむので、二年後のインド公演でも上演した。芝居前のこの「漫才」もやったが、「ロンドン見物にでかけた」を場所により、変えた。たとえば、デリーで上演した時には、「アーグラ見物に行った」とか、ムンバイでやったときには、「デリー見物に出かけた」という風にある。「インドで何回も上演して名声を…」というのも、だんだんエスカレーターさせて、「インドだけでなく、イギリスでも…」とか、「バジパイ首相の前でやったのだぞ…」とか状況に応じてセリフを追加していった。いずれも事実に基づいているので、決して誇張ではなかった。ついでに私は、もうひとつのドラマの「幕が開く前に」でも、主演俳優がリハーサル中に邪魔して、入場券をねだる商人役で出るようになった。役者が不足する場合は、私が脇役として出演せざるを得なかった。青年の役はできないが、中高年の役ならできる。うまい具合に、そういう役にめぐり合った。私ができる、学生一人分の「人件費」が助かる。こうして、だんだん舞台で演じる（それも学生たちといっしょに）楽しみを覚えるようになった私は、その後によくインド公演では、ついに主役を演じることになるのである。

なお、この二つのドラマの幕間に、Oさんは同行された母親と一緒に、得意の剣詩舞を披露した。結局Oさんは、三つの出し物に出ずっぱりだった。着替えに忙しかったこと。この日本文化紹介も

非常に好評であった。私自身が、日頃見慣れないものだったので、おおいに楽しんだ。Oさんは、毎日新聞社主催の「夢の旅」作文コンクールに応募し、高校時代に読んだ「河童が覗いたインド」(妹尾河童著)の読後感想文により、何千人という応募者の中から大学生の部で見事に一位となった優秀な学生である。その賞金で母親をインド旅行に招待した孝行娘でもある。第二章で述べた、ヴァーラナシーの教授の家にホームステイして実用ヒンディーをマスターした学生でもあった。こういう学生は、語学だけでなく、多方面な才能をもっているということだ。惜しいことに、その数年後に、そのまだ若いお母さんは、病魔に犯されて他界された。心からご冥福を祈りたい。

ヒンドゥー文化協会での上演(観客数約三五〇)

一日休息した後、二回目の公演は、北部ロンドンのノース・フィンチュリーという所にあるヒンドゥー・カルチュラル・ソサエティーで行われた。マーガレット・サッチャー元首相はこの文化協会と関わりをもっていたといわれる。週末でもあり、ラクシヤバンドンというヒンドゥー教の祝日と重なったため、三五〇人がつめかけた。立ち見席がホール外にもできるほどの盛況だった。主賓として、インディアン・ハイコミッションのサハー参事官が招待された。インド国歌の斉唱で始まったのには驚いた。インド人といっても、インド系イギリス人である彼らの国籍はイギリスではないか。「ゴッド・セイヴ・アワー・グレイシヤス・クウイーン」が彼らの国歌ではないのだろうか。インドとイギリスのどちらに忠誠を誓うのだろうか。非常に興味のある疑問が沸いてきた。さ

らに、この協会の会長と芝居の上演前に雑談した折に、「(アラビア語の) シュークリヤーという言葉を使うのは止めて欲しい。(サンスクリット系の) ダンニャヴァードという語を使ってください」といわれたことである。これは、ヒンディー語で「有難う」と言う意味で、両方とも使用されるが、前者の方が一般的で、後者は形式的な響きがする。サンスクリット系の単語が概して文語的であるのと軸を同じくする。インド航空のステュアーデスのアナウンスの最後は、ダンニャヴァードで終るが、これは英語からの翻訳と考えられる。私は、スピーチでは、ダンニャヴァードを使用しているので、問題はないと答えたが、スピーチの語彙にまで注文をつけられた事はインド本国でも一度もない。確かに、ヒンディー語にも言語愛国者という人がいて、ヒンディー語のなかのアラビア語・ペルシヤ語からの外来語を一切排除して、純粹のサンスクリット系の単語のみを使おうとする人は少数ながらいる。シュッド・ヒンディー(純粹のヒンディー語)という文体だが、これは完全な文体となり、庶民の話し言葉の文体とはほど遠いものである。アラビア語やペルシヤ語からの外来語を完全に排除して、ヒンディー語を話すことは難しい。単語は人為的に置き換えても、慣用句までは言い換え不可能である。そもそもこのような主張をする人は、何らかの政治的な理由に動機づけられている人達である。宗教的にも狭量な人達である。しかし、本国インドでも、そういう人達から外国人である私が、私の話すヒンディー語にどんな単語を使うべきか指示されたことは一度もない。それをロンドンのインド系イギリス人に言われたのだから、私の驚きは尋常ではなかった。もしかしたら、海外に移住したインド人の方が、本国のインド人よりも、「愛国的」になるのでは

ないだろうか。海外に出て「愛国的」になる日本人もいる。改宗者の方がもともとその宗教を信奉する人よりも、オースドックスで保守的になる場合が多いという現象と似ているのかもしれない。もつとも、シュツド・ヒンディーを話す人が、本当の「愛国者」かどうかは疑わしいが。それほどインドが好きなら、なぜイギリスに住んでいるのか聞いてみたかった。

とにかく、この公演も大成功で、スタンディングオヴエイションが起こったほどである。当時、ロンドン大学東洋・アフリカ研究院の長期客員研究員としてロンドン滞在中だった、東京外国語大学教授（ビルマ史専攻）で畏友の奥平龍二氏も、後輩を激励するため駆けつけて下さった。氏は大阪外国語大学で私と机を並べた同級生である。

ハロー芸術センターでの上演（観客数約九〇）

三日目の公演は、明くる日の八月九日に、ロンドン北西部にあるハロー・アーツ・センターというホールで行なった。有名なパブリックスクールであるハロー校のある地域である。ハロー校は、インド初代首相ジャワハルラール・ネルー氏が学んだ学校としても知られる。このセンターは本格的な劇場の設備を備えた立派な建物だった。観客の数こそ、昨日までの二回の公演に及ばなかったものの、そして会場にヤンヤの声援が飛び交うということはなかったけれども、観客は真の演劇愛好家が多かったと思う。観客の層も、これまでより高かったような気がする。それもそのはず、観客はすべてカラー・ジュヨーティ（芸術の光）の会員である。芸術を愛する人達なのである。周

囲の環境も、静かな高級住宅地という感じで、非常によかった。照明も音響設備も申し分なかった。ここではじめて、これまでの会場でひとりも見なかった白人の英国人が働いているのを見た。イギリスだから当たり前なのだ、これまでの二会場は、インド文化に関する催し物しかししないだろう。演じる人も、まあインド人系住民が多いのではなからうか。それに対して、この劇場のみは、市民の誰もが（勿論、白人が多数）利用する。そういう一般の劇場でやった点が、昨日までの二回の上演と異なっていた。熱気はなかったものの、観客の暖かさは伝わってきた。舞台が低く、客席との距離が近いのもよかった。この日の公演のようはZEEテレビで放映され、BBCラジオの海外放送でもとりあげられた。また、インド人移民の研究者として知られる長谷安朗九州工業大学助教教授夫妻も見えた。将来を嘱望された若い研究者だったが、その数年後、日本で病のため、若くして他界された。私が氏とことばを交わすのは、これが最後であった。



「僕たち、もう自由だ！」の舞台

こうして、初のロンドン公演は三会場とも、成功に終わった。最後の打ち上げは、ビールとワインの杯を傾け、フライド・チキンと焼きソバでお互いの健闘を称えた。インド以外の国で、ヒンディー語劇をやった感慨がこみ上げてきた。終生忘れられないだろう。

ところで、ロンドンのインド系住民に好評だった理由のひとつは、英語ばかり話して、自分達の言葉をお話そうとも学ぼうともしない自分達の子供達と比較して、外国人が流暢なヒンディー語を話しているのに感激したからというのがある。さきほど述べた、インド系移民の文化的アイデンティティーの問題と関わりのある事柄である。今後のインド系移民の研究には、二世、三世たちの文化的アイデンティティーの問題にも焦点をあてるべきだろう。

英日ヒンディー学者の批評

前記（デリーの大統領官邸でジョージ・グリアソン賞を受賞した）ロンドン大学のルーペルト・スネル氏のお膝元でヒンディー語劇を上演したのだから、当然同氏を公演に招待した。しかし、多忙で出席願えなかったので、収録したビデオを後日、直接手渡しして批評を乞うた。インド人以外の外国人からも、客観的な評価を得たいと思ったからである。次のようなコメントを得たので、原文のまま紹介する。

"I was greatly impressed by the proficiency of your students, and by the liveliness that they

brought to their performances. It is evident that Hindi enjoys a high status in your university, and that your students are being given an excellent introduction to the language and to cultural values that it represents. I would like to congratulate you on this remarkable achievement, which should be an encouragement to all of us who are involved in Hindi studies outside India. With thanks and very best wishes. Yours sincerely. Dr.Rupert Snell. (私は貴殿の学生諸君の流暢さと、劇の上演に見せた活発性に大いに感銘を受けました。ヒンディー語が貴大学において高い地位を占めており、かつ、学生諸君がヒンディー語とそれが代表する文化的価値への素晴らしい入門が与えられていることは明白です。この目ざましい功績に対し、貴殿にお祝いを申し上げます。これは、インド以外でヒンディー語研究に従事する我々すべてにとって励みとなるものです。感謝を込めて。ご成功をお祈りいたします。敬具。ルーペルト・スネル博士)

なお、このロンドン公演に先だって、この年の三月に、東京の築地本願寺境内にあるブッディスト・ホールで、シッダルタ・シン駐日インド大使を招いて、インド初公演の凱旋公演を行っている(そして、明るる日、インド大使館のシャンカル公使の私邸に昼食に招待され、そこで有名な舞踊家のソナールマーン・シン女史に会ったことも印象的だった)。その時観劇された拓殖大学教授で、ヒンディー語・ヒンディー文学専門の坂田貞二氏から、次のような(ロンドン公演のビデオも見ていただいたので、それも合わせて)コメントを頂いた(『ポランティア教育叢書第四号』一九九八年、

一九九八年三月の東京公演と同年八月のロンドン公演（ビデオ）で、大阪外大の学生諸君によるヒンディー語劇を観た。私自身、大学在学中は一年から四年まで語劇をおおいに楽しみ、またそれで苦労もした身なので、他人事として観ることができない。

東京公演では、棒立ちの役者が科白を棒読みするのではないかと危惧していた私は、最初の演目の喜劇第一幕で、東京在住のインドの人達と一緒に笑いの渦に巻き込まれていた。科白の内容を理解し、劇中の人物の立場と気持ちに同調してはじめてそれらしく演じられる劇を、大阪外大ヒンディー語専攻の学生諸君は見事に楽しんでた。

二つ目の出し物は、ややシリアスなドラマだったが、その中で、奥さん役を演じたKさんの演技に注目させられた。東京で、獣医になるコースの学生だった頃、私のヒンディー語のクラスに聴講に来て、その後、本格的にヒンディー語を学ぶために大阪外大に転学した人である。日頃控えめなKさんは、奥さん役にピッタリである。

ロンドン公演では、私のかつての留学地ヴァーラーナサイでホームステイして演劇の指導も受けたという二人の学生の演技がさすがに光っていた。三〇年来のお付き合いを願っている溝上富夫教授の家事使用人役もなかなか似合っていた。役者が足りないのです、端役を買って下さい。溝上富夫が、教師と学生が共同して作り上げる喜びは格別のものがある。また、溝上教授は、語学教師も

時として、俳優たる必要があることを私に教えてくれた。溝上教授とインド人教師の熱意ある指導に、学生諸君が共鳴した結果が、学内公演・日本各地の公演・インド公演・ロンドン公演と場を拡げることにつながったのであろう。この熱意には感動する。

(坂田貞二)

第四章 再びインド縦断の公演旅行

「若返り」を上演

イギリスから帰国した我々は、さつそく来年（一九九九年）の春休みに、再度インド公演を実施すべく、新しいドラマとキャストの選定に着手した。「幕が開く前に」と同じ作者のラージェンドラ・シャルマー作の「若返り」という面白いドラマをやることにした。物語のあらすじはこうである。「気の強い嫁に疎んじられて、チェスしか生甲斐のなくなった老人が、家庭内での権力を取り戻すため、ヒマラヤで修行して若返る。財産を狙う嫁と怠け者のその弟に復讐し、弟の恋人まで奪おうとする。しかし、決して怒ってはならないという行者の戒めを忘れて、嫁とその弟の策略に乗って、怒ってしまったため、またもとの老人にもどってしまう」というもの。二時間ほどの長いドラマなので、今回はこれ一本だけにすることにした。老人が若返るので、主役の老人役は、青年役と二役をしなければならぬ。かつらと白い髭は必須。このような芸に達者な新人M君を抜擢、ほかに新たに劇に加わったのは、嫁役のMさん、イスラム教徒の友人の息子役O君のみで、他の六名のキャストは、いずれもインド初公演または、ロンドン初公演の参加者であった。つまり、九名のうち六名は海外公演経験者ということになる。全員が新人であるよりも、そのグループに経験者がいると、何かととても役に立つ。

また今回は、スタッフ専用として三人の学生が加わり、そのうち二人は男子学生で、非常に心強かった。インドのような、女性が安全でない国では、男子学生が多い方がなにかと心強い。力仕事もできるし、有用な働き手となる。結局、キャストとスタッフを合わせて総数一二名の学生で渡航することとなった。一二名の男女比は、八対四で、まだこの頃は前回同様、「男性優位」であった。しかし、やがてすぐに「女性優位」にとつて代わられることになる。

今回は、再び阪神間のインド人コミュニティから五〇万円の寄付金をもらい、カンパもある程度集まったので、実施が可能となった。ロンドンから帰ってすぐ準備を始め、秋の学園祭と神戸公演、冬の東京公演を実施して「試金石」にかけていたので、今回のインド公演の成功もほぼ予測できた。それに、ドラマがとても面白い。ヒマラヤで修行するとか、手相占いに結婚式の日取りを決めさせるとか、きわめてインド的な状況設定ながら、老人問題という一点に絞れば、高齢化社会を迎えた日本の現実にも通じるものがあり、神戸公演では、日本人観客からもさかんに笑いをとったのである。このドラマのもう一つの特長は、次々に登場する個性の強い登場人物すべてに相互のからみがあり、退屈させないこと。最後にどうなるか観客に予測させない（意外性で終る）のが、面白いドラマのもう一つの側面だと思う。それだけに練習にはかなりの時間をかけた。

なお、この年から神戸では初めて、日本人観客用にOHPで字幕をスクリーン上に投射することにした。学園祭と同じであるが、まだこの頃は、パワーポイントが普及していなかったので、手書の日本語訳をスクリーンに写した。今のパソコンによる字幕の表示に比べ、読みにくかった。しかし、

とにかく、これで日本人観客にもヒンディー語劇をよりエンジョイしてもらえようになった。(しかし、インド公演では、まだ日本人観客を想定していなかったので、インドで字幕を見せるようになるのもっと後のことである。)

今回は、春休みを利用して行くため、冬休みを利用した前回のインド公演よりは日程的に余裕があったので、四都市六公演を六都市八回公演に拡大した。公演の都市もコルカタとプネーを追加した。まさに、インド亜大陸縦断の旅を敢行したのである。我々は、今回はタイ航空を利用してバンコク経由で、東の玄関口コルカタに降り立った。

しかし、それまでに個人的に南インド旅行を楽しみたいという学生の要望を入れ、ややリスクが懸念されたが、学生を信頼して、ロンドン公演と同じように「現地集合」とした。万一誰かが所定の日時までには到着できなければどうしようかという一抹の不安はあった。できれば、全員一緒に日本を出たかったが、私が公務で早く出られないので、仕方のないことであった。毎回、太田医師に同行をお願いすることはできないので、今回から医師の同行はなく、病気になるときは、インド人の医師の診察を受けることにした。すでに退職されたガンディー氏に代わって、新任のインド人教師アシクヴィニー・シュリーヴァースタヴ氏が同行された。

なお、全くの私事になるが、渡印直前に、長年病床にあった母親が亡くなった。病状からしてXデーの到来はある程度予測された。全くの不謹慎ながら、そのXデーが今回のインド公演日と重なればどうしようかと心配していた。もちろん、肉親の葬儀は何をおいても最優先しなければならな

い。そういう事情なら、万一公演中止になっても、学生もインド側主催者も納得してくれるだろう。しかし私は、これほど練習を積み、これほど完成度の高い（おそらく前回以上にレベルの高い）ドラマのインド公演を断じて中止にはしたくなかった。母にこうした私の思いが伝わったのだろうか。まるで、私の渡航日を避けるかのように、母は静かに他界した。母は最後まで子供に迷惑をかけまいとして、冥土に旅立つ日を選んでくれたのではないか、そんな風に私には思えた。葬儀では、母の思い出と共に今回のことを思つて、涙をこらえることができなかった。誰よりも、母は今回の公演の成功を祈ってくれているに違いない。

しかし、同様の不幸が参加学生の身内に起こったらどうしようかという心配が生じた。若い学生たちの両親も若いので、その可能性はきわめて低いが。しかし、祖母や祖父なら、その可能性は高まる。これまでは、学生自身が渡航前に病氣しないように祈っていたが、そういう身内の思いがけない不幸も起こりうることも考えておかなければならないと思うようになった。そういう不幸があれば、もちろん、参加を強制できない。急遽、代役を立てるか、公演を中止するほかないだろう。

結局、私とシュリーヴァースタヴ氏が最後に、コルカタのネタージー・スバシユチャンドラ・ポー・ス国際空港に降り立ったのだ。空港には先着組の学生たちが迎えに出てくれた。バンコクからのフライトはコルカタには昼に着くのが嬉しい。安心である。一九九九年二月二四日のことだった。二月下旬といえ、もうインドの冬は終りに近く、日一日と暑さが増してくる頃である。しかし、それでもまだまだ快適。寒い大阪から暑いバンコクを経由してくると、両者の中間ぐらいのマイルド

な気候のように感じられた。澄みきった青空もすがすがしい。航空機はやや到着が遅れた。それで、空港から市内のホテルに直行したが、予定されていた記者会見はすでに終わっていた。代わりに、学生諸君が出てくれたらしい。我々の公演を全面的にサポートしてくれるイマミ・グループというマルワリー系の新興財閥の代表との共同記者会見だったらしい。イマミ・グループは化粧品やアーユルヴェーダ（インド伝統医学）の薬品を扱う外、日本でアーユルヴェーダ伝統医学の普及に勤めておられる、大阪在住のハリシャンカル・シャルマー氏とイナムラ・ヒロエ・シャルマー夫人のスポンサーでもある。この財閥と知り合ったのは、シャルマーさんのおかげである。

私は、その足でコルカタ日本総領事館を表敬訪問し、川岸登総領事に挨拶した。今回すべての公演には、コルカタとムンバイの両総領事館とデリーの日本大使館から、後援名義の使用許可をもらっていたからである。つまり、シャンティニケトンとコルカタ公演は、コルカタの日本総領事館の後援、ムンバイとプネーの公演は、ムンバイの日本総領事館の後援、アーグラとデリー公演は、デリーの日本大使館後援で行なうことになった。

ホテルは記者会見用に訪れただけで、我々の宿泊には、イマミ・グループの経営者の豪華な私邸があてがわれた。コルカタ南部のトリガンジ地区にあるサザン（南）・アヴェニューというところに聳え立つ、四階建ての白亜の大マンションが、イマミ・グループのマネージャーを務めるゴエンカ一家の私邸である。使用人が沢山いる。さすがは、コルカタでベスト二〇に入るといわれる富豪の邸宅である。このゴエンカ邸からわずか数百メートルしか離れていない所に、イマミ・グループ

の共同経営者であり、代表取締役であるR・S・アガルワール氏の大邸宅がある。そこにも招かれたが、建物だけでなく、調度品の立派なものには驚いた。高尚な趣味も富から生まれるものであることを知る。こんな家を見ていると、果たしてインドは貧しい国かと、ふと考えてしまう。

ゴエンカ一家と書いたが、マールワリー商人はいまだに大家族制度を守っている。四人兄弟が共同経営者で、各階それぞれが各兄弟の世帯となっている。入り口には、どでかい踊るシバ神のブロンズの像があり、上の階には、エレベーターで上がる。三階に案内された。私とシユリーヴァースタヴ氏が個室、女子学生が二人部屋をあてがわれ、八人の男子学生用には、床にマットレスを敷いて寝床がこしらえてあった。床といってもぴかぴかに磨かれた大理石であるから、清潔なものである。「ごご寝」には違いないが、寝室といってもよい広さと清潔さがあった。学生にとつてはぜいたくなものである。近くのキッチンから、料理人が食べ物・飲み物をこの部屋にまで運んでくれるのである。マールワリーはほとんどが菜食主義者である。従つて、ここの食事はすべて菜食であった。しかし、菜食がこれほどマイルドな味で、しかもこれほど種類が豊富であるかを、ここに初めて知った。レストランで出されるヴェジタリアン用のメニューとは全然違う。故郷ラージャスターンの民族料理が主である。とにかく、美味しい。その場で我々用に、ゴエンカ家の女性たちが料理人と一緒に、腕によりをかけた料理を作ってくれるのだから、これほど心のこもつたものではない。外食なんかとてもする気にならないほど、ここの家庭料理はすばらしかった。

ゆっくり休めたが、我々の最初の公演は、日程上、コルカタから西北約二〇〇キロメートル離れ

た、アジアで初めてノーベル文学賞を受賞した詩聖タゴールの創設した学園シャンティニケトンで行なうことにした。

シャンティニケトンでの上演（観客数約二〇〇）

トリガンジ地区はコルカタ南部に位置し、鉄道のターミナルであるハウラー駅は北部にあつて、かなり離れている。二月二五日の朝、イマミ・グループ差し回しのミニバスで、ハウラー駅へと向う。九時五五分発の「シャンティニケトン・エキस्प्रेस」に乗るためである。エアコン付き二等座席指定車両にあらかじめ予約していたので、なんの問題もなく座れた。大きな荷物はコルカタのゴエンカ邸に置いてきたので、比較的身軽で、三人掛けのシートも楽に座れた。ただ、冷房が効きすぎて寒く、外は十分暖かいのに、セーターを着込まなければならなかった。インドの列車のエアコンというのは、暖房ではなく、冬でも冷房で走るらしい。暖房車にはお目にかかったことがない。

途中、ボルドマンという大きなジャンクション（乗り換え駅）があつて、デリー方面へ行く列車は、ここから分かれる。昔は、ハウラー駅からシャンティニケトンの最寄の駅であるボルプル駅へ行くには、このボルドマン駅で乗り換えなければならなかったのだが、この「シャンティニケトン・エキस्प्रेस」という直行便ができてから、非常に便利となった。途中、ボルドマン駅しか停車せず、わずか二時間半ぐらいでボルプル駅に着く。非常に便利になった。

ボルプル駅には、日本学院（学部）からオミットロシユドン・ボッタチャルジョ教授が出迎えて

くれた。ここから、ニキロメートル北にある学園まではサイキルリキシヤに分乗して向った。近くのマーク・メドウというホテルが我々の宿泊先だった。各部屋がコテツジ（小屋）のような形をしていて別々に建っている。都市の近代的な高層ホテルとは全く趣を異にするホテルで、周囲の環境によくマッチしているなと思った。

ポツタチャルジョ教授はベンガル語文学が専門であるが、日本人学者や留学生との関係が深いため、日本学院の運営の役も担っておられる。三〇年以上前に、筆者がこの学園に留学中、ベンガル語を教わった恩師で、以降ずっと交流を続けている。シャンティニケトンとは「平和の地」という意味で、一九〇一年に、タゴールが自らの教育理念を実践する場として、この地に生徒数わずか五名の私塾の学園を開いたのが、このヴィシユヴァ・バラティー大学の起源である。現在は理科系の学部もつ国立総合大学になっている。数少ない日本語コース（学士課程まで）を有する大学でもある。現在でも、インドの伝統的な教育方針を踏襲しており、木陰に座って小人数の授業が行なわれている。昔は、文字通り、「平和な・静かな」地で、観光客の訪れることもなく、近代的な宿泊設備もなかった。今では、すっかり有名な観光スポットになってしまつて、そのため、近代的なホテルも存在する。昔のよきシャンティニケトンを知る古い世代の人達の中には、こうした変化ぶりを嘆く人もいる。

さっそく、午後三時からの記者会見に出る。地元のベンガル語紙の記者がほとんどだったので、私はベンガル語で記者会見に応じた。ベンガル語といえば、タゴールの作品は、ほとんどが母語の

ベンガル語で書かれており、ベンガル語文学の水準は南アジアの諸言語のなかで高い評価を受けており、ベンガル人はこのベンガル語に大きな誇りをもっている。ベンガル語文学専攻のポッターチャルジョ教授も、本音は我々に、ベンガル語のドラマを演じて欲しかっただろうと思われる。タゴール自身、劇作家であり、かつ俳優としても劇を演じていたという。従って、タゴールの戯曲を、この地で上演すれば、最高に受けたであろう。しかし、我々の劇団はヒンディー語劇団だから、どうにもならない。記者会見では、将来はベンガル語のドラマをやりたい、とは答えておいた。実際は、日本でベンガル語を学ぶ学生は毎年いても、演劇ができるほどのレベルのベンガル語は教えていない。また、それだけの人数は揃わない。

圧倒的多数がベンガル人であるこの土地で、ヒンディー語劇がどれほど受けるか、少々心配ではあった。主催を日本語学科とヒンディー語学科の共催として、学内に宣伝した。公演は、日本学院の中庭に、特設舞台が設けてあり、今夜、野外でやることになった。夜でも、ここは全寮制の学園なので、数千名の学生が常時キャンパス内にいて、興味があれば、すぐに観客が集まるはずである。五年後に実施する、アリーガル・ムスリム大学での公演のように、女性が夜外出しないということはない。ここは治安もよく、女性が学園内を散策しても、まず問題はない。

日本学院の中庭に、観客用に並べられたパイプ椅子一〇〇脚ほどはすぐ埋まり、立って観ている人も多かったので、この二〇〇名という数字は満足すべきものかも知れない。しかし、ヒンディー語専攻の学生が全部来てくなくても、これぐらいにはなるはずと、私にはちよっぴり不満だった。こ

れがベンガル語だったら、もっと多くの観客が集まることは間違いない。私は、それを意識して、座長の前口上をベンガル語でやった。このようなものであった。

「皆さん、人生において、若さは狂喜であり、老齡は呪いであります。誰にとつても老齡はうとましいものです。従つて、若く見せるために、人々は古来、何千という方法を考え出しました。白髪を黒く染めたり、太くなる腰回りを細く見せるために、きつくバンドを締めたりです。白髪はおろか、毛が抜けはじめただけで、年齢をごまかすために、人々はあらゆる奥の手を考え出します。白髪に悩むのは、私たちだけではありません。ヒンディーの古代詩人のケーシャヴダースは、こう詠っています。

『ああ、かくあらまほし。その顔月の如く麗しく、その瞳鹿の如く麗しき乙女の、我を「翁」というなかれ。』

ケーシャヴダースだけでは、ありません。美しい若い娘さんに、「おじさん」と話しかけられるのに、我慢できますか。男性だけではありません。若く見せるテクニックでは、女性の方が男性よりずっと進んでいます。

一人人は若返ることができるでしょうか。ああ、そんなことができるといいですね。

真つ先に、私が若返りますよ。これからお見せするドラマのヒーローは、私より早く、若返つてきたのです。さあ、若返つた老人がどんな騒動を沸き起こすでしょうか。これから、日本人学生 of 演じるドラマ『若返り』をごらんください！」

ここで、第二回インド公演の初演の幕が開いた。結構、拍手と笑い声が起こった。野外なので、蚊にさされながらの熱演だった。

いつものように、今回のドラマでも、インド人教師のシュリーヴァースタヴ氏と私が発音の指導はした。しかし、とくに演出を指導した覚えはなく、振り付け等は学生たち自身で考案してやっていった。とくに、ヒンディー映画では必須のダンスを取り上げて、若返った老人と、その恋敵の青年との対立を描くシーンでは、二人の男子学生が踊りをとりいれて身体で表現した。最後には、若返った老人が青年を蹴飛ばすという踊りである。シナリオには全然ないシーンだったが、観客を楽しませるには十分だった。今の学生は、こういうセンスを持っているのだ。体の動きが柔らかない。私の世代では考えられなかったことだ。

途中で観客席から女子学生の数が減り出した。なぜかと聞いてみれば、女子寮の食堂の夕食時間なのだという。残念だが仕方ない。食事をミスしてまで、ドラマを観る義理はだれにもない。ある程度観て楽しめば、「まあ、こんなもの」と思うのが普通だろう。これがホールなら、中座しにくい雰囲気もあるが、ここは野外劇場なので、何の遠慮なく、退出できる。終った時には、一〇〇名を割っていた。しかし、過去三〇年ほど、この学園で日本語教育に当たっておられる牧野財士氏や、ヒンディー学科の主任教授、R・S・トーマル氏は最後まで観ていただいた。

私としては、必ずしも満足できない初演だったが、演じた学生の評判は意外によかった。結構拍手と笑いが起こって、気持ちよく演じられたというのである。蚊にはさすがに参ったらしいが。芝

居が終つて、また座長の私が登場して、次のような口上を述べた。

「皆さん、いかがでしたか。そもそも、生とか死とかは、人間の力ではどうにもならない神の領域なのです。このドラマからひとつ教訓を得ることがあります。それは、歳をとつたら、決して立腹してはいけないということです。怒れば怒るほど、それだけ早く歳をとります。老齡は避けられないとしても、工夫によって老後を楽しむことはできますね。私は断じて、老後はエンジョイしますよ。何？どのようにエンジョイする、ですって？　そうですね…芝居でも見て暮らしますよ！」

警察の護衛車つきで夜道をコルカタへ

さて、ここでさつそくハプニングに遭遇することになる。二日後の二七日（土曜日）の夜、重要なコルカタ公演があるので、我々は当地に一泊だけして、明くる日の朝の列車でコルカタにもどる計画であった。しかし、明くる日は、西ベンガル州のゼネストが予定されているというニュースが入つて、不吉な予感がした。左翼勢力の強いこの州では、よく労働争議やゼネストが起こる。ゼネストというのは、商店も閉まり、交通機関も止まるといふものである。鉄道がとまつたら、コルカタに戻れなくて大変なことになる。ここで、当地の主催者とコルカタの主催者との間で意見が対立する。

コルカタ公演の中止をなによりも恐れるイマミ・グループの人達は、今夜中に車をやとつて帰つてこいという。一方、シャンティニケトン側の責任者は、女子学生もいるので、夜の道路で万一本

測の事態が起こることを恐れた。当然である。そんなことがあつたら大変だ。しかし、コルカタに早く帰りたい気持ちもあった。夜が明けるのを待つて、車を雇つてコルカタへもどればいいというのが、シャンティニケトン側の提案だった。しかし、ゼネストでは何が起こるか分からない。道路が閉鎖される危険性もあるので、夜が明けたからといって、安全にコルカタへ辿りつけるといふ保証はない。むしろ、ゼネストが起こる前に、帰つてしまふ方が安全だろう。しかし、夜の道路交通も、絶対安全とはいえない。安全だけは守らねばならない。

いろいろ関係者が協議した結果、警察に依頼して、護衛のパトカーをコルカタまでつけてもらうことになった。これなら安心である。日本人のグループにもしものことがあれば、シャンティニケトン側の責任になるので、こういう措置をとってくれたのだろう。警察の護衛車が、途中県境ごとに交替したが、警察の護衛車が、二台の車に分乗した我々をコルカタまでずっと護衛してくれた。途中、県境でパトカーが交替するときに、少し休憩しただけで、夜中の国道をフルスピードで突っ走つたので、意外と早くコルカタに着いた。二六日の夜明け前に、コルカタのゴエンカ邸に無事着いたときは、ホツとした。一年前のヴァーラーナシー〜アーグラ間の、あの不安だった夜のバス旅行を思い出したが、警察の護衛付きだったので、今回は何の心配もなかった。しかし、しょっぱなからこういうハプニングに見まわれるとは、前途多難を思わせた。さっそく、初演を無事終えた開放感からか、やや無理して暴饮暴食をした学生がいて、下痢を起こして困つたことになる。二七日は、ゴエンカ邸でゆっくり休養した。

コルカタでの上演（観客数約七五〇）

コルカタ公演は、二月二七日午後六時から、G・D・ビルラー劇場で行なう事が決まった。主賓はA・R・キドワイ西ベンガル州知事、名誉客が川岸登コルカタ総領事である。イマミ・グループが各方面に出した招待状を見て、その立派さに驚いた。これほど綺麗な上質紙に印刷された立派な招待状は、見たことがない。第一回のインド公演の舞台写真とナラヤナン大統領との会見の写真が招待状に刷られていた。そして、一番上の見出しに、*They have come all the way from Japan to win your heart.*（彼らははるばる日本からあなたの心を勝ち取るためにやってきた）とあった。

正午ごろ、劇場入りして設備を確かめた。劇場は広くて立派だった。設備もよかった。軽いりハールをしようと思つたが、主演のM君が昨夜から下痢をしてダウン。熱があつたので、この劇場に医者診察を要請した。信頼のある医者を選んでくださいと何度も念をおした。三八度あつたので、出演できるかどうか不安だった。知事と総領事、その他コルカタの主要な政財界人を招待しているので、中止ということになれば、主催者の面目丸つぶれとなる。しかし、高熱が収まらず、出演が無理と医者が判断すれば仕方ない。ドクター・ストッフということで、公演を中止せざるを得ない。幸い、下痢に伴う発熱で、すぐに熱は下がると診断され、注射を打った。開演まで三時間と迫っていたが、安静にさせて回復を待った。医者の診断通り、やがて熱が下がってきたので、出演可能と判断した。本人も元気にセリフも間違えることなく、立派に舞台を勤めた。大したものだ。惜しみなく賞賛した。もつとも、こうなる前に舞台のことを考えて、健康には細心の注意を傾けて欲しかつ

た。素人であることに甘えてはいけない。我々の劇をわざわざ観に来てくださる客がいる。お客さんに、「観てもらおう」「楽しんでもらおう」ことを、最大の目標にすべきであることを、再確認した。この精神は以後も終始一貫してかわらない、我がヒンディー語劇団のプリンシプルである。

会場は大いに盛り上がり、大好評の内に終えた。シャンティニケトンでは、ベンガル人の観客のため、舞台挨拶と座頭の口上をベンガル語で行ったが、ここコルカタではヒンディー語でやった。コルカタは確かに、西ベンガル州の州都であり、住民の大多数はベンガル人である。しかし、主催者のマールワリーは、ラージャスタンを故郷とするヒンディー語スピーカーであり、その子弟達も通常、マールワリーの運営する、ヒンディー語を媒介言語とする学校に通う。ベンガル語は一科目として習うが。そういう関係で（マールワリー主催なら、その招待客もマールワリー・コミュニティが中心なので）、観衆の九割程度がヒンディー・スピーカーと思われるから（大体、顔つきでも



「若返り」の舞台

ある程度推測がつく)である。キドワイ州知事もウルドゥー語を母語とする人だから、ベンガル語よりは、ヒンディー語の方がおできになるはずである。州知事というのは、日本の県知事よりも、もつと権威のある重要ポストである。国家の大統領の地位が州の知事の地位に相当する。しかし、こういうVIPは普通、申し訳程度に一〇分ほど観劇して退席するものだが、キドワイ知事は、芝居が終るまでの約二時間中座されることはなかった。このドラマがいかに退屈させない面白いものだったかの証拠である。なお、これから六年後の二〇〇五年に、ハリヤーナー州の州都チャンディーガルで公演を行ったとき、キドワイ氏は今度は、ハリヤーナー州の知事として参列して、我々のヒンディー語劇終演後の東京外国語大学生によるウルドゥー語劇を観劇されるのである。

テレビのインタビュも受けた。記者もカメラマンもベンガル人だったので、ベンガル語で応じた。そのカメラマンというのは、かの有名なサタジット・レイ監督の映画を撮影した人と紹介された。凄い人に会ったものだ。

もう一人の招待客として、病弱と高齢をおしてわざわざ駆けつけてくださった、ベンガル仏教協会事務局長のダルムパール・ビック師がおられて感激した。名前からして、いうまでもなく(小乗)仏教の僧侶である。筑波大学の我妻和男名誉教授を中心とする日印タゴール協会(私もその会員である)と交流があり、来日経験もおありの親日家である。インドで消滅したかのように思われている仏教は、まだこのコルカタでは細々と生きているのだ。師は仏教の平和の教えを実践されている求道者であると同時に、生きたパリー語の権威でもある。パリー語が自由に話せるのだ。東南アジ

アヤスリランカの仏教徒とは、パリー語でコミュニケーションされるのである。この人のパリー語による朗々たる読経は、非常に魅力ある。声もよく通り、聞いていて気持ちがいい。私が所有する、師の朗詠で録音した「ダンマパダ」のテープは貴重品である。だんだん歳を召して弱っていかれるのが心配だ。

三七年前、私が大阪外大在学中にヒンディー語を教わったラーデー・シユヤム・ケーターン氏が、まだコルカタでご健在だったので、この公演会に招待し、芝居が終ってから舞台に呼んで、観客の前で紹介し、謝意を表した。主催者のゴエンカ氏と同じマールワリーのコミュニティーに所属する人だったので、主催者もよくご存知の人だった。翌二八日（日曜日）の朝、パリガンジのケーターン氏のアパートをシュリーヴァースタヴ氏と一緒に訪問し、朝食をごちそうになりながら、昔話に花を咲かせた。

その夜、一行は次の公演地ムンバイに向けて、コルカタ空港を飛び立った。全員すっかり体調が回復していた。一五〇〇キロメートルを二時間で飛び、インドの東の玄関コルカタから西の玄関ムンバイに到着した。そこで、昨年と同様に、NGOの文化団体プリヤダルシュニー・アカデミーの代表者の出迎えを受け、ミニバスで、やはり昨年と同じ、ダーダル駅のそばのホテルに案内された。内装が綺麗になって、多少「若返った」印象は受けた。しかし、相変わらず入り口が狭く、エレベーターが小さくて一度に二人しか乗れないため、全員が部屋に落ち着くのに、かなり時間がかかった。

ムンバイでの上演（観客数約七〇〇）

三月一日午後六時三〇分から、昨年と同じネルーセンターで上演が始まった。

昨年のように、豪華な立体的な舞台装置が準備されていた。本当にインドの家のの中にいる感じがする。コルカタと比べて、ホームステイ先の豪華さと招待状の立派な点は及ばないが、舞台の豪華さと劇場の広さという点では、やはりムンバイの方が、数段すぐれていた。

昨年は、開会式を英語でやったことをマスメディアで叩かれたからか、この年は、始めからヒンディー語でやった。ゲストとして呼んだのは政治家ではなく、舞台女優であり、ボリウツドの古い世代の女優であるタバスムさんであった。ユーモア巧みに、ネルーセンターの果たしてきた文化的な役割をたたえ（いうまでもなく、ネルーとはインド初代首相の名に因む）、ドラマのテーマ「若返り」について、自らの経験にもとづくジョークを語った。観客が、もひとつ反応しないので、「皆さん、面白ければお笑いになっていいですよ」とやったら、会場は爆笑と拍手に包まれた。いつも思うのだが、インド人は本当にスピーチがうまい。話術の専門家みたいな人ばかりに思える。長いスピーチは学生にとって退屈でいつも不評なのだが、私にとっては必ずしもそうではなく、スピーチの内容が面白いので、結構エンジョイしている。たとえば、うわべだけで中身のないスピーチでも、その「修辞法」は見事なものである。

ドラマそのものは、昨年以上にレベルアップしているし、観客の反応も昨年よりよかったと思う。おかしところでは、必ず爆笑が起こった。ムンバイのこの立派な劇場に招待される客というのは、

総じて品のいい人が多いので、他の会場に比べて笑い声が大人しいと思っていたが、今回はそうではなかった。率先して大声で笑う婦人が前席にいた。この人につられて大笑いした人も多かったようだ。こういうふうには、率先して大声で笑ってくれる人がいると、会場全体が盛り上がるので、こういう人は貴重な存在である。学生時代、西宮市にお住まいだったジャガト・ダヴェ氏に二年間ヒンディー語を学んだことがある。氏はその後、ずっとムンバイにお住まいで、昨年引き続き今回も夫人同伴で、観劇に来ていただいた。氏は、当時の上級生が学園祭で上演した、ジャヤシャンカル・プラサード作の有名な戯曲「ドゥルヴァスヴァーミニ」の演技指導をしたことのある人なので、当時の学生と今の学生のヒンディー語劇の演技力はどう違うか、意見を訊いた。「比較にならないほど、今の学生の方がうまい」という答えだった。当然のことだろう。四〇年近い前と今では、ヒンディー語学習の環境がまるで異なる。当時は、いい教科書も辞書もなかったし、インドへ行くのは夢物語だったし、大学にいても生のヒンディー語に接することはできなかったのだ。今の学生は本当に恵まれていると思う。しかし、当時学園祭で上演したこの「ドゥルヴァスヴァーミニ」はデリーで発行されたジャヤシャンカル・プラサードの演劇に関する論集のなかで、大きく取り上げられている。インドでも余り上演されることがないというので、その「歴史的」価値が評価されたのだろう。(Mahesh Anand, Jayashankar Prasad Rangsrishi rangmanch ke lie natak pp.107-109, New Delhi, 1998)

翌日の各新聞に、我々の劇のことが報道された。しかし、昨年あの熱気に比べると、非常に地

味な控えめな報道だった。インド「初」公演ではなくなったのだから、新奇さはなくなる。当然のことだろう。ムンバイの日本総領事館からは、山中真一首席領事が出席された。

翌日は、ちょうどホーリーというヒンドゥー教のお祭りとなつた。色粉をかけあつて開放感を味わう楽しいお祭りである。シュリーヴァースタヴ氏は、さっそく友人の家に、祭を祝いに行かれた。我々も単に旅行者なら、町に出てインド人と一緒に遊びたいところだが、とにかく大都市で群集が集まると何が起こるか分からない。外国人の女の子がそんな所へ行くのは、危険である。我々は、この日を休息にあてて、ずっとホテルで過ごした。しかし、夕方になると、その騒がしさも治まって、町は平静を取り戻した。この時間を利用して、私は男子学生を連れて、郊外に住む英国系インド人の旧友宅を訪問して、歓待にあつた。舞台で老人役が使う杖を、氣を利かせて貸してくれた人だ。それまでは、普通の棒を杖代わりにしていた。考えてみると、本物の杖のほうがいいはずだ。そこまで我々は気がつかなかった。

翌日の午前も自由だったので、たまたま神戸からムンバイに来ておられたダスワニー氏と、G・ヴィーという学識人と会つて、今後のムンバイでの公演のやり方について、アドバイスを受けた。氏がいうには、「この劇上演のために、基金を作つて、入場料をとればいい」と。しかし、我々素人劇団は、入場料をとらないから、お客さんが見に来てくれるのであつて、入場料を払つてまで来る人は、よほどの演劇ファンか、親日家ぐらいのものであろう。それに、毎年ムンバイに来てやれるという保障はない。学生が揃わなければできないのである。有難い提案ながら、丁重にお断りした。

プネーでの上演（観客数約六〇〇）

マハーラーシュートラ州の首都はムンバイであるが、ムンバイが近代的なコスモポリタン都市であるのに対し、その南東一二〇キロメートルに位置し、デカン高原の西端部にあるプネーの町は、落ち着いた文化都市である。歴史的にも、ここはマラーター同盟の中心として発展した。もともと、この町もすでに人口二五〇万人に達し、インドの他の町と同様に、あふれる人口、公害、交通渋滞に悩んでいるようだ。それでも、ムンバイから来るとホツとする。四時間ほどの列車の旅は、左手に、高原の絶景を見ながら楽しんだ。北インドの旅では、滝が見えたりすることも、列車がトンネルに入ることも余りない。プネー公演は、かつて神戸在住の折に知り合い、その後も親しくしているシュシヤント・ボシユ氏が骨を折ってくださって、印日協会とプネー大学ヒンディー語学科の共催でやつてもらったことにした。印日協会事務局長のデーヴァダル氏は退役軍人で、印パ戦争の実戦経験もあるとか。この人のどこに、そんな勇壮な面があるのかが不思議に思われるほど、温厚な紳士であった。その外、日本語を教えているインド人にもたくさんあった。この町は、インドで最大の日本語学習人口を有する町としても有名なのである。

会場は、当市最大のバールガンダルヴァ劇場で、ムンバイやコルカタの劇場とほぼ同じ設備が揃っている。プネーは文化都市で、演劇活動も盛んとさく。インドの諸言語のなかで、マラーティー文学とベンガル文学が一番演劇の水準が高くて活動的とは、よく耳にしていた。すると、この劇場は、マラーティー演劇のメッカであるに違いない。我々の宿泊先は、プーナ・クラブ（プーナはプネー

の旧名)といつて、イギリスの植民地時代は、イギリス人の社交クラブであつたところで、古風な建物ながら、風格があり、きれいに整備された芝生が美しい。高層の近代的なホテルより、こういうホテルの方が感じよい。個室で千ルピー(約二七〇〇円)とは安い。食事もよかつた。

三月五日、初のプネー公演も成功した。ところどころ、ムンバイでの反応と違ふところもみられたが(その理由はよく分からない)。プネー大学のアルン・ニガヴェカル学長も観劇された。プネー大学といえば、主催者となつてくれた同大学のヒンディー語学科を公演前日に訪れて、その教官と学生たちから大歓迎を受けていた。お互い、歌を歌つたりして楽しい時を過ごした。教授の家にも招かれた。インドの大学のキャンパスは、どこも広々としていて、羨ましい環境にある。プネー大学は、インドの一流大学とされ、特に古代史や考古学、サンスクリット研究、哲学・仏教学の分野が優れているとされる。日本のサンスクリット学者の中には、このプネー大学で研究した人も多い。ヒンディー語学科は、ヒンディー語地域にあるわけではないので、北インドの大学のヒンディー語学科に比べて、特に優れているとはいえないが。公演には、プネー大学のヒンディー語科の学生も観に来てくれた。そして、公演後もその学生たちと一緒に、当時大ヒット中のヒンディー映画『Kuch kuch hota hai』(何かがある)を見て楽しんだ。それから我々の劇は日本語でやるわけではないが、日本人がやるというので、そういう日本語を学ぶ人達も観劇に来てくれた。公演を終えた夜は、この町で日本語教育の中心的役割を果しておられるテンドウルカル美智子さんから、一同、シユレーヤスという定評ある菜食のレストランに食事に招待された。コルカタのマールワリーの

財閥の私邸でふるまわれた菜肴とはまた違った風味のするおいしい料理だった。

美智子さんとは、その昔（一九六〇年代）、デリー大学付属のミランダハウス・カレッジでヒンディー語を学んでおられたときに、筆者は一度デリーでお会いしている。懐かしい再会であった。食事を楽しみながら、日本語教育の問題、ヒンディー語教育の問題等を楽しく語り合った。本学学生へのヒンディー語の発音・演技力については、お世辞抜き賞賛を賜った。その後、美智子さんは、南インドのベンガルールに活動の拠点を移されたと聞いた。

昨年のムンバイと同様、プネー初の日本人学生によるヒンディー語劇の公演ということで、当地のマスメディアは大々的にとりあげてくれた。面白い見出しもあった。

英字では、『Made in Japan, Speak in Hindi』とか『Mera dil hai Hindustani』とかいうふうに。後者は「僕の心はインド人」という意味で、一九五五年にヒットしたヒンディー映画「詐欺師」で歌われる有名な歌「僕の靴は日本製、でも僕の心はインド製」という歌詞をもじったものである。

しかし、マスメディアの報道というのは、必ずしも百パーセント正確な情報を伝えるとはいえない。日本人学生の名前や地名もよく間違っって書いているし、インタビュ어도、こちらの言っていないことを付け加えたり、どうも記者の先入観や思い込みで書いている記事もあって、信用できないものがあるのも事実である。多少の誇張表現は、もちろんあってよい。総じて、より発行部数の多いヒンディー語紙の方が、英字に比べると、その傾向が強いように思える。そんな中であって、英字紙の Indian Express の記事は、インタビュの内容(上演前に行われた)を非常に正確に伝えており、

他紙に比べて質の高い記事だと思われるので、その記事の全文を次に引用しようと思う。和訳は筆者自身による。

日本人使節、舞台で脚光を浴びる！

プネーで演劇といえ、それに何の新鮮さがあるの？と訊かれそうである。つまるところ、この町は、しばしば最良の演劇を上演し、演劇人や演劇愛好者にとつて、十分すぎるほどの機会を与えている。しかしながら、もし、出演者が全員日本人学生であり、かつ彼らがヒンディー語で劇を演じると聞けば、皆、起き上がって耳を疑うことだろう。その通り。三月五日金曜日に、パールガンダルヴァ劇場には、ラージェンドラ・シャルマー原作の「若返り」のセリフが響き渡るだろう。印日協会とプネー大学ヒンディー語学科との共催で行われる。出演するのは、大阪外国語大学でヒンディー語を学ぶ日本人学生だ。

演出するのは、三〇年来大阪外国語大学でヒンディー語・ベンガル語・パンジャビー語を教えている溝上富夫教授である。溝上教授一行は、すでにシャンティニケトン、コルカタ、ムンバイで上演済みであり、この後、アーグラやデリーでも上演の予定である。教授は、文化・芸術の拠点としてのプネーの名声はよく知っている。

「これまで上演したところの評判は非常に良かったのですが、私達は、知識人と文学愛好者の町であり、演劇活動の中心でもあるこのプネーの町で公演することに興奮を覚えます。当地で公演で

きることは、私達の誇りです」。さらに、「出演者はすべて若い学生で素人ではありませんが、ブネーの人たちには、批判的にドラマを見て欲しいと思います。単なる、すばらしい、よくやったというようなお褒めの言葉を期待していません」と教授は述べた。教授の劇団は、一九九七年に、ニューデリーの国立演劇学校の招待で公演している。また、ロンドンでも公演の実績がある。さらに教授は「私達は、単に日本人がインドの言葉で上演するというのではなく、真剣な舞台という観点から私達の演技を批判的に評価して欲しいのです」といい、「私たちが将来向上できるように、真面目な演劇ファンと演劇人に芝居を見て欲しい」と期待している。

溝上教授は「新しい言語を習得するには、単に筆記試験でよい点数をとるだけではなく、その言語で意志疎通ができなければならぬ」との信念を持っている。「教科書から文法を学ぶだけでは面白くない。学ぶということは、楽しい経験でなければならぬ。ドラマは楽しい経験であり、学習を容易に面白くかつ楽しくさせます。それは又、別の楽しみも与えてくれます。ほかの場所を訪れたり、新しい人々と知り合ったりというふうに」。彼の学生達がインド人の学生達といきいきした会話を交わしているのを指して、教授は「ご覧ください。ドラマのおかげで彼らはヒーロー、ヒロインになれたのです」とさりげなく付け加えた。「いろいろな場所で公演することで、文化交流と、異国の生活・文化を直接体験することにつながります」と、演劇を重要な教育手段として活用している教授はいう。さらに、彼は「教科書だけでは教わらないことも多い」といって、プーラン・デーヴィー（訳者注・盗賊の女王といわれた人で、幼少時から差別され続け、盗賊の首領となって、自

分を苦しめた男達に復讐する。殺人犯として指名手配されるが、司法取引で投降し、仮釈放中に国会議員になる。一九九九年一月二三日に、京都精華大学で講演を行う。その後、デリーの自宅前で白昼に殺害される)が日本を訪問した時のことを思い出す。「彼女が使った表現の一つにムルガー・バノー(訳者注・雄鶏になれという意味で、むりやりしゃがまされて両手で耳をおさえてニワトリの格好をさせられる罰の形態)というのがあって、日本語ではそれに対応する言い方はない。しかし、私達は以前に演じたことのあるドラマで、その表現を知っていたので、彼女の言わんとすることは、理解できたのです」「本は有用ですが、限界もあります。結局、何人の人たちがその本を読むでしょうか。しかし、演劇は強力な手段です。ひとつのドラマは同時に何千人という人たちのところに達するのです。とくに、テレビ等のメディアで放映されると、その到達範囲は一層拡大します」。溝上教授は、ヒンディー語への愛を学生達に広めるのに従事しているが、最初にこの言語が彼をひきつけたものは何だったのだろうか? 「私は、当時日本で最大のインド人コミュニティのある神戸の高校生でした。ある日、私はサリーをまとった美しいインド婦人を見て、この妖精は一体どこから来たのだろうか、強い好奇心に引かれたのです」。何年も時が経過し、彼はもういちど無邪気な高校生に戻ってこう言う、「彼女はパズルのような文字で書かれた奇妙な本を手にもっていました。そして、もう一人の婦人と奇妙な言葉で喋っていたのです。そのパズルはデーヴァナーガリー文字で、奇妙な言語とはヒンディー語であることが、後で分かりました」。「私は、余り人の知らない言葉を学びたかったです。当時は、バンディット・ジャワーハルラール・ネルー(初代インド首相)

が世界的に知られた指導者で、とても尊敬を集めていました。彼は平和の使徒というイメージがありました。ですから、私は彼の国の言葉を学びたかったのです。しかしながら、「ネルー氏が主に入話す言葉は英語であることを知ってがっかりしました」とつけ加えた。

溝上教授は、インドと日本の間に共通点があると考えている。たとえば、年長者を敬ったり、合大家族であったり。「もつとも、合大家族は経済的理由で、もはや日本では崩れています。しかし依然として理想とされています」。違いは？「明かに違うのは、インドでは個人が重要であるのに対して、日本では集団が重んじられます。インドはマハートマ・ガンディーやタゴールやネルーのような傑出した人材を生み出していますが、日本の場合は、知られているのは個人よりも国です」。「しかし、重要なのは、共通点の方であり、お互いから学び、理解することが重要なのです」溝上教授は、マラーティー語劇を観劇したいと言う。「私には夢があります」と教授は言う。「インドと日本の学生が同じ舞台上で演じられるドラマを上演することです」。

なお、その言葉の通り、私は翌日マラーティー語劇を同じ劇場で観劇した（観客数は我々の劇よりもぐっと少なく二百名程度しかなかった）し、また後年、日印合同舞台を実現する事になるのである。

アーグララー（スール・サダン劇場）での上演（観客数約二〇〇）

プネーを発つて列車でアーグララーに向かおうとしていたときに、またアクシデントが起こった。雑踏するプネー駅のプラットホームで、Kさんが他の乗客の鉄製の固いケース（ポーターが頭に載せて運ぶ）を後頭部に当てられ、一瞬脳震盪を起こしたのだろうか、倒れこんだ。寝台列車に寝かせ、後頭部を冷やしたが、体の不調を訴えたので、同乗の医師を探し診察してもらったところ、二四時間の列車の旅は危険、すぐプネーに引き返して専門医の診察を受けるべし、というのである。しかし、もう列車は出発している。次のダウンド駅まで七〇キロメートルほどあるが、私とKさんとスタッフの男子学生のW君の三人は、その駅で降りて、下りのローカル線に乗り換え、プネー駅に引き返した。他の一行は、シュリーヴァースタヴ氏に責任を委ねて、予定通り、そのままアーグララーに向かった。どうぞ何事もありませぬようにと祈りながら、ボシュ氏の紹介でプネーの一流病院の救急医療部を訪れ、脳神経外科医の診察を受けた。意識ははっきりしており、しっかり歩く事もできたので、私は大したことになるまいとの期待をもっていた。CTスキャナーで異常なし、との診断が下ったときには、ホッとして神に感謝した。念のため、その夜一泊だけ入院し、翌日夕方の飛行機で、デリー経由アーグララーに飛び、心配していた仲間と合流した。歓呼の声で、無事を祝福したのはいうまでもない。Kさんの代役はいないので、アーグララー公演の中止はやむを得ないと覚悟していたのだが、本人が元気になったので、予定通り、あのスール・サダン劇場で上演した。三月九日のことである。ところが不幸なことに、事前の入念な準備にもかかわらず、この日、テレビの人気番組ショーに

加え、開演の遅れなどアクシデントが重なった事が災いし、他の公演に較べ、観客人数の点で納得のいくものでなかったのは残念であった。大きなホールで観客が少なくガランとしているよりも、小さなホールで満席になる方がずっと盛りあがるのだ。シュリーヴァースタヴ氏も足に大怪我をされるという不運が重なった。

アーグラ（中央ヒンディー語研究所）での上演（観客数約二五〇）

ここは、シュリーヴァースタヴ氏や前任者のガンディー氏の奉職されているヒンディー語の教育・研究機関であり、日本人も含めて多くの外国人留学生がヒンディー語を学んでいる。劇場はないが、ホールに急ごしらえの舞台を作って上演した。狭い舞台でやりづらいたところはあったが、観客は圧倒的に若者で占められたため、これまでで最高に受けがよく、ヒーローが踊る場面では、ついに初めて会場から拍手子まで起こった。観客と出演者が一体となった劇の雰囲気は最高潮に達した。こうして、前日のアーグラ公演の不評を帳消しにした。外国人学生もかなりいて、彼らにはいい刺激となったことだろう。日本人の名と大阪外大の名を高める事ができた。日本でいえば、「国立言語研究所」や本学の「日本語日本文化教育センター」に相当するヒンディー語研究の牙城において、高い評価を得たのは誇りにできるだろう。この所長、マハーヴィール・サラン・ジェイン氏から次ぎのようなコメントを頂いた。ネイティヴのヒンディー語の専門家からの初めての公式コメントである。

「大阪外国語大学生によるヒンディー語劇は、ドラマを演じるだけでなく、創造する喜びも味わせてくれた。舞台でドラマを脚本通りに模倣的に演じるのではなく、この劇の上演からは、独創性のある芸術が感じられた。出演者はすぐれた演技力と舞台装置によって、劇のテーマを印象的なシーンにして見せた。演技の実践面と舞台芸術の技術的な発展が相乗効果を生んだ。出演者全員の演技は自然で印象的であり、音楽と照明の効果により、ドラマのテーマに沿った雰囲気と状況が醸し出された。舞台上に、演劇の芸術美が最高度に表現された。大阪外国語大学のヒンディー語専攻の教官諸氏と学生諸君に心から敬意を表したい」。

デリー（ガーリーブ・インスティテュート）での上演（観客数約一二〇）

アーグラでは、公演の成功の後、女の子がホテルの従業員にセクハラされたり、スタッフのM君が下痢で入院したり、さんざんだった。気をとりなおし、バスでデリーを目指した。途中、アーグラから約五〇キロメートル離れたマトウラーを経由した。クリシュナ神の生誕地として知られる有名な町だが、皆疲れていたためか、バスを降り寺院に参拝したのは、私とひとりの学生だけで、他の全員はバスに残った。

第一回インド公演は、首都のデリーから始めたが、今年は逆で、デリーで最高の演技をして打ち上げようと、一堂張りきって首都に乗り込んだ。一回目は、前回と会場が変わっており、ガーリーブ・インスティテュートという研究所にある六〇〇人収容のシャンデリア付きの立派な劇場である。舞

台より客席が上にあり、客席から見下ろされるという経験ははじめてであった。しかし、客は入りで、二二〇名と拍子抜け。前回あれほど熱心に下準備も広報活動もやってくれた国立演劇学校が、今年はずらが催す大きな行事（デリーでその年から始まった全インド演劇祭）に忙殺され、こちらにまで手がまわらなかつたからだろう。インドの官僚組織は徹底したトップダウン方式で、上の者が動かない限り、下の者は絶対動かない。所長が超多忙なら、責任をもって代行する者を決めればいいと思うのだが、そのような融通性はない。確かに、主要紙三紙に広告が掲載された。しかし、先着順といいながら、これこれの時間帯に演劇学校で整理券を受取つてから、ガーンリブ・インスティテュートに行けというややこしい官僚的なやり方が嫌われたようだ。この交通事情の悪いデリーで、誰が二回も異なる場所に足を運ぶだろうか。どうせ、入場料をとらないのなら、直接会場で先着順にすればいいのだ。しかも、ガーンリブ（ウルドゥーの有名な詩人。片岡弘次訳『ガーンリブ詩集』花神社発行。二〇〇六年、参照）という名前からして、あそこはイスラム教徒の居住区（実際その通りだった）だと思つて敬遠した者もいたと聞いた。インド人の微妙な宗派感情は、こんなところにもちよろつと顔を出すということだ。前回は「国立」の権威で人集めができた。今回は、その「国立」が災いしたようだ。さらに、時期的に、高校生・大学生の年度末試験の時期と重なつてしまつて、若者の観客を集められなかつたことも不運なことであつた。そういうわけで、わざわざこのホールに足を運んでくれた人は、何らかの形で私と個人的に関係のある人達が多かつた。ギリッシュ・バクシー氏（一九九二年～一九九四年）とハルジェンドラ・チョウドリー氏（一九九四年～一九九六

年)というかつての同僚が熱心に観てくださったのは、何よりの救いだった。また、インド歴史研究評議会の前所長のT・R・サリン氏の姿もあつた。日本大使館からは、多賀政幸書記官、杉森健太郎書記官と栢北斗理事官が観劇された。

デリー(キロリマル・カレッジ)での上演(観客数二五)

カレッジが試験中(正確に言うとは試験はまだ始まっていないので、試験準備期間中)と聞いて、この時期にカレッジでやることに絶望的な気分を襲われた。それにしても、二五名の観客とは寂しすぎた。キャンパスに決して学生がいなわけではなかったが、授業は余り行われてなく、試験のムードであつた。こちらも手をこまねいていたわけではなく、劇の始める前に、周辺で談笑する学生に片っ端から宣伝チラシを配って勧誘した。「日本人の学生による面白いヒンディー語のドラマがもうすぐ始まります。ぜひ観てください!」というふうには。しかし、反応は鈍かつた。そもそも首都の学生には、外国人に対する好奇心が余りない。また、何よりも残念なことに、また皮肉なことに、首都ではヒンディー語の地位が低いのだ。二五名というのは、最後の公演を飾るには、あまりにも寂しすぎたが、ただその二五名は、すべてヒンディーの先生方で、熱心に観劇していただいたのは、我々を勇気づけた。かつての同僚で前回同行されたドラムパール・ガンディー氏(一九九六年〜一九九八年)とスジャーター・クルシユレシユタ氏(一九九〇年〜一九九二年)、さらには、東京外国語大学で教鞭をとられたことのある女性の詩人、インドウ・ジェイン氏も観に来られて、

お褒めの言葉にあずかったのは、せめてもの慰みであった。

学生による評価

コルカタ公演、ムンバイ公演を含めて、これで過去において大阪外大で教鞭をとったことのあるインド人の先生すべてが観劇に来られたことになる。これは、その後、故人となられた方が四名もおられるので、恩返しができたという点でも、今回の公演旅行の成果があったと言つてよからう。

同じドラマでも、会場によつて反応は異なつた。観客の反応のよさを、ドラマを演じた学生と、スタッフとして客席にいてそれを肌で感じた学生一二名全員に百点満点で点数をつけさせた。それを平均すると次のようになる。

シャンティニケトン	五七・九点
コルカタ	八八・一点
ムンバイ	八〇・八点
プネー	八〇・三点
アーグラ（スールサダン劇場）	五二・五点
アーグラ（中央ヒンディー語研究所）	九三・一点
デリー（ガーリブ・インスティテュート）	四八・七点

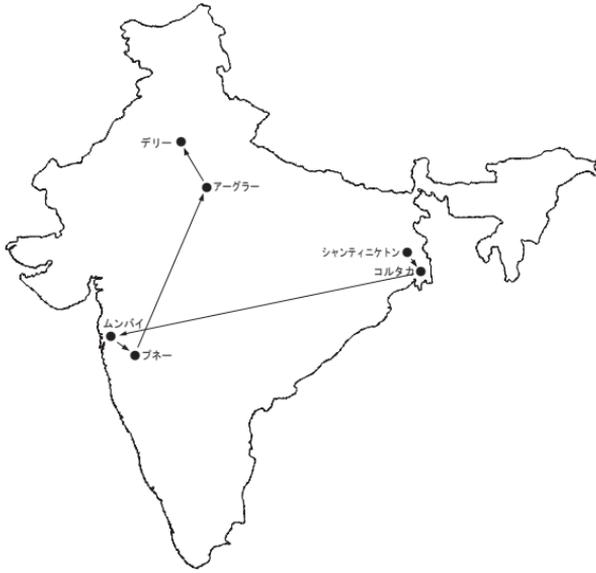
このように、平均値をとれば正確な数値となる。私の実感ともきわめて近い数値だと思う。回数を重ねるにつれ、演技は向上するのが普通だが、学生の評価は観客の反応に大きく左右されること分かる。ある学生に「何百人もの観衆の前では緊張しないか」と尋ねたことがあるが、意外と「いや、観客の少ない方が緊張します」という答えが戻ってきた。今の学生は「あがる」ということはないらしい。今の若者らしい反応だ。この気持ちはよく分かる。教師だって何の反応もない授業をやってもつまらないのだから。

とにかく、学生諸君は、前回同様、よく頑張ってくれた。昨夏以来、合宿も含めて練習に励んだ成果だ。従来は、語劇出演者が成績優秀者とは限らないのを不思議に思っていた（私は、両者は相関関係にあるべきとの信念をもっているが、この点で、学生の見解は異なる。ある学生は「語劇は大勢でやるもので、成績と関係なく楽しんでやれるので、台詞暗記の苦勞も乗り越えられるが、試験勉強は、試験のために一人黙々とやるものだから楽しめない」と言った）のだが、今回の参加者の専攻科目の成績はおしなべて良く、海外公演の効果が現れ始めたと思う。後年、はっきりと相関関係が数値的に裏付けられるようになるのである。

今回の公演旅行も大成といえる。しかし、もちろん問題点はあった。前回は寒さが原因で風邪をひく者が多かったが、今回は圧倒的に下痢が多かった。下痢ぐらひは、大抵の旅行者は一度ぐら

いは経験するので、たいしたことはなからうと思っていたが、下痢から高熱をだして寝こむ者が続出したのには、驚いた。初回より楽な日程にしたし、ホテルも概してよかった。第一、気候がよかつたにもかかわらず病人がでたのは意外であった。屈強の若者が意外に弱いとは、シュリーヴァースタヴ氏の感想だった。因みに最年長の私はピンピンしていた。私を含めてこれで五人の大人が同行したことになるが、五人のだれも一度も体調を崩すことはなかった。それは、大人は演技をしないのだから、疲労度と緊張度が違うので、単純な比較はできないが。健康にはいくら気をつけてもつけすぎることはない。

ともかく、全員無事で六都市（シャンティニケトンだけは、都市ではなく、「学園」であるが）八公演を終えて、ホッとしたのが三月一六日だった。始めが現地集合であったように、終りは現地解散とした。日本へすぐ帰国する者もいれば、そのままインド旅行やネパール旅行を続ける者もいた。私は、自由になって、デリーの友人宅にホームステイし（そこで、インドでは珍しい地震に遭った）、旧友に会ったり、書き物をしたり、地方都市に旅行に出かけたり、学会に出たりと多忙な生活を送り、四月上旬に帰国した。そして、母親の墓前に、今回の公演旅行の成功を報告した。



第五章 「世界ヒンディー語大会」に招かれるー再びイギリス巡業の旅

一九九九年の夏休み前、ロンドンの「世界ヒンディー語大会事務局」より、その年の九月一四日から五日間、ロンドンで開催される「第六回世界ヒンディー語大会」への招待状を受取った。それだけなら、これまでと同じで、普通の国際学会に出る話だけで終る。しかし、今回はこれまでと違った。「貴学のヒンディー語劇団を率いて参加されたし」というのである。世界ヒンディー語大会というのは、ヒンディー語の普及をはかるために、インド政府の肝いりで、偏りはあるが（国内政治状況に影響される）、原則としてほぼ三〜五年に一度開催される学会で、これまで、ナーグプル（一九七五年）、モーリシャス（一九七六年）、デリー（一九八三年）、再びモーリシャス（一九九三年）、トリニダード・トバゴ（一九九六年）で開催されていて、今回が第六回目の大会で、ヨーロッパでは初めてである。

筆者は過去二回（デリーと二回目のモーリシャス）の大会に出席している。今回は、ニューヨークで開かれると聞いていたのだが、急遽ロンドンに変わったらしい。その理由は分からないが、ロンドンに変更になったことが、この稀有な素人劇団招待に繋がったのだらうとみている。つまり、主催者が我々の過去のインド公演・ロンドン公演を観劇していたため、実現したことは間違いない。ヒンディー語大会は、ヒンディー語の「お祭り」でもあるから、大会が終った日の夜は、詩会やコ

ンサートといった余興番組が用意される。私の出席した二回の大会では、ドラマの上演はなかった。欠席した三回の大会については知らないが、あったとしても不思議ではない。しかし、普通ならインド人の俳優による質の高いヒンディー語劇が準備されるはずだ。それを、素人で外国人の我が劇団を招待というのは、異例である。ロンドン公演といっても、前回はほとんどの観客はインド人だった。しかし今回は、世界中から六〇〇名ものヒンディーの研究者が参加するという。これは凄い。これこそ、我がヒンディー語劇団にとって、いや大阪外国語大学ヒンディー語専攻にとって、世界の「桧舞台」である。興奮した。しかも、今回はロンドンだけでなく、スコットランドを含む地方都市でも公演予定という。航空運賃以外の滞在費はインド政府の負担という。イギリス国内旅行もセツトされているのだ。なんとありがたい招待だろう。

私は、大阪外大新聞の記者とのインタビュで、「私にとっては、オリンピック大会出場以上に名誉なこと。ドイツ人やイギリス人など世界各国のヒンディー語学者の前で、いい演技を見せたい。教職について以来、最大の喜び」と熱っぽく語っている。授業が始まっているのが気になったが、自己責任で参加するとの学生全員の同意を得て、参加することに決めた。演目は、インド公演で絶賛を浴びた「若返り」と決めた。但し、インド公演以来、わずか半年だが、学年が変わったため、参加学生の中には、就職活動等の理由で参加できない学生もいた。そこで、三人の新人が加わり（うち二人はインド公演でスタッフをつとめた学生である）、狡猾なバラモン占星術師役を私自身がやることにした。重要な役で、前回のような脇役ではない。セリフも比較にならぬほど多いので、夏

休みは、学生と一緒に懸命にリハーサルに励んだ。監督が選手を兼ねるようなものであった。意外とセリフの暗誦にはてこずった。学生の苦勞がよく分かった。三〇年以上ヒンディー語を教えた教師がヒンディーのセリフが覚えられないようでは、情けない。しかし、実際、そういう情けない気持ちになることもしばしばあった。暗記力は確実に退化している。

インドと違って、先進国イギリスの旅行は、前回の経験に照らしても、安心そのもの。鉄道がよく遅れるとの不評は耳にするが、そういうことも、おおげさに報道されているのだろう。何の不安もない、楽しい旅行になるはずだ。ところが、ハプニングは九月一日、早朝出発前の関西国際空港で起こった。学生の一人がなんと寝坊して、飛行機に乗り遅れたのだ。緊張のあまり、眠れなかったのが、明け方にトロつと寝こんでしまったらしい。そこは、下宿ひとり住まいの悲しさ。誰も起こしてくる人はいなかったのだ。爆睡する人には、目覚まし時計なんぞ全然役に立たない。代役がないので、彼が来なければ、せつかくの世界の桧舞台が台無しになる。一瞬血の気がひいた。大韓航空で、ソウルの金浦空港で乗り換えてロンドンへ向かうフライトを予約していた。格安航空券なので、乗り遅れば、その切符は無効になる。苦勞してアルバイトで稼いだ貴重な費用が、ふいになったのだ。とにかく、連絡をとらねばならない。金浦空港から電話で妻に電話し、妻から旅行代理店を通じて本人と連絡をとろうとした。土曜日だったが、幸いその旅行代理店は営業していたので、本人からの連絡を待った。本人が動かなければどうにもならない。長時間気をもんだが、やがて妻から、二日遅れて一三日の全日空機でロンドンに着くと聞いて、ホッと胸をなでおろした。

一三日早朝着なら、一三日夜の初演と一四日の開会式にギリギリ間に合う。責任感の強い彼は、どこかで借金して、あらたに航空券を買い求めたという。それは格安切符ではなかった。非常に高くついた遅刻だった。こういうことになるのなら、空港近くのホテルに泊まったほうが、はるかに安くついた。飛行機が朝出発する場合は、以後必ずそうアドバイスするようにした。

それにしても、国際化時代の「遅刻」とはこんなものかと、妙な感慨を覚えた。大阪駅での待ち合わせに遅れたというのは、訳が違う。ソウル、宝塚（私の実家がある）、大阪、ロンドンを電車で結んでの事後措置であった。

ロンドンも、現地集合だったので、別の航空会社の別ルートでヒースロー空港に到着した学生と偶然、空港で出会い、宿泊先のロンドン大学学生寮に向かった。到着すると、数日前にイギリスへ発っていた女子学生三名が、すでにチェックインをすませていた。全員個室で暖房付き（九月のロンドンはまだ暖房がある）、お湯のでるシャワーもあって、快適そのもの。朝と夜の食事は、食堂でインド料理店から弁当が届けられた。宿泊の参加数に見合う十分の弁当が届かない等の不手際はあったが、まあそれぐらいは受忍限度内のことだ。本国インドでは、いつもこの「食事」をめぐる混乱が生じる。

会場となるロンドン大学東洋・アフリカ研究学院は遠く離れていて、参加者のために、バスの手配がされた。しかし、地下鉄でも簡単に行けた。二日後に到着予定のO君を待つ間、リハーサルをやった。かつての大阪外大の同僚のハルジェンドラ・チョウドリー氏とは、デリー以来半年ぶりに

ここで再会して、感動した。氏から演技のアドバイスを受けた。

ロンドン（ネルー・センター）での上演（観客数約一四〇）

ヒースロー空港から、この学生寮に、O君が無事に来てくれるだろうかも不安だったが、O君は通行人に道を尋ねながら、とにかく無事に辿りついてくれた。責任を果たしてくれた彼に感謝。

最初のロンドン公演は、昨年も上演したネルー・センターで、開会式を待たずに前夜祭という形で行われた。ネルー・センターも会場の一部に指定され、すでにブック・フェアが行われていた。新メンバーが少々セリフをとちる場面があったが、最初にはおおむね上出来。昨年よりも盛況で、会場を見渡すと、インドでお目にかかったことのある人が結構いた。変わったところでは、駐英ウズベキスタン大使（デリー大学留



ロンドン（ネルーセンター）の観客
（前列左から3人目は駐英ウズベキスタン大使）

学の経験あり、ヒンディー語に堪能である）や、ハンブルグ大学でインド学を講じるロシア人教授がいた。

「第六回世界ヒンディー語大会」の開会式は、翌九月十四日の「ヒンディー・デー」（ヒンディー語がインドの憲法で正式に連邦公用語と認定された日）に、Wembley Conference Centreという立派なホールで厳かに開催された。大型のスクリーンには、アタル・ビハリー・バジパイ首相からのメッセージが流された。壇上には、インド政府の代表として、ヴァスンダラー・ラージエ外務副大臣がラリト・マン・シン駐英インド高等弁務官と並んでいた。彼女はBJP（インド人民党）の幹部で、現在はラージャスターン州の首席大臣である。イギリスのブレア首相からのメッセージも朗読された。こうしたセレモニーでは、必ず歌と踊りが披露される。

ロンドン（インド学術館）での上演（観客数約一五〇）

二回目のロンドン公演は、ウエスト・ケニングストン地区のカスルタウンという場所にある Bharatiya Vidya Bhavan（インド学術館）という、キリスト教会を改装して作られたというインド人のカルチャーセンターで九月一六日に行われた。主として大会関係者や昨年のロンドン公演も見たという人達が観劇に来てくれた。彼らがどこの出身で、という事が聞けなかったのが残念である。近くにはインド人の経営する商店などもある。落ち着いた住宅街の一角、といった趣だった。一五〇人程の観客に見てもらった。今回は、スタッフを一人も連れてこなかったので、ハルジエン

ドラ・チョウドリー氏にライト等の裏方をつとめていただいた。ゴークラクル大学のヴィシユヴァナート・ティワリー学長が挨拶された。ゴークラクル大学と言えば、サクセナー氏のウーシヤール夫人の母校であり、そんな関係もあってか、二年後には、ゴークラクル大学での公演に招待される事になるのである。

この大会もいろいろ混乱があったが（会場となったロンドン大学東洋・アフリカ研究学院の廊下・教室はインドからの「お上りさん」にすっかり汚されていた）、私の発表も終り、いよいよ九月一八日の閉会式を迎えた。ところが、この日の夕方に、次の公演地であるマンチェスターに行かなければならない。しかし、私は閉会式で表彰されることになっているので、欠席するわけにはいかない。あまり時間はない。そこで、学生たちに先にマンチェスターに出发してもらい、私がひとりだけで追っかけることにした。今回は、私も主役なので、私がいなければドラマを始めることは出来ない。少々緊張したが、そこは便利なイギリスだ。急行列車で、ロンドンからマンチェスターはすぐに到着して間に合った。以下の地方都市での公演の模様とイギリス公演のまとめを松本大介君のレポート（『ボランテニア教育叢書第五号』一九九九年、九〜一三頁）によって紹介しよう。

マンチェスターでの上演（観客数約二〇〇）

マンチェスターは、イングランドの北部に位置する中核都市である。一八〜一九世紀の産業革命の中心地として、この町は発展した。大阪のことを「東洋のマンチェスター」と言われたことも

あるが、イメージしていたよりは、さびれた町に感じられた。主催者の出身は、インド西部グジャラート州。勿論グジャラーティーという固有の言語をもつ。会場は Indian Association Hall とつづ、寺院とカルチャーセンターが合体したような施設。印僑の方は主として、このような宗教を介したコミュニティセンターを中心として、お互いに情報交換といった交流をしているようである。反応は素晴らしかった。インド、日本、イギリスを通じて、私の出演したドラマで、観客からのスタンディングオヴエーションまでも貰えたのは、後にも先にもここだけである。

もちろん、観客の大部分はグジャラーティーのコミュニティに属する人達ばかりだった。国父マハートマ・ガンディーと同じである。そういえば、ガンディーが、インドの独立を決めるためのロンドンの円卓会議に招かれた際、このマンチェスターを訪れて、ここの工場労働者たちから大歓迎にあっている写真は、よく歴史の本に載っているし、映画「ガンジー」にも登場する。

マンチェスターには、パキスタン系の人達もたくさんいて、そういう人達もこの近くに住んでいる。このドラマは、パンディットのセリフ以外は、難しいヒンディーの語彙は使われないし、パキスタンの人が見てもよく分かるはずなので、そういう人達にも見てほしかったのだが、会場がヒンドゥー寺院を兼ねているようでは、そんなことは、絶対に望めない。南アジア系の移民は、概して同じ地域にコミュニティを作って住む傾向にあるようだ。たまたま、主催者がグジャラーティーの人だったので、観客もグジャラーティーの人が多かった、というだけのことである。しかし、彼らは概してヒンディー語をよく解する。しかしやはりというか、言葉よりもアクションの方に笑い

のツボはあった。移民は一世、二世、三世と世代が移るにつれて、もともとの言語や習慣といった民族のアイデンティティーを薄めていってしまうものだが、現地でのホスト役をやっていたシャシ・モーハル氏の娘、カルナー（二七歳）との会話のことが印象に残っている。彼女は、六歳の時からイギリスに住んでいるのだが、一応ヒンディー語は話す事ができる。私たちを歓迎しての夕食会で、彼女はあるスポーツ選手（マンチェスターユナイテッドのベッカム選手）を指して、“Mota Sir”（モーターシル）と言っていた。「大きな頭」とはどういう意味なのだ？と、はじめ私たちは、彼女が何を言っているのか分からなかったが、英語に訳して貰ってやっと意味が分かった。英語の *big head* という語彙をそのままヒンディー語にして表現していたのである。「態度が大きい」という意味のヒンディー語がどうしても思いつかなくて、仕方なく英語の語彙をヒンディー語でそのまま言ってみたという訳である。

グラスゴーでの上演（観客数二四）

マンチェスターから鉄道で北上すること四時間、ブリテン島北端の大都市、グラスゴーはその首都エディンバラをしのぐスコットランド最大の工業都市であり、スコットランド経済の中心地である。スコットランドは、古くからイングランドと対立してきた歴史を持ち、文化的にもイングランドとは異なる伝統を持つ。イギリスのイメージとして、チェック柄のスカートをはき、バグパイプを吹く男性というのがあるが、あれはスコットランド人である。

ここで私たちはグラスゴー大学の立派なホールを借りて公演を行った訳であるが、残念ながら観客は二四人と寂しいものだった。大会の方からの連絡が遅れたのと、当日ちょうど結婚式や有名なインド人歌手のコンサートとぶつかったというのが原因だった。インド人にとっては結婚式ほど重要なイベントはない。何よりも、結婚式を優先する。そんな時に、自分たちの生活と何の関係もない、日本人のヒンディー語劇などを観に来る人は、よほどの好事家だろう。

ここでは、マンチェスターと異なり、パンジャービーの方がホスト。他にもパキスタン人や南インド出身の方々がコミュニティを持っているという。パキスタン人とインド人コミュニティとの交流は余りないらしい。反応は、少ない人数の割にはよかった。ここでインド料理屋へ入ったが、ボーイがパンジャービー、コックがパキスタン人という。ボーイはシク教徒だが、ターバンを捨て、髭を短く切ってしまった、「Kaccha”(不真面目な)なシク教徒だった。イギリスに住むシク教徒の中には、彼らのようにターバンを捨ててしまうような人も少なくない。

インドに住み、伝統を頑固に守る高カーストの人々に比べ、外国に住む印僑は肉食など、民族のアイデンティティーをやはりやや薄める傾向にある。その子供となると、母語を解さず、英語のみを話す、という子供もいる。

ストックトン・オン・ティーズでの上演 (観客数二八)

Stockton-on-Tees とは「ティーズ川沿いのストックトン」という意味。ロンドンの鉄道駅員も知

らなかつたといういわくつきの小都市である。インデラ
ンドの北東海岸に位置し、最近サムソンの工場ができて、
人口が増えている「田舎」である。ここにもインド人は
いた。この町へ向かうローカル線の汽車にゆられていて、
全公演旅行を通じてただ一度だけ、ふと不思議な気持ち
にとらわれた。「一体自分はなんでこんなところにいるん
だろう？」周囲はただひたすらムーアの茂る荒野が広が
るのみだ。一方には北海がよこたわり、一方では傾きか
けた夕日が眩しく照り付けている。忙しく動き回る旅の
中で、日本を遠く離れ、地球の裏側の、こんなさびれた
ローカル線に揺られて、私たち日本人は、インド人にヒ
ンディー語の芝居を見てもらいに行くのである。

立派なホールにもかかわらず、残念ながら公演に来た
観客は二八名だった。しかし重要なのは量ではない。私
たちは量を目指してはいない。観客の一人一人には忘れ
られない思い出が植え付けられる。Stockton-on-Teesで
は、二班に分かれて、あるインド人家族の家に泊めてい



「若返り」の舞台

ただいた。彼らは私たちの芝居を観てとても喜び、興奮し、感動してくれた。彼らの七歳と五歳の子供も。この「感動」こそが、明日への異文化理解への「種子」なのである。私たちは、知らず知らずのうちに、この「種」をインドに、イギリスに播いてきている。

私の泊った家族、スレーシュ・ビーナー・プージャー・テージャスについて、もう少し筆を進めたい。夫スレーシュは、グジャラート出身。ヒンディー語は上手く話せない。ビーナーは、女学校でヒンディー語を学んだグジャラーティー。ヒンディー語は上手だ。彼らの子供プージャー(女の子)とテージャス(男の子)は、ヒンディー語を話す事ができない。彼らは、伝統的なインド合同家族から離れた「核家族」で暮らしている。興味深かったのは、ビーナーの子供に対する教育だ。彼女は子供らに「インド人」として生きて欲しいと思っている。インドの文化、言語を教え、自分が「インド人である」というアイデンティティーを持つて欲しいと願っている。自分が「何者」なのか知らずしては、多民族の共存するイギリスでは、自分が誰なのかを容易に見失ってしまう。アイデンティティーとは足かせである。しかし、それなくして世界市民たりえない。私たち日本人はどうだろうか？

バーミンガムでの上演(観客数約二〇〇)

イングランド中央部にある、イギリス第二の大都市、それがバーミンガムだ。ここでの公演は素晴らしいものだった。観客は二〇〇人を超え、施設も整っていた。東京のインド大使館に勤務の経

験のあるハルデー・プリー公使が主賓だった。役者の腕前も公演を重ねるに連れ、飛躍的に向上してきている。観客と役者が一体になって大笑いするという、ヒンディー語劇海外公演の粋がここにある。私たちと彼らは非日常の時間を共有し、そしてまたそれぞれの生活へと帰って行く。だがその前とその後では、何かが明らかに変化しているのだ。ここでの主催者の出身は、ムンバイ、コルカタ、パンジャブとさまざまだった。大都市部では、職業を通じて地縁を超えてのインド人同士の交流ができていくようである。尚、このバーミンガムでの公演は、BBCのテレビ取材を受け、チャンネル二で全国向けに放映された。後に日本に送られてきたその番組のビデオを見る機会があったが、私たちの話すヒンディー語に英語の字幕がついているのが何とも言えずおかしかった。

まとめ

イギリスには実は多くのインド人が暮らしている。その数は、不法滞在者も入れると二五〇万人とも言われ、町中を歩けば非常に数多くのインドレストランや、町中を歩くパンジャーブイドレス姿の女性を簡単に見つける事ができる。そして、どんな小さな町にも必ずインド人コミュニティがあり、驚かされた。このインド人が多い、という事が私たちがイギリスでヒンディー語劇を行った主な理由である。

さて、以上公演旅行を見てきたわけであるが、私たちが見聞きした範囲に限れば、イギリスに住むインド人コミュニティの多くは非ヒンディー語地域出身のものが多く、かつ「外国人」である

彼らは、私たちのヒンデイドラマの「仕草」の方を楽しむタイプの方に属していた。

劇中、パンデイトというバラモン僧侶のキャラクターと、スニールとウーシャーというカップルのキャラクターが出てくる。この三人のキャラクターの誰が観客にうけるかを見る事で、観客がどのようなタイプに属するかを見分ける事ができた。パンデイトとは、「インド」のアイデンティティーそのもののようなキャラクターである。ヒンディー語の難しい語彙を多用し、そのもったいぶつた言い回しや、傲慢な態度がネイティブスピーカーの笑いを誘う。一方、スニールとウーシャーは誰にでも分かりやすい、より普遍的なラブコメディで観客を楽しませる。彼らのうち、パンデイトはヒンディー語大会関係者の多かったロンドンでは受けたものの、その他の地域の印僑にはそれ程楽しいキャラクターではなかったようである。むしろ、分かりやすいスニールとウーシャーのロールの方が楽しめたようであった。

“Kayakalp” (若返り) は、今回のイギリス公演で通算一七回公演を繰り返してきた事になる。同じ芝居を一七回、しかもネイティブのインド人の前で、彼らの反応から教えられ、私たちはこの芝居を絶えず進化させてきた。バーミンガムでは、一九七四年にインドで“Kayakalp”の主役ラーラーを演じた事がある、というインドの方が私たちの芝居を観に来られたが、自分達の演出とはかなり違うね、と仰っていた。無論、インドの方々からしてみれば、私たちの芝居は「日本的な」演出が施されたものに映る。ロンドン滞在中、チョウドリー先生に少し演技指導をしていただいたのだが、その時チョウドリー氏に同じセリフに振りをつけて演技して貰った時の驚きが、今も忘れられ

ない。そこには「リアル」なインド人がいたのだ。

リアル、というのは妙な言い方だが、私たち日本人には決してマネのできない、インド人だからできる「インド人」というのがある。どうだろうか……しかし、それでも私たちは「日本人」なりのインド人を演じる他はないだろう。自分の中の「インド人」をそうやって成長させて行ければ、それでいいのではないか？日本人はインド人にはなれない。しかし、演技を通じて近づいて行けば、お互いが共有するもの、共有しないものが見えてくる。私たちが芝居の中で、何が一体インド人に受けるのだろうか？と考えてきたものとは、「その共有するもの」を探る試みだったと言っている。ある部分で私たちが面白い、と思ったものは、やはりインド人も面白い、と思っていたし、一方でなんでこのセリフがうけるんだろう？と分からなかった部分も多かった。その意味で、この「Kayakalp」という芝居は、外大の中にこもっていは決して作る事のできない、私たちとインド人観客との共同作業としての作品でもあったのだ。

（松本大介）

ヒンディー語劇、世界の舞台で―大阪外国語大生たち

一九九九年一〇月二九日の朝日新聞夕刊「文化」欄に、右のような見出しの私の記事が掲載されたので、参考までに、朝日新聞社の許可を得て、ここに掲載する。

大阪外国語大学ヒンディー語劇団は、去る九月一四日～一八日、ロンドン大学東洋・アフリカ学院で開催された「第六回世界ヒンディー語大会」から招待を受け、ヒンディー語劇「若返り」を上演した。ロンドン以外にも、バーミンガム、グラスゴー、ストックトン・オン・ティーズ、マンチェスターの諸都市でも公演し、絶賛を浴びて帰国した。バーミンガム公演の様子は一月、BBC 2チャンネルのテレビ番組で全英に向けて放送される予定である。ロンドンの観客は、主として大会参加者だったが、他の都市では、熱心なインド系移民が観劇に駆け付けてくれた。

ヒンディー語はインド共和国の公用語で、中国語・英語に次ぐ世界三位の使用人口（約四億人）を有する重要な言語だが、その割にはわが国では認知度が低く、学習人口も多くはない。世界ヒンディー語大会は、ヒンディー語の普及を目的に、インド政府の後援で開かれる国際学会で、ヨーロッパで開催されるのは初めてである。「次世代のヒンディー語」という統一テーマのもと、世界各国から約七〇〇人の研究者が参加して議論した。

いわば世界のひのき舞台で、我々外国人の素人芝居が上演されるのは全く初めての事である。このような機会を与えられたのは、身に余る光栄であった。その背景には、三回の海外公演を含む、二五回に及ぶステージ上演という実績があった。劇団は学園祭での上演を続けていた。しかしせっかく一生懸命演じてでも観客が少なく、自己満足に終わりがちだった。そこで四年前、大学を離れ、阪神間に多く住むインド人を対象に神戸で上演してみた。これが意外にうけたのだ。それ以来、神戸のインドクラブでの上演は、秋の恒例行事となった。そして二年前、インド人観客の中から、イ

インド本国で上演してはどうかという声があがったのだ。

そんな大それたことと、当初はにわかには信じられなかつたものの、熱心な誘いにチャレンジ精神がかき立てられ、ついにはインドの国立演劇学校から正式の招待を受けるという予期せぬ事態に進展した。丁度独立五〇周年を祝うインドの歓迎ムードが実現への追い風となったのは幸運だった。

こうして、大阪外大生によるヒンディー語劇初の海外公演は、一九九七年一月～一九九八年一月にかけて、首都のデリーを皮切りに、インドの四都市で六回上演という形で実現した。軽い喜劇とシリアスなホームドラマの二本立てで臨んだが、どちらかというと言喜劇の方がうけた。八〇〇人もの大観衆で埋まる大ホールが爆笑の渦に巻き込まれたときほど、感激の瞬間はなかつた。圧巻は、ムンバイの大劇場での公演で、この二本のドラマがノーカットでインドのテレビで全国向けに放映されたこと。しかも、その後もしばしば繰り返し放映されているという。さらに、「タイムズ・オブ・インディア」という一流全国紙の一面トップに大きく学生の舞台写真が掲載された。この感動が忘れられず、学生たちは今年の一、二月にも二回目のインド公演を実現させた。昨年夏は、ロンドンでの初公演もした。

語劇の海外公演には、色々な利点がある。まず、大学における実践的語学教育のモデルケースと位置付けることができる。生きた語学を身につけ、自己表現を訓練するには、ドラマは最適の教材となる。海外公演はいわば、その「フィールドワーク」なのだ。勿論、困難な点も多い。発音は、インド人観客が理解できる程度に明瞭でなければならぬし、インド人に特有の表現や仕草もでき

るだけ真似る必要がある。それ自体、インド文化を学ぶ上で、大きな意義がある。

しかし、インド人観客は我々に、必ずしもインド人と全く同じ演技を期待している訳ではない。日本的解釈による独自の表現があってもよい。私は同僚のインド人教師とともに発音指導はするが、細かい演技指導はしない。若い学生の感性に任せて自由に表現させている。それが思いの外、インド人観客にうけているのだ。

そして、外国語ではあっても、日本人が演じる以上、広い意味での日本文化の紹介であり、そこに立派な文化交流が成立する。学生たちは、日本語を学ぶインド人学生の日本語劇との交流会をいつの日にか、日・印両国のステージでできる事を夢見て、今日も劇の練習に励んでいる。これこそ、新しい形の国際交流となろう。



第六章 インド人キャストとの初の共演・初のネパール公演

ネパール語ドラマにも挑戦

ロンドンの「第六回世界ヒンディー語大会」では、多くのヒンディー語学者や教育者と出会って意見を交換したのは有意義であった。我々のヒンディー語劇を観た人達から、ぜひ当地でやってほしいという招待をいくつも受けた。その内、ネパールの唯一の（国立）大学であるトリブヴァン大学ヒンディー語学科のスールヤナート・ゴープ主任教授からカトマンドウ公演の招待を受けたのが、我々の興味を引いた。

ネパールはインドと中国という大国に挟まれた山岳地帯の小国である。何かと大国インドからの脅威を感じており、対インド感情はあまりよくないと聞いていた。しかし、ネパール語とヒンディー語は近い親戚関係にあるので、ネパールではヒンディー語が通じるはずだ。しかし、「インド嫌い」の人はまた、「ヒンディー語嫌い」ではないか、そんな心配もあったが、とにかくネパールを訪れてみたいとの思いは、我々全員にあった。イギリス公演でも好評だった「若返り」をそのまま持っていけるーメンバーを変えることなく。ついでに、ネパール公演と同時に、北インドのまだ訪れていない都市でもやろうということになった。選んだ都市は、ビハール州の州都パトナー、ウッタラプラデーシュ州の州都ラクナウとサンガム（ガンジス河とジャムナー河の合流点）で有名なアラ-

ハーバード、それに、公演経験のあるヴァーラーナシーの四都市である。カトマンドゥを除けば、すべてヒンディー語地域の重要な中核都市である。「究極のヒンディー語地域での公演」などと勝手に命名して、翌年の二〇〇〇年の二月―三月に公演することを、イギリスから帰るとすぐ決めた。

その秋の神戸公演では、ラームクマール・ヴァルマー原作の「蛇」というドラマを上演したが、これはインド公演ではやらなかった。いろんな事情でインドで上演せずに、国内だけで上演したドラマというのは、この「蛇」以外に、二〇〇三年に上演した、マンモーハン・グプタ原作の「抵抗は止まず」というドラマだけであった。「蛇」の主演はインド公演の経験者で占められたが、脇役に新人が多く出演した。この「蛇」でデビューした新人が、翌年から主要なキャストとして、インド公演で活躍することになるのである。

ネパールでやるからには、短いものでもいいからネパール語のドラマを演じて、ネパール人に喜んでもらいたいと考えて、ネパール語でも劇を演じることにした。といっても、誰もネパール語はできない。今から勉強する暇もない。そこで、一九九八年の第一回ロンドン公演で演じた「僕たち、もう自由だ！」をネパール語でやればどうかと考えて、大阪府立大学のアディカーリー氏に翻訳を依頼した。これなら、一五分程度でキャストも五人ですむので、なんとかできるのではないかと考えた。文法をやっている余裕はないので、とにかく丸暗記をすることにした。幸い、大阪外大の大学院でネパール史を専攻するNさんがネパール語ができるので、発音の指導をこのNさんをお願いした。集中的に練習し始めたのは、学年末試験の終わった二月中旬で、出発までそう多くの時間はな

かった。

代役にインド人の原作者を

さらに、困ったことが起った。主役のM君が出発直前に病気になる、参加できなくなったのだ。中止もやむを得ないと判断した。これから日本人の代役をみつけることはできない。しかし、我々の為に会場の準備をし、宣伝もしてくれている人たちに、「中止」と言ってしまうだけでは、余りにも申し訳ない。お詫びするにも、現地に主催者を訪れ、直接お詫びしよう、できれば、M君の登場しないドラマの一シーンだけでも上演してお見せしよう、と全員で合意した。それが、主催者への誠意ある態度だと信じる。しかし、できれば公演を中止することなく、代役を見つけて上演したいものだ。インド人の代役である。まず、国立演劇学校の知り合いの学生、ラーケーシユ・チャトゥルヴェーデー君に、国際電話をかけて依頼した。彼なら慣れてるので、長いセリフも短時間で覚えてくれるだろう。引き受けてくれれば問題なかった。しかし、彼自身の舞台があるので、残念ながら引き受けられないとの返事。思い余って、原作者のラージェンドラ・シャルマー氏に電話した。シャルマー氏は劇作家の他、メディア作家、ジャーナリストでもある。デリーの彼の演劇サークルの誰かを推薦してもらおうつもりで。もちろん、デリーからカトマンドゥを経て、先ほど述べたルートでデリーへ戻るまでの交通費、ホテル代、食事代は負担するつもりだ。

ところが意外なことに、シャルマー氏から得た返事の言葉は、「それでは、私がやりましょう」

というものであった。原作者自身が代役をつとめるといふのだ。セリフは自分の書いた作品だから、暗記しているだろう。また、彼はすでに七八歳。老人役はそのまま演じられる。しかし、若返った後の青年役はできない。青年役に友達の弁護士を連れてくるという。二倍の「人件費」を払わされることになるが、そんなことを言っではいられない。ラッタンパールという弁護士で、演劇仲間だという。デリーで会ってみて驚いたのだが、すでに五五歳。どう見ても若くない。しかし、七八歳のシャルマー氏に較べると、確かに「若い」。後は演技力でカバーしてくれるのだろうと信じてお願いした。問題はわが学生の方だ。急に相手役が変わり、しかも相手役がインド人ではやりづらからう。皆不安感に怯えた。無理もない。しかし、もう後戻りできない。できるだけ、リハーサルを積みながらやるより他ない。

というわけで、悲壮な覚悟をして、デリー空港に着いたのが、二〇〇〇年の二月二六日のことだった。グレイターカイラーシユにあるサチュデヴ夫人の邸宅にホームステイして、この二人のインド人キャストにそこに来てもらって、少しリハーサルを行った。しかし、あくる日はもうカトマンドゥに飛ばねばならない。本格的なりハーサルは、ネパールに着いてからすることにした。なお、インド留学のため「現地参加」する学生も含めた団員の一部はカトマンドゥに先着していた。ここで感激したのは、脇役で新人の〇君が、インド人代役も見つからないという最悪の事態を想定して、自分が演じるつもりで、この主役の長いセリフを全部覚えてくれていたことだ。結局、その必要はなくなったが、このような学生の存在は、どれほど教師を勇気づけてくれることか。こういう立派

な学生に恵まれた教師は本当に幸せである。その番が廻ってこなかったからといって、覚えたセリフが無駄になることはない。実際、彼はその後、数々のドラマで重要な主役をつとめることになるのである。

以下は、松本大介君のレポート（『ボランテニア教育叢書第五号』一九九九年、一四〇―一九頁）を一部加筆して転載する。

カトマンドウでの上演（観客数約二〇〇）

ヒマラヤ山脈をはるかに望むネパール王国の首都、それがカトマンドウだ。街を歩き廻る人々の顔立ちはモンゴロイド系が多く、日本人とよく似ている。インドを旅していると、しばしば「お前はネパール人か？」とたずねられるが、そう聞きたくなくなる気持ちも分からないでもない。それくらいネパール人と日本人は顔立ちがよく似ているのだ。またここは、南アジアを放浪するバックパッカーたちが、一度は訪れたいと願う、穏やかで住みやすい土地である。

ここでは、二月二九日に、この国唯一の大学であるトリブヴァン大学の演劇ホールで公演を行った。今回の旅の大きな企画の一つでもあったネパール語劇とヒンディー語劇「若返り」の二本立てでの公演となった。「僕たち、もう自由だ！」の方は、ゴープ教授の高校生の息子さんに、長男役をお願いしてやった。さすがにネパール語の訓練を本格的には受けていないので、なかなか見事な演技をする、というレベルにまでは持っていけなかったが、観客の反応は良好だった。

パトナーでの上演（観客数約二〇〇）

さて、私たちの旅は空路、国境を越え、インドに突入する。インド東部、ビハール州の州都であるパトナーは、昔のパータリプトラ（マウルヤ王朝の首都として繁栄した）であり、広大なガンジス河のほとりに開けた大都会で、人口一〇万を数える。しかし、いきなり空港の入国管理係りの職員に公然とワイロを要求され、空港の印象は悪かった。過去の栄光とは裏腹に、今のビハール州は、貧困や汚職・犯罪率の高さ・識字率の低さ等で、インドのワースト州とされるのだ。

ここで、私たち大阪外大ヒンディー語専攻の先生方と交流のある詩人のジータンドラ・ラートル氏の招きで、三月二日に芝居をすることになった。会場は市内にあるラビーンドラ・バワンという劇場である。日本文化特集といった形で、宮沢賢治の記念祭と合わせて上演され、約二〇〇名の観客に来ていただけだ。ラートル氏は、宮沢賢治の詩をヒンディー語に訳した人とか。パトナーでは、この前の選挙がらみでテロが多発し、治安が悪化しているという。警官隊がラーティー（インド式警棒）を持って玄関口をものしく警備する中での上演となった。警官に守られての上演というのは、はじめての経験であった。

カトマンドウでの反省をふまえ、何回かリハーサルを繰り返した成果が出て、トラブルもなく、一応芝居の体裁を整えてきた。観客のリアクションも好意的であった。ここで驚かされたのは、二人のインド人キャストの演技である。特に、シャルマー氏の演技が素晴らしい。流石はプロ。彼が繰り出すアドリブに観客は爆笑の渦に巻き込まれて、もうこれは脱帽だった。彼ら二人の演技を観

ていると、私たち日本人同士がやっているパート等、まるで念仏でも唱えているかのように思える。いやいや、やはりネイティブスピーカーは、一筋縄ではいかない。セリフの微妙な間合いや言い回しが少しでもナチュラルでないと、笑ってはくれない。まだまだ勉強することは多いなど、感じられた。

ここではひよんなことから、旅行中の明治大学の学生さんが、私たちの公演のスタッフとして、働いてくれた。たまたまカトマンドウからの同じ飛行機に乗り合わせ、インドの主催者側に私たちのグループの一員だと勘違いされ、結局パトナーでの公演のお手伝いをしてもらうことになったのである。偶然とはいえ、インド公演には、このような予期せぬハプニングが付き物である。

ヴァーラナシーでの上演（観客数約二〇〇）

言わずと知れたヒンドゥー教の聖地である。ガンジス河沿いに浮かぶガートで人々は沐浴し、また死者は川沿いで火葬にされ、母なる河に流されて行く。さすがに二人のインド人キャストはここでは、敬虔なヒンドゥー教徒になり、嬉しそうに、「沐浴しに行った」と言っていた。芝居の前日にはちようどシヴァラートリの祭（シヴァ神とその妻パールヴァティーの結婚記念の祭）があり、私たちはそれを見ることが出来た。

インドの祭と言うのは、それは賑やかである。賑やかというよりは殆どバカ騒ぎと言ってよい。日頃のウップンを晴らすかのようにインド人は騒ぎまくる。ホテルの前の通りはすごい人だから

で、その中をパレードの列がゆつくりと続いて行くのだが、その列がすごい。まずは、象の露払いから始まり、ケバケバしいネオンサインをいくつもつけたシヴァ神の祭壇を載せた山車や、ガンジス河の水を見物人に向かつてかけながら通りすぎる山車、巨大なスピーカーをいくつもつけて大音響で流行歌を流しまくる山車と、とにかく騒々しい。大麻を飲んでラリった男達が歌い（この日は、バングなどの酪酊薬を飲んでもお咎めなしなのだ）、そのうちケンカが始まるわ、裸になるわと、もう大混乱である。ほとんど暴動に近い状況で、シヴァ神の結婚記念日は祝われる。

芝居の話へ移ろう。私たちにあって、ヴァーラーナシーでの公演は今回で二回目である。前回（一九九七年）と同じく、ヴァーラーナシー・ヒンドゥー大学を定年退官され、今はバーシャー・バラティーという、外国人を含む非ヒンディー話者向けのヒンディー語教育機関を運営しておられるヴィシユヴァナート・ミシユラ先生にお世話になり、三月五日に公演をすることとなった。会場は前回同様、市内にある「Nagari Natak Mandali」（市民劇団）という一〇〇〇人収容の大劇場である。二〇〇人ほどの観客に観ていただいた。反応は良好。実は、ここでの前回の公演はさんざんだった。段取りの悪さから途中で観客が、芝居が終ったものと勘違いして帰ってしまうし、寒さのため、メンバリーの何人かが急病に罹るなど、踏んだり蹴ったりだった。従って、第一回目から参加している筆者にとっては、今回はどんなことがあっても、前回の轍を踏みたくはなかった。今回こそは必ず観客を笑いの渦に引き込んでやる、という決意の下、ヴァーラーナシーへ乗りこんだのである。カースト制の弊害だろうか、現地では徹底的な分業制である（特に、このヴァーラーナシーでの分業制

は徹底している)。たとえば、幕係りなら幕係りの仕事しかしないのだ。つまり、自分のノルマを達成すれば、あとはもう何も考えない。このような縦割りのシステムが芝居の流れをちぐはぐにしたというのが、前回の失敗の原因でもあった。そこで、その反省を踏まえ、今回は現地で劇場の職員に頼らず、自分たちで率先して芝居の段取りを全て行った。その効果もあり、芝居は滞りなく出来、今回はうまく行った。思えば、この二年間の間に、私たちは二〇回以上の公演をこなしており、芝居の段取り、インド人との交渉能力などノウハウを蓄積しており、まだ海外公演に不慣れだった前回に較べて格段の進歩を遂げているのだろう。ここでもやはり、インド人キャストの巧さが目立った。このメンバーでの公演も三回目となり、お互いの連携がうまく機能し始めた。

この公演には、日本大使館の長嶺安政公使が主賓として出席され、私たちの芝居を楽しんでいたばかりか、夕食会にも出席頂き、全員に激励の言葉を賜った。氏は、今後の日印関係の良好な発展のために、両国の若者の文化交流が必要なことを説かれたが、私たちのこのささやかな活動が日印の文化交流に貢献していることを認めてもらったのは嬉しかった。

もうひとつ、エピソードを。三月四日は、メンバーの〇君の誕生日だったのだが、この時、思いもかけず、O・N・ラッタンパール氏が彼の為にバスデーケーキを買って来てくれ、ささやかながら誕生会を催してくれた。最初はハラハラだったが、私たちの劇団もグループとしてまとまりが出てきたな、と感じさせる出来事だった。

アラールハーバードでの上演（観客数約二〇〇）

ヴァラーナシーの西一三〇キロメートル、ガンジス河とジャムナー河の合流点（サンガムという）にほど近い処に、人口一〇〇万人近いアラールハーバードがある。インド初代首相、ジャワールハルラール・ネルーの故郷であり（市内にはネルーの生家がネルー博物館として保存されている）、ボリウツドのスーパースター、アミターブ・バッチャンの故郷でもある。因みに私たちが一九九九年の神戸公演で上演した劇「蛇」の舞台はまさにここ、アラールハーバードであった。祭で迷子になった娘を巡る出来事を扱ったこの芝居は、一二年に一度両河の合流点（サンガムと呼ばれ、ヒンドゥー教徒の重要な聖地の一つである）で行われる「クンプ・メーラー」の大祭を舞台としている。

ここでの劇場は、アラールハーバードの新市街にある「Uttar Ksher Madhya Sanskritic Kendra」（北部地区中部文化センター）というホールである。三月七日に



初の日印合同舞台
（真ん中は原作者のラージェンドラ・シャルマーさん）

公演したが、ここでの観客の反応はすばらしいものであった。観客数は二〇〇人程度。すでに、溝上教授の前口上の時から観客は爆笑しており、照明、音響のタイミングもぴったりはまり、キャスト同士の連携もぴったりはまって、観に来られた方には大変楽しんで頂いた。観客の中には、地元牧野一穂氏、アラールハーバード大学ヒンディー語学科元主任教授ジャグデーシユ・グプタ氏、後に大阪外国語大学の外国人招聘教員として赴任することになるヤースミン・スルターナー・ナクヴィー氏等がいた。

筆者は老人役で出演していて、シャルマー氏と競演するシーンがあるのだが、二人で観客を爆笑の渦に巻き込んだ後、「やったな」「やりましたね」という感じでニヤリとアイコンタクトを交わした。あつた時の痛快感といつたらなかった。「これぞ、ヒンディー語劇の真髄」といった感じのする舞台となった。ここの芝居では、東京外大からアラールハーバード大学へ留学している児玉行親さんにビデオ撮影を手伝って頂いた。ありがたい限りである。少なくともここでは、「ネイティブスピーカーに私たちの演技が通用するか？」という心配は杞憂に終わった。日本人キャストの中でも特に女の子役のUさんの演技とヒンディー語の発音がすばらしいとの絶賛の声が、インド人キャスト・観客双方から起こったことを付け加えておく。彼女は本当にインド人の女の子が「そこにいる」かのような演技をして、各都市の観客の心を魅了したのだ。

ラクナウでの上演（観客数約一〇〇〇）

いよいよ私たちの旅も、最終目的地へとやってきた。UP州の中部にある、人口一六〇万人のこの町はその州都である。駅舎は美しく、町も比較的落ち着いた雰囲気を見せる。三月九日、ここで私たちは旅の最後を飾るのにふさわしい大歓迎を受けた。芝居の前、印日の文化交流のセミナーがある、というので、とある学校へ招かれたのだが、出迎えのクルマを降りた私たちを待っていたのは、日章旗とインド国旗の小旗を手にしたその生徒たちによる大歓迎セレモニーだった。まずは、校門から校舎まではブラスバンドの出迎え、続いて入った講堂の中には五〇〇人くらいの生徒が入り、その歓迎ぶりに、私たちはちよつとした有名人気分だった。これだけの人達が私たちの歓迎をしてくれているのだと思うと、感動ものだった。

ここでの劇場は、その学校のすぐ隣にある「ラビーンドラ館」という立派なホールだった。主賓は、詩人でもあり、UP州議会の議長であるケーサリナート・トゥリパーティー氏であった。主催者によると、観客は二階席も埋まっていたので、一五〇〇名を超えていたそうだ。これは、過去の観客動員数の新記録である！舞台上の私たちにはそれを数える余裕もない。反応も最高に良く、有終の美を飾る素晴らしい舞台となった。

まとめ

以上駆け足で今回のインド・ネパール公演旅行を辿ってきた。さて、このようなレポートを読まれるとあたかも私たちが単独でこのような旅行を行ってきたかのような錯覚を読者の方にもたれる

かもしれないが、実は私たちの公演旅行の背後には数多くの協力者の方々がおられる事を忘れてはならない。逆にいえば、私たちのこの旅行は、この企画に賛同、共感し、尽力をくださった現地の主催者の方々（三回のインド公演と二回行ったイギリス公演の全ての町で、このような方々の協力、あるいはお招きがあった）、また、芝居を見に来てくれた多くの観客の人たち、そして日本で協力して頂いた沢山の人達の協力なくしては決して実現しなかっただろう。私たちのこのプログラムの背後には、何千人という人達のお力沿いがあるのである。シャルマー氏は既に七八歳を超えるご高齢であるにもかかわらず、闊達でユーモアの絶えない方である。また、ラッタンパール氏は弁護士という仕事柄ご多忙な中、私たちの公演旅行にご協力を頂いた。お二人にはこの場を借りて最大の謝意を表したい。今回初の日印キャストの合同公演となったのだが、惜しむらくは、それが当初からの予定であれば、私たちはもつと芝居を面白く出来たはずであるということである。

今回に限って言えば、何よりも先ず、このお二人に感謝せねばならない。主用メンバーの一人が急病に罹り、「中止もやむなしか。」とどうやりよりの時に、“Show must go on!”と代役を引き受けて頂けたからこそ、今回の私たちの芝居は成功できたのだ。そのような色々な人達（今まで劇に出演した三〇人を超える学生たち自身も含め）誰の力が欠けたとしても、私たちのこのプログラムは発展してこなかったし、ここまで継続してはこなかっただろう。私にとって、その一人一人がかけがえのない大切な人である。

（松本大介）

その後、シャルマー氏は、ニューデリーの日本文化情報センターの発行する英文情報誌「Japan Calling (Oct. 2005 - Jan. 2006)」に、この合同公演に関する記事を寄稿し、その最後に「私は二〇年以上にわたって私のドラマを上演してきたが、溝上教授とその劇団の学生達と過ごした二週間ほど、私の人生で思い出深い、楽しい時期はなかった」と述べておられる。

松本君はさらに、レポートの「おわりに」のところにこう書いている。「考えてみると筆者は今回のインド・ネパール公演を含め、通算四回の海外公演に参加し続けたことになる（一六都市二五ステージ。日本での学外公演を含めると、合計一八都市三二ステージにもなる）。かように、筆者の学生生活の後半はまさに、「語劇漬け」であった。それはすばらしく楽しい経験の連続だった。それらの一つ一つは、恐らく、筆者にとって一生忘れられない思い出となるだろう。願わくは、後が続く後輩諸君がこの道を辿り、伝統として受け継いでいって欲しいものである」。

その言葉通り、伝統として受け継ぐ学生がその後どんどん現れ、彼の「一八都市三二ステージ」という記録も、破られることになるのである。

（溝上富夫）



第七章 バジパイ・インド首相の前で上演

インドの現職首相の前で、我がヒンディー語劇を上演することになるとは、夢にも思わなかった。しかも、この大阪において。いろいろな偶然と幸運が重なって実現したのだ。

まず、当時のバジパイ首相（ヒンディー語では、ヴァージペイーという発音が正しいが、日本のメディアではバジパイと書かれるので、それに従う）の来日は、二〇〇一年二月一〇日が予定されていた。二月一日には、大阪のリーガロイヤルホテルで同首相歓迎レセプションまで準備されていた。ところが、一月下旬、突如としてグジャラート州のブジュ周辺を襲った未曾有の大地震のため、この訪日は中止いや延期されたのだ。

バジパイ首相の訪日は、前年の森喜朗総理インド訪問の答礼という意味があった。森総理は、インドの核実験のため凍結していた経済援助を復活させ、日印のグローバル・パートナーシップをうたいあげ、険悪だった日印関係を修復させた。そのため、日本国内では不評だったが、インドでの森元総理の評価は高く、二〇〇五年にインド政府から、外国人でただ一人「パドマ・ブリーシャン」（蓮華宝章）という、インドで二番目の文民向け勲章が贈られている。なお、森元総理は、日印協会の会長でもある。

ところで、森総理は首都のデリーの他、南インドでハイテクの町として急成長しつつあるベンガ

ルールも訪問している。バジパイ首相の来日が、東京だけでなく、大阪訪問も組みこまれたのは、そのこととも関わりがあると思われる。阪神間には、もともとインド人コミュニティがあり、インド総領事館や在日印度商業会議所もある。インドの二つの銀行支店もあるし、インド航空が週三便、関西国際空港に寄港している。過去にも、関西を訪れたインドの首相は多い。延期されたバジパイ首相の来日がいつになるか関心があったが、結局、一二月六日にまず大阪、それから東京と決まった。

話は、その約一月前の一月九日にさかのぼる。この日、アフターブ・セート駐日インド大使の二度目の大阪外大訪問があった。前回は、単なる表敬訪問で、学長・副学長を交えての大使歓迎の夕食会がもたれた。今回は、学生に講演する目的の来学で、午前中に、日印関係に関する講演を終えた後、大阪外国語大学の南アジア地域文化専攻の教官一同と昼食を共にされた。午後から、大使にくつろいでもらおうと、ヒンディー語劇団の有志が大使にヒンディー語劇を披露することになった。文化祭で通常、語劇が演じられる大講堂ではなく、大使と総領事の二人だけにみてもらうため、同窓会館の小さなホールに椅子を並べて、その前で演じた。出し物は、日本のドラマで原千代海原作の「鏡草子」をヒンディー語に訳したものだ。実は、今年度もインド公演を目指して適当なドラマはないものか考えていたのだが、この頃から急に男子学生が減り始め、男性の登場人物が圧倒的に多いヒンディー語のドラマで、女性が多く登場するドラマはそう多くないので、選択に困っていた。そこで、気がついたのが日本のドラマ。日本のドラマなら、男子が少ないドラマはいっぱいある。「鏡

草子」は、鏡をはじめてみた村人が、鏡に映る顔が自分の顔だと知らずに、お化けだとか、浮気の相手だと邪推したりする狂言を戯曲家したもので、インド人にもこの面白さは伝わると思ったことと、登場人物が男女それぞれ二人ずつですむというメリットがあった。しかし、登場人物が少ないということは、一人一人のセリフが膨大であることを意味し、一ページまるまる独白のセリフがあったりして、出演する学生の負担は大変なものである。それでも、意欲的な学生は積極的にこのドラマに挑戦し、リハーサルに励んでいた。原作者の原千代海氏（今は故人）からは翻訳の許可をとり、出版社には上演料も払っていた。

このドラマは、実は、この日が初演ではなく、一〇月七日、東京の築地本願寺で毎年催される「ナマステ・インドエア」というインド文化紹介の行事に参加する形で、境内のイベントホールで上演済みなのであった。そして、観客から一定の評価は得ていた。

大使はいたく感動され、お褒めの言葉を賜った。幸運はここから始まる。観劇を終えられた大使は、そこから新大阪駅まで行って帰京されるわけだが、普通なら、タクシーを呼んで同窓会館の玄関で見送ってそれで終わりであるが、その日の後の予定のない私は、大使と総領事を新大阪駅までお見送りすることにした。タクシーでも三〇分ぐらいかかる。この車内で、私は思いがけない提案を大使にするのだ。「一二月八日のホテルニューオータニでのバジパイ首相歓迎レセプションで、このドラマを演じたい」と。

「それは面白い」と即答があったのには、こちらが驚いた。このレセプションは大使招待なので、

やりやすいという。しかし、本国の首相官邸の許可がある。大使はすぐさま、携帯電話で、東京のインド大使館の部下に指示していた。なお、助手席で私は、その会話を聞いていたのだが、ハトヤマとかタナカとか政治家の名前がポンポン飛び出していて、これこれは英語ができるのか、そういうやりとりであった。ハトヤマとは、当時の鳩山由紀夫民主党代表のことであり、タナカとは、田中眞紀子外務大臣であった。いうまでもなく、東京におけるバジパイ首相歓迎レセプションの準備をしているのである。やはり、大使ともなれば、そういう政治家のトップとの付き合いがあるのだなと思っただ次第。当然のことではあるが。

というわけで、この日の大使の来学が、この稀有な好機会をもたらすことになるのである。大使は帰京後、すぐに本国政府に打電して、我がヒンディー語劇上演の許可を求めた。やがて、このドラマを一〇分間に圧縮してビデオテープに録画して送れとの指示が届いた。初のインド公演を決めたのは、国立演劇学校に送ったビデオテープであったことを思い出した。

確かに、レセプションの席上で五〇分ものドラマが上演できるわけではない。又、分刻みの日程をこなす首相に、別の場を設けて上演と言う事も不可能だ。しかし、せっかく覚えた長いセリフを短くして、しかもあちこちのセリフをつなぎ合わせて喋るといふのは至難の技だ。日本語ならできるかもしれないが、そこは外国語の難しさなのだ。しかし、そんなことは言ってはられない。徹夜に近い作業をした結果、なんとか一〇分（厳密には私のスートウルダールの前口上が一分半、ドラマのシーンが八分半とさらに細かく決められていた）にまとめて、東京経由でデリーにビデオを送っ

た。やがて、すぐOKの返事が来た。さあ、これでいよいよ、バジパイ首相の前で、ヒンディー語劇を演じるという歴史的な大事件が実現することになるのだ。興奮さめやらぬ日が二月八日の当日まで続くことになる。アフガン問題で頭の痛かるうバジパイ首相に、たとえ一〇分でもくつろいで楽しんでもらいたいと思った。それと同時に、このレセプションに招待される人達（インド人が多かるう）へのプレゼンテーションともなるので、期待した。インド本国から新聞記者も沢山同行するだろう。このニュースはすぐにインドに伝わるに違いない。

以下は、圓藤淳平君のレポート（『ボランテニア教育叢書第七号』二〇〇一年、一〇～一三頁）をそのまま転載する。

…正確な日付けは忘れたが、一月の二四日か二五日にアルバイトを終えて携帯電話を見ると、メッセージが入っている。それは、溝上教授からで「バジパイ首相臨席の下、劇上演決定」と伝えるものであった。

帰宅後改めて電話をかけ、やや興奮気味の溝上教授から、一二月八日、ホテルニューオータニで行われる首相歓迎レセプションで一〇分の持ち時間があること、それに先んじて一月二八日一時に、ホテルニューオータニで打ち合わせがあることを聞いた。

一月二八日に打ち合わせが一六時からだと聞いていたので、一五時に環状線の大阪城公園駅に集合した。打ち合わせながら、全員準備万端で芝居の用具を持参していた。事前に芝居をインド側

スタッフ（首相の先発隊の役人）に見せる必要があった。そのために、即ホテルには行かず、大阪城公園内でまず、リハーサルをした。いったい何語を話しているのだろうと訝しがる周囲の視線には目もくれず、三回練習をしてから、いざホテルに向かった。連絡先に電話をかけて、部屋に向かう。すると「当日レセプションの行われるホールで打ち合わせをする。すぐに行くから階下で待機しておいてくれ」とのこと。そこで、そのホールに行ってみると、ウインドウズによるパソコンのプレゼンテーションが行われていた。みんな「とうていインドラしくない雰囲気だなあ」などと漏らしつつ、待てども、誰一人現れない。それでも、待つより他しようがないので、隅の方でひっそりと待っていると、ホテルの人から「プレゼンテーションの関係者の方ですか」と尋ねられた。それもそのはず、周囲は正装の人ばかりで、私たちだけが貧相な服装をして、手には劇で使う小道具の莫塵や背景の絵を持っていたからである。おかしいと思われもする（大体、一番おかしいと思っていたのは、私たち自身であった）。それで事情を説明すると、「この場所でお待ち頂くのは、差し障りがありますので」と言って、場所の移動を命じられた。さらにしばらくすると、また別のホテルマンから、同様の内容を尋ねられる。そうすると、今度は「本日は、このホールは貸し切りになっておりまして、そういった予定はございませんが」と言われて、下の階で待つ。一七時ちょうどになろうとしたときに、インド側の人姿を見せた。すると、まだ他の用事があるから一八時からにして欲しいといわれ、さらに一時間待つ。一八時に待ち合わせの場所に行く。すると、迎えに来たインド人からこう言われた。「インド時間を知っていますか。必ず、定時から遅れる。一〜二時間

の遅れはよくあることです」

この言葉を聞いて、インド政府のお役人でさえ、このように考えているのかと、一種のインド文化だなと逆に感心した。こういった経験も教室ではすることができない。その後、当日に使うホールでない別の部屋で、私たちの劇を披露した。一〇分足らずのうちに笑いを誘い、良い感触を得た。しかし、終ってインド側からの第一声は「一二分かかったよ」だった。しかも、指摘した人物は、インド時間のことを私達に告げた同一人物だったので、私は妙に面白く感じた。それでも、観劇したインド人には概ね好評で、異口同音に首相も喜ぶだろうと言ってくれた。

ともかくも、一二月八日の本番当日を迎えた。一三時一五分が出版と聞いていたので、一一時に集合した。溝上教授は羽織袴で現れた。これには理由がある。一月二八日の打ち合わせの際、学生の衣装が和服なのだから教授も和服を着てはどうかと、インド側から提案されていたのだ。教授は、わざわざ貸し衣装屋でレンタルしたという。

話を戻そう。集合すると、ホテルのレセプション進行係と事前交渉をしたが、私たちの望み通りに会場のセッティングがなされた。わざわざ芝居のために、ホール中央奥に舞台が設営されたのだ。その前に五人のVIP用に椅子が並べられ、その廻りにはロープが張られていた（筆者注・五人とは首相の他、アルン・ショーリー民営化担当大臣、ブラジャーシユ・ミシユラ首相主席秘書、オマル・アブドゥッラー外務副大臣、アフターブ・セート駐日インド大使であった）。そこでのリハーサルは実現しなかった。ホテル側の準備中、大阪府警とインド政府のSPは会場の隅々にまで目を光ら

せ、緊張感を漲らせていた。小道具の紙作の鏡すらチェックの対象とされ、写真撮影などは、一切ご法度であった。改めて、自分たちがどういった社会的地位に属する人物に芝居を披露するのかということを実感し、気が引きしまった。着替え、メイクをすませ、セリフ合わせをして、気分が高揚してきたと感じ始めた矢先に、舞台裏に行きましよう、声がかかった。そこからアツという間の出来事だった。移動してしばらくすると、すでに溝上教授はあらすじの説明に入っていた。マイクを通す音声から、教授の緊張ぶりが手にとるように分かり、妙に可笑味を感じたのをはつきり覚えている。そのおかげで、緊張が幾分和らいだ。そして、いよいよ出番となり、スポットライトを浴びてしまうと、一〇分なんてあっという間に過ぎてしまい、もう終わりかという感じだった。上演後、首相から直々に記念品―教授はネクタイ、学生は時計―を頂いた。観劇直後、首相は退席となり、私達はレセプションの食卓の末席をけがすことになった。食事中、話し掛



ホテルニューオータニ大阪の玄関で記念撮影

けてきたインド人記者の言葉は、ことのほか嬉しかった。「首相は最近、政治問題、経済問題で頭を痛めておられて、あのように笑った姿をしばらく見たことがなかった」

後になって、あらすじを説明してから首相の表情をつぶさに観察していた溝上教授から、首相は二度哄笑された、と聞いた。感激である。

レセプション終了後、劇団の先輩にあたり、現在NHK国際放送ヒンディー語セクションで活躍する竹林友里さんからインタビューを受けた。夜は八時半から、今度は中ノ島にあるリーガロイヤルホテルで、報道陣を主軸とするダイナー・レセプションがあり、それにも参加した。こちらには、首相は顔をみせてはいなかったが、セート大使に「お父さん、お父さん」（劇中私の役が父親役だったので）と呼ばれ、歓談もし、気分は有頂天であった。

また、大使のおかげで、首相と記念写真を撮れる可能性が出てきたのだ。昼のレセプションでは、カメラなどの撮影はとにかく全面禁止だった。翌朝首相がホテルを出発するときに、そのチャンスは訪れたのだ。厳重な警備体制の最中ではあったが、安全のため、裏口から出る首相と一時の会話を楽しんだ。日印両国の国旗を背後に真っ赤な絨毯が敷かれていたが、首相が部屋から出てくるまでに、このカーペットを踏んでしまつて、係りの人から叱られた。

「劇、面白かったですよ」首相の率直な感想は私たち全員の心に響いた。声が小さく、話全体の隅々まででは残念ながら聞えなかったが、確かにこう言われた。私も必死で何とか、「そう伺って嬉しいです」とだけ、答えていた。首相との記念写真もさりげなく、自然体で撮影できたのである。男子

は背広にネクタイという正装、女子は晴れ着を着て。

こうして、バジパイ首相の前での公演は終わった。まさか、人生の中で一国の首相に会えるなどとは想像したこともなかった。まして、ヒンディー語劇を披露しようとは。とにかく無我夢中で演じ、ゆっくり感激など味わう余裕などなかった、というのが本音だ。あの時よりも、こうしてゆっくり思い出している現在の方が、感動が込みあげてくるのだ。全く、ドラマ以上のドラマを経験した。この経験は本当にかげがないものである。

(圓藤淳平)

第八章 四回目のインド公演旅行

二〇〇一年は、米国で九・一一同時多発テロが発生した年だが、インドでも、バジパイ首相が日本訪問を終えて帰国後まもなく一二月一三日に、デリーで国会襲撃事件が発生した。パキスタンに支援されたといわれるイスラム過激派が、開催中の国会を急襲し、白昼銃撃戦の末、過激派と警備員が殺された。これは、翌年の二〇〇二年の五月に核戦争一歩寸前まで行ったインド・パキスタン危機の伏線となる、インド人にとっては九・一一事件に劣らぬほどの大事件だったのである。年末年始のインド公演を予定していた我々にとって不安な材料となり、テロを危惧する学生もいた。しかし、デリーの局部で起ったことであり、一般市民が犠牲になつたわけでもないのです、外務省からは「注意情報」だけで、渡航禁止や自粛の指示はでなかった。一二月といえば、インドの観光シーズンで、多くの観光客は旅行をキャンセルしたようだが、我々は予定通り、四回目のインド公演旅行を決行する事にした。来てみると、危険情報を出す責任者である駐印大使自身が観劇に來られる状態で、危険な雰囲気は全然なかった。日本のマスメディアは少々騒ぎすぎのように思われた。

さて、今回は久しぶりに二つのドラマを用意した。一つはバジパイ首相の前で上演した「鏡草子」で、もうひとつは、ウペンドラナート・アシユクという有名な作家の書いた「潔癖症」(原語は「タオル」)だ。これは一年前、神戸と東京で公演している。

ストーリーは「清潔好きの妻マドウは、夫ヴァサントが自分のタオルと人のタオルを区別しないのが気に入らないばかりか、洗顔用、沐浴用、髭剃り用とそれぞれ区別するように夫に要求する。しかし、夫にはきびしく要求する彼女が、夫のヴァーラーナシー長期出張中に遊びに来た友達に見せた姿は、それとは裏腹に、友達も驚くほどかなりちゃんぼらである。留守中、夫の気持ちを察して反省したかのように見えたが、夫が帰ってくると、またもとのように清潔さを強く要求する」というもの。原作は、夫婦の外は、妻の二人の友達と女中の五人しか登場せず、ほとんどの会話は夫婦間に集中している。ところが、本学の学生は八人が参加を希望したので、八人全員に役を振り分けるという教育的配慮のため、同僚のチャトウルヴェーデー氏にお願いして、登場人物を三人増やして脚色してもらった。増やした三人とは夫の母と弟夫妻である。できあがってみると、少し違和感はなく、インドの普通にある家庭が描かれていた。こんな芸当ができるのは、さすがにヒンディーを母語とする専門家だと感心した。上演にあたっては、原作者のご子息に手紙を書いて、脚色したドラマの上演の許可を得た。

以下の公演記録は、圓藤淳平君のレポート（『ボランテニア教育叢書第七号』二〇〇一年、一四〇―一四九頁）を、ごく一部だけ加筆して転載する。

デリーでの上演（観客数約二〇〇）

首都から始めるのは、一九九七年の第一回インド公演以来である。一月二二日デリーに到着、

二三日は終日リハーサルに明け暮れ、翌日が今回の公演旅行の初日。会場は国立演劇学校付属「アビマンチ」劇場。インドの演劇人の半数以上はここが出身といわれる程権威ある教育機関。溝上教授によると、素人で外国人の芝居用にこれほど立派な劇場の使用を認めるのは、極めて異例のことであるらしい。所長のアングル教授が一九九九年本学を訪問された際、第二回イギリス公演成功を受けた「凱旋公演」を観劇されて以来、教授との親交を結び、その日印の演劇交流が希有な劇場使用を実現したようである。

当日も朝からリハーサル。学校の舞台関係者を交えたミーティングを終えると、直ぐに本番である。初日というのは、いつでも緊張するものではあるが、今回は特に皆が不安に感じていた事が二点あった。一点は、「潔癖症」は昨年の国内公演とキャストを変更していた（特に主役のAさんは「鏡草子」でも娘役を演じており、長いセリフを覚えなければならなかった）にも関わらず、もう一



「潔癖症」の舞台

人の主役であるO君が七月以来インドに留学していたために、予め十分な稽古をつめなかつたこと。二点目は、O君以外にインドの舞台経験がなく（日本ですら、舞台経験のない人がいた）、ここインドにおける芝居進行の成り行きが全く未知数であつた事である。

不安は的中した。「潔癖症」劇のさ中に、劇の進行が止まってしまったのである。私は舞台の袖で何とか助け舟を出そうとしたが、どうする事も出来ず、ただ状況を静観するしかなかつた。劇場内に暫く重い沈黙が支配した。するとO君が機転を利かせ、「パキスタンへ行ってくる」と言つて、舞台袖に戻つてきた。急いで台本に目を通して、再び舞台へ。この辺りは流石、舞台経験豊富なO君だと感心した。実は、私は知らなかつたのだが、「パキスタンへ行く」というのは、「トイレへ行く」という隠語としてインド人がよく使うセリフなのだそうだ（逆にパキスタンではその隠語的意味で、「インドへ行く」という表現は存在しないらしい）。勿論パキスタン人がいれば気を悪くしたはずであるから、うっかりした使用は要注意であり、警戒しなければならぬが、今回のピンチによくもそんなセリフがとっさに思いつくものだと、今更ながらO君の機転のするどさと舞台経験の深さに脱帽するだけであつた。

しかし、「鏡草子」の方は、余り笑いが取れなかつた。インド人にはやはり通じないのかと不安に思つていたが、記入して貰つたアンケート用紙によると、（マイクテストを行ったにも関わらず）声が十分客席まで達していなかつたようだった。私たちの素人振りを露呈する形となつたのである。因みに、この公演に日本大使館から平林博大使と西ヶ廣渉公使が観劇に臨席されるといふ異例の

事態を私たちは経験する事になった。一二月二四日といえば、クリスマス・イヴ。クリスチャンでない日本人も何らかのパーティーに出るため、殆ど顔をみせない。しかも、前日の二三日は天皇誕生日。大使の最大の仕事は、この日に政財官界のお偉方、各国外交団を招いて大使館公邸で催す「天皇誕生日の祝賀パーティー」を成功させることだと聞いている。大使ご夫妻はきつとお疲れであるに違いない。こんな中を大使夫妻とナンバー2の公使がわざわざお越し頂いたのは、私たちにとって非常にありがたいことであつた。これもバジパイ効果かしらんと、教授は推測した。

また、前回のインド公演で同行した劇作家のラージェンドラ・シャルマー氏とO・N・ラッタンパール氏（二人には後日、翌年のインド公演実現を目標に準備している「心を売る店」の演技指導を仰いだ）、パーシャー・バラティーなる、外国人を含むヒンディー語話者のためのヒンディー語教育機関を運営するヴィシユヴァナー



「鏡草子」の舞台

ト・ミシユラ先生、以前本学で教鞭をとられたスジャーター先生、バクシー先生、シユリーヴァースタヴ先生らが観劇された。数日後、公演は行わなかったが、メンパー数人がアーグラへ観光に出掛けた時、シユリーヴァースタヴ先生にはことのほか、お世話になった。また卒業生の森剛彦氏（U F J銀行（当時）ニューデリー支店勤務）とインド松下電器の橋本氏には、女子学生に宿泊先の世話をいただく等、懇意にしていた。

そして、当時インドに留学中の先輩KさんやN君、Uさんらが、劇のスタッフとして惜しみなく協力して下さった事は嬉しかった。

ラクナウでの上演（観客数約五〇〇）

次の公演先は、UP州中部にある人口一六〇万人の州都ラクナウで、二〇〇〇年に続き二回目である。二八日夜に到着、二九日は休息と観光。リキシャ（サイクルタクシー）に分乗して、市街地を観光していると、土地の名産 chikan（手刺繍布）店に立ち寄る。そこで店の主人と話していると、「明日劇を上演する日本人か」と尋ねられ、驚いた。既に活字報道されているらしい。V・K・シャー ストリーUP州知事、ダウジ・グプタ元ラクナウ市長等が観劇された。

夜は、大阪でのバジパイ首相臨席公演で知り合った地元記者から豪華な晩餐会に招待され、感激した。一流ホテルでの会食であったが、中庭では壮麗な結婚式が挙行され、関心を示すと、少し見学を許された。ムスリム式婚礼であったが、女性陣のみ幕屋内入場を許され、男性の私たちは、少々

羨ましくなった。この時期、インドは結婚シーズンである。

あくる日。会場は、とある学校（前回公演時に歓待され、今回もご馳走等過分なもてなしを受けた）に隣接するラビン・インドラーヤという立派なホールだった。デリーの初日から大分日が経っていたので多少勘が鈍ったのか、緊張感が上手くコントロール出来ず、「潔癖症」は何とか切り抜けたが、「鏡草子」は散々で、私が段取りを間違え、頭が真っ白になり、セリフも飛ばし、口から出た言葉は何と「ソーリー」だった。自らの未熟さを大いに思い知った瞬間であった。

劇終了後、女性陣が学校の女子学生の人気の的となり、取り囲まれて上機嫌であった。劇自体は練習の成果もあり、それなりのヒンディー語を話し、観客に理解された。そのため観客は、私たちが日常レベルのコミュニケーション位は完璧だろうと思込んで話しかけてくる。しかし、実際はそうではない。自己表現できないもどかしさ、しかも相手は私たちが話せると思っただけに、余計にシヨックを受ける時がある。つまり、相手の顔に落胆の色がはつきりと浮かぶことさえあるのだ。これはこれで語劇をやる意義につながり、日頃の語学学習に一層熱意を込めようという意欲が湧いてくるのだ。

ゴークラプルでの上演（観客数約三〇〇）

一月を迎えると、まさに疾風怒涛の如き目まぐるしい日々の連続であった。とにかくこの町に辿り着くだけで一苦労した。三一日ラクナウで列車が遅れていると情報が入った。念のため、情報の

確認に駅へ行ったO君が、血相を変えて戻ってきた。「もうすぐ列車が出ますよ。行きましよう！」大幅な遅れで、ラクナウ始発列車を増便するというのだ。勿論パッキング等は終っていたが、私たちもいつの間にかインド時間でものを考えていたようだった。大慌てでプラットホームに辿り着き、何とか間に合い、ほっと一息をついた。それにしても、インド人の熱烈な歓迎・接待には、毎回驚かされる。ホテルから駅までマイクロバスで移動したのだが、私たちだけでなく、見送りにわざわざ来て下さった人たちまで、皆バスに乗り込むのだ。時間がないにも関わらず、皆乗り込み、バスはすし詰めで足の踏み場もなかった。

ともかく、ゴークラクルに深夜到着した。ゴークラクルは人口約六〇万人の町で、ネパール国境に近いこの辺りは、結構寒い。たくさん持ってきたホカロンが役に立つ。朝起きると、その日（一月一日）はいきなり公演当日である。デリーからラクナウまでの移動時間が長かった事もあり、朝目覚めても、今日公演を行うという実感が今一つわかない。会場はゴークラクル大学講堂。午前中、学長を尊敬訪問した後、準備に入り、本番を迎える。終了後、インド人から「鏡草子」について「あの家族はどうなったのですか。あの家族の問題は解決していないのでは？」と質問を受ける。

実は、この点は既にチャトルヴェーデー先生にも指摘されていた。この芝居の最後は観客の想像に任すような曖昧な終り方をする。これが日本的余韻というものだろうが、インド人ははっきりしないと面白くないと言うのである。私たちにとってこういう終り方は、全く違和感がない。結局そのままにしていた。その点が、教官だけでなく観客からも違和感がある、と指摘されたのは、興

味深かった。

次の日、大学でヒンディー語学科主催の歓迎会があった。お土産に巨象のテラコッタの置き物をいただいた（これが特産物らしいが、相当の大きさでここから日本に持ち帰るのは大変であった。殆どの人が帰国するまでにどこかしらの部分を欠けさせていた）。

クシナガルでの上演（観客数約二〇〇〇）

ゴーラクプル大学の歓迎会・昼食会が終り、一五時頃ホテルの前に救急車が来た。病人が出た訳ではない。次のクシナガル公演は、インド福祉村病院（現地では、アーナンダ・ホスピタルという）の配慮で、わざわざクシナガルまで迎えが来たのだ。釈迦入滅の地であり、インド政府から「仏教指定都市」として認められている。小さな田舎町であるクシナガル（サンスクリット読みだとクシナガラ）に夜着いた。直ぐに来年度の芝居に使う衣装用の生地を買いに行った。店主が私たちの劇上演の事を知っているには、驚いた。その後、インド福祉村協会の大竹紘一氏の先導で、私だけ翌日本番がある会場の下見に出掛けた。というのも、今回の公演の中で、この地だけが野外公演と聞いていたからである。行ってみると、車のヘッドライトを照明代わりにして、インド人が仮設ステージを建てようと作業していた。その中で、一人の日本人女性がてきぱきと指示を送っていた。この人こそ、農村の女性の自立を支援する草の根ボランティア活動に従事する加藤裕子さんであった。少し打ち合わせをしたのだが、改めて劇上演のためにどれ程多くの人がサポートしているのか

を知り、感謝の気持ちでいっぱいになり、意欲がわいてきた。

打ち合わせ後、私たちは某ホテルでの夕食会に招かれた。実はこのホテルの泊り客は教授ただ一人だけであつた。理由はパキスタンとの緊張関係が高まり、観光客が一齐にインド行きを自粛したためであつた。

その緊張関係は確かに存在し、私たちももちろん無関係ではいられないのであるが、この広大なインドのことである。実際は国境地帯の緊張感がこのひなびた町まで伝わるはずもなく、ただただのんびりしていた。日本のマスメディアは過剰反応ではないかと思つた。国会襲撃事件のあつたデリーでさえ、市民生活には何の変化もなく、人びとは何もなかつたかのように、普段通り映画を楽しんでいた。ホテルでの夕食会では、それまで香辛料がピリリときいたインド料理を主として食べていたので、この夜出されたマイルドな中華料理は格別おいしく感じられた。



アルプナー（米粉で床面に描く模様）で「歓迎」と書いてくれるゴーラクプル大学生

劇上演当日、会場のブツダ・カレッジに着くと驚いた。溢ればかりの人の山なのである。この小さな町の何割の人が来てくれているのだろうか、本当にそう思った。事実、後ほど聞いてみると、閉店までして観劇に訪れた人がいたそうだ。会場は本学の学園祭ステージを大きくしたようなものである。つまり、正面にステージを設営し、残り三方は既存の建物で囲まれており、その囲まれたグラウンドにカーペットを敷いたり、椅子を並べたりして観客席を設けるのである。その観客席はもちろん、満員御礼である。そればかりではなく、建物二階や屋上から見物する人もいたのである。観客二〇〇〇人の観劇反応は、圧巻の一言であった。観客は演者の一挙手一投足に視線を真剣に注ぎ、私たちもその張り詰めた緊張感に刺激を受け、持てる演技力で最高のパフォーマンスを実現しようとして奮奮した。子供達を前に座らせたのはよかった。長い退屈なドラマなら子供達は必ず騒ぐ。子供達が騒がずに熱心に見てくれただけでも、私たちの演技が受けた証拠だといえる。自画自賛であるかもしれないが、本当に最高の舞台になった。もともと、後で加藤さんから伺った話によると、近辺に住む貧しい子供達の中には、見に来なかったが、被差別カースト故に、入れてもらえないと思つて諦めた子がいたらしい。喜んでばかりはいられない。やはりカースト差別という厳しい現実があるのを知った。

本叢書・第四号（一九九八年）で教授曰く、「成功は何よりも、現地主催者の熱意にかかっている」（二〇八頁）と。大竹氏と加藤さんの自己犠牲的で献身的な協力なくして、これ程の成功は達成されなかったであろう。二人には感謝の言葉もない。大竹氏は製薬会社を定年前に退社し、貧困にあ

えぐインドの人々の為に医療事業の一翼を担うべく、この病院建設当初からずっとボランティア活動に従事している。大竹氏はこの劇の成功をひどく喜び、幕が下りた瞬間、観客席から拍手喝采が起こるや、目にうつつすら涙を浮かべておられたのは、誠に印象的だった。教授は、年配の大竹氏を評して、「まっすぐで純情な人」と呼んだ。

打ち上げの宴席は、助力を仰いだビルマ寺住職主催の夕食会であった。美味絶品の料理が食卓狭しと並んだ。翌日一日自由時間だった。午前中大竹氏の先導で部落を訪問した。このような貴重な経験も普通の観光ルートには、絶対入らない。午後タシナガルの町を歩いていると、あちこちから「昨日観たよ」とか「面白かった」等と、声を掛けられ感激した。夜は病院グプタ医師招待による夕食会。加藤さんから貴重な人生談を聞いた。教授が宿泊するホテル・オーナーが医師の友人で、夕食会に招待され、飲めや歌えの大騒ぎになった。この夕食会は、今回の語劇旅行の食事会の中で私にとって、最高のものであった。本当に楽しい一時であった。

シャンティニケトンでの上演（観客数約六〇）

五日からの移動となり、ほぼまる一日列車に乗った状態で、この学園に着いたのは、午後九時過ぎであった。チェックアウトの都合上、直ぐ部屋に入れず、休息できず、ロビーで時間を潰してようやく部屋に入り、シャワーを浴びて一休みしたかと思うと、公演時間である。

会場は文豪タゴールが創設した学園ヴィシユヴァパーラティー。現在国立総合大学になっている

が、インドの伝統に従って、現在でも、木陰に座って小人数の野外授業が行われている。行くと、会場はまだ施設されたままで、嫌な予感が脳裏をかすめたが、その予感は見事の中した。観客が全く不入りだったのだ。観客二〇〇人から六〇人への落差。同時進行の別の催しがあったのも一因だと聞いた。ベンガル語がドミナントなこの地では、ヒンディー語に対する興味は少ないのか。しかし、失望は禁物である。これも私たちにとつては勉強だ。それでも来客者には楽しんで貰えたという自負はある。ベンガル語にも堪能な教授は、ベンガル語で舞台挨拶をした。この地では、インドの植物に関する文献や民話の翻訳等で知られる西岡直樹氏から、私たちの公演実現のために、惜しめない援助を頂いた。地域に根を下ろした在野の知識人にめぐり合い、歓談するのはこの上ない光栄であり、自らの滋養になる。海外公演には、いつもこのような予期せぬ人との出会いがあるのも、特筆すべき点である。夕食時、急に女の子三人が、体がしびれると言い出して大変なことになった。まったく同時に同じ症状を訴えたのである。急いで医者診察を受けた。きのこのスープにあたったようだ。薬を服用し、安静にしておれば、やがてすぐ回復したが、きのこは怖い。そのうえ、インドでは、きのこは肉類・アルコールと並んでタマスの（翳質）食物に分類されるらしい。なるほどと思った次第。それにしても、八人一緒に同じ物を食べていたのに、三人だけに症状が出たのも不思議である。とにかく、シャンティニケトンには余りいい事が起こらない。

前回は、「西ベンガル州のゼネスト」に遭遇したため、ストが始まる前に、夜の国道を警察のパトカーに守られて疾走してコルカタに着いたが、今回は「ボルプル（シャンティニケトンの最寄の

町で、鉄道駅もボルブルの「デモ」に遭遇した。危険はなかったが、道路を閉鎖されるとミニバスで駅に到着できなくなるのが心配だった。そこで、ホテルのマネージャーにミニバスに同乗してもらい、もし、群集にブロックされたら、説得してもらおうことにした。幸い、険悪な状況は生まれず、穏やかに群集と会話を交わし、無事コルカタ行き列車（シャンティニケトン・エクスプレス）に乗ることができて、ホッとした。これで、間違いなくコルカタに着けると。しかし、公道を行くのに、デモ隊の許可がいるというのもおかしなことだと思った。

コルカタでの上演（観客数約五〇〇）

三年前同様、イマミ・グルーブという新興マールワリー財閥主催で行われた最終公演地。前回は、シャンティニケトン↓コルカタから始めたが、今回は逆にシャンティニケトン↓コルカタで終えることになった。コラモンドイルという立派なホールで行った公演は受けも良く、最後の公演にふさわしいものであった。シャンティニケトンと同じベンガル語の使用頻度が勝るとはいえ、さすがにこの町はコスモポリタンであり、ヒンディー語もよく通じるのである。ところで、教授はベンガル語とヒンディー語を巧みに使い分けて、会場から喝采を浴びていた。西ベンガル州のブッドデブ・ボッタチャルジヨ主席大臣が多忙な日程の間隙を縫うように臨席・観劇されたことには驚嘆した。主席大臣の脇では、『タゴール著作集』の編者・訳者として知られ、ベンガル語だけでなく、ヒンディー語教育にも熱心な、麗澤大学の我妻和男教授も観劇されていたのである。

上演後、首席大臣、我妻先生から直接、素晴らしい文化交流を実現していると賛辞が寄せられた。私たちのヒンディー語が結構評価されていると知り、今後の自信に繋がった。半年前に、コルカタへ嫁いだシュリーヴァースタヴ先生の令嬢ゲンジャンさんも、夫君とともに、観劇していた。

公演後受けたTV取材で、カッラをかぶり直して、ヒンディー語で受け答えをしながら、今回の旅行もいよいよ終るのかと思うと、妙に感慨深くなった。

コルカタ到着日の夕食会（総領事官邸で和食）と公演後の打ち上げ宴席（コルカタのパンジャーブ料理のレストラン「アンバー」）は、在コルカタ日本総領事館の菊池龍三総領事（溝上教授と同輩で、アラーハーバード大学留学時以来の知人）の主催によるもので、豪華な食卓メニューに舌鼓を打っただけでなく、総領事館員との貴重な体験などを交えた歓談にもいたく感激した。派遣員の中津雅昭氏は、空港まで随行



スピーチをするブッドデブ・ボッタチャルジョ西ベンガル州首席大臣

し、私たちが無事搭乗するまでの一部始終に援助の手を差し伸べるほど親切の一語に尽きる人だった。

インド公演のまとめ

五〇分のドラマ二本立てで臨んだのは、三時間の映画を見慣れているインドの観客にとつて、五〇分だけでは物足りないと思われたからだ。インドのドラマと日本の劇の組み合わせはよかった。各会場で行ったアンケート調査によると、ほぼ三対一で、「鏡草子」の方が好評だったのは、やや意外であった。「潔癖症」もO君とAさんのコンビはよかったし、Kさんの歌うヒンディーのヒットソングも拍手喝采を浴びたのだが。

語劇を実践するということはどういうことであろうか。ヒンディー語は世界三位の使用人口を有するが、日本における学習者数は少なく、日本では希少価値の言語である。しかし、やはり学んでいる言葉は使いたいし、運用することによって、言葉は生命を吹き込まれると思うのである。また、インド人教官からインド人の身振り・仕草など非言語的コミュニケーションを学ぶこともできる。これは本からはなかなか学べない。つまり、教室ではなかなか学べないということである。身体全体を使って言葉を覚える―ここにこそ、語劇上演の意義があるのではなからうか。

では、インドで公演するということは何であろうか。演劇大好きな国民性から、劇に対する反応は大きく、さまざまである。また、語劇上演に関わるインド人は、旅先で知り合った人に比べて、

やはり安心してコミュニケーションができるということもあろう。また、そうした演劇的絆を通して垣間見えるインド人気質なり、固有の文化も確かに存在する。

個人的に、インド人とコミュニケーションをとることから思わず逃げ出したい心境に陥る、あるいは時にあまりに熱烈な歓迎ぶりが疎ましく嫌になることがある。それは、数多くの大小さまざまな都市でいろんな人物と出会う機会に、数限りない親切心に接しすぎて、素直に感謝する気持ちも少々忘れていくからだと思うが、実は自戒すべき点である。その当人たちからすれば私たちに会うのは初めてであり、誠心誠意を尽くして歓迎しようとしているのである。

私たちはどこまで行っても所詮素人演劇集団である。そのことを忘れることなく、謙虚につねに向上心を失わず、さらに一段上の達成目標を目指して語学力の不断の鍛錬を一層積み重ねたい。

(圓藤淳平)



第九章 五回目のインド公演旅行―日印修交五〇周年記念行事として参加

二〇〇二年は、日本とインドが国交を結んで五〇周年になるといふ、両国にとって節目となる年であった。外務省でも、記念行事をいくつか企画したが、我がヒンデュー語劇団のインド公演も、その記念行事のひとつに指定された。例年より、さらに充実したインド公演を行おうと、新人を加えた学生達は、四月の新学期から張りきっていた。演目は、久しぶりに、ラージェンドラ・シャルマー作の「心を売る店」に決めた。これも、非常に面白いドラマで、「相手に不満な三組の夫婦が、手術で相手の心を取りかえる。ケチを浪費家に、きつい女房を恋多き乙女に、飲んだくれで仕事もしない夫を聖者にと。しかし、かえって不幸になり、もとに戻してください！ということになる」。芥川竜之介の「鼻」を少々連想させる。ラージェンドラ・シャルマーの作品を取り上げるのは三作目。彼の喜劇は本当に面白い。セリフが軽妙でユーモアに富んでいて、覚えやすい。我々のドラマにぴったりののである。ひさしぶりに団員が増え（女子の方が多いが）、ほぼ全員新人で、五回目のインド公演に臨むことになった。

さらに、旧作の「僕たち、もう自由だ！」も再演することにした。団員全員に出演の機会を与えるためでもあった。「同一都市で同一ドラマの再演はやらない」という原則を立てていたが、今回訪れる地は、いずれも初演の地であった。

以下は小林真衣さんのレポート（『ボランテニア叢書第八号』二〇〇二年、三〇～三七頁）をほぼそのまま転載する。

デリー（国立演劇学校）での上演（観客数約二五〇）

九月四日の夜、インドの首都デリーに到着。翌日、「心を売る店」の原作者であるラージェンドラ・シャルマー氏に演技指導を請うた。ここで、また新たにいくつかのインド人特有の仕草などが加味され、私たちの劇は、インド人仕込みのさらにスパイスの効いた本格劇となった。

今回のインド公演が外務省主催「日印五〇周年記念行事」のひとつに正式に指定され、その日の午後は日本大使館へ招かれた。平林博大使は去年に引き続き、今回も観劇されることとなった。六日は、公演準備のため、会場となる国立演劇学校付属のアビマンチ劇場へ行つた。ここは昨年二月の第四回インド公演でも上演し、また翌年三月に私たちも出演予定の全インド演劇祭の開催地でもある。後日、この学校の三年生の学生による劇「人形の家」（イプセンの戯曲）を観劇したが、その表現力の豊かさ、本格派の芝居作りに、私はひどく感銘を受けた。数日前に同劇場で私たちがあの素人芝居をしたと思うと恥ずかしくなるほどであった。

話を戻そう。六日つまり本番前日に、通し稽古のために会場を訪れたとき、劇関係者の方々とは他の団体との交渉や打ち合わせなどで手がいっぱいだったらしく、なかなか私たちの劇の準備に取り合ってもらえなかった。効果的な練習ができず、不安なまま迎えた本番当日、昼過ぎにようやく舞

台責任者が指揮し、音響、照明なども含めた本格的ななりハ―サルが始まった。形が見え、皆の顔にも笑顔が戻った。インドでの初公演、気合いを入れていくぞと円陣を組み、メイク、着替えを済ませるとあっという間に本番。

今回は、原作者のシャルマー氏も観劇されたため、あまり大胆な脚色は好ましくないと判断し、八月の神戸公演で好評だったダンスはカットしたのだが、そのダンスの力を借りなくとも、十分にお客さんを楽しませることができたと実感できるほど手応えのある反応が返ってきた。「心を売る店」の最初に、案内人役を演じるRさんがある。とにかく、私たちは自分のヒンディー語が伝わっている喜びを全身で受け止め、初公演を無事終えることが出来た。今回が初のインド公演となった二年生の部員達も、インドでヒンディー語劇をする快感を、一日にして覚えたようであった。デリー大学で日比較文学を教えるためにインド滞在中の高橋明先生も観劇され、労を



「心を売る店」の舞台

ねぎらってインド料理をふるまっただけでなく、翌日市内観光にも同行していただいたことは、感謝の一言では言い尽くせない、忘れがたい思い出となった。

デリー（ネルー大学）での上演（観客数約一〇〇）

この日、「僕たち、もう自由だ！」の劇の召使役である溝上教授が体調不良だったため、急遽Eさんが代役をする事になった。以前にネパール語で一度演じた経験があるとはいえ、このような緊急事態にすぐ代役を引き受けられるとは、日頃からしっかりと台本を読み込んでいなければ出来ないことである。この日の公演は、学生など特に若い人が観客に多かったので劇中何度も笑いや拍手喝采を浴び、とても気持ちよかった。

今回特筆すべきは、ネルー大学の日本語専攻の学生による、日本語劇を見る機会を得たということである。演目は、星新一原作の「ボッコちゃん」。外国語劇について改めて考え直すよい機会となり、いろんな意味で有益であった。まず痛感したのは言葉の大切さ。私たちは彼らの劇を観て、台詞の自身そのものよりも、イントネーションのおかしさで何度も笑ってしまったのである。と同時に、私たちの話すヒンディー語もこのように聞こえていて、同じ理由でインド人に笑われているのではないかという不安が頭をよぎった。決して他人事ではない。発音には細心の注意を払わなければと、劇を観た部員の誰もが自戒したことだろう。問の取り方やテンポの大切さも、彼らの劇を通して再確認することができた。また、彼らが演じる日本人を見ると、彼らの目に映っている日本人像

が分かって嬉しかった。そして私たちがヒンディー語劇をやっていることもよく感じるものだが、やはり日本人とインド人では笑いのツボが違うのだ。受けるだろうと思う台詞で受けず、思わぬところで笑いが起きたりする。ネルー大学にも足を運び、再び観劇された高橋先生が、「君たちの勝ちだね」とこっそりささやかれたのがとても嬉しかった。しかし、まだまだ改善すべき点はいっぱいあるなど新たな課題を抱え、外国語劇上演の難しさを改めて思い知らされた。

アリーガルでの上演（観客数約三五〇）

九月一〇日早朝にデリーを出発、二時間ほど列車に揺られ、ムスリムの学園都市、アリーガルへ。アリーガルは人口約六七万人。日程上、多少強行な連日公演となったが、主催者の十分すぎるほどの歓待と準備の良さのおかげで、私たちはスムーズに本番を迎えることができた。実際、デリー公演では二ヶ所とも、事前に頼んでおいた



爆笑する観客

大道具・小道具がインド時間で届けられた。つまり、当日の本番直前になって、こちらが再三要求してようやく動いてくれるのである。依頼されているものを、当事者到着までにはすべて用意しておくという日本では当たり前のようなことでも、インドではここが初めてであった。

劇以外のことを少し書くと、イスラム教と何か関係しているのか、建物の床や内壁、学生の制服などが、全てブルーで統一されていたのがとても印象的だった。外壁が真っ白な建物が多いことも目に付いた。この日の昼食は、なんと学長特別招待の超豪華料理。クリームシチューやフルーツポーチなど、信じられないようなおいしい料理が所狭しと並んだ。

さて、会場のアリーガル・ムスリム大学付属女子カレッジでの開会式典は、コーランの朗読から始まった。これは、一般にランプへの点火から始まるヒンドゥー式の式典とは全く異なる、私たちが初めて経験したことである。一瞬、パキスタンに来たかのような気がした。しかし、これももちろん、インド文化の一つである。今回、ムスリム大学での公演ということで、私たちも一つ試みたことがある。「心を売る店」の第三幕の王様と行者のシーンの順番を入れ替えたのである。前者はウルドゥー系の単語を、そして後者はサンスクリット系の単語を台詞中に多用しており、デリーでもこの両者の言葉の対照性がとても受けていたため、その効果を狙ったのである。結果、その効果の手応えをそこまで感じることは出来なかったが、懸念を抱いていた行者の台詞、さらにはイスラム教でタブー視されている酔っぱらいのシーンでも、しっかり笑いがとれていた。女子大学だったからか、私が演じた、夫を尻に敷くうるさいおかみさんの役は殊の外受けた。

今回一つハプニングが起こった。踊りの最中にカセットデッキが壊れ、音楽が止まってしまったのだ。実はこの後バレエリー公演でも同じハプニングが起こった。予備テープを持ってきていたところが不幸中の幸いだったが、インドでは全く何が起るかわからない。今回は舞台慣れしたEさんの機転の効いたアドリブ（キヤーフアー（どうしたの？）と平然と言って観客を笑わせた）で何とか切り抜けた。劇中に限らず、とっさのトラブルにもヒンディー語でしっかり対処できるようにしたいものだ。また、アリーガルでは、ある日本人の方との出会いもあった。帰国後、ヒンディー語劇初の京都公演を実現可能に導いて下さった、京都産業大学でアラビア語を教えておられる山本啓二助教授である。

バレエリーでの上演（観客数約一五〇）

九月一日の、アリーガルからバレエリーへの六時間のバスでの移動は、一言では語り尽くせないものとなった。バレエリーは首都デリーと州都ラクナウのほぼ中間に位置する、人口約五八万人の都市である。バス自体は快適だったのだが、道路の状態が最悪だった。石だけで固められた道路や、舗装されてはいるが雨でもろくなり、走行車輛でどんどん削られていく穴だらけの道路……。ウツタル・プラデーシュ州も財政難で、道路補修にまでお金が回らないとか……。それにしても、揺れに揺られて、後部座席に座っていた人は何度も天井に頭をぶつけるほどであった。そんな状態なので、ゆっくり寝られるはずもなく、私たちはバスの中で、溝上教授を交えてヒンディー語でしりとりゲー

ムをした。「私を負かしたら一〇〇ルピーやる」と教授がおっしゃったので皆頑張ったが、やはり「生き字引」の教授には敵わなかった。

ちようどその日、デリーとコルカタを結ぶ「ラージダーニー」という豪華特急列車がビハール州で、古い橋を渡っている途中で端が崩れて脱線・転覆し、約一一〇人が死亡するという事故が起こった。そのため、バスが鉄橋を渡るときは、警戒してゆっくり進んだ。驚いたことに、私たちが渡ったその橋は、列車と車が兼用して使う橋であった。つまり車がレール上を走るのである。溝上教授も初めて見たと。

翌日、バレーリー市内から離れたところに設けられた宿泊所から、市内の会場（BPCCAS・プラシャーサン・サバーガールⅡインド獣医学研究所管理委員会会議場）の下見にいったのだが、またあの凸凹道を通り、なんと一時間半もかかった。信じられなかった。宿泊所から会場までの距離が近いことは必須条件だなとこれほどまでに身にしみて感じたことはない。そしていざ会場に着いてみて、さらにショックを受けた。長い間使われていなかったのか、会場はとても汚く、頼んだものも何一つ揃っていなかった。イヤな予感がした。なお、会場はお世辞にも立派とはいえないが、ここの獣医学研究所は全国的に有名ならしい。英語では、Indian Veterinary Research Institute といふ。九月一三日の本番当日、予感的に有名らしい。英語では、Indian Veterinary Research Institute といふ。前日、会場下見後、主催者宅で細かな打ち合わせをし、当日の昼一二時までには全て準備しておく約束したにも関わらずだ。

結局、音響、照明機材が届き、人が動き始めたのは夕方の四時頃。開演予定時刻は六時だというのに。この日、日印国交樹立五〇周年記念の式典で、ネルー大学の日本語劇「ポッコちゃん」も招待されていたため、一つの舞台で、準備は同時進行となった。さらに、劇の準備が終わらないうちに、主催者は勝手にVIP用の机や花飾りを舞台に運び込み、レセプションの準備にとりかかり……もう散々であった。三〇分遅れで始まった式典は、VIPの祝辞、子供たちの歌、踊り、お祈り、そして「ポッコちゃん」と様々なイベントが続き、私たちの劇の出番が回ってきたのはなんと夜の九時過ぎ。観客も私たちも疲れ切っていた。反応も悪いし、台詞も間違えるし、とにかく惨めなものだった。劇終了後も、一人ずつ舞台に呼び出され、記念品を渡されるなどプログラムは続き、結局全ての式典が終わったのは夜の一一時頃であった。

私たちの劇そのものよりも、レセプションやVIPを重要視する主催者の会場では、劇はうまくいかない。そのことを、ここバレーリーで痛感した。もちろん彼らは何もしてくれなかったわけではなく、力を入れる方向が違っていただけなので、一概に悪くいうことは出来ない。ここに、あるインド人気質を垣間見ることが出来る。自分の利益になることには時間も労力も惜しまない。しかし、そうでないことには無関心で、出来るだけ他人にその責任をなすりつけたがる。これは、今でもインドに根強く残る、カースト制による分業化を見てもよく分かるだろう。皆、自分の仕事しかないし、それ以外のことは、上の人からの指示があるまで動かないのだ。バレーリーの主催者は演劇人でもなく、イベント全体を総括して指示を出してくれるわけでもなく、誰に何を要求しても

たらい回しにされるばかりで本当に困った。

ポーパールでの上演（観客数約三〇〇）

「バラータール」(ヒンディー語で「大きな池」という意味)の湖がある、マディヤプラデーシュ州の州都できれいな文化都市ポーパール。人口は約一四四万人。演劇も盛んなこの街で、九月一日、私たちは今回のインド公演の中で最高の上演を経験した。さらに、溝上教授が高熱のため欠席という、まさに異例の公演にもなった。

会場のポーラト・バヴァンは演劇をするための舞台だったので、照明、音響設備はバツチリ。そして、準備に携ってくれた人が演劇経験者で、頼んでいた劇の道具は十分すぎるくらい揃っていたし、リハーサルもスムーズに進んだ。私たちの劇のことを真剣に考え、彼らもまた完璧を目指していることがよく伝わってきて、私たちも彼らの期待に応えるべく、真剣に芝居をしなければという気持ちになったし、「今日来る客は皆目が肥えているからがんばれよ」と彼らに励まされ、さらにやる気に火がついた。いざ、本番会場と同時にたくさんの方が会場へと流れ込んできたのを見て、本当に嬉しかった。Eさんが、先生不在の理由を説明し、先生の代役を務めた。劇は二つとも大成。劇中に拍手で何度も劇が止まってしまうほどであった。あの会場との一体感、自分の台詞で大爆笑が起こったときの快感、伝わっている、そして楽しんでくれていてという確かな手応えを、体いっぱい受け止めながら私たちも最高の演技をすることができた。

劇終了後、本当にたくさんの方が舞台上の上がつてきて、握手を求め、嬉しいメッセージをシャワーのごとく浴びせてくれた。たくさんの方々の笑顔の中で、達成感で胸がいっぱいになった。或る偉い人物が、私たち全員を集め、次のようなことを話された。「外国語を話すことは非常に難しい。にもかかわらず、日本人のあなた達が、ヒンディー語を使って劇を上演し、こんなにたくさんの方の心を楽しませたということは奇蹟のようなものだ。自信をもちなさい。あなたたちは本当に素晴らしい」。身に余るほどの嬉しい言葉。この場に居合わせず、この感動を味わうことが出来なかった溝上教授はさぞ残念がるに違いない。しかし、ホテルに戻った私たちの満面の笑みを見て、その日の公演の大成功を察し、そのためか健康を回復された。私たちは、石窟寺院で有名なアジャンタ・エローラ遺跡の見物をして感動を味わってから、ムンバイのホテルで、一歩先に当地に到着されていた溝上教授と落ち合った。いよいよ、南インドの旅に出発することになった。

南インド初のティルヴァナンタプラム（旧名トリヴァンドラム）での上演（観客数約二〇〇）

ヒンディー語劇史上初の南インド公演。私自身にとっても初めての南インド旅行となったので、南インドについて思ったことを正直に少し書いてみようと思う。まず、人の顔が変わった。北インドの人よりも色黒で、まぶしい日光を遮るためだろうか、眉の部分が出っ張っている人が多い。そして当たり前だが看板の文字が変わり、町を歩いてもほとんどヒンディー語が使えなくなった（この「当たり前」というのは、多言語国家インドだからこそである）。南に来てから至る所に現れた

マラーラム語は、大学で習ったタミル語と似てはいるけれど少し違っていて、読めそうで読めなかったのが悔しかった。男の労働者がよく腰に巻いているルンギーの丈は、くるぶし辺りまであったのが膝上に変わり、食べ物の香辛料の量が減り、町には教会が増え、ヤシの木が立ち並び……。同じ一つの国内でも、北と南では大違いだ。やはりインドは広い。

そして、私たちは、ティルヴァナンタプラムで出会った、ガンディーによく似たあるおじいさんのお説教により、南インドでのヒンディー語の扱われ方を身をもつて知ることとなる。「ヒンディー語を学ぶということは、言葉だけでは駄目だ。文化も学ばなければならない。だから君たちは、酒もタバコも、肉や魚を食べることも捨て去らなければならないんだよ」。

この人が公演会場であるケララ州ヒンディー語普及教会の責任者であった。その人の言い方には多少押しつけがましさも感じられたが、ヒンディー語に対する信念のようなものが痛いほど伝わってきて、私たちもヒンディー語と真剣に向き合っていかなければと思ひ知らされた。

ティルヴァナンタプラムは旧名のトリヴァンドラムの方が有名だが、インド最西南端に位置するケララ州の首都で、人口約七五万人の町である。

さて、劇の話に戻ろう。実はこの日の九月二一日、何かと不都合が多かった。午前中の公演だったにもかかわらず、窓にはカーテンもなく、舞台には幕もない。つまり暗転ができなかったのだ。場替えが丸見えだと、やはり現実世界に引き戻され、しらけた感じだった。そして、設備が悪いため、途中でマイクがハウリングを起こしたりして、私たちも劇に集中できず、散々な結果となって

しまった。さらにつらかったことは、観客の反応が、北インドでの公演に比べて著しく減ったことであつた。劇の途中で大笑いや拍手が起きることもなく、シーンとした空気の中で喜劇を演じることはとても耐え難く、今までどれだけお客さんの笑いに助けられていたかを改めて感じた。溝上教授に、南インドの人は日本人と似ていて、おもしろくてもストレートに表現せず、自分だけで楽しむ傾向があると教えられたが、やはり言葉の障害も大きかつたのではないだろうか。私たちは、二、三年間ヒンディー語を勉強してきたが、現時点でヒンディー映画を字幕なしで見ても、ヒンディー語を母語とするインド人が大笑いするシーンで自分も一緒に大笑いできるかというところ、到底無理である。中学校から学んできた英語でさえそうだろう。ヒンディー語を母語としない地域でヒンディー語劇をすることの難しさを痛感した。

コーチでの上演（観客数約一八〇）

インド亜大陸の最南端、カンニヤクマリー（コモリン岬）の観光を経て、列車でコーチへ。コーチは人口約六〇万人。ここも旧名コーチンとしての方がよく知られた港湾都市である。トリヴァンドラムの北方約二〇〇キロメートルに位置する。最寄のエルナクラム駅に着いてすぐに目に付いたのは、一週間前から掲げられていたという、私たちが歓迎した横断幕であつた。そして、到着時刻は夜の九時過ぎだったにもかかわらず、約二〇人の人が私たちを駅で待っていて、全員に花束まで用意してくれていた。九月二三日の公演当日も、会場の南インド・ヒンディー語普及協会では、

盛大なセレモニーが私たちを待っていた。南インド・ヒンディー語普及協会は文字通り、南インドでヒンディー語を普及させるために、国父マハトマ・ガンディーによって設立された組織で、本部はチェンナイにある。鼓笛隊の生演奏と、大勢のお客さんの手拍手に包まれながら、花びらがまかれる花道を通って私たちは会場入りした。そして一人ずつ壇上に呼ばれ、トロフィーを頂いたのだ。

これだけよくしてもらったのだからと意気込んだ劇は、残念ながら、空回りに終わってしまった。やはり北インドの映画の歌は知らない人が多いのであるうか、いつも拍手喝采を受けるRさんの歌でも、会場はずっと静かなままだったし、劇の最中も何度か時間差で笑いが起きたくらいであった。しかし、彼らの歓迎ぶりは十分に伝わってきたし、私たちが一生懸命演じるその気持ちもしっかり伝えることができたと感じている。

次の日、主催者の方々に観光に連れて行って頂いたのだが、バスやボートの座席が、女性が前方、男性が後方と別れていたのが印象的だった。以前は女性が後部だったらしいが、女性に



マラーヤラム話の歓迎幕の下を鼓笛隊に迎えられる

安全な席を確保すべきだと、ストライキで前方座席を勝ち取ったらしい。夜は、ケーララ地方の古典舞踊劇、カタカリダンスを見に行った。顔や瞳や手が生み出す様々な表現力には、歌舞伎との共通点も見られ、本当に魅せられた。

ゼネストのムンバイでの上演（観客数約八〇）

ムンバイへ向かう飛行機の中で、とんでもないニュースが飛び込んできた。なんと九月二六日の公演当日、ゼネストで街全体がストップし、劇は中止になるかもしれないのだという。グジャラート州のヒンドゥー教寺院で、イスラム教徒による銃乱射テロ事件があり、三〇名以上が亡くなったらしい。最後の公演が中止になるかもしれないと聞き、皆ショックを隠せなかった。

本番当日、朝からひたすら待ち続けた。ホテルの中にいると実感が湧かなかつたが、窓から外を覗くと、人通りも車の行き来もほとんどなく、店も全て閉まっかけていて、やはり街全体でゼネストが行なわれていることが窺えた。電話も通じず、女の子や溝上教授とは別に、ヒンディー語科卒業生の前田さん宅にホームステイしていた男の子たちとも連絡が取れないままで、不安ばかりが募っていた。

もう本当に無理なのかもしれないとあきらめかけていたその時、男性陣が私たちのホテルに到着した。苦労して流しのタクシーを見つけて来てくれたのだ。希望が見えた！皆で行こう！たとえお客さんが一人でも、その一人のために劇をやろう！意気込んで準備に取りかかった。いざ外に出て

みると、やはり静かであった。ようやくつかまえたタクシーは、行き先を告げると、「あの辺り人を乗せて走っていると、石でも投げられそうで怖いから行きたくない」と断られた。そんなに深刻なのか、次につかまえたタクシーで、道具チェック係の私、音響係のRさん、照明係のNさん、ビデオセットのT君が、まず会場へ向かった。最近ムンバイで若い外国人女性が乗っているタクシーを狙った強盗事件が多発しているらしかったので、シヨールやサリーの端などで顔を隠してスラム街をタクシーで通り抜けていった。

会場のマイソール・アンシエーション・ホールに着くと、すでに関係者の方々がたくさん来ていて、準備を進めてくださっていたのでとても嬉しかった。あつという間に開演。お客さんは少ななかったけれど、私たちも精一杯演技をし、お客さんもよく笑ってくれた。劇終了後、舞台上からお客さんを見て、胸が一杯になった。あきらめかけていた公演がちゃんと実現して、このような状況下でもこれだけの人が私たちの劇を見に来てくれたことが本当に嬉しかった。

またムンバイでは、ある芸能プロダクションによるビデオ撮影も行なわれた。溝上教授が、今後のヒンディー語劇の紹介などに使うため、また、私たちの一生の記念のためにと多額の投資をしてくださったのだ。撮影は公演本番終了後に行なわれたので、夜中の一二時頃まで続いた。皆緊張したのか、気合いが入りすぎたのか、けっこうNGが出たが、とてもいい思い出になった。全て終わった後、皆で気持ちよく「お疲れ様」と言い合えたことが頑張った証である。最後まで公演できて本当に良かった。この公演を主催してくれたムンバイの印日協会の機関紙に私達の上演のことが大き

くとりあげられたが、その見出しが非常にユーモラスだったので紹介しよう。

「大阪外大生、ムンバイバンドの日に心を売る店を開く！」（「バンド」は縛りという意味で、ゼネストを指す。「縛る」と「開く」でしゃれたのである。）

（小林真衣）

この公演旅行を終えた学生達は、帰国後めいめいの感想文を綴った手書の文集を作った。仲間だけの記念のために作ったもので、公刊されたものではない。その文集に私（溝上）は、次のような「巻頭言」を寄せている。

ジョイフル・ヒンディー語劇！

還暦を迎えた二〇〇一年と二〇〇二年は、私にとって素晴らしいことばかりが続いた年でした。まず、二〇〇一年五月に、シャーストリーUP州知事より「ヒンディー・ラトナ（宝石）」賞を受賞しました。立派な盾と賞金一萬ルピーをもらいました。一〇月には、東京の「ナマステ・インディア祭」ではじめて日本のドラマ「鏡草子」を上演して好評を博しました。それを二月に大阪外大でインド大使に見てもらったことから、何と二月八日の、ホテル・ニューオオタニ大阪でのバジパイ首相歓迎レセプション席上で上演という、世紀に一度あるかというような凄いことが実現できたのです。その余勢を駆って、二〇〇一年二月から二〇〇二年一月にかけての北・東インドの六

都市での公演でも、大使・公使・州知事・州首席大臣等多くのVIPに観劇してもらったこと、クシナガルの野外劇場で二千人の観客を集めたという画期的な成果を含めて、大成をおさめました。余りにも良い事が続きすぎるので、今度は何か悪い事が起るのではないかと冗談を言っていたら、このインド公演から帰国後すぐに、「慢性硬膜下血腫」で緊急入院、手術という羽目に陥りました。これは恐らく「後厄」というやつなのでしょう。脳の手術と聞いて肝をつぶし、もはやこれまでと一時は観念しましたが、医師の適切な措置とインドの神々の慈悲のおかげで、不死鳥のように甦りました。退院後はすっかり元気になり、七ヶ月の間に四回も渡印しています。大体私は、一九四五年の神戸大空襲を生き残り、一九九五年の阪神・淡路大震災も生き残り、今また大病から生還というように、「サバイバル」に強いのです。

退院後真つ先にインド政府から届いた朗報は、長年のヒンディー語研究と教育への貢献により、大統領より直々に「ジョージ・グリアソン」賞を贈るというものでした。世界で八人目、アジアで二人目、日本人で初めてという名誉な賞です。小躍りして喜んだことはいまでもありません。それまで三〇数回に亘って実施していたヒンディー語劇の海外公演が評価されたことは、間違いがありません。ということとは、この名誉は、これまでヒンディー語劇に参加した卒業生や上級生を含めた君たち全員に与えらるべきもので、私は「右総代」に過ぎないのです。一〇月一日に大統領官邸で行われた授賞式（「鏡草子」に出演した四人の学生も私の妻と共に参列しました）では、そのようなスピーチをして盛んな拍手を浴びました。賞金一〇万ルピーとシヨールと立派な銅版の賞状

(アシヨールカ王の碑文もそうですが、インドでは重要な文書は銅版に彫る伝統があります) をもらいました。身に余る光栄！感動的でした。

受賞が決まったとき(授賞式の日程は未定で、新大統領に変わったこともあって、なかなか決まらなかったのです)、九月一四日の「ヒンディー語デー」(ヒンディー語がインドの公用語と決められた日)を予測して、その日を挟んで、初の南インド遠征を含むインド七都市八回の公演旅行を企画したのです。一年前から念入りにリハーサルを重ねてきた「心を売る店」で、かつてないほどの爆笑を客席から引出す事に成功しました。但し、大統領官邸での授賞式の席上でこの「心を売る店」を上演するという私の野望は、一時実現するかと思われましたが、結局授賞式が一〇月にずれこんだために、前年の「鏡草子」を官邸ではなく、その日の夜、中央ヒンディー語研究所デリー支部で開かれた、受賞者祝賀夕食会の席上で、仮設舞台を作ってもらって演じることになりました。ところが、住宅街の真中に位置するこの研究所の隣家では、ちょうど結婚式の真っ只中で、楽隊が奏でる騒音で演技は妨害されました。このような場合でも、インドでは絶対止めさせることはできません(結婚式ほど重要な行事はないのです)。それでも、大声を張り上げて芝居を終えましたが、出演者にとっては、涙の出るような経験でした。やはり、何もかもうまくいくとは限らないのです。しかし、結婚式に妨害された公演というのも初めてであり、何につけても話題に事欠かないインドの上演は、これはこれで、忘れ難いすごい経験をしたともいえるでしょう。「開き直り」の論理も必要です。

「心を売る店」「僕たちもう自由だー」も演技という点で秀逸でありました。全員がそれぞれの役になりきり、パワーフルな演技を繰り広げた事が、各方面から高い評価を得た最大の理由です。これほど、層の厚いキャストが揃ったことはかつてありませんでした。帰国後の東京公演・神戸公演では、それぞれ両外大の学長に観劇（そして感激！）して頂いたのも、すごい出来事でした。今回で引退する諸君もいて、寂しくなりますが、今年はまだ、全インド演劇祭参加という、実にエキサイティングなプログラムが待っています。楽しみです。私の今の高揚する気持ちは、最近見た「K—19」という映画で、ハリソン・フォード扮する旧ソ連の原子力潜水艦のボストリコフ艦長が乗組員に対して述べる次のスピーチに凝縮されています。

Without me, you are nothing. Without you, I am nothing. All of you are heroes!

もちろん、語劇以外にもいろんな才能を持っている君たちを nothing といつては失礼です。また、ボーパールでは、病のため私がいなくても、君たちだけで立派に公演を果たしたわけですから、nothing、ごうるか、something greats です。しかし、部下との一体感を吐露したボストリコフ艦長のこのスピーチに、座長たる私は自分の気持ちを重ねて、いたく感動したのです。まさに、「ジョイフル・ヒンディー語劇！」ですね（このコピーは、宝塚歌劇の演目から拝借しました）。敵を殲滅せんとする潜水艦と違って、私たちの草の根活動は、国際親善・日印の文化交流に貢献しているのですから。

溝上富夫（二〇〇三年一月）

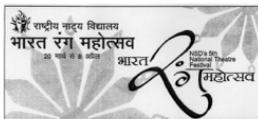


第十章 全インド演劇祭で「夕鶴」を上演

この章も小林真衣さんのレポート（『ボランティア教育叢書第八号』二〇〇二年、四〇～四八頁）をほぼ原文のまま転載することとする。

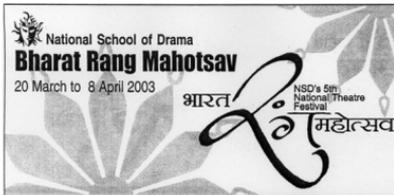
全インド演劇祭とは

まず、私たちが参加した全インド演劇祭について少し話しておきたいと思う。毎年三月から四月にかけて約三週間に亘ってデリーの国立演劇学校主催で行われるこの演劇祭は、今年で五回目を迎える。この演劇祭のために、総額一〇〇〇万ルピー（日本円に換算すると約二七〇〇万円だが、インドの総国家予算が東京都の総予算額とほぼ同額というから、実際は約二七億円ぐらいの価値があることになる？）が国家予算に組み込まれているというのだから、この演劇祭の規模の大きさが分かるだろう。実際、私たちがデリーにいる間の滞在費は全て演劇学校側が負担し、さらには、一人につき三〇〇ルピーの日当が支給された。プログラムごとに美しい光沢紙に印刷された豪華なパンフレットにも驚く。私たちがプロの俳優のように紹介されているのだ。今年の参加者数は八七団体、約三五〇〇人、言語は十七言語にも及んだ。インド以外の参加国は、日本、モリシヤス（ヒンディー語）、シンガポール（英語）、スリランカ（シンハラ語）、ドイツ（一人によるパントマイム）であつ



23 मार्च तक की कार्यक्रम

दिनांक	समय	स्थान	कलाकार	कला
23	3:00 pm	SARABUKH
23	6:30 pm	SRG
23	6:30 pm	YOGA HALL
23	7:30 pm	KAMANG
23	7:30 pm	OPEN LAUND
23	8:30 pm	ADISHANKAR



PROGRAMME UPTO 31 MARCH

Date	SARABUKH	SRG	YOGA HALL	KAMANG	OPEN LAUND	ADISHANKAR
March 23	PARVAT (Hindi) Director: Anandav Writer: Saravanan Crew: Suresh Dir: Prasad Dasgupta Duration: 1 hour	SABU (Hindi) Director: SPC Ray, Co. Chatterjee Writer: Mihirbanjan Das Dir: B. Karan	MOON KANTAR (Hindi) Director: Kapur Anandav Writer: Anandav Dir: Prasad Dasgupta	SOCHI KANTAR (Hindi) Director: Kapur Anandav Writer: Anandav Dir: Prasad Dasgupta	JAI CHANDAN (Hindi) Director: Academy of Film and TV Writer & Dir: Sang Anandav Member: Narmada Dir: Narmada	SRITA KI AATM (Hindi) Director: Academy of Film and TV Writer & Dir: Sang Anandav Member: Narmada Dir: Narmada
March 24	USHA RAOPAN (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	KULDEVIJAYANTA (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	INDUJINGTA (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	AMBI AUR BARAN (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	KAHAI (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	KAHAI (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav
March 25	KANTAR (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	PINKI AND ASHA (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	DOLI KI RISHABH (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	SOCHI KANTAR (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	KANTAR (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	KANTAR (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav
March 26	SOOPIKA KA SAPTA (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	JAGTI KI PUCHHO (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	HANSHI BAN (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	BATHE BENE (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	TEHAKKARAN (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	TEHAKKARAN (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav
March 27	AMANDI (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	SARAI RAAT (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	KANTAR (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	KANTAR (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	KANTAR (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	KANTAR (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav
March 28	BAHUBALI (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	SACHETI (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	LAHAWA (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	BALYOGAL (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	CHANDI (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	CHANDI (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav
March 29	PARVAT (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	TURE, BANARAS (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	DE KIN (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	KANTAR (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	KANTAR (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	KANTAR (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav
March 30	SAARAS PREM (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	SAARAS PREM (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	SAARAS PREM (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	SAARAS PREM (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	SAARAS PREM (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	SAARAS PREM (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav

— 裏面 —



SAARAS PREM & BURE PHASEN MUHABBAT MEIN (Hindi)
Osaka University of Foreign Studies,
Osaka, Japan
Dir: Tomio Mizokami

SAARAS PREM & BURE PHASEN MUHABBAT MEIN (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	SAARAS PREM & BURE PHASEN MUHABBAT MEIN (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	SAARAS PREM & BURE PHASEN MUHABBAT MEIN (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav	SAARAS PREM & BURE PHASEN MUHABBAT MEIN (Hindi) Director: NDD Reg. Co. Delhi Writer: Anandav Dir: S.P. Anandav Dir: S.P. Anandav
---	---	---	---

— 拡大 —

全インド演劇祭の多彩なプログラム。なお、裏面はヒンディー語で刷られている

だが、自国の公用語以外での参加は、唯一我がヒンディー語劇団とモーリシヤス代表のみであった。しかし、モーリシヤスからの参加者は全員がインド系住民であり、彼らにとってヒンディー語は「外国語」とはいえない。そして、全くの素人劇団の参加というのもきつと私たちだけだっただろう。演劇祭としては全くの異例なことであるが、やはり、インド各地で重ねた過去の公演実績が評価されたものと思う。また、ひとつの劇団がふたつのドラマをやるのも私たちだけで、これを実現させたのも溝上教授の手腕だと思われた。

二つのドラマの一つは、バーラクラム・ナーガルという人の作品「恋の罫」で、登場人物はわずか三人。「性格が一八〇度異なる二人の姉妹が、巧みに二重人格を演じる同じ男を愛して、結婚の約束までする。しかし、二人の前に現れたこの男の正体を知って驚く」というドタバタ喜劇。姉妹を「鏡草子」で母娘役を演じたベテランのWさんとAさんが演じ、主役の男性をやはり海外公演の経験が一番豊富なOさんが演じることになった。WさんとAさんは、共にインド留学中で現地参加だったので、三人揃ってのリハーサルはデリーに着いてから初めて行われた。時間不足をベテラン先輩の経験と演技力で補うこととなった。

もうひとつの作品は、日本の民話「鶴の恩返し」に基づいて木下順二が脚色した「夕鶴」である。溝上教授が直接木下氏に手紙を書いて、ヒンディー語への翻訳とインドでの上演の許可を得た。全インド演劇祭は「国際祭」でもあるので、日本文化紹介によって日本代表のアイデンティティーを示したいとの意図で「夕鶴」上演が決まった。

私は日本語の「夕鶴」の台本を読んだとき、最後まで読みきる前に、感動して涙をこぼしてしまつた。そして、ぜひ主役の「つう」役を演じたいと、溝上教授に名乗りをあげた。即座に教授は、「これまででは、インド人観客を笑わせてきたが」「インド人を泣かそう!」を合言葉に一丸となって成功させようと、激励してくださつた。教授がかつて「産経新聞夕刊」(二〇〇〇年四月一〇日付け「ライバル徹底研究 東京外国語大学・大阪外国語大学」)で「次はシリアスなドラマに挑戦して観客を泣かせたい」と公言したことがいよいよ実現するのだ。私の演技にすべてがかかっていると、身を引き締まる思いがした。

「夕鶴」といえば、一〇〇〇回以上も上演したといわれる山本安英のつうが有名だが、一九八六年を最後に上演されていないときく。ぜひビデオを見て学びたかったが、ビデオも市販されていないことを知つてがっかりした。わずかにNHK教育TVで放映されたオペラの「夕鶴」(音楽は團伊玖磨)を参考にした。つうを演じていたのは、ソプラノ歌手の鮫島有美子だった。オペラだから直接の参考にはならないが、それでも芝居の雰囲気をつかむのに役に立った。

今年の演劇祭の開催期間は三月二〇日から四月八日までで、七つの会場で時間をずらして一日にそれぞれ一つの劇の上演が行われた。できるだけ多くのドラマを観てもらおうという主催者の配慮だ。七つの会場はいずれも徒歩で移動できる便利な場所にあった。私たちの出番は三月二十九日。一般の人は、観劇のために、招待券もしくは有料のチケットが必要だが、演劇祭参加者の特権として、私たちは無料で、他の一流の劇団による素晴らしい劇を毎日観劇することが出来た。それでは今回

私たちが実際に経験した全インド演劇祭について報告していきたい。

最高だったデリーでの上演（観客数約四三〇）

三月一五日に日本を出発。その日の夜に首都デリーに到着した。演劇祭の開会式は二〇日。それまで毎日劇の練習と、それぞれ自由にデリー市内を観光・買い物などして楽しんだ。ホテルの食堂の外にあった大きなテラスで練習していると、従業員が劇を見に集まり、ギャラリーがいると、しかもそれがインド人となると、益々頑張ることができた。私たちが劇を上演する予定となっているアビマンチという劇場を使用させてもらえるのは、二〇日と本番当日のみだったので、二〇日は朝から張り切って練習に臨んだ。やはり演劇祭だからであろう、例年に比べ、演劇学校の人達も準備にはとても力をいれ、本格的なセットが出来上がっていた。またこの日、去年九月のインド公演でインタビューを受けたことで知り合った佐藤雅子さんが、カタックダンスの練習でちょうど演劇学校に来校中で、私たちの劇の練習の指導を仰いだ。佐藤さんは本当に感性が豊かで、一度見ただけですぐに私たちが今まで気付かなかったことを次々と指摘・提案してくださり、本当にためになった。

三月二〇日は演劇祭の開会式の日であった。夕方、私たちはそれぞれ浴衣や着物を着て、開会式に参列した。国立演劇学校の理事長でもあり、有名なポリウッド俳優でもある（映画の盛んなムンバイの旧名ボンベイが、ハリウッドに対してこう呼ばれるのは有名だ）アヌパム・ケール氏のユー

モラスな挨拶に始まり、演劇学校出身の著名俳優の追悼式や彼の一生を表現した音楽劇の上演など、開会式は実に多彩であった。演劇祭と並行して、その時デリーでは人形劇祭も開催されており、開会式会場のちょうど隣で人形劇をやっていたので、少し覗きにいつてみた。その日上演されていたのは「ラーマーヤナ」で、大学の授業で習ってストーリーを知っていたので楽しめた。

そして三月二一日。いよいよ演劇祭がスタートし、他のプロ級の劇団による演劇をライブ観賞したことで、私たちの意識もグンと変わった。その日観劇したムンバイの劇団は、映画俳優や女優（ニーナ・グプタが特に有名）が出演する、まさに映画関係者ばかりの劇団であり、レベルも並大抵のものではなかった。独白シーンの見せ方や照明・舞台の使い方などとても参考になり、素晴らしい劇を観賞して本当に感動した。と同時に、八日後同じ舞台で自分たちが劇を上演しているところを想像して焦った。おそらくメンバー全員が同じ事を考えていたの



「恋の罟」の舞台

だろう。次の日から劇リハーサルに臨む皆の意識や姿勢が一変したのは言うまでもない。こうして私たちの劇はさらに改善されていった。

三月二十八日。ネルー大学で「夕鶴」の第一回公演を行った。演劇祭本番前にぜひ一回上演をしておきたいという思いと、日本文化に興味を持っている日本語専攻の学生達にこの劇を観てもらいたいという願いが叶ったのである。急遽決定した公演だったため、観客も少なく、設備も悪かったが、この一回の上演が自信に繋がり、いい起爆剤にもなった。公演後、ネルー大学の日本語専攻のモトワニ教授から、一箇所台本ミスの指摘を受けた。一語一語注意して聴いておられたが故の指摘であったので、発するヒンディー語がちゃんと伝わっているんだな、という実感と、本番で一語たりとも間違えないよう、特に発音には細心の注意を払わなければというプレッシャーを感じた。

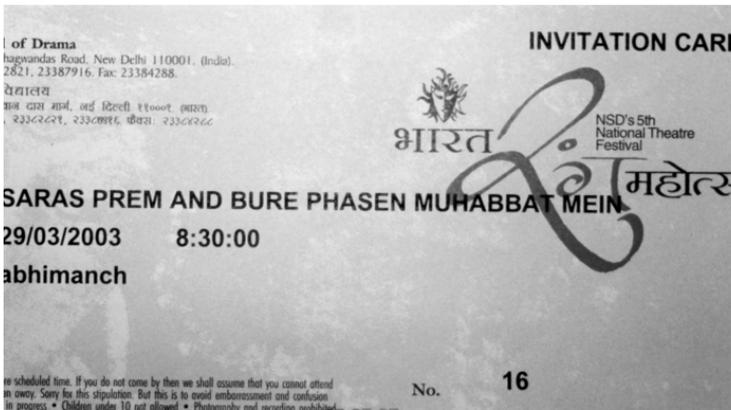
そして迎えた本番、三月二十九日。午後八時からの公演



鶴が機を織るシーンが一瞬ライトで映し出される



全公演旅行を通じて最大の公演回数（7回）を誇る国立演劇学校内の「アビマンチ」劇場



大阪外大生の演じる「夕鶴」と「恋の罫」の招待チケット

であったが、朝九時には会場入りし、最終的な細かい打ち合わせを進めて行った。とても設備のいい劇場だったので、それらを最大限に生かし、劇をできるだけ理想に近づけたいと思って、私は「夕鶴」の照明を担当したOさんに次々と注文を付けた。ヒンディー語に堪能なOさんが、照明係のインド人と積極的に交渉してくれたおかげで、スムーズに理想を現実化していくことができた。実は、日本のドラマをやるのは衣装や小道具の点で、インドのドラマをやる以上に大変なことなのだ。私は早くから着物二枚の準備をし（途中着替えもある）、スタッフ（人手不足のため、実際はキャストが兼ねる）は本物の障子をインドまで運搬するなど、できるだけ日本の雰囲気伝えるためにあらゆる努力を惜しまなかった。食器も日本製を持参し、子役のために浴衣と藁ぞうりも持参していた。子役には、インド留学中のWさん、Aさん、Mさん以外に、デリーの日本人学校で学ぶ、本当の子供三人に出演してもらった。日本人学校を通じて事前に依頼しておいた。

長いと思っていた準備もあっという間に過ぎ去り、気がつくともう本番直前。三人のベテラン先輩さんが出演する「恋の罫」は、練習期間も短く、これが初公演であったため、ベテランの三人といえどもとても緊張している様子だった。私たちも少し心配していた。：がそんな不安はベテランの好演技と観客の大爆笑で吹き飛ばされてしまった。前回の「心を売る店」をしのぐかと思われるほど、何度も沸き上がる爆笑と拍手。観客の多さとノリの良さ。

そして一作目の劇の大成功は、舞台裏で待機していた私たちにも十分伝わってきた。掴みはオーケード。しかしやはり不安もあった。シリアスな内容を正確に伝えるために、発音や台詞には最大

限の注意を払わなくてはならないし、微妙な感情の変化を、間や仕草、声色、表情などでうまく表現しなくてはならない。緊張ありき。しかしその引き締まる緊張感が、今までの最高の演技を生み出したに違いない。大勢の観客、素晴らしい設備：私たち自身の気分を盛り上げる環境は全て揃っていた。劇の世界に入り込み、役になりきり、夢中で演じて……。劇終了後、客席の電灯がついて、改めて、万雷の拍手を送る観客の多さに驚いた。三五〇人収容の劇場に、四三〇人余りの観客。立ち見席ばかりか、通路の床まで座りこんで見ている人がいた。まさに、「立錐の余地もない」ほどの状態だった。日本なら、消防法違反になるだろう。後ほど聞いた話によると、その日までの観客最高動員数を記録したのが私たちの劇だったとか……。溝上教授の舞台挨拶もかかってないほど熱っぽいものだった。「つうに完全になりきった小林さんは、本当に涙を流して熱演しました。私の目には、皆さんのかくも盛大な拍手と暖かい激励を受けて、喜びの涙が溢れています」と。先生もなかなかの役者ですね！

舞台上がって私たちに握手を求めた大勢の観客と話していると、まるで同窓会のような気分であった。昨年九月の公演を見に来てくれた人、前回ホームステイでお世話になった（今後もお世話になる）サチュデーヴ夫人、「ポッコちゃん」で主役を演じたバーヴナーさん、以前本学で教えておられたシュリーヴァースタヴ先生と娘のグンジャンさん、スジャーター先生、故バクシー先生の夫人と娘、京都産業大学の矢野道雄教授、練習中に演劇学校の食堂で出会った学生や、開会式で知り合いになった人達……本当に嬉しかった。さらに驚いたことに、回収されたアンケートの枚数も過

去最高であった。二〇〇人以上の人が、アンケートに記入し私たちの劇に対して反応を返してくれたということは、私たちの劇がそれだけ多くの人の心に大きな印象を与えることができたと考えてもよいだろう。アンケート記入の呼びかけに協力してくださった、現在インド留学中の先輩小松久恵さんに大変感謝している。では、アンケートにどのようなコメントが書かれていたか、少し紹介してみたい。

- ・ ヒンディー語を話してくれてありがとう。自分の国の言葉とあなた達を誇りに思います。
- ・ 本当に感動しました。これからもずっと続けていってください。
- ・ もっと頻繁にインドに来て公演してほしい。
- ・ 毎年上達している。
- ・ 言葉は障害ではない。芸術には国境や言葉の壁は存在しない。
- ・ 最後のシーンには泣けてきました。

身に余る程嬉しいメッセージだ。「夕鶴から日本の感情の素晴らしさ、美しさがとてもよく伝わってきた」というコメントもあり、日本の劇をインドでこのように紹介できて本当によかったなと思った。又、喜劇と悲劇、インドのドラマと日本のドラマの組み合わせもよかったとの感想もあった。日本語でコメントを書いてくれた人も多くいた。そして特に目立ったのは、記入欄を特に設けてい

たわけではないのに、自分の名前・電話番号・住所を書いてくれる人がとても多かったことだ。これを機会に私たちとコンタクトを取りたいと思ってくれている人がこんなに大勢いるのだと知り、とても嬉しかった。また、「話の内容や演技は excellent だが、発音は good だ」という意見もあり、劇よりもまず先にヒンディー語があり、正確な発音で台詞を観客に伝えることができて初めて劇が成り立つのだということ、しつかり胸に刻みつけておかなければならないなど思った。アンケートの集計をしてもう一つ驚いたことは、観客の母語の多様性だ。ヒンディー、タミル、パンジャビー、テルグ、ベンガリー、マラーティー、ネパリー、ウルドゥー；等々、実に一五言語近く見受けられ、多言語国家インドを改めて感じた。そしてこのような環境の中、上演したことを本当に誇りに思う。子役としてエキストラ出演してくれた、デリー日本人学校の池田愛ちゃん、松木結ちゃん、池田めぐちゃん、ありがとう。その他、この日まで私たちを支えてくださった多くの方々に感謝の意を表したい。

ボーパールでの上演（観客数約三〇）

デリーでの公演を終えると、帰国までの一週間に四回も公演するという離れ業をやったのけた。まず訪れたのはボーパール。昨年九月の公演で最も反応が良く、一番印象に残った町だったので、ぜひもう一度ボーパールでやりたいという私たちのアンコールに応えた公演実現だった。だからこそ期待していたし、演劇祭での成功を経て皆自信をつけていただけに、三月三二日いざ本番を迎え、

観客の少なさを知って、誰もが驚いてしまった。実は、ちょうどその時、芸術の町ポーパールでも演劇祭が行われている最中であり、昨年九月に私たちが公演したバーラト・パワンという劇場では、五日目のイベントが行なわれていた。つまり、少し離れたラビンドラ・パワンという劇場で公演した私たちの劇は、いわば裏番组的な存在になってしまったのである。しかし、そのような状況下にもかかわらず、見に来てくださったお客さんのために、私たちは精一杯の演技を披露した。去年もお世話になったサルマンカーンさんが、仕事を休んでまで、私たちの劇の成功のために、一日中一人で駆け回り、助力を惜しまなかったことは、殊の外嬉しかった。この日、残念ながら観客は少なかつたけれど、大きなテレビ局や新聞社から取材を受けた。そして、翌日の朝刊には次のような記事がでていた。「フランスから来たロックバンドと、日本から来た日本人の劇団……この日の主役は外国人であった。しかし双方の違いは、日本人が日本語ではなく、ヒンディー語で劇をしたということだ」。なお、上演のあくる日、私たちは終日バスで、ウツジャイン見学を楽しんだ。かの詩聖、カーリダーサの生誕地といわれる町で、有名な寺院が多く軒を並べていた。

プネーでの上演（観客数約三五〇）

プネーまで南下すると、いよいよ暑さでやられてしまいそうだった。会場となったプネー大学の講堂は、普段は全く使われていないのか、汚く、設備もほとんど整っておらず、劇をするコンディションとしてはかなり悪かった。掃除に手間取り、照明・音楽担当者もギリギリまで来てなかつたので、

マイクテストもままならず、四月三日の本番を迎えることとなってしまった。その結果は：会場の後ろに立ち見の人が続出するほど観客は一杯だったにもかかわらず、なんと会場の前半部分にしか声が届いていないという非常に残念なことになってしまったのである。マイクの力を借りなければ客席の後ろまで声が届かないとは何とも情けない話ではあるが、これではせっかく来場した観客にも申し訳ないし、本当にもつたいない。同じ過ちを繰り返してはいけないと思い、「夕鶴」までのインターバルに、マイクの配置に一番注意し、劇中ではできるだけ大きな声をだすよう努力した。結果、本当に一番後ろまで声が届いていたかどうかはわからないが、個人的には長い独白シーンの後、拍手を浴びてとても嬉しかった。そして劇終了後、溝上教授が挨拶をしている時に、改めて舞台上から客席を見渡すと、涙を拭う観客を何人も見つけたのである。「夕鶴」の台本をもらった頃からずっと、「今年の目標はインド人を泣かせることですね」と溝上教授と話を合わせてきたので、それを達成でき、「やりましたね」と満面の笑みで教授と熱い握手を交わした。プネーでは、インド在住で仕事をしている語劇の先輩宮川礼さん、日本に留学していたワイシャリーさん、長年日本で働いておられたバシユさんに特にお世話になった。紙面を借りて感謝の意を表したい。

ムンバイでの上演（観客数約三〇〇）

ムンバイ公演は、インド商業会議所主催で四月五日に行われた。会場は、チャーチゲート駅に近い、ムンバイ大学付属のキシシ・チャンド・チェッララム・カレッジにある五〇〇人収容のとて

も綺麗なホールで、ACまで完備されており、設備の面では非常に有難かった。本番寸前まで揃わなかったものの、私たちだけのために大工を雇い、本格的な舞台装置を準備してくれていたことからも、主催者の熱意はとてよく伝わってきた。そしてここでも、劇の後涙を拭っている人を何人か見た。小さな子供にはサインまでせがまれてしまい、嬉しい限りであった。ほとんど申し分ない公演だったが、やはり五〇〇人収用のホールに三〇〇人の観客というのは少し寂しい気がした。主催者に任せきりで、自分たち自身では全く宣伝活動を怠っていたことを反省した。当日、空いた時間に会場周辺でピラ配りをするなど、やりようによってはもっと多くの一般客に見てもらえたかもしれない。所詮素人劇団であるのに、謙虚さと少しの努力を忘れかけていた自分を恥じた。

この日の夜は、男性メンバー二人と溝上教授がホームステイしていた、ヒンディー語科卒業生の前田健二さんに、前田さんが世界一と誇る特大のカニ料理をごちそうして頂いた。インドでこんなおいしいものが食べられるとは思っていなかったと、皆夢中で減多にお目にかかれない絶品を堪能した。

ナーシクでの上演（観客数約三〇〇）

四月六日の朝五時過ぎにホテルを出発し、六時頃の列車で、宗教都市ナーシクへ。人口は約一〇八万、マハーラーシュトラ州四番目の大都市である。そしてその日の夜に本番という連日公演。ナーシクは、語劇のインド公演では初めて訪れた都市でもあるからというから、それも理由の一つ

だったのであろうか、主催者である印日協会の人々の歓迎ぶりは甚だしいものであった。予定表に三〇分単位のタイムスケジュールがびっしり記されており、これは日本から学んだのではないだろうかと思わず苦笑いしてしまった。レセプション、そしてさらには食事まで用意されており、なんだかも劇が終わったかのような雰囲気になっていたが、気を引き締めて会場へ向かった。会場では、前の舞踊団体のイベントがまだ続いており、私たちは舞台が空くまで待つしかなかった。本番は九時から：なのに、九時を過ぎてもダンスはまだ終わらない。聞いてみると、彼らは追加料金を払って時間延長を申し出たので、九時まで舞台を使うのだという。結局、九時から照明合わせや大道具のセットなどを行い、一時間遅れの一〇時に劇はスタートした。劇に先立つセレモニーはすべて、この地域のマラーティー語で行われた（なお、今回公演した五都市のうち、ブネー、ムンバイ、ナーシクはいずれもマラーティー語地域であるが、南インドと違って、ヒンディー語の理解にはならぬ支障はなかった）。会場自体は一〇〇〇人収容のとても大きなホールで、印日協会の人たちも一二〇〇人に招待状を出したらきつと満席になるだろうと予測していたが、日曜の夜遅くという日程のせいか、観客は三〇〇人ほどしか集まらず、劇が一二時近くまで続いたため、途中で帰ってしまった人もいたそうだと。ともかく、私たちはラスト公演を最後まで精一杯演じきった。無事全ての公演を終える事ができたと思うと、感涙が込み上げて来た。溝上教授を始め、ともに最後までやり遂げた仲間達と健闘を称えあった。かくして私たちの大きな挑戦は、無事幕を下ろしたのである。上り列車でアーグラ、デリー方面に向かうWさん、Aさん、Mさんの三人とナーシク駅で別れ、

他のメンバーは、ムンバイから帰国するため、下り列車でムンバイに向かった。

語劇について改めて思うのは、その実用性である。台本は、まさに「生きた会話の宝庫」である。簡単な日常会話から、インド人が腹を抱えて笑う言い回しまで、実際に使える台詞が満載なのだ。デリーで出会った、ヒンディー語を学ぶ日本人留学生が、「劇の台本が欲しい」と言っていたその気持ちはよく分かる。私たちは、幸運な自分の環境をもっと自覚し、手にした素晴らしいヒンディー語会話の虎の巻を最大限に活用しなければならない。

一二月の神戸公演で、大阪外大新聞の人に、「あなたにとつてずばり語劇とは？」とインタビューされ、私はためらいなく「私自身とインドを繋ぐ架け橋です」と答えた。実際、語劇は、日本にいながらインドを一番身近に感じられる方法なのではないだろうか。自らインド人になりきろうと、インド映画を見て、インド人独特の仕草を真似てみたり、友達との日常会話の中で、使える台詞を言ってみたり……。どのような状況下で、どんな台詞を言うことが相応しいかを、語劇を通じて知ることができるといふことはとても有益である。そして、現地インド公演によって、実際にその台詞が使えるのか試すこともできるし、伝わってくる喜びを実感すれば、さらなる学習意欲が湧いてくる。

会話の授業が少なく、習った言葉を使う機会がほとんどない学習環境で、語劇という場はとても貴重だろう。週に三回会話の授業があり、流暢な日本語を話すネルー大学の学生が私はとても羨ましく思えた。私は、このヒンディー語劇を媒介として、生きたヒンディー語とインド文化に触れる

素晴らしい機会と経験を得たことを、本当に幸せに思う。

インドではどこに行っても、日本語を話せるインド人に出会った。私はそれが嬉しかった。私たちに出会ったインド人もきつと同じように感じていたことだろう。私たちがしたいのはこういうことだ。お互いのことを理解し合うために、言葉が果たす役割は大きい。両国のできるだけ多くの人に親日感情、親印感情を生み出す契機に、私たちがなり得ることができれば幸いである。実際、ヒンディー語劇を通じて、私自身はインドにさらに興味を持つきっかけとなったのだから、そうできると信じている。

(小林真衣)



第十一章 国際交流基金の助成金で初めてのモーリシャスへ

二〇〇四年の海外公演の特徴は、新たに北インドの五都市で初演をし、インド系住民の多くに住む、アフリカの小さな島国モーリシャス遠征を果たしたことである。さらに、初めて国際交流基金の「日本文化紹介派遣助成事業」から助成金を得たことである。二回目の応募で採用されたのだが、助成対象者は次に該当する者という条件がついている。

(一) 優れた業績を有する我が国の人文、社会科学分野の学者・研究者。

(二) 優れた芸術と業績を有する芸術家。

(三) 優れた技術と業績を有する生活文化分野の専門家。

(四) その他の文化分野において、特別の技能を有する専門家。

となっている。我々は素人劇団なので、厳密に言えば該当する項目がない。しかし、ヒンディー語というマイナーな言語を使って演技するわけだから、まあ(四)が適用されたのだろう。競争率は激しい。実績がなければなかなか採用されない。これまで、毎年やってきた海外公演が評価されたことは疑いがない。今年の参加学生は幸運だといえる。先輩の功績のおかげで得られた特権であることを肝に銘じて、全員よく頑張ってくれた。

なぜ、ヒンディー語劇が「日本文化紹介」？と思われる人が多かるう。日本の芝居をヒンディー

語に訳して演じるのだから、紛れもなく「日本文化紹介」である（もつとも、必ずしも日本のドラマをやらなくても、日本人が日本人の感性で演じるのだから、それだけでも日本文化紹介たりうるといのが、私の考えだが）。過去においても、原千代海作の「鏡草子」と木下順二作の「夕鶴」をヒンディー語で上演して、好評を博している。

「食欲のないおはなし」をヒンディー語で

今回取り上げた日本のドラマは、佐々俊之作「食欲のないおはなし」である。「ヒマラヤで遭難した山野登という男が冷凍人間の状態で、百年後に発見され、コオリ博士なる冷凍学の権威によって蘇生させられる。しかし、その間に地球に大変革が起こり、二一世紀には人類がもはや本能を克服した状態にある。二〇世紀の人間だった山野登は、『お腹が空いた』と空腹を訴えるが、食欲のない時代の人間には食欲の意味が分からず、若い娘たちから好奇の質問を次から次に受ける。絶望感にとらわれた山野登は『僕をもう一度ヒマラヤに戻して！』と絶叫して暴れるが、重要文化財として保存したいコオリ博士から無理やり鎮静剤を注射される…』というストーリー。荒唐無稽だが、文明批評もあって、なかなか面白いドラマである。私は、このドラマのシーンを東京からデリーに移して、コオリ博士をドクター・アイスにし、妻や助手、娘とその友達をすべてインド人にし（面白いことに、日本人の女性の名前をヒンディー語に直訳したら、すんなりインド人女性の自然な名前になった。ユキノはヒマーニー、レイコはシータルという風に）、登山家だけを日本人にしてみた。

娘とその友達には「食欲時代の人間」というテーマで研究をしている。二〇世紀の日本の歴史にも興味をもっている。インド人にとって、ヒマラヤは身近な存在なので、自然な状況設定となる。つまり、冷凍人間になった日本人がインド政府の依頼により、インド人科学者によって蘇生させられるのである。言葉の問題は？ということになるが、インド人がヒンディー語を喋るのは当たり前なので、ちようどヒンディー語劇にふさわしい。問題は日本人の登山家である。彼にヒンディー語を喋らせるには、生前彼がヒンディー語を喋っていたことにしなければならぬ。

そこで、私は、コオリ博士が冷凍人間を実験台で蘇生させた直後、その男に話しかけようとする際、助手のユキノが「ことばがつうじますか？」と問うたのに対して、「ことばは二〇世紀と變っていないよ」と答える原作の場面に、次のセリフを創作して挿入してみた。

ヒマーニー「いえ、ヒンディー語が通じますか？って訊いているのです」

アイス博士「そりゃ君通じるさ。ヒマラヤ登山を目指す日本人なら、皆ヒンディー語を学んできたものだ。日本人は勤勉だから、ヒンディー語ぐらいはできたんじゃないよ。それに、二一世紀には、アタル・ビハリー・ヴァージペーという偉い首相がいて、その人の尽力のお蔭で、ヒンディー語は今や国連の公用語なのだよ。今や、ヒンディー語を話す人の数は、中国語を話す人の数を抜いて世界一なのだよ。（ヒンディー語で）話しかけてごらん」

原作の次のセリフは、ユキノ「君、君…あなた、あんた、…お前、お前さん、…オイ、コラ…」というものだから、全く自然な形で繋がる。この三つの待遇表現もヒンディー語にちゃんとあるの

で、直訳しても何の違和感もない。英語なら「ユー」だけで、全然面白くないだろう。

ところで、原作が書かれたのは一九五〇年だから、もちろん二〇世紀で、一〇〇年後というのは、二一世紀である。しかし、このドラマを演じた二〇〇四年はすでに二一世紀である。従って、原作の二〇世紀を二一世紀に、本能を克服したとされる二一世紀を二二世紀にせざるをえなかった。前首相の名前をここに持ってきたのは、インド人の受けを狙ったもので、実際、神戸でもインドでも爆笑をとった。しかし、全く根拠のないセリフではない。かつて、同前首相がデサイ内閣の外務大臣であったとき、国連でインド代表としてはじめてヒンディー語で演説をした人である（日本では宮沢喜一首相がはじめて「英語で」演説したのとは好対照）。そして「ヒンディー語を国連の公用語にする」というのは、インド政府も目指していることである。中国語を抜いて世界最大というのはもちろん誇張だが、しかし、インド全体の人口自体は、一〇〇年を待たずに中国を抜いているだろう。

実は初演が神戸公演だったので、そのことを念頭に、もう一箇所セリフを挿入しようとしたことがある。神戸公演の当日、二〇〇四年八月二八日にヒマラヤで遭難し、ちょうど一〇〇年後の二一〇四年八月二八日に救出されるという設定で、蘇生させられた後、山野登が自分の遭難した年をなかなか思い出せない場面があるのだが、そこを「あれは確か、阪神タイガースが優勝した翌年だったなあ」とやりたかった。観客の七割は阪神ファンで、絶対会場が沸いたに違いないが、学生に拒否された。ある学生は「インド人が見に来るから」というのを理由にしたが、神戸のインド

人でも阪神ファンは多いのである。今年の出演学生は多分真面目すぎるのだろう。これまでは、事實上「溝上劇団」で、私の思う通りにやれた。その点、今年はちよつとこれまでと違うなという感じはした。我がヒンディー語劇団のモットーは、徹底してお客さんにサーブすることにあったのだが、やや「自分を」演じようとするタイプの学生が出てきたかという感じはした。良いか悪いかは分からないが、「見てもらう」から「見せる」への明らかに微妙な変化を感じた。確かに「阪神タイガース」は些細なことだ。なくても一向に差し支えがない。しかし、神戸公演のみは、ユーモアとしてあつてもよかつたと思うが、それを「差し支えある」と真面目に考える学生（別に巨人ファンではないが）が出てきたのが変化であつた。まあ要するに、芝居の完成度を高めさえすればそれでいいのであつて、阪神タイガースに拘るのも大人げがないと判断して引つ込めた。多分、読者の中には、「そりゃ、やれば面白かつたのに」という人がいると思う。なにしろ阪神の優勝というのは滅多にないので、関連づけて覚えやすいという「真实性」はあるのだ。今でも、私は一九八五年といえば、他の事件は思い出せないが、阪神タイガースの二一年ぶりのリーグ優勝と初の日本一となった事を思い出すのだ。

とにかく、今年の目玉は、この「食欲のないおはなし」であり、マニラール・トリパーティー駐日インド大使を東京から招いて実施した神戸公演（一〇周年を記念して兵庫県民会館内の、三六〇人収容できる大ホールで上演した）での初演は大いに受けた。大阪外国語大学の是永駿学長も招待したが、中国語が専門だけに、「中国語を抜いてヒンディー語が…」というセリフには笑っておら

れた。実は、このアイズ博士は私自身が演じたのであった。ちようど地でいける老人役であり、キャスト不足(男性は二人しかいない)をカバーするためとはいえ、私も久しぶりに張りきったのである。

オール女性で「お姑さん、用心なさい！」を

さらに、このインド・モーリシャス公演用に、もう一作短いドラマを用意した。シャイル・ラストーギーというインド作家の書いた「お姑さん、用心なさい！」という喜劇である。二〇〇三年は、「夕鶴」の実演を学内で見て刺激を受けたためだろうか。女の子が七人も入団した。男子は一名だけだった。全員が出られるようなドラマを選ぶのは至難と思われたが、幸い、登場人物が全員女性というドラマが見つかった。「姑からの虐待を受けた嫁達が姑たちを告発する集会をひらく。その集会に、嫁に化けてスパイとしてもぐりこんでいた「姑協会」の事務局長が、駆けつけた彼女自身の嫁に正体を暴かれる」という風刺ドラマがこの「お姑さん、用心なさい！」のストーリーである。ドラマのシーンは、この決起集会が中心で、いろんなタイプの女性―高学歴の近代的な女性、貧しいヒンドゥー教徒の女性、イスラム教徒の嫁、シク教徒の嫁といろんなタイプの嫁が登場して告発のスピーチをするのである。彼女たちは、すでに一年生の時に、大阪城公園内の太陽の広場で開かれた「市民活動フェスティバルINおおさか」に参加して野外公演をしていたし、東京外国語大学の学園祭でも上演して舞台度胸をつけていた。しかし、このドラマには、実際に嫁が姑から虐待を受けるシーンがないので、そういうシーンを学生たちはビデオに撮影して劇の冒頭に流す工夫をした。先輩学

生の協力も得て撮影し、コンピュータに詳しい学生が字幕付きでビデオCDに編集するなど、一切学生たちで自発的に作成したもので、私は一切関知していなかった。しかし、できあがったものを見ると、非常によくできていて驚いた。これなら芝居を一層面白くすることができる。しかも、ボリウッドの映画のように踊りもとりにいった。すでに、「若返り」でも実践済みではあったが、今度は女子ばかりなので、一層華やかな踊りを取り入れて観客に楽しんでもらおうとしたようだ。映画「デーヴァダース」で、マードウリー・ディークシトとアイシュワルヤ・ラーイという二大女優が華麗に踊る有名な踊りのシーンをビデオで見ながら練習を積んだらしい。こうして、このドラマは学生達の創意工夫によって完成度を高めて行った。私がひとつ拘ったのは、シク教徒の嫁には、パンジャービー語を話させたほうがリアルと思って、彼女のセリフをパンジャービー語に書きなおし、それを演じるHさんに、パンジャービー語の特訓をしたことである。パンジャービー語にはヒンディー語にない声調があり、これをはっきり発音しないとパンジャービー語のように聞えない。Hさんは苦労したが、なんとかそれらしく発音できるようになった。多分インド人でもやらないだろう。「脚色」を私はやったのである。これは、大いに受けた。

嫁と姑の対立は古今東西どこにもある。しかし、インドの場合、結婚時の持参金をめぐって嫁が姑のいじめにあうことはよくあり、ひどい場合は、焼き殺される凄惨な事件も起っている。原作にも、それに関する言及もある。しかし、自国の恥部を外国人に暴かれる事に反発を招かないだろうかという危惧を指摘する声が神戸公演ではあった。

インドでも、国粹的な運動をする団体がある。そういう危惧を私も全く懐かなかったわけではない。前年の一〇月に、中国・西安市の西北大学で、日本人留學生が演じた寸劇が中国人を侮辱したとって反日の抗議デモが起った事件があったので、万一そんなことになれば、大阪外国語大学が社会的に大恥をかき、私は辞職をせざるを得ないだろう。

しかし、私には絶対そうはならない自信があった。まず、ストウルダールとしての私の前口上で「これは、インドの作家の書いたものであり、私たちは、ただヒンディー語を愛するが故に、嫁と姑の対立に巻きこまれてしまったのです」と予防線を張っていたからである。また、中国人と違ってインド人は基本的に親日的で、寛大であることへの安心感があった。そして何よりも、私には、万一会場が陰悪な雰囲気になっても、観客に説明して納得してもらおう自信があった。それこそ、語学教師の腕の見せ所である。西安の事件の詳細は分からないが、果たして日本人留學生に、観客にきちんと中国語で説明できるだけの語学力があったのだろうか。

実際に、インドとモーリシャスで九回公演をしたが、それは全くの杞憂であることが分かった。学生たちの熱演がそれらの批判を封じたともいえよう（もつとも、さすがに、嫁を焼き殺すために、姑がガソリンに点火の準備をするという映像のシーンだけは、余りにも生々しいのでカットした）。今回は、コンピュータに強い学生をスタッフに採用し、二つの劇の冒頭に、パソコンで学生の作成した映像を流して劇をリアルにした他、日本語の字幕を見やすくすることにした。デリーやムンバイでは、日本人観客も来てくれるので、日本語の字幕が必要なのである。なお、「食欲の

ないおはなし」ではヒマラヤでの遭難のシーンを流したかったが、これはロケができない。あの有名なアメリカ映画の「バーティカル・リミット」の迫力ある映像を使ったかったが、著作権侵害の恐れがあるので断念した。結局、ヒマラヤの静止画像に続き、デリー市街の映像を流し、ヒンディー語で「日本人登山家がヒマラヤで遭難した。そして、一〇〇年後デリー：アイス博士冷凍学研究所」と解説をつけることにした。

神戸公演では、大阪外大の敬愛する先輩で、元ムンバイ総領事・現在日印協会理事の武藤友治氏から次のような激励のメッセージを電報で頂いた。

「君たちが演劇を通じて、ヒンディー語の修得に日々研鑽され、同時に日印相互理解の架け橋の大任を果たされていることに、満幅の敬意を表します。一つの方向にひたむきに進むこと、それが青春を謳歌できる君たちの特権です。ヒンディー語劇への参加が諸君にとり、輝かしい青春の一里塚になるよう祈っております」。

学生たちは、その暖かい言葉を胸に、張りきってインド・モーリシャス公演旅行に旅立った。ここでは、原口理沙さんの次のレポート（小冊子に印刷して関係者に配ったが、公刊はされていない）で、インド・モーリシャス公演のあらましを伝えることにする。

デリーでの上演（観客数約三五〇）

九月一日に日本を经ち、その夜デリーに到着した。銃を持つ空港の係員、道で寝そべっている牛、

サイドミラーのない車など、日本とは正反対の光景に釘付けにされながら私達はホテルへと向かった。翌日は、デリーの日本大使館を表敬訪問した。今回の公演の詳細を伝えると、榎泰邦大使は関心を示してください、また今後のインドの発展の展望など、いろいろなお話もしてください。そしてその後、今回助成金をいただいた国際交流基金デリー支部を訪問した。私たちより一足早くインドへ行って（帰って）いたギター・シャルマー先生が作ってくださいった立派な公演告知のポスターが貼られており、初めて足を踏み入れた土地に少し夢見心地だった私たちにより刺激となり、公演旅行成功の意思を再確認した。

インドで初の公演は国立演劇学校であった。三日は一日中、国立演劇学校（以後NSD）のアビマンチ劇場でリハーサルを行った。この会場では先輩方が過去三回上演しており、私たちの劇団だけでなく、デリーの日本人やヒンディー語関係者と演劇関係のインド人にはおなじ



上演後、榎駐印大使より祝福を受ける出演者たち

みの会場である。神戸公演での課題として、「食欲のないおはなし」で、好奇心に溢れる娘の女友達が二世紀人である主人公、山野登に対して話しかけるシーンをどのように盛り上げるか、というのがあった。インド人の動作をあまり見たことのなかった私たちは、彼女達がどのような動きをするのかなかなか想像しにくかった。ああでもない、こうでもないと言論を交し合っていると、練習の様子をずっと見ていた会場のスタッフが突然立ち上がり、自ら女友達役になって実演してくれた。また、NSDのアヌラーダー・カプール先生も、お母さんが病気だったにも関わらず時間を割いて私たちを指導してくださった。二人の言葉を聞き、動きを見、真似することで自分たちがどう動けばいいかが掴めてきた。さらに工夫を加えていこうと、その後の練習にはさらに熱が入った。

そして迎えた九月四日。初めてのインドでの公演である。この日はアーグラに留学中のYさんも応援に駆けつけてくれた。機械操作の手順を現地スタッフから教えてもらったり、またこちらの要望を彼らに伝えるのは一苦労だった。身振り手振りを交えながらやっとなり理解することができた。彼らは私たちが使いやすいように機械にさまざまな工夫をしてくれ、本当に助かった。それと同時に、自分の意思をもっとスムーズに伝えられるようにもっとヒンディー語を勉強しなければ、と反省した。

本番では榎泰邦駐印大使夫妻、西ヶ廣渉公使夫妻を含むほぼ満員の三五〇人に観劇してもらったことができた。演目は「お姑さん」、「食欲のないおはなし」の順である。初めて多くのインド人を目の前にし、彼らの反応が非常に気になったが、私たちの心配とは裏腹に会場は大盛り上がりであっ

た。今回もRさんの歌から始まったが、歌が終らないうちに拍手が沸き起こった。その後の「お姑さん：」でも、何回も笑いととも大きな拍手が起こった。後半も非常に盛り上がり、私たちは乗りに乗って演じることができた。今回二つの劇の合間に、特別に参加してくださった佐藤雅子さんによるカタックダンスが披露された。日本人による美しいダンスに観客は魅了されていた。続く「食欲のないおはなし」も、サンスクリット系の語彙が多かったにもかかわらず高い評価を得ることができた。女友達の改良した会話の場面も、大げさすぎるとも言える動きで笑いをとることができ、自信につながった。榎大使は舞台挨拶で私達を称えて「大阪外大万歳！」と仰って下さった。嬉しかった。終ったあとは多くのインド人が私たちに話しかけてくれた。初めての経験でなかなかうまく話せなかったが、観客に喜んでもらえた嬉しさでいっぱいになった。また、東京外国語大学のウルドゥー語の学生たちも観に来てくれていた。宣伝がよく行き渡っていたようで、インドで劇の告知を見て駆けつけてくれたという。「お姑さん：」のアレンジをとっても評価してくれ、自信につながった。インドで、ヒンディー語で劇をすることの大変さ、楽しさを早くも味わうことができた一日であった。

後日、India Today という、インドで最大の発行部数を誇る週刊誌の英語版、ヒンディー語版ともに、私たちの公演のことが舞台写真とともに大きく掲載されたのを見て驚いた。とくに、ヒンディー語版には、丸一ページを割いて私たちの踊りのシーンのカラー写真と「食欲のないおはなし」のシーンのカラー写真と溝上教授のインタビューが掲載されたのは圧巻だった。タイトルは「ヒン

デーイの中の日本」だった。

ハステイナプルでの上演（観客数約四五〇）

デリー公演の翌日、九月五日、私たちはメーラトへ向けて車に分乗して出発した。メーラトへ向かう途中、私たちはハステイナプルへ立ち寄った。ハステイナプルは小さな町であるが、名前は叙事詩「マハーバーラタ」に登場するクル族の出身地として知られている。現在は、ジャイナ教に関する史跡が多いことで有名であり、私たちもジャイナ教団が経営する初等・中等学校を訪れ、公演することになった。この学校では、付近の農村部の中間ないしは下層クラスの子どもたちが寄宿舎生活をしながらか教育を受けている。男の子の数が圧倒的に多かったのが印象的である。私たちが到着すると、門の外からたくさんの子どもたちの視線が私たちに注がれた。日本人はおろかヒンディー語を話す外国人を見たことのない子どもたちにとっては本当に珍しいことだったのであろう。しかし、みんな笑顔で私たちを迎え入れてくれた。

今回は少し段のあるところにシートを敷いただけの簡素な舞台での上演であった。また、時間の関係上「お姑さん……」のみの上演となった。劇が始まる前、ひとりひとりに対し手作りの首からかけるメダルをいただいた。私たちがどれほど歓迎されているかを知り、本当に嬉しくなった。

そして私たちの劇は始まった。劇の内容が子どもたちには少し難しすぎてピンと来なかったのか、デリー公演ほどの反応はなかった。しかし、Tさんのモダンガールの演技に観客からは笑いが起こ

り、姑を告発する嫁役のRさんの登場するシーンでは本当にみんなびっくりしていて、子供たちらしい、素直な反応があった。中には私たちの演技よりも、この土地ではほとんど目にしないであろうビデオカメラに興味関心を示している子どももいた。その学校特有のものなのか定かではないが、拍手の仕方が独特だったのが印象的だった。デリーよりも近くに観客がいたので緊張したが、逆に観客一人一人の表情をこちらでも観察することができ、いい経験になった。

この日の公演の後、ジャイナ教寺院に連れて行ってもらった。アシユターバドジーという建設中の建物を見学させてもらった。この建物の高さは一五一フィートもあり、十年後完成予定なのだという。この建物は丸い筒のような形をしており、中が吹き抜けで、上までは建物の内側の周りを螺旋階段のようにくるくる回りながら登っていき、登りきると解脱できるそうだ。建設中ではあったが、登っていき一番上にたどり着き眺めた光景は、今まで見たことのないものであり、私たちはただただ驚いていた。インドの広大さを初めて目にした瞬間であった。

メーラトでの上演（観客数約五〇〇）

デリーから約六〇キロメートル北東に位置するメーラトは人口七五万人都市で、一八七五年「インド大反乱」が起こった町としても有名である。そして私達の公演に引率してくださったシャルマ先生の出身地でもある。ハステイナプルとはさほど離れていないため、三日連続公演というハードスケジュールになった。ハステイナプルと同様に学校での公演であったが、この学校（ダヤーヴァ

ティー・モーデー（高等学校）はインドでも有数の進学校であるらしく、設備も整っていた。前日に下見に行った時は屋根のある殺風景な屋外の講堂に案内され、ここで本当に劇をするのだろうか、と少し不安がよぎったが、翌日になると昨日とは打って変わって幕や音響、花などがきれいに取り付けられていた。短時間で私達のためにここまでやってくださったスタッフの方々に本当に感謝したい。

劇は、とにかく暑い日でさらに屋外だったということもあり、出演者・観客ともに集中力を持続させるのが大変であった。手の甲からも汗が出るほどで、全員汗びっしょりになりながらの公演となった。それでも途中で退席する観客のいなかったことに感動した。また、特設会場であったため舞台袖がなく、私達は観客席から出なければならなかった。そこである面白いエピソードがあった。開会式での来賓の挨拶の間、「お姑さん……」のキャストは衣装・メイクをして観客席に座っていたのだが、そうとは知らないあるインド人がブルカー（イスラーム教徒の女性がまとっている服）を着た出演者を見て、「日本にもイスラーム教徒はいるのか」と尋ねて来たのだ。もちろんブルカーを着ていたのは、出演者のTさんであった。本番を前にやや緊張していた私達を和ませてくれた出来事であった。

劇が終わり控え室のテントへ戻ると、私たちはペンとメモ帳を持った子ども達にサイン攻めに遭った。「名前を書いてほしい」と頼まれ、ヒンディー語の文字であるデーヴァナーガリー文字とひらがな、そしてアルファベットで書くとともに喜ばれた。時間の関係でなかなか子どもたちと話

す機会が作れず、最後は群がる子どもたちの中を掻き分けながら移動しなければならなかったのが残念である。初めてあのような待遇を受けて、まるでアイドルにもなったかのような気分であった。その後は教職員の方々が、昼食を用意してくださった。いろいろな方と話をしたのだが、その中に夫が東京に単身赴任している、という方がいた。「娘は日本のものが大好きで、着物や日本人形を持っているわ」と嬉しそうに話してくださったのを聞き、日本のことに興味をもってくれていることに非常に嬉しくなった。それぞれが初めてインド人と向かって長い時間話をし、有意義な時間を過ごせたように思う。その後はシャルマー先生のお宅にお邪魔した。先生のご家族に作っていただいたインドの家庭料理をご馳走になり、また日本の歌を紹介したりして楽しいひとときを過ごすことができた。先生の親戚の小さな男の子が、ポケットモンスターが大好きで、たまたまその飴を持っていたYさんがあげるととても喜んでいた。こんなところでも日本とインドのつながりを知ることができた。

ハリドゥワールでの上演（観客数約三〇〇）

九月七日の昼にメーラトを後にし、ハリドゥワールに向かった。ハリドゥワールはヒन्दゥー教の聖地であり、世界中から観光客が訪ねてくる。ガンガーのほとりでは毎日夕方になると川に燈明を捧げる儀式（ガンガー・アールテイ）が行われ、そこに私達も行ってみることにした。初めてガンガーを見た時の感動は言葉に表せない。話に聞いたり写真で見たように水はきれいとは言えな

かったが、この速い流れの中にインドの歴史が刻まれているのかと思うと、なんとも言えない気持ちがかみ上げてきた。アールティーはとても美しく幻想的であった。ここでも私たちは好奇の目を向けられたが、アールティーが始まるとみんな国籍や宗教に関係なく、ただその幻想的な美しさに魅了されていた。日本を經つて一週間が経過し、メンバーの中にもそろそろ体調不良と疲労が見られるようになってきていた。しかし、アールティーの美しさを見て少し癒されたように思う。また、当地にあるグルクル・カングリー大学は、サンスクリット研究や古典インド学が盛んで、私たちは実際にヴェーダの授業を参観した。そして、ヒンディー語学科を訪問して先生方と学生を、私たちの芝居に招待した。

翌九月八日、BHEL会議場ホールで公演を行ったのだが、到着して会場の大きさに驚いた。BHELとはインド重電機公社のことで、電気関係の国営企業としては最大らしい。そんなことを全く知らなかった私たちは一二〇〇人収容の会場を前に、いったい何人のお客さんが見に来てくれるのだろうと不安になった。

さて今回は、今までの公演のアンケートから「お姑さん」と「食欲のないおはなし」の順番を変えてみた。これは「お姑さん」の方が評判よく、また最後が盛り上がるから、という理由からであった。この試みは成功し、以後の公演はずっとこの順番で上演することになった。どのぐらい会場が埋まるのか心配していたが、三〇〇人のお客さんに見てもらうことができた。一本目の「食欲のないおはなし」は特別なトラブルもなく終えられたのだが、二本目の「お姑さん」の時、ハ

プニングが起こった。行進しながら入場するため会場脇の扉裏で控えていると、足元で何か黒い物体がうごめいたのだ。嫌な予感がして足元を照らすと、それはなんとサソリであった。舞台は裸足でやっていたので身の危険を感じたが、サンダルで処理しなんとか無事に公演を終らせることができた。もし誰かが刺されていたら、と考えると今でもぞつとする。会場は満席にはならなかったものの観客の年齢層が高かったせいか、前回・前々回の学校での公演よりも全体的に反応がよかったように思う。この頃からアンケートの評価が少し増えてくるようになった。どこを改善すればいいのかを考え、次はよりよい公演になるように改良していこうと思った。また、今回の公演で初めてのインタビューストを受けた。出発前から先輩方にインタビューストを聞いてはいたが、やはり喋ることができず、自分のヒンディー語力の乏しさを痛感した。相手は劇での様子から、日常でも私達が同じレベルで話せると信じ込み次々にネイティブ・スピードで話しかけてくるのだが、当然劇中のように流暢に話せるわけでもなく、インタビュアーたちをがっかりさせてしまった。唯一四年生のRさんがすらすら答えているのを見て、本当に羨ましく思った。ヒンディー語をもっと勉強していこうと心に誓った。

ハリドゥワールと並んでヒンドゥー教の聖地であるリシケーシユが近くにあるので、公演旅行の中休みということで、そこを訪れることになった。ハリドゥワールを出発し山道を通り抜けてやってきたこの場所は、ヨーガなどの修行のために訪れる人の多い聖地のひとつで、ビートルズやマドンナも修行に来たということもあり、西洋人が多く見られた。ここでも夕方にプージャー（祈り）

が行われていた。靴を脱ぎ、裸足になつてプージャーを行った。ここで私たちは特別にヤッキヤ（供儀）の席に参加させてもらい、間近で見学することができた。サードウの少年達にビンディー（額につける赤いもの）をつけてもらい、花や米が配られ、それぞれを炉に入れていくという神聖なものであった。まさかこんな経験ができるとは思っていなかったので驚いたが、今まで授業中に文献や教授の話の中にしか登場しなかつた光景を現実として自分自身の体で体験できた感動を、メンバーのひとりひとりが噛みしめていた。ここでもエピソードがある。プージャーが終わり、帰ろうとしている日本人らしき人を発見した。メンバーのひとりが話しかけると、なんと大阪外大のスワヒリ語の学生だったのだ。インドの山間の地でまさか日本人に、それも同じ大学の人に出会うという偶然が重なる、という非常に珍しいできごとだった。長旅で体力を消耗していた私達にとつて、貴重な休日となつた。

デヘラードウーンでの上演（観客数約六〇〇）

リシケーシユでリフレッシユした後、私たちはデヘラードウーンへ向かつた。デヘラードウーンはウツタルプラデーシユ州から分離して新しくできたウツタラーンチャル州の州都で、人口約二七万人の都市である。国立森林研究所や陸軍幹部候補生学校など、重要な機関がいくつもある。また、インドで唯一の国立視覚障害者研究所があつて、視覚障害をもつ多くの子ども達が学んでいる。この公演で特筆すべきことは、今回の公演の主催者が視覚障害者の学校であつたことである。

代償機能が発達して鋭い聴覚をもつ視覚障害者の前で上演をするというのは、何よりのチャレンジである。日本人の話すヒンディー語がどれだけ伝わるのが最もはつきりと試される時であった。私たちは前日から台本をよく見直し、有気音と無気音、長母音と短母音などを念入りに確認していた。

ここでは公演だけでなく研究所兼学校も訪れ、そこで点字テキストを製作する現場やたくさんの方の教材、視覚機器などを見学させていただいた。視覚の代わりに聴覚や触覚を生かしたものが多く、非常に興味深かった中、特に数学で使われる教材に驚いた。碁盤の目のような線が引かれた板に穴が開いており、針のようなもので三ヶ所点を打ち、専用の定規で線を引くと三角形が描けるといった具合に、工夫を凝らした教材がたくさんあった。また、視覚障害者向けのボールには中にビーズが入っていて、どこに転がっていったのかがわかる仕組みになっていた。その後は生徒達との交流会を楽しんだ。生徒達が踊りを披露してくれたことには本当に驚いた。目が見えないのに先生方はどのように指導なさったのだろう、子ども達の学習能力もすごい、と感心せずにはいられなかった。最後は子ども達と私達が一緒に手をつなぎ音楽にあわせて踊ったり、話したりした。その時私は初めて視覚障害者の学校に入ったのだが、ハンディキャップを感じさせないくらい子ども達が明るくのびのび生活していると実感した。

そして翌日九月一日、本番を迎えた。ここでの上演は節々に「インドらしさ」を感じるものとなった。当初は、視覚障害者の学校のグラウンドで特設舞台を作って上演すると聞かされていたが、雨天の可能性があるので、急遽、アーダルシユという高等学校の講堂で上演することになった。

た。学校の講堂は普通、広さはあるが音響や照明設備は演劇向けに整備されていない。講堂で私達の声が届くようにマイクが吊り下げられていたのだが、集音タイプではなかったので少し離れると音は何も入らず、近づくと異常に大きい音になってしまい、非常に都合が悪かった。さらに学校はPTAの役員や父兄を前に座らせ、生徒を後ろに座らせてしまったのだ。これでは私たちの声は届かない。肝心の生徒たちは本番中になかなか集中できず、私語が絶えずざわざわしていた。私達も自分たちの身長ぎりぎりに垂れ下がったマイクにぶつからないように、よけたり近づきすぎたりせず、適度の声が入るところまで移動して台詞を言ったりと、なかなか演技に集中できなかった。さらに追い討ちをかけるように停電が起こり、散々な状況の中の公演であった。停電は一瞬のものだったので、劇が途中で大きく中断することがなかったのが不幸中の幸いであった。特に前半の「食欲のないおはなし」は、ダンスも、大きく盛り上がる場面もなかったため、演じている私達にとっても辛く惨めなものになってしまった。そしてRさんの歌が入り、「お姑さん…」に入る前に、子ども達による歌が披露された。きれいにメイクをし、かわいらしい衣装を身に着けた子ども達はいきいきと発表していて、前半の不完全燃焼に終わってしまった舞台に対するもやもやを少し取り消してくれた。後半はインド社会において身近なテーマであったことや、ダンスを取り入れていたということもあり、前半よりは盛り上がった。そして、なんとか二本とも無事に上演することができたものの、何かすっきりしないものを感じた。それは、視覚障害者からの反応が確かめられなかったことだ。耳の鋭い彼らが、ある意味で一番厳しい批判者であったはずだ。日本の学校だったら、

こういう場合絶対に、児童・生徒たちを前に座らせるだろう。そうすれば、反応は違っていたはずだ。今回の公演の後も、記者会見が待っていた。毎回自分の語学力のなさをあらわにして、惨めな思いをしてしまう。特に今回の公演は気合の割りにあまり望ましい成果を出せなかったで、なおさら複雑であった。全旅程中、日程的にも最もつらい公演だったように思う。しかし、他の公演と違って唯一観客（生徒たち）と同じ舞台上に立って共演したのもこの公演である。さまざまなトラブルはつきものだが、すべて経験として受け止め、次の公演への反省材料として生かしていこうと思った。また、デヘラードゥーンでは刑務所に行つて受刑者たちと交流するという、大変貴重な経験もすることができた。ハリドゥワールの公演を新聞で知ったデヘラードゥーンの刑務所の所長さんが興味を持たれ、ぜひうちの刑務所でも上演してほしい、とおっしゃったのがきっかけである。時間の関係上、劇はせず「お姑さん」の中に出てくるダンスシーンのみを披露することになった。たくさん受刑者を前に緊張したが、みんなとても盛り上がってくれた。なぜかかけたテープがいつもよりテンポがとても速く、また床も滑りやすかったため勢い余つて転倒してしまうメンバーもいたが、無事に私達の出番は終わった。その後は受刑者たちが音楽を演奏したり歌を歌ったり、踊ったりしてくれた。どの人もとても明るく上手で、本当に罪を犯した人なのだろうか？と思ったほどだ。この交流のほかにも、工場での作業風景、調理場、病棟などの見学をさせてもらった。刑務所に入ってくる日本人を、彼らは物珍しそうに眺めていた。私たち（少なくとも私）はかなり緊張してびくびくしていたが、得意げに自分の作っているものを見せてくれた人、調理場で作っていたチャ

パーティーを食べさせてくれた人など、いろいろな人と会話をする中で不必要な警戒心はなくなっていた。日本でも刑務所の中に入ったことがなかったのに、インドで入り、その受刑者の前で踊りを披露するなど普段ではありえない経験をすることができた。

チャンディーガルでの上演（観客数約一五〇）

二五日間に及ぶ公演旅行も折り返しに入ったこの公演は、九月一三日に、パンジャープ州とハリヤーナー州の州都を兼ねるチャンディーガルで行われた。ここでの観客のほとんどはパンジャープ人であり、もちろんヒンディー語はできるが、パンジャービー語を母語とする人が多い。またシク教徒が多く見られたのも印象的であった。当然、私のパンジャービー語が一番受けたのがこの町での公演であった。この会場は小さく、観客は床に座りながら見ていたが、多くの新聞に載ったためであろうか、入りきれないほど多くの人が集まってくれた。劇は会場が狭かったこともあり、出演者と観客との距離が近く、ここでも観客の表情から劇を楽しんでもらえていることを感じることができた。観客の反応もよく、デヘラードゥーン公演で少し自信をなくしていた私達にとつて、非常に勇気付けられる公演となった。また、ここでも偶然日本人の大学生と出会うことができた。インドで教育実習中の学生で、新聞で今回の公演の記事を読んで駆けつけてくれたのだという。遠く離れた土地で同郷の人と出会うのは嬉しいものである。

この文化団体（古典芸術センター）の事務局長を兼ねるコーサル氏は実に愉快な人で、私達を楽

しませてくれた。舞踊家でもあるコーサル氏の舞台での活躍の写真を見せていただくことができたのだが、本格的な衣装、メイク、まるで目の前で演技が行われているかのような真剣な表情を見て、彼の多才ぶりを知り、またどれだけ自分たちが偉大な人物と関わっているのかを思い知った。同時に、私たちについてもメイクなど、真剣に考え直すよい機会となった。

コーサル氏の人柄を示すエピソードがある。実は、上演一〇分前に、溝上教授が首筋を蜂に刺されたのである。私たちのメイク室にあてがわれていたベランダには、初めから蜂が飛び交っていて危険だったので、室内に変えてもらったのだが、ホールにも入ってきたわけである。それがこともあろうに、開演直前に溝上教授を刺そうとは！教授はすぐに近くの医院で毒を抜いてもらったようだが、教授を待つ間、私たちとコーサル氏の間が険悪となった。私たちは、脳に近い場所を刺されたので、危険と判断して教授を絶対安静にさせるため、「お姑さん……」は上演するが、教授の出演する「食欲のないおはなし」の中止を主張した。しかし、たかが蜂にさされたぐらいで、中止にするとは招待客に失礼だし、自分のメンツがまるつぶれだといってコーサル氏は断固譲らない。私たちも、まだまだ公演旅行が続くことでもあり、溝上教授に倒れられると困るので、絶対安静を主張して譲らなかつた。やがて、診察を終えた教授が戻って来られてとりあえず、「お姑さん……」の上演をはじめ、その間、教授には安静を要請した。「食欲……」の中止はまずいと判断された教授は「出る」といわれたが、それでも不安な私たちは、激しい動きはしないでと釘をさした。こともなく芝居は終了してホツとしたが、溝上教授はコーサル氏に、私たち学生の非礼を詫びられた、すると、氏は

怒るところか、教授に「あなたは何と幸せだ。今頃、こんな先生思いの学生をもつとは！」と笑顔で言われたのである。「何と寛容な人だろう、さすがはパンジャープ人だ」と教授は感心しておられた。

バジパイ前首相と会見

「チャンディーガルでの公演を終えた翌日の早朝六時にホテルを出発し、再びデリーへ向かった。今回の旅行で初めての、そして唯一の列車での移動である。前日遅くまで公演をしていたため、朝早い列車での移動は辛かった。さらに、ポーターたちによって積み込まれていた荷物がひとつ一時間行方不明になる（後で離れた場所から見つかったが）というハプニングも起こり、朝から騒然としていた。駅につくと、ポーターたちに囲まれ、彼らの中で私たちの荷物運びをめぐって口論が始まった。あつげにとられてその光景を見つめているうちに話がまとまったらしく、何人かのポーターがさっさと荷物もって歩いていった。スーツケースをふたつ頭にのせて歩いている姿に、驚きのあまり声が出なかつた。デリーを離れてそれほど日は経っていないが、今まで公演してきた都市が落ち着いた場所であったのだろう、デリーの喧騒がなつかしく思えた。

さて、ここでなぜデリーへ戻ったかを説明しておかなければならない。実はインドに着いてから溝上教授はずっと、バジパイ前首相の秘書と携帯電話で連絡を取り合っており、ついにこの日私邸での三〇分の会見が実現したのだ。溝上教授と前首相の初めての出会いは、二〇〇一年二月八日、

大阪で催されたバジパイ首相（当時）歓迎パーティーの席上で、日本の作品である「鏡草子」をヒンディー語で上演した時であった。三年前のことを覚えていくださった前首相が、今回の会見を引き受けてくださったのだった。女性陣はチャンディーガルでサリーを新調して前首相宅を訪問した。さすが前首相の私邸で、私たちは厳重な警備のもと、手荷物など空港さながらの厳しいチェックを受けた。前首相は物静かな方でありお話はされなかったが、私たちがそれぞれ劇の冒頭の台詞を口にする、にこにこしながら聞き入っておられた。また、日本語で「おはようございます」とおっしゃったのは驚いたが、それにより緊張していた空気が和んだ。この日九月一四日は、ヒンディー語が憲法でインドの公用語として制定された日であり、「ヒンディー語デー」として関係者のあいだでめでたい日となっている。そのような記念の日に、ヒンディー文学者でもある前首相と会見できたのは、実にラッキーであった。これも、ひとえに溝上教授のおかげである。

ムンバイでの上演（観客数約三五〇）

ムンバイ公演は、ムンバイ印日協会創立五〇周年記念行事を兼ねて、同協会主催で、九月一六日に、ダーダール地区にある「マイソール協会ホール」で行われた。先輩方が訪れた二年前の前回は、ムンバイのゼネストのためあまり観客は多くなかったそうだが、今回は満席となった。寒川富士夫在ムンバイ首席領事や日本人学校の畠河弘校長など、日本人もかなり出席されたので、デリー公演以来二度目となる日本語字幕映写となった。機械に関して二年生はめっきり弱いので、一年生のI君

にもつばら任せきりであった。慣れない状況下でI君にとつては大きな負担だったに違いないが、彼のおかげで映像関係は全くトラブルなく流すことができた。

劇は今までにない盛り上がりを見せた。Rさんの歌が始まると会場の人はみんなうっとりとその歌声に聞き入り、中にはヒンディー語の歌詞をRさんに合わせて口ずさむ人もいたほどだった。会場には最初から熱気があり、「食欲のないおはなし」も今まで笑いがなかった場面でも笑いが起こったりと、自信を失くしかけていた私たちにも勇気が湧いてきた。続く「お姑さん：」でも会場は爆笑の渦に包まれた。特にダンスの終わった後では拍手や口笛が沸き起こり、観客と私たち出演者がまさに一体となった瞬間であった。また演じ慣れてきたこともありアドリブを入れるメンバーが増えてきて、同じ舞台上に立っていないながら、他のメンバーのアドリブに対し笑いをこらえるのに必死だった。実は「お姑さん：」に関しては、持参金問題や姑が嫁を焼き殺したりするインドの深刻な社会問題を劇中で取り扱っていることから、それがインド人



ムンバイの会場に張られた幕—大阪外大は一足先に阪大に「統合」されている

の反感を買うかもしれないという危惧をしており、そのために毎回流している映像で過激な場面をカットするなどの配慮も行ってきた。しかしそのような心配をよそに、公演は批判やトラブルもなく、無事にインド国内における最後の公演を終えることができた。

このムンバイ公演では、私たちの公演だけでなく日本語を学ぶインド人学生たちによる日本語劇を見ることもできた。二〇分弱ほどの劇の内容は、インド人夫と日本人妻の夫婦三組（役者は全てインド人）が中心に繰り広げられており、夫はそれぞれグジャラーティー語、マラーティー語、パンジヤービー語を話している。夫は同じインド内でも異なった言語を話すのに、日本人の妻はみんな同じひとつの言語しか話さない、どうしてか？という、分かりやすいが考えさせられる内容のものであった。また、劇の合間にはダンスも取り込まれており、彼らは普段から踊りなれているようで、とても上手に楽しそうに踊っていた。非常に流暢に日本語を話すインド人たちを見て、私たちのヒンディー語もこれで通じているのだろうか、と気になった。そしてもうひとつ気づいたのが、そのインド人学生同士は普段の会話では英語を使っていたという点である。いろいろな言語を話す人がいる地域では、英語は重要かつ必要不可欠なスキルであるのだと実感した。公演後の打ち上げで彼らと話をすることができたのだが、中には日本語を習い始めてまだ一年、という人もいて非常に驚いた。彼らが日本語を学んでいる理由は様々であったが、みんな本当に熱心に勉強しているな、と会話の中から察することができた。それと同時に、私たちもヒンディー語をもっとたくさん勉強し、使い、彼らのように話をしたり、またインタビューにもすらすらと答えられるようになりたいと思っ

た。私たちがヒンディー語で、彼らが日本語でお互い言葉の意味や文法の間違いなどを教えあいがら会話をしていた。はたから見れば不思議な光景だったであろうが、私たちにとっては同世代のインド人と身近に話す機会に恵まれ、思い出深いひとときとなった。

こうしてインドでの全公演が予定通り終了した。しかし、その夜ムンバイからモーリシャスへ出発するため、落ち着く間もなく一旦ホテルへ引き返し、荷物をまとめて急いで空港へ向かった。早朝の四時半出発という飛行機に間に合うようにと、メンバー全員が一睡もせずたくただった。なんとか飛行機に乗り込み、私たちは初の南半球、モーリシャスへ向かった。

モーリシャス滞在（九月一七日～九月二三日）

飛行機に乗ること約六時間、私たちは九月一七日にモーリシャスに上陸した。まず最初に、この国について簡単に説明しておく。モーリシャス共和国は一九六八年に独立した、インド洋に浮かぶ面積約二〇四〇平方キロメートルの小さな島国で、人口は約一一〇万人である。インド系の住民（ビハール系が多い）が約六割を占めている。砂糖産業や観光で潤っていて、国民の平均所得は四六四〇ドルでアフリカでは最高水準とされる。

ヒンディー語は公用語ではないが、日常会話では充分通じるし、インド人系の学校や大学ではヒンディー語が教えられている。テレビやラジオでも、ヒンディー語番組は多く放送されている。この国は、最初はフランスに、後にイギリスに支配されたため、空港の表示は英語とフランス語で書

かれており、また人々は英語、フランス語、ヒンディー語を実に巧みに話し、使い分けている。今回モーリシャスを訪れるきっかけになったのは、溝上教授がNGOの文化団体である「文化・映像アカデミー」の代表、バルラーム・タークリー氏とインドで知り合いになり、招待を受けたことである。また、夫人がブネー出身ということもあり、インドを第二の故郷だと考えている方でもあった。私たちを本当に歓迎してくれ、また一週間のモーリシャス滞在に関しても、インドでのハードな公演スケジュールを考慮して前半に休息と観光の時間をたっぷりとってくれるなど、きめ細やかな配慮にも感動した。ここで、デリー公演で共演し、モーリシャス公演にも出演してくださることになった佐藤雅子さんと再び合流し、ともに行動することになった。

モーリシャスに降り立って初めての感想は、「寒い、きれい」だった。真夏のインドを旅立ち、そのままの格好で到着したのはいいが、ここは南半球で、季節が逆であった。赤道に近いから暑いだろうと考え、赤道をまたぐと気候がどうなるのかを全く考えなかったため、肌寒さを感じてようやく南半球にやって



モーリシャスの美しい砂浜でリフレッシュ

きたのだと実感した。そして、空港や道路が整備されており大変きれいだったことにも驚いた。インドで見る光景がむしろ当たり前になっていたため、きれいな空気でもこぼこのないアスファルトを自分たちが走っていることに初めのうちは慣れず、違和感があった。またインドではお湯が出ず、水で入浴していたが、ここではお湯が出たのには感動した。さらに、私たちが滞在していた寄宿舎には全自動洗濯機があり、インドではずっとバケツで手洗いをしていた私たちは浦島太郎のような気分になった。このようにインドとは全く違い、日本を思い出させる物事が多くあった。自動車もその一例で、走っている自動車のほとんどが日本製であった。さらに、街にはインド系、アフリカ系、ヨーロッパ系など、さまざまな人種の若者が見られた。女性はミニスカートを履き、インドでよく見られるパンジャーブードレスやサリー姿の若い女性は見られなかった。インドに比べ、自由な印象を受けた。しかし、店を覗いていてもインドのように話しかけたり、「チャイを飲んでいきなさい」という人もおらず、少し寂しさも感じた。モーリシャスに滞在している間、主権者に連れられて実に様々な場所を見学することができた。ちょうどガネーシャ（ヒンドゥー教の神様のひとりで、体は人で頭は象）祭の時期であったため、Paris Tarao（妖精の湖という意味）という湖へ行つた時、祭の様子を見ることができた。みんなオレンジ色の鉢巻を巻き、辺りにはアールティーの時に流すような音楽が鳴り響いていた。奥に進んだところにあった湖は、昔奴隸として連れて来られたインド人たちが、ガンジス川の水を一緒に持ってきてその湖の中に注いだと言われている。祖国を離れても信仰の対象を自分の身近に置いて心のよりどころにするという、インド人の深い信仰心を感じ

取ることができた。

他にも海や南アジア式の結婚式など、私たちの希望に沿って実に様々な場所へ案内してくださった。忙しいスケジュールの中、時間を割いて接待してくれた主催者団体に対し、感謝の辞を述べたい。

モーリシャスでの上演① フェニックス市（観客数約九〇〇）

満足のいくまで休息や観光を楽しんだ後、九月二〇日、モーリシャスでの公演の日を迎えた。この日の公演は、インド政府の援助で建てられたIGI（インディラ・ガンディー・インド文化研究所）ホールという約一〇〇〇人を収容できるホールで行われた。フェニックスという名の小さな町である。初のモーリシャス公演で、私たちのヒンディー語が通じるか、さらに私は「お姑さん：」でパンジャービー語を話すのでインド以外の国で果たして理解してもらえるのか、また、持参金などのインドの風習がここでも根付いているのか、などというたくさんの不安を抱えたまま本番を迎えた。しかし、私たちの心配をよそ



盛り上がる女子高校の会場

に劇はインドに劣るところかそれ以上に受けた。まず佐藤さんのカタックダンスで幕を開けたのだが、日本人がインド舞踊を踊る姿が珍しかったのだろう、観客は食い入るように観ていた。私たちは、毎回舞台袖に待機していなければならず、佐藤さんの踊りをちゃんと見られないのが残念であった。モーリシャスでは、プロジェクターが借りられなかったので、各演目の前に映像を流すことはできなかった。しかし、劇にすんなり入りこめてもらえたように感じた。私のパンジャービー語も通じていたようだった。ダンスのシーンではどよめきが起こった。きつと、遠く離れた国からやってきた若者が、インドの曲に合わせてみんなで踊る姿に驚いたのだろう。終わった後は初めてスタンディングオベーションが起こり、観客に喜んでもらえたのが分かってたまらなく嬉しかった。観客席はほぼ満席で、さらに翌日のモーリシャスの新聞にも掲載され、関心が大きかったことを実感した。新聞のほとんどはフランス語で発行されていることが、インドとの最大の違いである。

モーリシャスでの上演② キュリピブ市（観客数約二二〇〇）

初のモーリシャス公演での成功の余韻が抜けないまま、翌日の公演を迎えた。今公演旅行最後の舞台である。会場はカレッジという名前がついてはいるものの、高校生の年齢の生徒たちが通っている女子校の講堂であった。キュリピブは、フランス語で「パイプを掃除する」という単語に由来する不思議な名前の町である。その昔、フランス人がこの土地で、パイプの煙草をつめかえていたらしい。私たちが女子高校の敷地に足を踏み入れた途端、キャーキャーという甲高い声が響いた。

THEÂTRE ■ Une troupe japonaise joue deux pièces en hindi à Maurice

À l'initiative de Bulram Tacouri de l'Academy of Film and Theatre, une troupe japonaise était à Maurice pour deux représentations de deux pièces en hindi. Durant cette tournée, cette troupe a présenté *Saavdhaan, Saas Ji* (Méfiez-vous de votre belle-mère) et *Kshudharahit Yug* (Un âge sans appétit). Ces deux pièces ont été écrites en japonais et traduites en hindi pour être présentées dans quelques pays d'Asie et à Maurice. Le Pr Tomio Mizokami confie que sa troupe souhaitait venir à Maurice l'année dernière, mais que la tournée fut annulée. C'est ainsi, explique-t-il, qu'il accepta l'invitation de Bulram Tacouri quand celui-ci lui proposa de venir dans notre pays. Les deux pièces étaient entrecoupées d'un numéro de kathak exécutée par Masako Sato, danseuse qui a étudié le flamenco et le ballet pendant plusieurs années avant de s'attaquer à la danse de l'Inde du Nord. Le Pr Tomio Mizokami, Head of Asian Studies de l'université d'Osaka, au Japon, est à la tête de la troupe comportant une dizaine de comédiens. Ayant à leur actif plus d'une cinquantaine de représentations à l'étranger, la troupe japonaise est composée exclusivement d'étudiants en langue hindi de l'université d'Osaka. La première représentation fut donnée au Indira Gandhi Centre for Indian Culture (IGCIC), à Phœnix, le lundi 20 septembre, et la seconde, au Hindu Girls College, à Curepipe, le lendemain. Les deux représentations se donnaient gratuites, dans l'esprit habituel de gratuité de l'Academy Of Theatre.

フランス語の雑誌にヒンディー語劇の記事が掲載された

私たちがよっぽど珍しかったのだろう。慣れない歓迎のしかたにメンバーたちも少し戸惑っていた。控え室で最後の公演に向け気合を入れ、いよいよ本番に臨んだ。

公演は佐藤さんのダンス、そしてRさんの歌へと続いた。まるで有名歌手のコンサートであるかのように黄色い歓声が沸き起こった。公演を通して聞いてきたこの曲も、この日で最後かと思うと感慨深かった。「食欲のないお話」は、Sさん演じるアイス博士の夫人の眠たそうな演技が殊の外受けた。とにかく何をすることも笑い、歓声と拍手が起こり、劇が中断してしまうこともしばしばだった。そして、大きな拍手と共に前半が終った。続く「お姑さん」は、二〇〇三年秋に大阪城公園で初めて上演して以来さまざまアレンジを重ねてきたが、今公演が最後となる。それぞれ思いを抱きながら本番に臨んだ。観客の前半での熱気は冷めるばかりかますます高まって、いつも客席が沸くダンスシーンでも歓声は桁違いであった。最後に姑が嫁に復讐されるシーンでは感情移入したのであろうか、大きな声援と拍手がこぼれ、賑やかな歓声に包まれながら幕を閉じた。劇の最後の出演者紹介では一人一人に歓声と拍手が送られた。インド・モーリシャス公演の最後に、こんなにとくさんの暖かい拍手をもらうことができ、全公演の成功を確信することができた。日本人がほとんど訪れない、大使館もないこの小さな国に、私たちが文化の大使となって訪れたのだ。九都市で公演を重ねてきたが、素晴らしい千秋楽を迎えることができたと思う。

こうして二五日間に及ぶインド・モーリシャス公演旅行は終了した。多少体調を崩したりハプニングが起こったりしたが、公演は全て全員で臨むことができた。語学を学ぶことの重要性、演劇の

楽しさ、そして何より人の優しさ、あたたかさを感じることでできる旅行となった。武藤先輩の言われた、まさに「輝かしい青春の一里塚」だ。今回の公演旅行を可能にしてくださった国際交流基金、そしてその他多くの方々の好意に、紙面を借りて感謝の意を述べたい。

(原口理沙)

なお、一九九〇年度より文化庁の調査事業の一環として作成されている『舞台芸術交流年鑑』の二〇〇四年版に、我々の今回の海外公演の詳細が正式に記載されたことを付言しておく。

(溝上富夫)



第十二章 東京外大ウルドゥー語劇団との初のインド合同公演旅行

二〇〇五年の海外公演の特徴は、ライバル校の東京外国語大学ウルドゥー語劇団との合同インド公演をはじめて行ったことである。私は、同劇団の顧問である麻田豊助教授とはかつて同じ研究室の同僚でもあったことから懇意の間柄にあり、実践的語学教育に関しても共通した考えをもっていた。こうした事情があつて、大阪外国語大学のヒンディー語劇団が、二〇〇〇年一月に、東京外国語大学の府中新学舎移転を祝つて、その学園祭（外語祭といわれる）に「友情出演」して以来、両語劇団の間で、自然な形で交流が始まり、二〇〇五年まで六年連続して「競演」している。ほとんどは、東京外国語大学の外語祭だが（プログラムにも正式に印刷されるようになった）、二〇〇一年一月には、東京の築地本願寺境内で催された「ナマステ・インディア」祭に共に招待されて初参加、一二月には、神戸のインドクラブでも競演している。

両大学間にはスポーツの交流（毎秋、定期戦を行っている）はあるが、文科系クラブの交流を行っているのは、我々の語劇だけだろう。スポーツが純粹の課外活動であるのに対し、語劇は課外活動とはいえ、語学という両大学の「正課」に一番近い。このような交流こそ奨励されるべきだと思つたが、実際には、それを制度的に実施するのは費用や時間等の関係で難しかろう。しかし、我々はそれを自発的に実践して、お互いが刺激を得て向上するという目的をみごとに達成してきたし、友好

促進という成果も挙げてきた。

ヒンディー語とウルドゥー語というのは、一卵性双生児のような関係で、言語学的には同一の言語といつてよく、異なるのは文字と語彙だけである。その語彙といつても、日常生活で用いる平易な語彙なら何らの違いもなく、通じ合う。高度な抽象的な語彙になると、前者はサンスクリット語系、後者はアラビア・ペルシャ語系の語彙を使うので、通じ合いにくくなるが。普通、インドで制作されるヒンディー映画の娯楽作品はパキスタンでも容易に理解される。ウルドゥー語はパキスタンの国語であるが、インドの公用語の一つでもある。ウルドゥー語はインド・パキスタン両国で通じる便利なことばなのである。従つて、両語劇団の学生は、一見異なる語学を勉強しているようで、抽象名詞や形容詞以外の単語は、ほぼ聞いて理解できるのである。こういう近い関係にあるので、よけいに交流する意義は高まるのである。

そして、一度インドで一緒に公演できればいいなあ、と考えていたところ、運良くインド文学アカデミーのゴーピーチャンド・ナーラング議長から、両大学の学長宛に正式に招待状が届いたのである。ナーラング博士は著名なウルドゥー文学研究家として知られ、来日経験もありである。もちろん、快諾し、デリー以外にも一〇都市で公演することにした。

なお、東京外国語大学のウルドゥー語劇団は、二〇〇二年一月～二〇〇三年一月に初めてパキスタン公演を行っているが、インド公演は初めてである。二〇〇四年度の文部科学省の「特色ある大学教育プログラム」に、東京外国語大学の「生きた言語修得のための二六言語・語劇支援」が採

扱われたことが、ライバル校では追い風となつて、初のインド公演に非常に燃えており、演目として、中沢啓治の自伝的漫画「はだしのゲン」を戯曲化したもののウルドゥー語訳を選んだ。もとのドラマはニューヨークや韓国では大ヒットしたらしい。但し、「はだしのゲン」をそのまま直訳しても一般のインド人には分からないので、「ヒロシマ・キー・カハーニー」（廣島物語）というタイトルにしたようだ。

インド公演では先輩格の我が大阪外国語大学ヒンディー語劇団も負けてはおられない。ラージェンドラ・シャルマーの四作目の喜劇『不協和音』で対抗することにした。

ストーリーは「スレンドラとサルラーは二人とも高学歴で、自分に自信をもつ夫婦。スレンドラは男の方が女より偉いと主張し、気の強いサルラーは、男女は平等だと言い張り、お互い相手の言う事を聞き入れようとしない。喧嘩の締めくくりはいつも「シャットアップ！」お互いに思いやりの気持ちを忘れていては、一人娘のピンキーにも悪影響を与えるばかり。これを見かねた、サルラーの友人マールティーが行者に変装して、それぞれの相方が死期の近い事を告げることによって、二人に夫婦愛をとりもどさせる」という単純なもの。しかし、脇役として登場する女中のラーダーと、田舎に住む保守的な（インドの良き伝統の信奉者である）伯母がこのドラマに彩りを添えている。ラージェンドラ・シャルマーのいつもの面白いセリフのため、結構楽しめるホームドラマに仕上がった。

それでは、一一都市で一一回公演したもようを次に紹介する。

ラクナウでの上演（観客数約四五〇）

両大学の学生達は、それぞれ成田と関空から八月二八日の夜デリーに到着し、同じホテルに泊った。そして、翌二九日の朝、ホテルのロビーで対面式を行い、これから一ヶ月にも及ぶ長期旅行を共にするため、全員よろしくと自己紹介をしたあと、すぐに最初の公演地、ラクナウに飛んだ。東京チームが総数一四名（男五、女九）大阪チームが八名（男二、女六）だった。

ラクナウは我々にとっては三度目の公演地であり、会場も前回と同様、ラビンードラーヤという大きなホールであった。ただ、今回の主催者は、「ヒンディー・ウルドゥー文学賞賞与委員会」というNGOの文化団体であった。到着後、すぐに記者会見を行い、早速会場の下見と準備にかかる。これまで我々のヒンディー語劇は日本のドラマを除いて、一幕もののホームドラマが中心だったので、居間にソファとテーブルを配置するだけの簡単なセットがあれば十分だった。今回も同様で、照明も音響も特別の工夫はいらないので、いわゆる「仕込み」にはさほどの時間を必要とはしなかった。

しかし、東京外国語大学チームは仕込みに大変な時間をかけていた。それもそのはずで、「はだしのゲン」のものとドラマはすぐれたプロの演出家による本格的なミュージカルなので、音響や照明には特別の工夫を凝らす必要があり、インドでそれに近いコンディションを再現するのは大変だ。スタッフのなかに、コンピューターに強い学生が二人いて、麻田座長指揮下のもとに、てきぱき準備をしていた光景に感銘を受けた。きけば、初のインド公演にかける彼らの意気込みは凄かった。

ミュージカルなので、歌と踊りのシーンは欠かせない。そのため、発声練習から体力づくりのために夏休みは合宿までして特訓をしてきたらしい。主役のゲン役を演じる女子学生は渡印直前に、髪の毛をばっさり短く切ったとか。それだけでも、この公演にかけるその意気込みは凄い。

大阪チームも夏休みにそれなりのリハーサルをやり、出発直前には、いつものように、神戸のインドクラブで、インド人観客の反応という「試金石」にはかけてきた。しかし、まあ従来通りのペースでやっており、かけた時間とエネルギーに関しては、東京外大チームには遠く及ばなかったことは事実だ。

八月三〇日、いよいよ初の合同公演の日。午前中は市内のホテルで、「日印の社会経済・文化関係について」というセミナーが開かれ、筆者も招かれてスピーチをした。そのセミナーの主賓だった、カルナータカ州知事のT・N・チャトゥルヴェデー氏（名前からしてヒンディー語圏出身の人である）が、そのまま夜の公演にも主賓として招待された。

上演は芝居の一般常識にしたがって、我々（大阪）の喜劇を先にやり、休憩をはさんで（東京の）悲劇の方を後にすることにした。大阪チームは一人を除いて、インド公演の経験ははじめてである。最初は緊張していたようだ。今回のヒンディー語劇で我々が新しく試みたことがひとつある。これまでのように、ストウルダールの私が前口上を述べるのではなく、夫婦役を客席の真中に座らせ（もちろん、一般の観客は二人が役者だとは気付いていない）、女子学生（ドラマの中では友達のマールティー役を演じる）が登場して、ヒンディー語のすばらしさを称えるスピーチをしている最中に、

客席でいきなり派手な夫婦喧嘩をはじめるのである。この女性が二人を舞台上に呼び寄せ、二人の無作法を叱り、家を出るときに錠をしたかどうかという些細なことが喧嘩の原因と知り、早く家にもどるように諭す。そして、客席に向かって「高学歴の人はエゴが強く、しょっちゅう夫婦喧嘩をするのです。外でもこんな状態なら、家ではどんなことをしているのでしょうか。こっそり覗いて見ましょう。これ以上に面白いドラマはありませんよ」と言って引っ込み、ここで幕が開くという演出である。これは観客の関心をドラマに引きつけ、客席を盛り上げる上で大きな効果があった。随所に爆笑を誘い、初演は成功した。

ついで「はだしのゲン」の上演である。私は原作の漫画を読んでストーリーは知っていたが、その日本語のドラマは見ていなかったもので、どんな風に戯曲化されたのだろうか、どんな風にウルドー語に訳されたのだろうかという非常な好奇心があった。

もちろん、核戦争を知らないインドの観客の反応にも興味があった。我々が決して演じた事のない見せ場が多くあった。歌はいずれも感動的なものであり、踊りもよく練習したことを伺わせるものだった。きけば、ダンスの心得のある学生がいるということ、さすがに上手だった。そして、原爆投下のシーンは、客席に向かって一瞬まっ赤なライトが照らされるといって実に印象的な演出に圧倒させられた。ヒンディー語劇団の学生も一様にそういう印象をもった。これは負けてはいられないぞ、という気持ちを持ったことだろう。東京の学生も、最初の我々のドラマが結構受けていたので不安を感じた、と述懐している。しかし、二つのドラマは全く種類のちがうドラマであって、

かえって観客には楽しんでもらえたと思う。さっそく、明るる日の新聞に二つのドラマ上演の記事が大きくとりあげられていた。

チャンディーガルでの上演（観客数約二四〇）

古都ラクナウはまた、みるべき史跡もあるのだが、時間的にその余裕がなかったので、観光はやめて、翌日八月三日の夜行列車で、次の公演地、チャンディーガルに向かった。大体一時間半ぐらいで到着した。列車による大きなグループの移動は、非常に気をつかうが、始発駅から終着駅までの旅だとなにかと安心感があり、ゆっくり列車の旅が楽しめた。チャンディーガルもヒンディー語劇団にとっては昨年に引き続き二度目であり、昨年同様、「古典芸術センター」のコーサル氏が温かく出迎えてくれ、同じホテルで同じように記者会見をおこなった。昨年との違いは、もちろん、東京外大のウルドゥー語劇団の初参加であり、記者団の注目はそちらに集まった。コーサル氏は舞踊家だが、マスメディアに強い人脈があり、チャンディーガル市内で発行される約一〇種類のほぼすべての新聞に報道された。両大学の学生達が仲良く芝生でくつろぐ微笑ましいカラー写真が大きくでたのである。インドの新聞は日本の大新聞に比べると発行部数の点では、ケタ違いに少ないが、日本の新聞以上にカラー写真が多いのおどろく。新聞の値段からすると、宣伝費でまかなっていないとはいえず、よく採算がとれているなど、他人事ながら不思議な気がする。

さて、公演は九月二日の夕方に行ったが、会場は昨年と違って、市内で二番目に大きい劇場（創

立は一九六〇年）であるタゴール劇場だった。ノーベル文学賞を受賞した詩聖タゴールの名にちなんだこのような劇場は、インド各地にある事を知る。タゴールはまた、すぐれた戯曲家・演出家でもあったので、当然だろう。ほどよく観客が集まったところで、ヒンディー語劇を無事に終えて、ウルドゥー語のドラマが始まったが、途中とんでもない知らせが入った。主賓のハリヤーナー州キドワイ知事がまもなく到着するので、芝居を中断して待てとの指示である。これはひどい。いくら多忙な知事でも、遅れてきたのなら、ソツと途中で芝居をとめることなく着席すべきである。まるで知事のための上演会のように、権威主義を誇示する以外のなにもでもない。こんなことなら招待しなければよかった。盛りあがるシーンで中断させられると、熱心に演じている学生はエネルギーを削がれてしまう。しかも、また予期できぬアクシデントが起こった。突然停電して、芝居がすっかり止まってしまい、見せ場の原爆投下のシーンが見せられなかったのだ。インドの電力事情の悪さは有名で、停電は珍しくないが、よりによって知事の出席中に停電するとは、なんとも皮肉なことである。キドワイ知事は、一九九九年二月に行ったコルカタでの初公演に、西ベンガル州の知事として臨席を賜っており、六年後に今度はハリヤーナー州の知事として当地で再会するというのは奇遇だったが、ウルドゥー語劇団にとっては、チャンディーガルの経験はハッピーではなかった。

モハーリーでの上演（観客数約五〇）

どこか近隣の小さい町で暴動があったという新聞記事に少し気がかりではあったが、その影響を

全く受けることなく、翌九月三日は、隣町であるモハーリーでもまた、無事公演を行うことが出来た。モハーリーはまさにチャンデーガルの隣町で、どこが両市の境界か分からないほど一体のように見える。ここに「古典芸術センター」の学校があり、インド古典舞踊や音楽等が教えられている。その小じんまりしたホールで上演したのだが、少ない小道具だけですむヒンディー語劇は、客席との距離が近い方がやりやすい面もあるが、やはり本格的なドラマである「はだしのゲン」の上演には不向きな舞台である。

シムラーでの上演（観客数約九〇）

四都市目は、避暑地として名高い英国統治時代の夏の首都、シムラーだ。ヒマーチャル・プラデーシュの州都でもあるこの地は、なぜかこれまで訪れたことがなく、私もひじょうに楽しみにしていた訪問である。五台の四輪駆動車を連ねて山道をドライブしながら向かった。コーサル氏も同行された。氏は、シムラーでの記者会見用にウイスキーを大量に買い込んで車に積みこんだ。州境を越えると酒類の値段が高くなるためという。記者会見は集客上必要で、記者にもパンジャブ州からの手土産が要るのだという。三時間ほどの快適なドライブの末、いよいよシムラーに着いた。下界とはまるで違う涼しい空気が迎えてくれた。但し、坂道が多く、荷物をホテルまで運ぶのが大変だった。ポーターをやとったとはいえ、ホテルに着いてからまた、上の階への移動が大変だったのである。一流ホテルならもちろん、リフトがある。我々の止まった中流ホテルにはリフトがなかったの

で、食事ひとつとるにしても、つねに階段の上下を徒歩で上り下りしなければならなかった。ホテルのチェックインやチェックアウトの時は荷物で大変だった。

しかし、上の階からの景色は素晴らしい。本当にリゾートに似た気分。前日まで、ほとんど連日公演をこなしてやや疲れていたが、ここでは、ちょっと中一日空いたので、休養にあてた。町の人口は約七万人とあるが、観光客の多いこの時期は、そんなものではないはずだ。こんな所にもシティーバンクのキャッシュマシーンのあることに驚く。

学生たちは、歴史ある街を散策しようと、空き時間を捻出してこぞって外出した。彼らはここで初めて、地元の人々と出会うことが出来、対話を楽しんでいた。立ち寄った店で知り合った客に、庶民の生活を支える商店街を案内してもらったりした。気品溢れる町並みと、庶民の暮らす、ごく普通の町並み、シムラーの二つの顔を見ることができ、有意義な時間を過ごすことが出来た。

この町のメインロードは車が通れないので、徒歩で楽屋入りをした。劇場はカーリー寺院に付属するカーリーバリー・ホールという、四〇〇人収容のホールであった。寺院に付属する劇場というのも珍しいが、名前からしてベンガル人協会に運営されており、寺院の様々な行事に使われるという。一九五〇年に建てられたという当ホールは、当時は市内唯一の劇場だったため、往年の映画スターも、この劇場でよく出演していたという。プリトウヴィー・ラージ・カプール、ラージ・カプール、デーヴァ・アーナンド、スニルダットというキラ星のような往年の名スターがこの舞台で演じていたことを聞くと、なんだか興奮を覚えるのだった。九月五日の夕方、ヒマーチャル・プラデーシュ

州のV・S・コークジェー知事を主賓に迎えて、落ち着いた雰囲気でご公演を終えることができた。

感動の舞台 デリーでの上演（観客数約二五〇）

シムラーからデリーへの帰路は、列車を利用することにした。カルカー駅までは、六時間近く小さな山岳列車（愛称は「ヒマラヤ・クウイン・エクスプレス」という）に乗り、すがすがしい山の空気と景色を満喫した。鉄道ファンにはたまらない。しかし、車両は二二名が各人の重いスーツケースをもって乗ると、一両の車体はもう移動ができないほど窮屈な状態だった。

カルカー駅からニューデリー駅までは、快適な特急で約四時間ほどで着いた。しかし、夜の一時を過ぎていた。遠く離れたオークラー地区にあるジャミア・ミリア大学のゲストハウスへと向かったが、急激な気温の変化（必ずしも避暑地から灼熱の地に来たというだけでなく、冷えすぎる列車内の冷房も原因だと私は思う）に、体調を壊す人が出てきた。いつも公演の半ばぐらいに病人が出やすい。ヒンディー語のほうはKさんが三九度の高熱がでたので、医師を呼んで診てもらった。たいしたことのないような口ぶりだったので抗生物質の効き目に期待するより外なかつたが、私は万一のことを考えて、ひそかにインド人の代役を考えた。代役とはいえ、女中役はひじょうに大事である。しかし、芝居に慣れたインド人ならセリフはすぐに覚えられるはずだ。むしろ、相手役の日本人キャストの方が戸惑うので、リハーサルは欠かせないだろう。多少のちぐはぐはあっても、中止よりはましだ。

国立演劇学校のアヌラーダー・カプール教授に相談したら、卒業生で比較的自由な時間のとれる主婦を紹介してもらった。快く引き受けてくれ、台本を今夜の内に暗誦しておいてください、と依頼しておいた。明くる朝、学生の高熱が続くようなら、彼女を代役にたてるつもりであった。しかし、幸いなことに、朝になると学生の熱は平熱にもどり、元気になった。本人の意志をきくと、大丈夫、舞台上立つというので、この代役案は実行せずにすんだ。しかし、こういうときは全く、心臓の凍る思いがするのだ。

さて、九月一〇日、国立演劇学校での上演日となった。これまで何度もヒンディー語劇を上演してきた由緒ある劇場だ。これまで、ヒンディー語劇、ウルドゥー語劇の順番でやってきた公演を、この会場に限り、ヒンディー語劇を後にしてくれるように主張して認められた。このアビマンチ劇場は、わがヒンディー語劇団にとつては、阪神タイガースにとつての甲子園球場みたいな「ホームグラウンド」なのだ。

実は、順序を入れ替えることによって、考えていたパフォーマンスをやった。ちょうど、「不協和音」の原作者であるラージェンドラ・シャルマー氏が老齢をおして観劇に見えたので、ヒンディー語劇が終ると同時に両外大生を一同に舞台上に並べ、私が舞台挨拶でシャルマー氏を紹介して謝辞を述べ、さらにパートナーの麻田座長を舞台に招いて、がっちり握手し、「ヒンディー・ウルドゥー万歳！東京・大阪万歳！日印友好万歳！」とやったら、会場から嵐のような拍手を浴びた。ついでに、感激のあまり、「これまで皆様方から暖かい激励を頂いたおかげで、今日までヒンディー語

劇を続けて来られたのです。ヒンディーを学ぶことの素晴らしさ、ヒンディー語劇の楽しさを教えてくださったのは、皆さん方です。私は二〇〇七年に定年退職しますので、おそらくこれがデリーでの最後の舞台挨拶になるでしょう。今後は一観客として皆様方にお目にかかりたいと思います」とスピーチしたら、後で「そんな悲しいことを言わないで。あなたには定年はない。これからもどんどん面白いドラマを見せて私達を楽しませてください」といわれた。これだから芝居がやめられないのである。

演劇のメッカであるこの劇場の設備は音響・照明とも申し分なく、ヒンディー語劇、ウルドゥー語劇とも最高の出来映えの芝居を披露することができた。ヒンディー語劇は、神戸公演以来久しぶりに字幕をパソコンで表示した。デリーの日本人のなかには、相当ヒンディー語のできる人もいて、ちょっとした字幕とセリフの食い違いでも指摘されるので、油断がならない。慎重にチェックして、事前に字幕のリハーサルもやった。このデリー公



「不協和音」の舞台

演はとりわけ、忘れることのできない感動の舞台であった。

ヤジで妨害されたアリーガルでの上演（観客数約一一〇〇）

デリー公演でちょうど公演のスケジュールの半分をこなした。学生の健康状態も回復したので、後半もがんばろうと、早速列車で、次の公演地アリーガルに向かった。当地もヒンディー語劇は二〇〇二年に上演した経験がある。前回は、付属の女子カレッジで上演したのだが、今回はアリーガル・ムスリム大学の演劇クラブの招待を受けた。実は、同大学には、アメリカ政府から寄贈されたケネディー・ホールという一二〇〇名収容の立派な劇場があり、前回訪れた時に、こんな立派な劇場でやりたいと思っていたところ、思いがけず、それが実現することになったのである。ここで歓迎ぶりは前回同様すごかった。駅に着くと、演劇クラブの学生たちが出迎えてくれ、なんとポーターを雇わずに、自ら重いスーツケースを送迎バスまで運んでくれたのである。同様のことを、デリーへ帰る列車に乗り込むときも（深夜であるにもかかわらず）やってくれた。ゲストハウスの厚遇ぶりも以前と同様で、結局この学園町では一ルピーも費やす必要がなかった。全部招待者が負担してくれたのだ。過去の公演の体験から言っても、全額丸がかえというケースは二、三箇所ほどしかなかったと思う。しかも、演劇仲間だから、我々にとって必要な物は何かをすぐ理解してくれて、敏速に大道具・小道具を揃えてくれたことは、非常に有難かった。

しかし、九月一二日の公演では、ちょっと困ったことが起こった。入場者に整理券を配ったとは

いえ、誰でも先着順に入場できたので、大学関係者以外の高校生達が入ってきたのである。別に観客がだれであつても、熱心に見てくれるのなら、我々は歓迎である。しかし、興味本位に、最初からヤジる目的で来た若者が多かった。ヒンディー語劇からいきなりヤジが飛んだ。ある程度のヤジは、雰囲気盛り上げる上で効果的な場合があるが、度を過ぎるとせっかくのセリフが客席に聞こえなくなる。そんな状態になってしまった。ヤジを飛ばすのはすべて男である。思うに、きれいなサリーに身を包んだわが女子学生たちは、少年たちに結構色っぽく映つたのだろう。一生懸命喋るヒンディー語も、彼らには魅力的だつたのではないだろうか。

余りの激しいヤジに業を煮やして、ウルドゥー語劇の麻田豊座長は、上演前に、「これはシリアスなドラマなので、静粛に観劇してください」と観客に訴えられた。しかし、それにもかかわらず、ヤジはやまなかつた。原爆投下という悲劇の場面でヤジられたのではたまらない。どれほど学生達の気持ちに傷つけたことだろう。麻田座長は、公演後舞台から異例の苦情を述べられた。ヤジだけでない。カメラのフラッシュは焚かないでとお願いされていたにもかかわらず、心無い記者によつて無視された。一部の不心得者のために、せっかくの主催者の熱き歓待にもかかわらず、後味の悪い舞台になつたのは遺憾であつた。

これまでの多くの舞台経験を見ても、ヤジで妨害されるというのは、初めてであつた。また、観客の九五パーセントが男性ばかりというのも異常である。三年前と同様、女子学生に見て欲しかつた。この広大な大学の構内には、女子寮がたくさんあつて、女子学生もいっぱいいるはずだ。しか

るに彼女たちが自由にこの劇場に観劇に来られないのは、やはりイスラム教の影響ではないだろうかと思つた。女子学生に見てもらおうと思えば、こちらから女子大学にでかけなければならぬのである。とにかく、この学園町での公演は「女性ばかり」「男子ばかり」という偏つた観客層を経験した。

しかし、主催者から受けた厚遇は嬉しかった。彼らにも予測できない事態だったので、ヤジの件で責める気はない。ゲストハウスで振舞われたルーマリー・チャパティー（普通のチャパティーより薄く大きく、ハンカチを広げたような形になることからこう呼ばれる。イスラム文化特有のものである）の味は忘れられない。

ジャイプルでの上演（観客数約二〇〇）

アリーガルを深夜の列車で発ち、早朝ニューデリー駅に着き、そこからシャターブデイー・エキスプレスに乗り変えて、次なる公演地、ラージャスターン州の州都ジャイプルに向かった。四時間ほどで、「ピンクシティー」に到着した。九月一三日のことで、アリーガル公演からまだ丸一日経っていない。実は東京外国語大学の一行とは、アリーガルで別れて、大阪チームだけでジャイプルに来たのだ。東京チームは次の公演地としてマディヤプラデーシュ州の州都ボーパールの「全インド言語文学協会」から招待を受けていた。歴史的にイスラム文化と関わりが深いという理由以上に、ボーパールを有名にしたのは、多数の死傷者を出した、一九八四年に起つた化学工場でのガス流出

事故である。そのため、ポーパールのことを「インドのヒロシマ」と言われることがある。タイミング良く、事務局長のサティール・シユ・チャトウルヴェーデー氏のルポルタージュ『インドのヒロシマ』が出版されたので、その発刊式が「はだしのゲン」の上演に合わせて行われたのである。当初、大阪チームも招待されていたが、そして、この地でも、多分歓迎されたことと思うが、すでにポーパールでは、過去二回公演の実績があるので、今回は、まだ一度も公演していないラージャスターン州でやりたかった。ラージャスターンといっても広く、仮に従来のような日程（大体二〜三日に一回のペース）でこの州の主要都市を公演して回るだけでも二〇日以上かかるだろう。東京外大チームとは、再びムンバイで合流する約束なので、このジャイプルとウダイプルという代表的な二つの都市に絞ることにした。

ジャイプルの人口は約二三〇万人。ラージャスターン州最大の都市で、デリー、アーグララーとこの都市は、観光客にとっては「黄金のトライアングル」といわれ、短期間でインド旅行をする人が必ず選ぶコースである。

ジャワーハル・カラー・ケンドラという有名な芸術センターの演劇部門長サリル・バット氏の招待を受けて、初のジャイプル公演が実現した。どこかで聞いた名前と似ているなど思っていたら、チャンデーガルの招待機関がプラチン・カラー・ケンドラ（古典芸術センター）であった。ジャワーハルというのは、インド初代ネルー首相のファーストネームである。ここには、演劇ホールとコンサートホール、それに絵画の展示場がいくつもある。

九月一四日に、この二五〇人収容のほどよい広さの演劇ホールで公演を行った。八割程度の入りであった。ヒンディー語劇単独の上演だったので早く終ってしまった感じだったが、七回目の上演ともなれば学生の演技も磨かれてきて、何の問題もなく成功裏に終った。新聞報道でも好評だった。

この芸術センターのゲスト・ハウスに泊めてもらったのも嬉しかった。会場と同じ場所というのは、非常に都合だった。宿泊場所から公演場までは移動しなければならないのが普通（それが大都市ほど遠く離れていて不便である）だが、今回の一一都市での公演を見ても、会場が宿泊場所の目と鼻の先というのは、ここジャイプルだけだった。豪華なホテルに泊るのも悪くないが、こういう芸術の香り高い雰囲気の場合に泊るのは、精神衛生上も非常に良く、息抜きができた。ラージャスターン各地の民芸品展示コーナーではラージャスターンの文化に触れることができた。たまたま「ガインディー・キング（牧師）・池田（大作）展」も開催されていたので、それも鑑賞した。

息抜きといえ、やはり屈指の観光都市に來た以上、学生も観光地に案内した。私は曾遊の地だったが、アムベール城の「象のタクシー」に学生達と一緒に乗った。ところが、明るく日の新間に「ゾー」とする記事を見た。なんと我々が象に乗った数時間前に、その一頭の象が暴れて象使いを踏み殺し、ロシア人を含む数名の外人観光客に重傷を負わせたというのだ。日本でも、どこかのサファリ・パークでライオンがライオン使いを噛み殺した事件があったが、もちろんすぐさま営業は停止する。そしてかなり長期間、営業は自粛するものだ。しかし、何事もなかったかのように、（もちろん、その象は使わないにしても）他の象を営業に使いつづける神経は、日本人には分からない。サリル・

バット氏はあの事件を知って親切にも、私に携帯電話で、象には乗らないように、と連絡をくれたらしいのだが、通じなかったらしい。まあ無事だったことを、いつものように、ヒンドゥーの神々に感謝した。

その他、ジャイプルの楽しい思い出は、学生達と一緒に専門店でラージャースタン料理（菜食）に舌鼓を打った事、はじめてヒンデュー映画を鑑賞したことである。映画こそ、われわれの最大の興味なのだが、忙しい公演期間中は、意外と映画を見る時間がとれないのである。ジャイプルで初めてその機会にめぐまれたのである。

ジャイプル公演でもうひとつ私にとって満足すべきことは、この州都で上演したことにより、ヒンデュー語地域のほぼ全ての州都でヒンデュー語劇を上演という記録を達成したことである。これが二〇〇〇年以前なら「全ての」と書く事ができた。しかし、「生憎」二〇〇〇年に、ビハール州からラーンチーを州都とするジャールカンド州が、マディヤ・プラデーシュ州からラーイプルを州都とするチャットティースガル州が、ウッタルプラデーシュ州からデヘラードゥーンを州都とするウッタランチャル州が分離した。このうち、デヘラードゥーンでは昨年公演したばかりだが、ラーンチーとラーイプルが残ってしまったのだ。

ウダイプルでの上演（観客数約二〇〇）

九月一六日の早朝、飛行機で、ラージャスターン州の南端部にある、もうひとつの公演地ウダイ

プルへと向かった。飛行機であつという間に着いてしまった。ウダイプルは人口約三〇万人。ウダイプルのウダイとは、この町の建設者であるメーワール王国のウダイ・シング王に因む。ウダイプルは一五六八年以降、イギリス統治下にあつても、ウダイプル藩王国の首都として存続したという。主催者であるJRNラージャスターン・ヴィドヤーピート（ラージャスターン学研究所）のラリト・パーンデ所長の出迎えを受け、ヴィシユヌプリアーという名の快適なホテルに案内される。着いたその日の夕方に公演という慌しい日程であつた。しかしリハーサルはいらないので、体調さえよければ、それも十分可能だ。会場は、モーハンラール・スカディヤー・ホールという研究所内ホール。ジャイプルと同じような雰囲気、同じような反応があつた。

今回の公演実現の橋渡しの役割を果たしてくれたのは、同研究所考古学助教ジーン・カラクワール氏だつた。私は氏が京都の国際日本文化センターで研究留学中に知り合つた仲である。ラージャスターン学というのに興味をもつた私は、ラージャスターニー語で行われる民衆文学の授業に出席させてもらった。かなり分かるが、やはり標準ヒンディー語とは相当違う。劇の上演以外にも、研究所あげての歓迎にあつたことも嬉しかつた。日本に関する関心も高まつており、日本のことをいろいろ質問された。我々は外国語と外国の文化研究を任務としているが、海外では、日本のことをよく聞かれるので、日本の歴史や文化についてもきちんと説明できるだけの知識をもつておく必要を感じた。

さて、屈指の観光都市であるウダイプルに來た以上、ピチョーラ湖に臨む壮大な王宮と湖中の小

島に浮かぶレイクパレス・ホテルは必見である。「ラージャスターンのカシユミール」といわれる所以である。私はかつて留学時代に、ある会社の社長さんの通訳としてこの超豪華ホテルに泊めてもらって夢のような経験をしたことがある。まさか、学生達とこんな豪華ホテルには泊れないので、せめて豪華な昼食をご馳走した。インドではとても庶民の手に届かない金額だが、円に換算するとそれほどでもない。連日奮闘してくれている学生達にこれぐらいの慰労は当然だ。

ラージャスターンにも地球規模の異常気象が起り、雨量が少ないため、この一〇年間はこの湖の水も干上がっていたという。しかし、我々が訪れたこの時期は、幸い満々と水をためていた。ちょうどガネーシャ祭が行われており、その神像を湖に沈めるヴィサルジャンの儀式も見ることが出来た。但し、爆竹を所かまわず投げつけて鳴らすのは危険である。あの耳をつんざくような激しい音は、日本では許されないだろう。警官がボート上から監視していて警戒しているのは、きつと過去に、爆竹による被害があったからだろう。さらに、バゴレー・キー・ハヴェーリーと呼ばれる旧藩王の大邸宅内を見学した。迷路のよう入り組んだ建物の中には一三八もの部屋がある。美術展示室も楽しめた。

ムンバイでの上演（観客数約二六〇）

一週間ぶりに東京外大チームと無事にムンバイで再会して、お互いの成功を喜び合った。ポーパールでは全市あげての大歓迎にあったと聞いて、嬉しかった。さて、ここからまた合同公演が始まる。

とくに、ここムンバイの劇場（マイソール・アソシエーション・ホール）はデリーの国立演劇学校のアビマンチ劇場と並んで、劇場としての設備が整っているので、「はだしのゲン」の上演にとつても、理想的な場所である。

九月一九日の夜のマイソール・アソシエーション・ホールは三つの演目で盛り上がった。我々のヒンディー語劇とウルドゥー語劇の他、地元市民による日本語劇が加わった。主催はムンバイ印日協会で、安井兵典総領事を主賓に招いた。ヒンディー語劇は、デリー以来久しぶりに字幕を表示した。ヒンディー語劇のなかで、女中が目玉焼きと煮抜きをナイフとフォークを使って食べるシーンがあるが、これまでどこの会場でも、実物の卵を調理させて、舞台でそれを実際に食べてきた。しかし、このホールのオーナーたるマイソール協会は厳格なベジタリアンの団体で、卵の持ちこみも一切禁止という。劇に使うだけで食べないから、といつても、頑として持ちこみそのものを拒否された。そこで、ケーキを卵のように見せかけて、食べた。食べ物へのインド人のこだわりはすごい、と改めて感じた次第。

また、ヒンディー語劇のムンバイ公演にはいつも欠かさず見に来て、前列に座って大声で笑ってくれるニーシャーという婦人が、今回だけはゴア出張のため欠席したのは残念だった。彼女のよう
に率先して大声で笑ってくれる観客の存在は、出演者にとってどれほどありがたいか分からない。
彼女に引きつられて他の観客も笑ってくれるからである。

ベンガロール（旧名バンガロール）での上演（観客数約三〇〇）

ムンバイから飛行機で、「インドのシリコンバレー」ベンガロールに向かう。今や、ベンガロールは人口五〇〇万人近い堂々たる国際都市で、外国の航空会社もぞくぞく乗り入れている。在留邦人の数も、今ではムンバイを追いぬいて、デリーに次いで多いといわれている。気候もよくて、住みやすいために、どんどん人口が増えており、それがインフラの発展を妨げ、かえって住み難くなつたという皮肉な面もある。

大阪外国語大学ヒンディー語学科の卒業生で、現在バンガロール大学で日本語を教えておられる秦智氏がプログラムの、宿泊、車等あらゆる手配を全部やってくださつた。そして、我々の訪問に合わせて、「ジャパン・ハツバ」（ハツバは祭りという意味のカンナダ語）を全学的な行事として準備された。これには、ベンガロール在留の日本人からも財政的援助があつたらしい。

初日の九月二〇日は自由行動の日で、ハイテク産業の見学組とバンガロール大学ヒンディー語・ウルドゥー語学科訪問組に分かれた。私と麻田座長は数名の学生とともに、バンガロール大学を訪問、ヒンディー語・ウルドゥー語専攻の学生達と交流した。明日の公演に誘うことを忘れなかつた。

「ジャパン・ハツバ」は九月二一日、大学構内のジュナーナ・ジュヨティ・ホールと隣のセミナーホールで催された。大学関係者やトヨタ自動車現地合併会社の伊藤清元社長の挨拶があり、デリー大学元教授で、インドにおける日本研究の草分け的存在のサーヴィトリー・ヴィシユヴァナータン女史の「インド・日本と私」と題する講演から始まつた。日本研究を志した理由、東大に留学中のこと、

日本人の知己、今後の日本研究の展望についてなど、非常に興味あるお話しをされた。私も知己のひとりだが、彼女が引退されて、ここベンガルにお住まいとは知らなかった。この行事がきっかけで、デリー以来三〇年ぶりで再会したことは感激だった。しかも、わがヒンディー語学生の演技を見てもらえるなんて。文句なしの激賞だった。感動的とさえ言われた。彼女の母語はタミル語だが、長年デリーで暮らされたので、ヒンディー語もよくお出来になる。同じ賛辞はウルドゥー語劇に対してもなされた。

また、東京外国語大学ウルドゥー語劇団の先輩の幾人かも祝福に駆けつけて下さった。中でも、多忙なはずのNHK沖縄局のアナウンサー、中山庸介氏がわざわざ沖縄から駆けつけてくださったのには感動した。かつて東京外国語大学で競演した仲間である。「相変わらず、大阪喜劇は健在です」と誉められた。ジェット口の久保木一政氏には、過去デリー公演でも観劇いただいているが、今回も観劇いただいた。久保木氏は、「ロイヤルエコー」という在留邦人で結成されたコーラス・グループの一員として舞台に立たれて美しいハーモニーを聞かせていただいた。

我々の二つの語劇上演に対して、秦氏をはじめとする日本語学科関係者が準備した日本文化紹介関係のプログラムは実に多彩で、歌あり、踊り（盆踊り）あり、日本語劇（「ウサギと亀」を面白くアレンジしたもの）あり、詩吟あり、生け花と折り紙のデモンストレーション、前記のコーラスも…と、書ききれないほどである。よくも短期間でこれだけの行事が企画できたものと、さすが元商社員の秦氏の能力に感嘆した。

このような若者同士の草の根文化交流は実に有益だと思う。ちょうどこの年の四月に、小泉首相とマンモーハン・シン首相との間で署名された「日印共同声明」の八項目のうち、五番目に「日印両国は人と人との交流、とくに学生の交流、JETプログラムを含む若い世代の交流を奨励し、文化・学術交流を継続的に推進する」とはっきり明記されている。我々はこの精神を忠実に実践しているのだ。

最後に、帰国の日が近づいてきただけに、ホテルに届けられた日本料理の弁当には、涙がでるほど嬉しかったことを記しておこう。

ハイダラーバードでの上演（観客数約三〇〇）

そしていよいよ最後の公演地は、IT都市としてベンガールのライバル都市である、南インドのもうひとつの大都市ハイダラーバードである。人口は約三五〇万人。この町はデリー同様、五日間滞在のゆっくりしたスケジュールを組んだので、二ヶ所での公演を予定していた。その一つはイスラム研究では定評のあるオスマニア大学である。そこに留学中の東京外国語大学の学生が走りまわって事前交渉に動いてくれたにも関わらず、なぜか大学当局からはっきりした返事がないまま、当地に到着後に、麻田座長がコンタクトをとったが、結局話しがまとまらず中止となった。ウルドゥー語劇団にとっては、所縁のある大学での公演ができなかったのは、残念だっただろう。

ヒンディー語劇団のそれまでの公演で、主催を引き受けるのを断られたことは一度もない。そこ

で、アンドラプラデーシュ州政府の文化局とウルドゥー文学協会主催で行われる公演が唯一の公演となった。場所はガンディーバワン。ここで、ある事件が起った。公演の前日、会場と舞台のチェツクに訪れていたときに、あとから一人でやってきた前記の女子学生Nさんがいきなり地元の少年に抱きつかれるというワイセツ事件が起った。すぐさま警察に届け、事情説明のため、私も麻田座長ともども警察に行った。犯人はすぐ捕まったが、インドのマスメディアはすごいもので、この事件はテレビを通してたちまちインド全国で有名になった。地元の新聞にも、ヒンディー語・ウルドゥー語・テルグ語・英語紙を問わず大きく出た。このところ、インド全国でレイプ事件が多発しており、外国人女性も犠牲になることが多いという事情が背景にあったのだろう。

このうち、ヒンディー語紙の「ガンディーバワンでハーエ・ラーム！」という見出しはふるっていった。「ハーエ、ラーム」とは「おお、神様」という意味で、ガンディーが暗殺されて息をひきとるときに、こう口ずさんだといわれている。そのガンディーの名を冠せられた劇場でセクハラ事件が起こった事を嘆く記事である。しかし、セクハラ事件を詳しく書くのはこの欄の目的ではない。当人も迷惑だと思われるだろう。

九月二四日のガンディーバワンでの最終公演で、この事件の思わぬ余波を受けたのだ。この事件が大きく報道されたので、再びこのような不祥事が起らないように、会場には数名の警察官が配置されていた。私はそのことを余り気にせずに、ヒンディー語劇を始めた。最終公演だと思って、学生も特別力をいれて、客席で特別大声で夫婦喧嘩のシーンを始めたようだ。いきなり観客の下肝を

抜く算段だ。最初は本当の喧嘩が始まったと観客のだれもが思う。やがてすぐに芝居の一部だということが分かるのであるが。今回だけは違った。本当の妨害Ⅱいやがらせが起つたと誤解した警官が二人に向かつて突進、警棒を振りかざして「逮捕」しようとしたのである。インドの警官の携帯する警棒はラーティーと呼ばれ、日本の警官のもつ警棒よりもずっと長くて丈夫。これが頭上に降り落ちるとたまらない。いきなり脳天めがけて降り下ろそうとするから、かなり手荒な「逮捕」である。夫婦役の二人の学生は、本当に「怖かった」と言っていた。間一髪のところ、立ち上がって舞台の方に歩いていったので、芝居だということが分かって事無きを得たが、もう一秒遅れていたら：そして学生が重傷を負っていたら：と思うと戦慄が走る。言うまでもなく、私の責任が問われ、学生の両親に訴えられ、最悪の場合、私は辞職を余儀なくされ、本書が世にでることはなかったであろう。またしても私は、ヒンドゥーの神々に救っていただいた。

しかし、本物の警官をも「欺く」ほどの迫真の演技は好評だった。主催者がウルドゥー文学協会だった関係からか、観客のほとんどはイスラム教徒だったのが特徴である。歴史的事情からして、この町にはイスラム建築やイスラムにまつわる史跡が多く、住民にもイスラム教徒が多いのは事実である。ウルドゥー語もよく通じる。しかし、全体としては少数派である。多数の住民はテルグ語を話すヒンドゥー教徒である。警察署での事情聴取でも、警察官は学生の書いたウルドゥー語が読めず、英語訳を要求したほどである。

とにかく、途中一週間ほどの別日程はあったが、一ヶ月にも及ぶ長期の合同公演旅行はこうして無事終了した。両大学の歴史にとって画期的なイベントとなった。芝居の評価は人それぞれだろう。各会場でアンケート調査を行って、反省の材料ともした。私は当事者として論評はしにくいのが、音楽・舞踊・美術を含めた舞台の総合芸術という点では、東京外大チームにはるかに及ばないことは事実だ。専門家からも高い評価を得るだろう。我が大阪外大チームの生命は、ヒンディー語のセリフそのものへのこだわりにあった。ネイティヴスピーカーに十分通じるだけでなく、よどみなく流暢に話すことにより観客を魅了することを最大限めざしたのだ。一瞬たりとも観客を退屈させてはいけない。ヒンディー語を学ぶ者として当然とはいえ、こうした目標をめざした結果、まあ高い評価を得た事を満足に思い、学生の健闘を称えたい。

両外大の学生代表が「インド通信」の紙上に共同で書



合同公演の記念写真—インド服が大阪外大生、浴衣姿が東京外大生、前列左から四人目が榎駐印大使

いた公演手記は非常に良く書けているので、次の文章を引用してこの章を終えたい。

「ウルドゥー語劇の「はだしのゲン」では日本の文化背景を土台にした、いわば「日本性」がどこまで通用するか、対してヒンディー語劇では、インドの家庭を舞台とするなかで、「インド性」を重視し、両者とも目指すものもアプローチも全く対照的であった。結果として、ウルドゥー語劇で観客の涙を誘い、ヒンディー語劇で爆笑を浴びたのである。連日、テレビや新聞で大きく報道され、予期以上の大反響を得た。ライバル関係にある東西の外国語大学生が専攻の語学を生かして、共同でインドとの草の根文化交流に尽くした意義は大きいと思う」

公演終了後のハイダラーバードのホテルでの打ち上げ会は、特別盛り上がりを見せ、お互いの健闘を称え合った。いろいろひやっとすることはあったが、終ってみると、いつものように楽しいことばかりが思い出されるのだ。すばらしい合同公演だった。



第十三章 東南アジア公演と最後のインド公演

三人のメンバーチェンジはあったが、昨年と同じ「不協和音」を二〇〇六年二月から三月にかけて、東南アジアの二都市、シンガポールとバンコクで上演した。インド以外の国でも、インド人の多い所では、どこでも上演したい。そして、その人達との交流を広めたい。そうした変らない我々の願いは、この年、東南アジアの二都市で実現する事となる。日本から近いし、費用もそれほどかからない、というのが最大のメリットである。

シンガポールでの上演（観客数約四〇〇）

二月二八日、シンガポールにあるグローバル・インディアン・インターナショナルスクールという、インド人子弟の通う学校で上演した。この関連のインド人学校は、東京でもすでに数年前に開校している。シンガポールという土地柄、タミル人が一番多い。しかしながら、やはり本国インドでのヒンディー語の優勢はここにも影響を及ぼしている。児童・生徒の多くはヒンディー語をよく理解できる。必須ではないが、ヒンディー語の授業もあり、履修者も多い。第二外国語として、フランス語とヒンディー語のどちらかを選択することになっている。

講堂に四〇〇名ほどの生徒を集めて上演した。照明・音響設備も良く整い、きちんと管理されて

いる。日本人の演じるヒンデュー語劇に皆、非常に関心をもったようだ。結構笑ってくれていた。シンガポールにはリトル・インドシアというインド人居住区がある。そこへ行けば、ほぼ何でもインドのものが手に入る。芝居の衣装もそこで調達できる。この学校の校長先生は親切な人で、参加者全員に五〇シンガポールドルの「出演料」を頂いた。サチュデヴ夫人のマンションで全員ホームステイさせてもらったので、滞在費はほとんど不要であった。

バンコクでの上演（観客約一五〇）

三月四日、バンコク市内のインド・タイ商業会議所ホールで公演した。主催は、タイ・ヒンデュー語協会と在バンコクのインド大使館。タイのインド大使館の仕事は印タイ関係のことをやっておればいいはずで、日本の我々のことを世話する義務は一切ない。それにも関わらず、こういう催し物をわざわざやってくれるのは、非常に親切である。もちろん、実現には、大阪神戸インド総領事館の尽力もあったが。

プミオン国王ご夫妻と、国父マハートマ・ガンディー、アブドゥル・カラーム現大統領の御影が飾られている舞台で演じた。観客はほぼ全員、インド人あるいはインド系タイ人ばかりであった。わずかに、シンラパーコン大学でサンスクリット語とパリー語を教え、ヒンデュー語もできるチラパト・プラパンドヴィドゥヤー教授だけがタイ人であった。

ヴィヴェーク・カトウジュ駐泰インド大使が主賓だった。上演後の夕食会では、大使を中心に楽

しく語り合った。前日はラージーヴ・クマール参事官の私宅に夕食に招かれた。大使はアラールハーバード出身のカシユミリーリ民族で、ネルー初代首相と同じである。アラールハーバードのことを中心に話題が尽きなかった。バンコクには八万人ほどインド人がいるといわれる。シンガポールと違って、半数はシク教徒の多いパンジャーブ出身者である。町中で、ターバン姿をよく見かける。インド系タイ人（タイ生まれでタイ国籍、もちろんタイ語はよくできる）とインド国籍、外国人としてバンコクに暮らしているインド人との比率は約三対一だという（タイのインド社会について、佐藤宏『タイのインド社会』アジア経済研究所、一九九五年を参照）。

タイ・ヒンディー語協会というのは、二〇〇一年に結成された団体で、一〇〇人ほどの会員がいて、本業のビジネスの傍ら、毎月一回程度の会合を開き、インド大使館と協力して、ヒンディー語の普及を図るのを



プーミポーン国王ご夫妻と国父マハートマ・ガンディー、アブドゥル・カラーム現大統領の御影の下で演じる

任務としている。そのウェブサイトでは、この公演のことが大きくとりあげられ、高い評価を得た。このバンク公演が七一回目の海外公演で、日本でも二九回公演を行っているため、海外と国内の公演を合わせるとちょうど一〇〇回目というめでたい公演になった。この「一〇〇回記念公演」に、大阪から、ヒンディー語劇団の大先輩である小林真衣さんが駆けつけて祝ってくれた。

日印交流年事業で再度両外大のインド合同公演実現

ちょうど一〇〇回公演を行ったところで、定年も近づいてきたので、ヒンディー語劇からこれで文字通り「引退」のつもりで、その後は一切活動をしていなかった。

ところが、二〇〇六年の十一月頃、外務省内に設けられた「日印交流年」実行委員会から「二〇〇七年日印友好年の交流行事として、東京外国語大学学生によるウルドゥー語劇と大阪外国語大学学生によるヒンディー語劇を取り上げる」と連絡が入った。一二章で述べたように、二〇〇五年四月、小泉前総理とマンモール・ハン・シン首相との間で署名された「日印共同声明」に基づき、日印両国は、日印文化協定締結五〇周年にあたる二〇〇七年を「日印交流年」として、それぞれの国において各種事業を実施することになっていた。そして、二〇〇六年の六月には「日印交流年」事業の全体調整等を目的とした実行委員会が組織されたのである。大橋信夫実行委員長（三井物産会長）から両大学長あてに届いた手紙には「両外国語大学の学生によるヒンディー・ウルドゥー語劇は（日印）両国民間の相互理解の促進と、平和の大切さを訴える上で効果的な事業であると認められる」と選

定の理由が述べられていた。有り難いことである。やはり、これまでのインド公演の実績、とくに二〇〇五年の両外国語大学初のインド合同公演が各方面で評価されたのだから。「平和の大切さを訴える」とあるから、「はだしのゲン」を取り上げた麻田座長の慧眼に、今にして頭が下がる思いがした。

そして、二〇〇六年の二月一四日、東京のフォーシーズンズホテルで、安倍晋三総理夫妻、マンモハン・シン首相夫妻列席のもと、「日印交流年二〇〇七」の合同開会式典が行われた。一方、インドのニューデリーでは、二〇〇七年の二月一三日に、日本大使館で森喜朗元総理参列のもと、「日印交流年」の開会式典が行われた。日本における「インド祭」は年間一〇〇余りのインド文化紹介事業がすでに各地で繰り広げられている。

「インドにおける日本年」の行事には、巡回日本映画祭、観世流能公演、中根千枝・東大名誉教授の講演会、現代日本美術展、日本語弁論大会等、四〇余りのイベントが用意された。我々の「大學生によるヒンディー・ウルドゥー語劇公演」もその一つであり、我々の公演の直前に、デリーでは、森山良子コンサート、宝塚OG公演、日本風景画展、和太鼓公演、生け花・盆栽展等がすでに実施済みであった。しかし、聞けば、森山良子コンサートや宝塚OG公演の観客の九五パーセントは在留日本人で、五パーセントのインド人もごく限られた招待客で、しかも敷居の高い大使館公邸で催されたとか。これでは、まるで日本人のための「慰問公演」であって、本当の日印の文化交流になっていない。せつかく民間から集めた多額の浄財が有効に使われているとは言えない。インド

人の大衆を無視して何が文化交流かといいたい。我々の劇の観客は、逆に九五パーセントがインド人である。

「大学生によるヒンディー・ウルドゥー語劇公演」プログラムは、二月一日～三月七日の間、デリー（四回）、コルカタ（二回）、ムンバイ（二回）、プネー（一回）と決まった。学年末試験、入学試験等の大学行事からして、この時期以外には考えられなかった。

「ある死神の話」に挑戦

東京外大チームは「はだしのゲン」をインドとパキスタンで上演済みであり、ほとんど同じメンバーでそのままやれたのに対し、大阪外大チームはすでに解散していたので、新たなメンバーを探して新しいドラマで臨むより他なかった。残された日数の少なさから、登場人物の少なくてすむドラマで、できればベテラン学生（過去に出演経験のある学生）だけでやるより他ないと判断した。三年生はすでに就職活動に入っているので無理で、一、二年生には負担になる。幸い四年生の学生に、単位も卒業論文のみを残してほとんど取得しており、就職も決まっているという好条件を備えた三人の女子学生が見つかった。しかも三人とも、インドまたは日本国内での公演で出演経験済みである。

演目は、内木文英作の「ある死神の話」と決めた。実は、将来の上演用に、この一時間ドラマのヒンディー語訳をギター・シャルマー氏（大阪外大の前外国人教師）と共訳で完成させていたの

だ。死神三人と、自殺を図り死神に助けられるという学生が登場する。四人とも男なのだが、今回は誰も男子がいないので、女子学生が死神A、死神Bと学生を演じ、死神Cを私が演じる事にした。

このドラマは、一九五四年初演で、一〇〇〇回以上演されたという。作者の内木氏は八二歳で健在である。快く翻訳とインドでの上演を許可して下さった。これまでのドタバタ喜劇とは違って、爆笑を誘う場面は少ないかもしれないが、人を殺すのが役目の死神が命の貴さを説く、というのが面白いところで、風刺の効いた面白いセリフもあり、やりようによつては結構受けるかもしれないと思つた。日本で一〇〇〇回以上も上演されたということは、評判がよかつたからだろう。「日本年」だから、日本のドラマがふさわしかろう、とも判断した。言うまでもなく、「はだしのゲン」も日本のドラマである。

「死神」という概念は、そもそも仏教を介してインドから伝わつたものだから、インド人には一語（ヤムラージ。その使者をヤムドゥートという）で通じるが、英語なら、たとえば、*ruler of the world of the dead* という風に、複数の単語を並べないと通じないだろう。

死神は舞台にどんな衣装で現れるのだろう。資料としては、朝日新聞に出た、喜劇の祖といわれる曾我廼家十郎の死神姿の写真がある。見るからに痩せた貧相な老人で、乞食のような姿をしている。女の子がこんな格好をしたのでは、あまりにも違和感がある。そうでなくとも、いくら男子学生が少なくとも、「宝塚現象」化だけは避けてきたのだ。

そこで、インドではどんな格好で登場するのだろうか。たまたま、国立演劇学校で舞台衣装を教

えるアンバー・サンヤールさんが筆者のシャンティニケトン留学時代からの知り合いだったので、彼女の家でいろいろな舞台衣装の写真を見せてもらった。ひとつには、面をかぶる方法がある。鬼のようなイメージである。これなら、「宝塚現象」を薄める効果もあり、衣装の点で、非常に印象的な舞台となろう。これまでは舞台装置も衣装も、費用の点で、総じて簡素なものが多かった。最後に、派手な衣装で登場するのも悪くなくろう。そこで、「死神装束」のデザインはアンバーさんに任せることとした。原作は日本の死神だが、インド風の死神にしたのだ。

それから、ドラマの終わり方について、日印の観客の間に違いがあることを日頃から感じていた。日本のドラマの結末は必ずしもはっきりしてはいなくて、観客の想像に任せるものが多いように思う。いわば余韻を残した終わり方が好まれるようだ。しかし、インドの観客ははっきりした結論を求めるように思われる。それも、伝統的にはハッピーエンドが好まれる。「ある死神の話」も、人を殺すという死神の任務を忠実に守る死神Bが、学生を助ける死神Aに感化されて、最後には、何となく分かったような気がして、「殺しちゃいけない…生かす、ってえんだな…！」とつぶやきながら去っていくところで終わるのだが、インドの観客にとっては、印象が薄いような気がする。そこで、思いきって、ポリウッド映画風にハッピーエンドにして、「一年後」という字幕を（複数のインドの言語で）入れ、この間暗転にして、その間に学生役が綺麗な服に着替えてから、急に明るくなった舞台に「お母さん、試験に受かったよ！」と叫びながら走ってくるところで終わることにした。音楽もそういう明るいものにした。これらはいずれも女子学生三人が相談して決めたことで、

ここでも若い彼女たちの感性が発揮されたのだ。果たしてインド人観客の反応はどうだろうか、いつものように興奮しながら、インドへ出発する直前まで稽古に励んだ。

デリーのカレッジでの上演（観客数・初日約三五〇、二日目約二五〇）

二月一八日にデリー空港に着いた我々のチーム（スタッフを入れて五名）は、翌日、先着の東京外大チームに合流する前に、国立演劇学校の衣装部門を訪れて「衣装合わせ」を行った。予想より派手で（特に仮面）、高くついたが、これでやることにした。思い切って「化ける」楽しみもある。

二月二〇日の午後、早速デリー市内の名門女子大、レイディー・スリーラム・カレッジで初演を行った。このカレッジは、インドの全国カレッジ・ランキングの上位につねに登場する、優秀な子女を集める名門校である。午前中にライトや音響の調整をすませ、午後の開演を待った。大講堂の入り口の床には、両語劇の名前が美しくアルプナー（一六八ページ参照）に描かれ、花輪が添えられていた。主催者が心から歓迎してくれていることを感じさせてくれる。とりわけ、ヒンディー語学科の先生方が中心になって準備をすすめてくれたらしい。東京外大チームとは、この会場で合流して対面した。私は、昨年の夏、彼らのパキスタン（カラチ）での公演を拝見しているので、一四名全員と顔見知りである。三人の学生のうち、Yさんだけは、二〇〇五年の彼らとのインド合同公演に参加しているので、ほとんどのメンバーとは旧知の間柄。再会を喜んでいた。他のメンバーもすぐ友だちになった。

実は、我々大阪外大チームは、スタッフとして字幕係りを一人参加させただけで、照明や音響は、東京外大チームの豊富なスタッフに助けってもらわねばならなかった。彼ら用に、「ある死神の話」の台本をウルドゥー文字で書いたのを持参して渡した。八回の公演を通してずっと彼らの世話になった。合同公演の有難さで、我々はこの友情にすっかり甘えることになった。

このカレッジの講堂は一応、音響設備も照明設備も整っていて、上演には差し支えがないと思われた。しかし、いざ始まってみると、最初の効果音が出なかったり、いろいろ予期せぬハプニングがあった。効果音にオーディオ・カセットを使う時代はとくに過ぎており、この頃は、アイポッドをパソコンに繋いで使う。どうも、そのハイテクがインド側の古い音響装置とは不整合を起こすのではないか、機械に弱い私は勝手にそう推測した。

しかし、初めてこのドラマを見る観客には、それほど影響のないことで、三五〇人余りの女子大生は、セリフの一つ一つを楽しんでくれたようだ。いつものように、我々のドラマには、ほとんど会話の途切れがない。それに加えて、凝った衣装で登場したので、つねに観客の注目を惹きつけることができたようだ。反応のよさは、その後の交流会で確認できた。ヒンディーの発音は確実に通じていた。死神Aを演じたTさんは、ほとんど出ずっぱりで、よくもあの長い（日本語でも覚えられない）セリフを短期間で覚えたものだとの絶賛の声を聞いた。インド公演の経験をもつYさんは、このドラマで唯一の生きた人間である学生を演じたが、泣くシーンの迫力はすごい。たまたまデリーに滞在されていた、大東文化大学でヒンディー語を教える石田英明教授も観劇された。初演はまず

まず成功で、後七回もある公演に自信をつけさせてくれたが、しかし、まだまだ動きが鈍い。ホテルに戻っても、出演者たちは、よりよい演技にするため、知恵を出し合った。

次の公演は、同じデリー大学付属の女子カレッジではあるが、はるか北のデリー大学キャンパスの一角にあるダウラトラーム・カレッジである。スリーラームとかダウラトラームという名前は、学園創設に寄与した篤志家の名前である。二月二二日の上演に備えて、前日の二一日に会場の下見に訪れた。このカレッジの校長は、筆者も習った、もとデリー大学ヒンディー語学科主任の故ヴィジャイエンドラ・スナータク教授の令嬢のスネーフ・スターさんであることを知り、昔話に話が咲いた。講堂は、一〇〇人以上収容できる立派な講堂だったが、広すぎるとマイクの性能がよほどよくないと、声が後まで届かないという欠陥がある。また、日中の公演なので、外から光が入り、会場を暗くすることができない。「はだしのゲン」は照明が生命であるので、満足のいく上演ができないと判断して中止。ヒンディー語劇だけの上演となった。やはり、一〇〇〇人入るホールで二五〇人という観客というのは、もうひとつ盛り上がりには欠ける。初めてピンマイクを使用したのが、静止状態でしゃべると確かによく音を拾ってくれる。しかし、動きが激しくなったり、役者同士が近づきすぎるとハウリングを起こして却って聴き取りにくくなる。そういう問題に直面した。一番良いのは、耳につけるマイクだと聞いたが、高価すぎる。まあ、素人劇団としては、できるだけ大きな声を出すように努めるより方法がない。マイクへの不満・不安があったが、女子学生たちには好評だった。この二つのカレッジで上演したのは、本命の国立演劇学校での上演に備えるという意

味で非常によかった。本番へのリハーサルのようなものだった。東京外大のスタッフ（音響・照明）との呼吸もピッタリ合うようになった。

デリー（アビマンチ劇場）での上演（観客数・初日約一四〇、二日目約八〇）

さて、いよいよ、われらヒンディー語劇団のホームグラウンドともいえる国立演劇学校付属のアビマンチ劇場での上演である。今回は初めて二日連続公演にした。順序は、二月二三日が、ヒンディー語劇、ウルドゥー語劇の順番で、あくる日の二月二四日がその逆と決めた。マイク等のチェックは当日朝から行ったが、それで充分だった。さすがにここの設備は演劇をやるには最高で、すべてがよく整っている。何の問題もなかった。

いよいよ、初日の二月二三日、旧友や恩師や旧同僚等のお馴染みの常連の人たちが顔をそろえ始めたが、死神Cに扮する私は楽屋入りしてメイクをする必要があったので、その人たちへの挨拶は劇終了後に行うことにして、六時半からの開演を待った。いつものことながら、本番前の緊張感はないともいえない。馴染みの観客が多いので、私はやや意識過剰になり、固くなったが、まあなんとかセリフも間違わずに言えた。ドゥールダルシャン（国営テレビ局）の記者とカメラマンが来て、二つのドラマの全編を録画して帰った。また、私は、テレビのインタビューに応じた。これは、毎度のことであるので、こちらも落ち着いたもの。また前日には、麻田座長と二人で、ドゥールダルシャンのスタジオに招かれ、生番組に出演、ニュースキャスターからのインタビューに応じた。日

本でのインド諸語教育についての状況や、今回の渡印の意義等について聞かれた。生番組に出演するのははじめてで、さすがにやや緊張したが、今年が日印友好年であり、両国の文化交流がとりわけ重要であることを力説した。なんだか大使館の報道官みたいなることをやったわけだが、せっかくの日印友好年なのに余り市民一般には知られていないのが、私には歯がゆかったのだ。「はだしのゲン」も最高の設備のもとでやったので、いっそう感動を与えた。二〇〇五年には、合同公演ということもあって、六〇分に縮めての上演だったが、今回は、パキスタンでやったのと同じ九〇分をノーカットで上演した。その中には、女子たちが竹槍の訓練を受けるシーン等が追加されており、私も拝見、原作のすばらしさをますます味わった。

ただ、両ドラマを合わせると二時間半というのは、忙しいデリー市民には、やや長く感じられよう。ドラマの途中で席を立つ者が出たのはやむをえない。我々は、そ



「ある死神の話」の舞台

のことを織り込んで、ノーカットヴァージョンを上演したのだ。やはり、満足のゆくドラマを演じたいという、出演者の当然の希望に沿ったまでだ。中座する人の中には、結婚式に出なければ、という人が結構いた。前のどこかの章でも述べたように、インド人にとって結婚式以上に重要な行事はなく、結婚式とかち合うと、観客の数は一気に少なくなる。あいにく、この時期はそういう結婚式のシーズンとかち合った。また、各学校の学年末試験が近づいているということも、観客の足を遠ざけたようだ。これも、過去において経験済みである。合同公演にもかかわらず、前回より観客数が少なかったのは、ちよつと寂しい気がした。二日目の土曜日は増えると期待したのだが、その逆で、土曜日の方が少なかった。

いつも、我々のドラマを必ず観劇に来て、暖かい激励と賛辞をいただく人たちがいるのは嬉しい限りだ。中には、はるばるラクナウから駆けつけて下さった親日家のダウジー・グプタ元ラクナウ市長（過去二回、我々のラクナウ公演を主催してくださった人である）や、珍しいところでは、ジャーナリスト出身（ヒンディー語新聞「ナワバール・タイムズ」の元編集者）で、ヒンディー語誌「バーシャー」（言語）編集長のヴェード・プラタープ・ヴァイディク氏の姿もあった。ヴァイディク氏は、アフガン問題の専門家で、かつてネルー大学で博士論文をヒンディー語で書くこうとして大学当局と対立したために大学を追われ、国会でも論争を巻き起こした硬骨のジャーナリストで、政治コラムニストでもある。当時は社会科学の論文は英語で書くのが常識とされていた。長崎暢子・東大名誉教授や桑島昭・大阪外大名誉教授とも親交のある人だ。毎回、デリー公演には招待していたが、い

つも多忙で観劇願えなかった。今回はじめてお越しいただいた。これほどレベルが高いとは思わなかった、と抱きしめて感激の言葉をいただいた。後からメールで、「ヒンディー・ウルドゥーの両語劇から受けた衝撃と感動は一生忘れられない。家に帰っても、胸の高ぶりが治まらずに夕食をとる気がしなかった」と知らされた。これだから、芝居はやめられないのである。なお、これまたいつも超多忙で、二〇〇三年の全インド演劇祭以来、一度も観劇いただいていない演劇学校のデーヴェンドラ・ラージ・アングル所長にも観劇いただいた。氏の批評は次章に載せる。

せっかくの交流年なのに、客の入りがもうひとつであることに、内心やや不満もあったが、多くの人々に感動を与え、マスメディアにも大きく取り上げられたので、やはりデリー公演は成功であった。一週間で同じ都市で四回も連続公演というのは、初めての経験であった。最後の舞台では、二〇〇五年と同様、麻田座長とがっちり握手して「ヒンディー・ウルドゥー万歳!」「東京・大阪万歳!」「日印友好万歳!」とやった。例のアルカカット氏（次章参照）が四回のうち三回観劇に來られた。また日記形式のホームページに今回の演劇評を詳しく書かれることであろう。楽しみだ。早速、死神Bを演じたUさんに、「死神にしては可愛いらしすぎる」という批評をいただいた。このアドバイスは検討することにした。しかし、女の子だから可愛いのは当たり前。自分なりに「怖い」死神（現世では極悪非道人だった!）になりきろうと身振りを工夫し、一生懸命ヒンディーのセリフを喋っている姿は、誰が見ても「可愛い」に違いない。だからと言って、ミスキャストとも思わない。一生懸命その役柄になると健気な努力をしているその姿勢がいいのだ。

二月二四日の夜、両劇団の卒業生も交え、親しい人たちを交えて、コンノートプレイスの中華料理店で、デリー公演の成功を祝って、賑やかな祝勝会を持った。いよいよ明日からコルカタ公演に向けて出発だ。

なお、二〇〇七年二月二七日付で、在インド日本大使館から外務省にあてて送られた公電「大学生によるヒンディー語・ウルドゥー語劇公演／報告」の中で次のような「大使館の所感」が述べられているので、参考までに引用する。

戦中の話である「はだしのゲン」と、戦後を舞台とした「ある死神の話」、登場人物の数も演出も対照的であったが、奇しくも「死」が共通のテーマとなった。その割には、深刻一辺倒となることなく、むしろユーモアを感じさせる部分も多く、観客席から幾度も笑いが聞こえた。これは、演出の効果であると同時に、台詞が理解できているという意味で両大学学生の語学力の高さを表しているものと言える。

反面、やや冗長になるところもあり、伝えたいテーマが時として揺らぐこともあるように感じられた。また、準備の面で難しいかもしれないが、両大学同士の相互関係や、NSDとのコラボレーション等の場面があると、別の盛り上がり期待できるかもしれない。

本公演は、準備段階における関係者の多大な労力に拠るところが大きいものの、若年層の相互交

流の効果もあり、日印交流年に相応しい企画であったと思われる。

コルカタでの上演（観客数・初日約一一〇、二日目約八〇）

二月二五日の夕刻、コルカタに到着。早速、留学生やカタック・ダンサーのソロバニ・バネルジさんを交えて、ピアレス・インというホテルの中にある「アヘリ」というベンガル料理の高級レストランで夕食会をもった。私は、一九八九年に著した『文化紹介ベンガル語中級会話集』（大学書林刊）の中で、カルカッタ（旧市名）広しといえども、ベンガル料理店というのは、「シユルチ」しかないと書いたが、最近こういうベンガル料理専門のレストランも各地に現れ始めたという。ベンガル料理はすべて家庭料理だから、特別に外食するものでない、と思っていたのだが、修正を迫られた。やはり、インドの他の地方と同様、コルカタもその文化も変わりつつある、ということだ。

当市で公演するのは三度目、二〇〇二年以来五年ぶりである。ここでの過去二回の公演はいずれも、イマミ・グループというマールワリー系財閥の主催だった。今回は、NPOの文化団体「古典芸術センター」（本部はチャンディーガルにある。二〇〇四年のチャンディーガル公演と二〇〇五年の合同公演のうち、チャンディーガル、モハーリー、シムラー公演を引き受けてもらった団体である）のコルカタ支部にお願いした。

会場は、カーリー寺院に近い「モハナヨク・ウットム・モンチョ」という劇場。ウットムというのは、ベンガル出身の有名な舞台・映画俳優であったウットム・クマールの名前をとったもので、

モハナヨクとは、「偉大な主人公」という意味である。一九七〇年代に若死にしたウットム・クマーを偲んでその兄が創立したという。マイクの性能は完璧とはいえないが、他の設備は整った、バルコニー付の立派な劇場である。我々の宿泊地は、その劇場のすぐ隣にあるホテルに予約されていた。重い衣装や小道具を携えて会場とホテルを往復しなければならぬ我々にとって、この配慮は全く嬉しい。二〇〇五年のジャイプル公演もそうだった。

デリーの国立演劇学校アビマンチ劇場での公演と同様、二月二十七日と二月二十八日の連続公演とした。一日目がヒンディー語劇、ウルドゥー語劇の順番、二日目がその逆とした。メトロの駅からも近く、関係者に招待状も沢山送っていたので、多くの観客を期待したが、実際に観劇に来た人は、一〇〇人前後。広い劇場には、いかにも寂しい気がした。在コルカタ日本総領事館の生川明宏領事が挨拶された。

前回までと違うのは、観客の大半はベンガル人であったこと。観劇に来た人は、演劇に関心をもつ人か、日本に関心をもつ人が多いように思われた。観客の数の大小に関わらず、学生達は一生懸命演じた。字幕を必要とする日本人はごくわずかであったが、きちんと見せた。少ない観客の中には、はるばるシャンティニケトンから私に会いに来て下さったオミットロ・シュドン・ボタチャルジョ教授、シヨウメンドロ・ボンダパディヤ元教授の姿があった。地元のロピンドロ・バロテイ大学演劇学科の主任教授ソームナート・シンホ氏が演劇学科の学生を連れて連日観劇に來られた。両方の劇に感銘を受けられたらしく、ベンガル語に翻訳して演じたいとの申し入れを受けた。これは嬉

しい出来事だった。ついでに、学生同士の交歓の場を設けようと、同大学に招待されたが、時間がないためお断りをしたのは残念だった。もう少し日程に余裕があれば、有意義な交歓会がもてたのだが。

それにしても、前回までの七五〇人、五〇〇人という観客数と今回の一〇〇名程度という落差は何故だろう。学校の試験が真近いことを最大の理由にあげる人がいた。インドの親たちは日本の親以上に子供の教育に熱心で、入学試験だけでなく、定期試験でも家族ぐるみで取り組むのだそうだ。しかし今にして、イマミ・グループというマールワリー系財閥の影響力の強さを感じた次第。地元の政財界の大物を招待し、七五〇名もの観客を集めることができたのは、この財閥の力によるものであったことは間違いない。

ムンバイでの上演（観客数約二〇〇）

次の公演地は、デリーに次いで上演回数が多いムンバイ。三月一日、悪天候のため二時間遅れてコルカタの空港を飛び立ったサハラ航空三一六便は、水平飛行に移る前から上下左右に激しい揺れを繰り返し、乱高下が数分間も続いた。乱気流に突入したのだ。外は、稲妻が光っていて、生きた心地がしなかった。一瞬、御巢鷹山の日航機墜落事故の恐怖を想像した。私はこれまで数百回飛行機に乗っているが、こんな恐怖感を味わったのは初めてである。しかし、機長からの機内放送はななく説明も釈明も一切なかった。隣に学生がいて喋ることができたので、少しは気が紛れたが、一人

旅ならどれほど怖かったことだろう。

無事ムンバイ空港に着いたときは、ああよかった、と胸を撫で下ろした。三時間も延着したにも関わらず、ホテルには、日本総領事館の鳥飼貞一領事がヒンドスタン・タイムズの記者を伴って待つて下さっていた。ホテルで記者会見、翌々日の同紙には、「はだしのゲン」の舞台写真（黒く焼けただれた体を暗示するシーン）が大きくでた。

実は、ここムンバイでは、二日連続公演をヒンディー語劇、ウルドゥー語劇に分けて単独公演とした。会場はいずれも過去三回と同様、三〇〇人収容のマイソール・アソシエーション・ホールだ。単独公演にしたのは、学生を休ませる必要と、短いヒンディー語劇と一緒に、地元のインド人による日本語劇を上演するためである。

初日の三月二日がウルドゥー語劇、二日目の三月三日がヒンディー語劇プラスインド人による日本語劇（地元のマラーティー語劇の翻案らしい）だった。この日は、安井兵典総領事が挨拶された。土曜日のためか、デリーとは逆に、二日目の方が観客の数は多かったようだ。このマイソール・アソシエーション・ホールの設備は、デリーの国立演劇学校付属のアビマンチ劇場に次いで充実していて、特に天井からの吊りマイクがよく音を拾ってくれた。もう七回目の上演となると、演技もすっかり板についてきた。ここでも雑誌記者のインタビューを受けたが、出演者のヒンディー語の発音には驚いていた。

ムンバイ最後の夜の打ち上げは、マヒムというところにあるポルトガル料理店「ゴア」で行った。

公演旅行をグルメ旅行とも位置づける東京外大チームに、いろいろな珍しい料理店に誘われるが、今回は、実においしい海鮮料理に舌鼓を打った。学生は大喜びだが、糖尿病を患う私には余りよろしくないことだ。

ブネーでの上演（観客数約三〇〇）

いよいよ最終公演地ブネーだ。ここでも単独公演とし、東京外大チームの「はだしのゲン」は三月四日に International Institute of Information Technology という大学で上演し、大阪外大チームは市内最大のバールガンダルヴァ劇場で三月五日に上演した。ここでは、一九九九年に六〇〇人の観客を集めて上演した実績がある。主催は今回も、ブネーの印日協会だ。

合同公演最後の地とあって、両劇団ともあらん限りの力で熱演した。情報技術大学の方は、本格的な劇場でなかったもので、照明設備を外注でとりよせたり、舞台そのものを作らなければならなかったり、という悪条件の中を東京チームは力一杯演じ切った。一語一語にどよめき・笑いという反応があり、反響のよさという点では、これまでの公演で最高だったと思う。印日協会の事務局長のデヴァダルさんと事務局次長のサリター・ラナデさんを除く観客はほとんど、この大学の学生であった。床を舞台として使ったため、客席との距離がほとんどなかったことが、むしろ客席との一体感を高めたのだろう。劇の終わりのところで登場して、水野潤一の詩「静かに歩いてつかアさい」のウルドゥー語訳を朗ずる麻田座長の声もいつも以上に熱がこもっていて、聴衆の心を強く捉えた。

何度見ても最後の「灯籠流し」のシーンは涙なしでは見られない。

我らのヒンディー語劇も燃えた。その前にムンバイ公演と同様、地元のインド人グループによる日本語の寸劇と歌のパフォーマンスがあったが、楽屋にいて記者会見に応じていた私はそれらを拝見することができなかった。

「ある死神の話」にはやはり一語一語に反応があった。この反応も四都市で一番よかったと思う。面白い台詞には、大きな笑い声が聞こえた。演技という点でも、八回公演のうちでもっともすぐれたものになった。終演後に客席に降りてみていっそう、観客の熱い反応を知った。上演後、セレモニーがもたれ、壇上で私は主催者から賞状といろいろな記念品を頂戴し、久しぶりにスピーチ（謝辞）をして、大きな拍手を浴びた。二〇〇五年のバンガロール大学での合同公演の際、世話になった秦智氏もベンガルールから駆けつけて応援くださった。神戸以来の旧友S・K・ボシユ氏とも再会した。

その夜がインド最後の夜でもあった。明日はもうムンバイから日本への帰路につく。短い滞在中に忙しかったが、毎日が興奮の連続で楽しかった。印日協会の幹部に招待された、パダレ・パレスというホテルの庭園でのお別れ晩餐会も実に燃えた。ホーリーが終わると日中は急に、日本の夏のような暑さとなるが、夜は快適だ。ここで、招待者の一人で、デーシュ・パインデという演劇評論家と語り合う機会を持った。ヒンディー語劇に対して高い評価を得、マラーティー語に翻訳して演じたいとの申し入れを受けた。コルカタの演劇専門家と同じ反応を得て嬉しかった。

思えば、この合同公演の間、両外大生はずっと家族のように親しく過ごしてきた。公演では協力し合い（スタッフの足りない大阪チームが一方的に東京チームに助けられたのだが）、双方の芝居からお互いに刺激を得た。それ以外のところでは、ジョークを言い合ったり、いつも和気藹々とした雰囲気で行動をともにした。これが最後と思うと、感慨がこみ上げてくる。東京外大チームの団長のIさんは感極まって泣き出すまでに。私は両大学の男子学生に胴上げされた。麻田座長からも謝辞と祝意を頂戴し、参加者全員から色紙に心のこもった寄せ書きを頂いた。それらをここでいち書くことはできないが、一様に私への謝辞と賛辞だった。インドの人ばかりか、東京の同学の士たちからも祝福されたとは光栄だ。一生の宝としたい。

女子学生が圧倒的に多くなっても、我がヒンディー語劇団は女性中心のドラマを選ぶ等の方法で、女子に男役をやらせる「宝塚現象」をこれまで頑として避けてきた。しかし、ついに最後のインド公演に至って「宝塚現象」は避けられなかった。それは私にとって宿命であった。なぜなら私は「宝塚市民」なのだから。そういえば、彼女たちがタカラジェンヌのように見えてきた。これも「有終の美」なのだろう。



第十四章 印日演劇専門家の評価

最後に、インドと日本の演劇専門家の目からみた、我々のヒンディー語劇評を紹介する。

デーヴェンドラ・ラージ・アングル国立演劇学校所長

国立演劇学校の所長デーヴェンドラ・ラージ・アングル教授は、一九九九年一〇月九日、大阪外国語大学を訪問の際、イギリスから帰国したばかりの我が劇団の「凱旋公演」を観劇し、帰国後、同演劇学校の機関誌（年二回発行）である Rang Prasang の秋季号に「中国と日本におけるインド・ヒンディー演劇」と題する論文を掲載している。やや古くなつたが（一九九九年までの演目に限られる）、その中から関係部分を抜粋する。

…溝上富夫教授が、舞台芸術のこまやかさを学ぶだけでなく、学生と一緒に上演的なことを恒常化したのは、特に注目に値する。過去二〜三年で、大阪外国語大学の学生たちからなるヒンディー語劇団がインドを二回訪れ、四つのドラマを七つの都市で一四回公演したという情報は重要である。二回の公演にあたっては、国立演劇学校の果たした役割も大きい。これとの関係で、古くは一九六一年に、ジャヤシャンカル・プラサード作の有名な戯曲「ドゥルヴァスヴァーミニ」

が、この大学で上演されたことを述べるのは、的をはずれていないだろう。詳細は、マヘーシユ・アーランド著で、国立演劇学校出版の『ジャヤシャンカル・プラサード 舞台の創造』に述べられている。大阪外国語大学の学生たちが、溝上富夫教授の監督で上演した四つの劇とは、ラージエンドラ・シャルマー作「幕が開く前に」同「若返り」ラマーシャンカル・ニシエーシユ作の「愛とはいかなるものか」とマストラム・カプールの「僕たち、もう自由だ！」である。これらはいずれも軽いドラマであることは疑いがない。外国人学生にヒンディー語を教えるために、懸命の努力を傾けなければならぬところでは、初期の段階としては、このようなドラマの上演によって、舞台の雰囲気は確かにかもしだされている。さらに、インドとイギリスで、外国人学生による上演に対してインド人観客から実に熱い反応が得られた事は、彼らにとつて、大いに益するものだった。私は日本滞在中、「若返り」の舞台を見る機会を得た。これは、外国人用に書き改められたもので、彼らは、ロンドンの第六回世界ヒンディー語大会から帰国したばかりであった。

劇のストーリーはきわめて単純で、平面的である。一家の長老が何かの薬品を服用して若返り、それによって滑稽な状況が生まれるというだけのストーリーである。全体のドラマが、居間で展開され、そこに登場人物が次から次へと登場したり退場するのだ。出演者にとつては、特に工夫して見せ場を作る余地がない単純な喜劇である。しかし、ドラマのストーリーの平凡さにも関わらず、溝上富夫教授演出で演じられたこのドラマは、疑いなく、賞賛に値するものといえる。どの喜劇にもなければならぬ敏捷性、活気、活力は演技者に十分みられた。言葉の点で、いくつか困難な面

はあったが、それにも関わらず、劇の進行・テンポ・リズムをすべての出演者はつねに意識していた。だから、ドラマのテンポは敏捷だった。

しかし、問題点もあった。言葉と共に、身体の動きにも十分注意を払っておれば、もっとよかつただろう。つまり、言わんとすることは、ドラマ全体が、舞台にいる出演者の互いの会話レベルで展開されているということである。もしも、セリフと身体の動きや行動を組み合わせておれば、おそらく場面の雰囲気は一層盛りあがったことだろう。にも関わらず、このような形で演出した溝上富夫教授が、祝福の言葉を受ける資格のあることは、疑いがない。彼は、このドラマの演出だけでなく、自らパンディット役というような重要な役も演じていて、かなり成功を収めている。

前章で述べたように、アンクル教授から、最近作の「ある死神の話」について、次のようなコメントを頂戴した。

つい先日（二〇〇七年二月二三日）アビマンチ劇場において、日本からほぼ毎年訪れて当劇場で日本人学生によるヒンディー語劇を上演している演劇通の溝上富夫教授の新ドラマ「ある死神の話」の舞台を鑑賞する機会を得た。溝上教授は、以前にも当演劇学校のキャンパス内で、多くの劇の上演を行っており、二〇〇三年には、全インド演劇祭にも参加している。溝上教授は長年大阪外国語大学で、ヒンディー語教育に尽くして来たが、今年の三月三十一日をもって定年退職を迎えるという。

ある意味で、この「ある死神の話」が現役教授としての最後の公演といえる。もともと、我々は溝上教授が定年後もこうした活動を続けられることを希望するが、今回の公演は、印日友好年行事の一環としての公演だったので、日本側の公的資金を得ての訪印だった。

「ある死神の話」は内木文英という劇作家の作品で、一九五四年に東京で初演されている。タイトルから判断しておそらく風刺喜劇だろうと思われたが、上演後に、特にそのようなものではないことがわかった。ある学生が大学入試に失敗して自殺した後に、死神のところに行く。学生を自分の配下にとり込もうとする二人の死神が論争する。一人の死神は学生を生き返らせて、勉強して人生をやり直すように諭すが、もう一人の死神は、それは死神の掟に反すると強く反対する。結局は前者が勝利して、学生は生き返ることになる。一年後にその学生は入学試験に受かるというストーリーである。もともと、原作にはこのようなハッピーエンドの描写はないが、溝上教授は少し脚色を加えて、社会に対して重要なメッセージを伝えようとした。つまり、我々はたとえ仕事があまく行かなくとも、それに敗けることなく、前向きに生きるべきということである。

ドラマの原作に従って、舞台装置も非常に簡素なものだった。舞台正面奥の幕に、奇妙な風景画がかけられており、ときおり聞こえる列車の汽笛、死神の一杯やっている騒音、波の音、その他の音楽が聞こえる程度である。溝上教授とギター・シャルマー氏によって翻訳された台詞を喋る役者は、教授を含めてわずか四人だ。

もし溝上教授が役者の動きにもう少し注意を払っておれば、このドラマの上演はもっと面白いも

のになったであろう。しかし、動きの少ない中でも、このドラマのステージ上の台詞まわしは歓迎すべきものである。興味深いことに、死神Aと死神Bを演じた学生は、二〇〇三年に大阪で私とスレーシユ・バールドウワージ教授が指導した演劇トレーニングキャンプに参加した学生であった。

本文にもお名前が登場する西ヶ廣元インド公使にゆかりの深い結城雅秀氏は、一時帰国された期間を除いて、毎回我々のヒンディー語劇の公演にお越しいただいた。氏は演劇専門誌に演劇批評を書いておられる演劇批評家である。専門家から見た我々素人劇の評価をかねてから知りたかったのだが、我々もデリー公演がすめば慌しく次の公演地に移動する必要があったので、なかなか直接お会いしてお話を伺うチャンスに恵まれなかった。二〇〇六年に、東京でお会いすることができたので「大阪外国語大学ヒンディー語劇の思い出」と題する次のような玉文を同年一〇月三〇日に頂いた。お許しを得て、全文を掲載させていただく。

大阪外国語大学ヒンディー語劇の思い出

結城雅秀

演劇雑誌『テアトロ』に批評を書き始めてから、かれこれ二五年ばかりになる。ロンドンとパリの芝居をそれぞれ二年にわたって観てきた者の眼を通して、日本の芝居の批評を書き、これをテアトロ社に持ち込んだのがきっかけなのだが、日本の演劇もそれぞれの時代を反映して、変化し、かつ発展してきた。一九九〇年代以降のインターネットとグローバル化の時代を経て、今後、日本の

演劇は世界の他の地域とますます緊密に連携し合っていくことになる。

訳あって、あの二〇〇一年の「九・一一同時多発テロ事件」直後から三年半をインドのデリーで生活した。最近、中国とインドの台頭が言われ、大いに注目を集めているインドだが、その地における大いなる貧困、貧富の格差、単調な食生活はなかなか難儀である。インドで面白いのは、人間である。十億を超える人間が住んでいると、そこには多くの歴史的経緯や人種、卓越した思想家が居るものだ。そして、人間の住んでいるところには必ず演劇が存在する。人間の精神は、模倣を通じての虚構や幻想を抱くことなしには生き続けることができないからだ。

インドの演劇状況と云えば、演劇の題材となる苦悩のようなものについては事欠かない。パキスタンとの分離独立から来る「苦悩」があるし、伝統的に女性が置かれた地位から来る「苦悩」もある。それらはインドにおける近代演劇の題材になっているが、同時に、インドでは演劇における「舞踊」の割合が大きい。「人間にとって真に重要なことは言葉で伝達することが出来ない。詩や音楽、それに舞踊を通じて、感じることにしか出来ない」との考え方があったのだ。

そのような中であって、毎年インドに来て、ヒンディー語で上演される大阪外国語大学の芝居はデリーにおける言わば風物詩であった。私自身は台詞の意味を重視するタイプの批評家であり、ヒンディー語を理解しない以上、批評の対象とすることには困難を感じたが、幸か不幸か、マレイシアに滞在していた時期に、意味を理解できない芝居をも観るといふ習慣を獲得していたので、事前に梗概を読むとか、幕間の間に隣に座っている老人の解説を聞くとかの手段で対処していた。その

ようにして、二〇〇一年から毎年（二〇〇二年を除く）、溝上富夫教授の率いる大阪外国語大学の芝居の公演を観る機会を得たのであった。

二〇〇一年には「鏡草子」と「潔癖症」が公演された。喜劇である。観客の受けもよかった。インドの芝居の特徴として、芝居の始まる前に、公演の趣旨などを含めて、重厚な解説が入るのだが、溝上教授が格調の高いヒンディーでこれをやっておられた。ヒンディーに詳しい人によると、この言語は、話者の背景を大いに反映し得るような言語であると言う。だから、口語によるものとか、文語によるもの、都会的センスとか、田舎の雰囲気などの差異を自由に表現できる言語であるとか。そして、溝上教授のヒンディーはサンスクリットのな格調の高いものであったと友人から聞いた。した。

二〇〇一年はなかなか忘れることの出来ない年である。その年、インド議会の建物がテロリストによって襲われ、インドとパキスタンとの間の緊張関係が高まってきていた。一九九八年の核実験以来、両国とも核兵器保有国であることから、いざ全面戦争となった場合にはパキスタンがインドに対して核兵器を使用する可能性が排除されないとの状況が生じ、邦人がデリーから退去する事態となった。溝上教授の率いる二〇〇一年の芝居を観たのは、このような緊張が終ってまもなくのことであった。

翌々年の二〇〇三年、この年は三月であったが、溝上教授の一行は「恋の罨」と「夕鶴」を公演した。前者はインドの作家による喜劇であり、人物の取り違いから来る混乱が面白おかしく描かれ

ていて、観客に大いに受けていた。後者は民話に取材した木下順二の作品であり、つうの役の女性が豊かな感性を演じた。公演に先だって、溝上教授が、「夕鶴」とインドの童話との共通点を指摘する序詞を述べたところも有益であった。

二〇〇四年には、「お姑さん、ご用心！」と「食欲のないおはなし」が演じられた。前者はインド人の作による喜劇であり、姑にいじめられる嫁たちが団結して姑に対処する喜劇。どたばた喜劇であるが、インド人の反応が良かった。こういった題材には、国家や社会の背景の差を越えて普遍的なものがある。後者は、未来小説のような設定となっており、その時代では食欲というものが存在しない。そこに、百年前、つまり現在に生活していた日本人の男がアイスマンとして偶然保存されていたのが蘇生して問答を行うとの設定。溝上教授自身が、教授の役で登場するのだが、その喜劇役者振りが堂に入っていた。その中で、教授が大いに褒め上げ、国際社会の中で、大きな役割を占めるインドの言語があつて、世界共通語のひとつとなつていけるとする場面があるが、これは「二十世紀末にインドの首相となったヴァジパイ氏」の努力による成果であるとして評価する場面が実に面白かった。実際、この公演に続く時期から、中国と並んで脚光を浴びることになったインドは、米国からも戦略的に重要な国家とされ、国力を伸ばしてきているのだ。昨年（二〇〇五年）には八・四％の経済成長率を達成している。

そして、二〇〇五年九月のデリーでの公演は、私自身は、既に帰国して見ていないのだが、幸い、この年、大阪外国語大学の一行は帰国後に東京公演を開催した。この年は、東京外国語大学生のウ

ルドゥー語による芝居と一緒に公演が行われた。東京外国語大学は、「はだしのゲン」ともうひとつ「ムガル朝」に取材した芝居を、大阪外国語大学は「不協和音」を公演した。「不協和音」はラージェンドラ・シャルマー作の芝居であり、仲の悪い夫婦を和解させるため、友人がサードゥ（行者）に変装し、それぞれ相手の死が近いことを伝えるといったもの。インドの習慣や風俗が豊かに表現されていて、この作品を日本で観ることに格別の喜びを覚えた。

これらの作品については、インド在住のアルカカット氏が日記形式のウェブサイトを開設しており、溝上教授の率いる大阪外国語大学の活躍が記されている。私自身は、アウラングゼーブについて検索している時に、このサイトに偶然に行き当たったのであるが、インドの生活と哲学に対する深い洞察力に溢れるサイトであり、是非一読をお薦めする。(www.koredeindia.com)

溝上教授は、一〇年にわたって、五〇回以上に及ぶインド公演を続けられたのだが、二〇〇五年のインド公演に際して、「今度からは観客として皆さんとお会いすることになるだろう」と述べられた。溝上富夫教授の今後のご活躍を心からお祈りするものである。

(演劇批評家)

なお、この玉文を頂いた後、状況が変わり、二〇〇七年が最後のインド公演となったことは、いうまでもない。

(筆者)

あとがきーやっぱり「旅芸人」は楽しい

「演劇は最高の語学教育である」といったのは、ボヘミアの教育思想家メニウスだが、私は「語学」を「外国語」と言い換えたい。私が、この一〇年間の海外公演の実体験を通して学んだことは、まさにそのことである。

当初の参加学生は、必ずしも成績優秀者ばかりでなかった。授業についてゆけなかった学生が再起を期して劇を始めるケースもあり、「溝上再生工場」などと呼ばれた。その後、参加学生と一般学生の学力差は歴然となった。ある学年では、定期試験における平均点で両者の間に二〇点の差が出た。

鹿児島大学大学院の米沢傑教授は病理学者であるが、テノール歌手としても知られる。お医者さんには多才な人が多いが、その中でも、米沢教授は異色である。本業の方も大変だと思われるが、「それでも歌い続けるのは、地鳴りに似た拍手が忘れられないからだ」「あの充実感を他人に取られるのは、惜しいじゃない」と述べておられる（朝日新聞「ひと」欄—二〇〇四年二月三〇日）。これは、私の気持ちと全く同じだ。だからこそ、多くの困難にもめげず（途中何度止めようと思ったか分からない）、七九回も公演を続けることが出来たのだ。感動を味わったのは、学生も同じだ。我々の場合、感動を味わったのは、「われわれ」複数なのである。

しかも、私が学生と一緒に海外の舞台に立つのは、米沢教授が舞台に立たれるのとは違って、語学教師にとつては「本業」の延長であり、その一部でもあるのだ。また、ある都市から他の都市へと公演の旅を続ける我々は「旅芸人」でもあった。旅する喜びも満喫した。いろいろな人々との出会いがあったし、発見があった。インドの人達は、本当に友好的で親切だった。かつてNHKテレビの「プロジェクトX」で「第九への果てしなき道―貧乏楽団の逆転劇」というのを見たことがある。それは、群馬交響楽団が経済的困難を乗り越えて、最後には本場ウイーンで第九が受けた、という感動の物語だったが、我が素人劇団が本場インドで受けた感動もこれに似たものだった。ただ一つ悔いが残るとすれば、アメリカ合衆国で上演する機会がもてなかったことだ。シリコンバレーにはインド人IT技術者が一杯いる。きっと大受けしたことであろうが。

私はまもなく、「最後の大阪外国語大学教授」として定年退職を迎えることになる。大阪外国語大学が今年一〇月から、大阪大学と統合するからである。私にとって、教師としてもっとも充実していた時期は、いうまでもなく、最後のこの一〇年間であった。

外国語教育の形態もこれからどんどん変わっていくだろう。Eラーニングというのも盛んになりつつある。私の得意でない分野である。私が行ったような、語劇の海外公演といったことは、多分踏襲されないだろう。無謀という批判があったぐらいだから、同じようなやり方は薦められない。リスクを負った上に、相当研究面を犠牲にしなければならぬ。しかし、なによりも大事なのは学生の熱意であり、私の場合は、幸運にもそういう学生達に恵まれたから海外公演が成功したのであ

る。いつもそういう面での意欲的な学生ばかりが現れるとは限らない。

私が学生達と行ったこの実践的発信型外国語教育は、大阪外国語大学の伝統ある長い歴史の最後の一ページに残りさえすればいいのである。すでに、世界中で何万人という人達に観ていただいた。そういう人々と、ヒンディー語劇を演じることによって、「旅芸人」としての感動と喜びを共有できただけでも、私と参加学生にとつて、生涯忘れられない素晴らしい体験だったのだ。河合隼雄氏の言われる「文化ボランティア」も立派に果たしたと自負できる。

私は、誰よりも、私と一緒に旅をし、舞台に立った五四名の「旅芸人仲間」に、もう一度声を大にして「ありがとう。ご苦労さん！」と言いたい。星野監督が優勝した阪神タイガースの選手に言ったのと同じ「夢と感動を与えてくれて有難う！」とも叫びたい。

このような大きなイベントは、もちろん多くの人達の支援がなければ、できなかった。物心両面で私たちをサポートしてくださったすべての方々に、心から感謝の意を表したい。

本書はヒンディー語劇の「光」の部分だけを書いたが、残念ながら「影」の部分もあったことを率直に認めたい。常に教育者としての善意で接したものの、学生との完全なコミュニケーションを一部欠いたために、教育者としての未熟さを露呈して、結果的に関係者に迷惑をかけてしまったことは遺憾であった。

私が頻繁に海外に出かけることで迷惑をかけたにも関わらず、寛大な態度で接してくださった同僚の先生方にも感謝したい。

母校大阪外国語大学しかも同じインド語の大先輩である陳舜臣先生に本書の推薦のことばを書いていただいたのは、身に余る光栄である。感謝の言葉もない。

神戸公演に何回もお越し頂いている大阪外国語大学の是永駿学長からも推薦のことばを頂いたことに深く感謝する。

このような（余り商業的にペイしそうにない）本の出版を快く引き受けてくださったユニオンプレスにも感謝したい。

ああ、やっぱり旅芸人は楽しい！

二〇〇七年三月一〇日

神戸市内でのインド凱旋公演の日に

溝上富夫

（付記）最後に、私の長年の研究生生活と公演活動を支えてくれた妻の淑子に、謝意を述べることをお許し頂きたい。いつも気持ちよく私を送り出し、道中の無事と公演の成功を神仏に祈ってくれた彼女の協力なしには、本書の完成はあり得なかった。深く感謝する。

海外公演一覽表

	都市名	会場名	観客数
1997年			
12月23日	Delhi	Kirori Mal College	200
12月24日	New Delhi	L.T.G.Hall	350
12月28日	Varanasi	Nagari Natak Mandali	400
1998年			
1月1日	Agra	Sursadan Theatre	600
1月4日	Mumbai	Jai Hind College	500
1月5日	Mumbai	Nehru Centre Auditorium	800
8月6日	London	Nehru Centre	120
8月8日	London	Hindu Cultural Centre	350
8月9日	London	Harrow Arts Centre	90
1999年			
2月25日	Santiniketan	Nippon Bhavan ground	200
2月27日	Kolkata	G.D.Birla Sabhagar	750
3月1日	Mumbai	Nehru Centre Auditorium	700
3月5日	Pune	Balgandharva Rang Mandir	600
3月9日	Agra	Sursadan Theatre	200
3月11日	Agra	Central Institute of Hindi	250
3月13日	New Delhi	Ghalib Auditorium	120
3月15日	Delhi	Kirorimal College	25
9月13日	London	Nehru Centre	140
9月16日	London	Bharatiya Vidya Bhavan	150
9月18日	Manchester	Indian Association Hall	200
9月19日	Glasgow	The Crawford Theatre	24
9月22日	Stockton-on-Tees	The Arc Theatre	28
9月24日	Birmingham	CBSO Centre	200

	都市名	会場名	観客数
2000年			
2月29日	Kathmandu	Tribhuvan University	200
3月2日	Patna	Rabindra Bhavan	200
3月5日	Varanasi	Nagari Natak Mandali	200
3月7日	Allahabad	U.K. Madhya Sanskritik Kendra	200
3月9日	Lucknow	Rabindralaya	1000
2001年			
12月24日	New Delhi	Abhimanch, National School of Drama	200
12月29日	Lucknow	Rabindralaya	500
2002年			
1月1日	Gorakhpur	D.D.Upadhyay University	300
1月3日	Kushinagar	Buddha College	2000
1月6日	Santiniketan	Natyaghar, Visva Bharati	60
1月8日	Kolkata	Kala Mandir	500
9月7日	New Delhi	Abhimanch, National School of Drama	250
9月9日	New Delhi	Jawaharlal Nehru University	100
9月10日	Aligarh	Women's College	350
9月13日	Bareilly	BPCAS Prashasan Sabhagar	150
9月16日	Bhopal	Bharatiya Bhavan	300
9月21日	Thiruvananthapuram	Kelara Hindi Prachar Sabha	200
9月23日	Kochi	Dakshin Bharat Hindi Prachar Sabha	180
9月26日	Mumbai	Mysore Association Hall	80
10月11日	New Delhi	Central Institute of Hindi	100
2003年			
3月28日	New Delhi	Jawaharlal Nehru University	30
3月29日	New Delhi	Abhimanch, National School of Drama	430
3月31日	Bhopal	Rabindra Bhavan	30
4月3日	Pune	University of Pune	350
4月5日	Mumbai	Kishinchand Chellaram College Hall	300
4月6日	Nashik	Kalidasa Theatre	300

海外公演一覽表

	都市名	会場名	観客数
2004年			
9月4日	New Delhi	Abhimanch, National School of Drama	350
9月5日	Hastinapur	Atmanand Jain Ashram	450
9月6日	Meerut	Dayavati Modi Academy I	500
9月8日	Haridwar	Convention Hall, BHEL	300
9月11日	Dehradoon	Vivek Hall, Adarsh Vidyalaya	600
9月14日	Chandigarh	Pracheen Kala Kendra	150
9月16日	Mumbai	Mysore Association Hall	350
9月20日	Phonex, Mauritius	I.G. Centre for Indian Culture	900
9月21日	Curipepe, Mauritius	Hindu Girl College	1200
2005年			
8月30日	Lucknow	Rabindralaya	450
9月2日	Chandigarh	Tagore Theatre	240
9月3日	Mohali	Pracheen Kala Kendra	50
9月5日	Shimla	Kalibari Hall	90
9月10日	New Delhi	Abhimanch, National School of Drama	250
9月11日	Aligarh	Kennedy Auditorium, A.M.University	1100
9月14日	Jaipur	Jawahar Kala Kendra	200
9月16日	Udaipur	Mohan Lal Sukhadia Hall	200
9月19日	Mumbai	Mysore Association Hall	260
9月21日	Bengalooru	Jnana Jyoti Auditorium	300
9月24日	Hyderabad	Gandhi Bhavan	300
2006年			
2月28日	Singapore	Global Indian International School	400
3月4日	Bangkok	Indo-Thai Chamber of Commerce	150
2007年			
2月20日	Delhi	Lady Sri Ram College for Women	350
2月21日	Delhi	Daulat Ram College	250
2月23日	New Delhi	Abhimanch, National School of Drama	140
2月24日	New Delhi	Abhimanch, National School of Drama	80

	都市名	会場名	観客数
2月27日	Kolkata	Uttam Manch	110
2月28日	Kolkata	Uttam Manch	80
3月3日	Mumbai	Mysore Association Hall	200
3月5日	Pune	Balgandharva Rang Mandir	300

みぞかみ とみお
溝上 富夫

1941年、神戸市生まれ。

大阪外国語大学外国語学部卒業。デリー大学 Ph.D.

大阪外国語大学外国語学部助手、講師、助教授、教授を歴任。

その間、シカゴ大学客員研究員、カリフォルニア大学バークレー校

客員教授、京都大学、東京外国語大学、熊本大学、京都産業大学、追手門学院大学各非常勤講師を歴任。

現在、大阪外国語大学名誉教授。関西日印文化協会会長。

主要著書・訳書

Language Contact in Panjab (Bahri Publications)、『実用パンジャープ語会話集』(大学書林)、『文化紹介ベンガル語中級会話集』(大学書林)、『シク教—教義と歴史』(筑摩書房)、『シク教のお祭り』(同朋社出版)、『ヒンズー教のお祭り』(同朋社出版)、『ヒンディー語で歌う日本のうた101選』(大阪外国語大学)、『ヒンディー映画ヒットソング集(1951～1980)』(ユニオンプレス)、そのほか。

旅芸人は楽しーヒンディー語劇海外公演の記録—

2007年4月27日 初版発行

2012年4月2日 電子版初版発行

著者 溝上 富夫

発行者 池田 宏史

発行所 ユニオンプレス／株式会社ユニオンサービス

542-0062 大阪市中央区上本町西5丁目1番6号

電話 06 6763-5431 テレファックス 06 6763-5463

E-mail info@union-services.com

振替口座 00900-0-33598

印刷・製本 デザインインターナショナル

ISBN 978-4-946428-55-5

© Tomio Mizokami 2012

Produced in Japan

定価は、裏表紙に明示してあります。乱丁・落丁はお取り替えいたします。本書の一部または全部について、弊社から文書による許諾を得ずに、複写複製、転載することは法律で認められた場合を除き、著作権及び出版権の侵害となります。



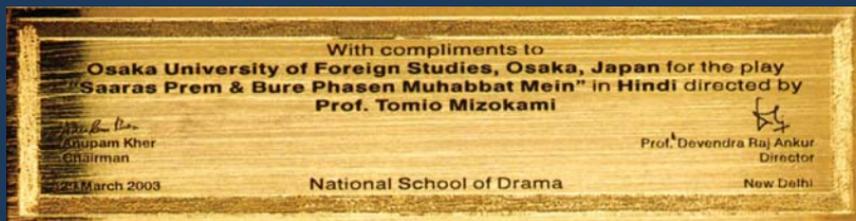
みぞかみ とみお
溝上 富夫

著者略歴

1941年、神戸市生まれ。
大阪外国語大学外国語学部卒業。デリー大学Ph.D。
大阪外国語大学外国語学部助手、講師、助教授、教授を歴任。
その間、シカゴ大学客員研究員、カリフォルニア大学バークレー校
客員教授、京都大学、東京外国語大学、熊本大学、京都産業大学、追手
門学院大学各非常勤講師を歴任。
現在、大阪外国語大学名誉教授。関西日印文化協会副会長。

主要著書・訳書

Language Contact in Panjab (Bahri Publications)
『实用パンジャブ語会話集』(大学書林)
『文化紹介ベンガル語中級会話集』(大学書林)
『シク教—教義と歴史』(筑摩書房)
『シク教のお祭り』(同朋社出版)
『シクズー教のお祭り』(同朋社出版)
『ヒンディー語で歌う日本のうた101選』(大阪外国語大学)
『ヒンディー映画ヒットソング集(1951~1980)』(ユニオンプレス)
その他。



表紙写真：インド国立演劇学校提供